

別添 1

厚生労働科学研究費補助金

障害者政策総合研究事業

強度行動障害者支援のための  
指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究

令和 6（2024）年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 日詰 正文

令和 7（2025）年 5 月

目 次

I. 総括研究報告

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の  
構築のための研究 . . . . . 1  
研究代表者 日詰 正文

II. 分担研究報告

1. 強度行動障害者支援のための広域的支援人材養成を見据えた中核的人材養成研修  
プログラムの作成 . . . . . 9  
研究代表者 日詰 正文  
分担研究者 安達 潤  
研究協力者 中山 清司 田熊 立 米澤 巧美 縄岡 好晴 加藤 健生 坂井 翔一  
原 昭徳 槻岡 正寛 内山 聡至

2. 広域的支援人材の研修に関する研究  
—広域的支援人材及びその候補者がこれまでに受けてきたトレーニングから  
見える必要な要素について— . . . . . 30  
研究代表者 日詰 正文  
研究協力者 村岡 美幸 中澤 典子

3. 強度行動障害の状態にあるものへの地域支援体制の整備状況に関する研究  
—地域支援体制のデータベース化を目指して— . . . . . 35  
研究代表者 日詰 正文  
研究協力者 村岡 美幸

4. 教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する研究  
—管理職を対象として— . . . . . 40  
研究代表者 日詰 正文  
研究協力者 長江 清和 石本 直巳 内山 聡至

5. 強度行動障害者支援への ICF システム導入による QOL 支援について . . . . . 45  
分担研究者 安達 潤

6. 強度行動障害の支援者養成研修における機能的アセスメントの効果 . . . . . 68  
分担研究者 井上 雅彦  
研究協力者 稲田 尚子

7. 地域支援体制強化に向けた取り組み（佐賀県の事例）について . . . . . 76  
分担研究者 會田 千重  
研究協力者 福島 龍三郎

III. 資料 . . . . . 84

IV. 研究成果の刊行に関する一覧表 . . . . . 203

別添3

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラム  
の開発および地域支援体制の構築のための研究

総括研究報告書

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究 (22GC1015)  
総括研究報告書

研究代表者：日詰 正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
分担研究者：安達 潤 (北海道大学)  
井上 雅彦 (鳥取大学)  
會田 千重 (国立病院機構肥前精神医療センター)

【研究要旨】

3年計画の3年目である令和6(2024)年度は、中核的人材養成研修を全都道府県対象に実施し、広域的支援人材(指導的人材)の育成にとって効果的な運営方法、研修内容となっているのか、広域的支援人材に必要な研修内容や地域の体制整備は何か等について明らかにすることを目的とした。

令和6(2024)年度は、①広域的支援人材の養成を見据えた中核的人材養成研修プログラムの作成に関する研究、②広域的支援人材の研修ニーズに関する研究、③地域支援体制整備に関する研究、④強度行動障害支援者養成研修の教育分野における活用に関する研究を行った。

本研究を通し、中核的人材養成研修のプログラムの提言、広域的支援人材の養成イメージを明らかにするとともに、地方自治体における次の広域的支援人材の候補者を、中核的人材養成研修を行う過程で見つけ、人材の発掘と育成を全国各地で継続的に行う仕組みを開発することができた。また、地域支援体制の構築に向けた継続的な情報交換を行う仕組み作りに着手した。

分担研究者	
安達 潤	北海道大学大学院教育学研究院・教授
井上 雅彦	鳥取大学医学系研究科臨床心理学講座・教授
會田 千重	国立病院機構肥前精神医療センター・統括診療部長
検討委員	
市川 宏伸	日本発達障害ネットワーク・理事長
松上 利男	全日本自閉症支援者協会・会長／北摂杉の子会・理事長
志賀 利一	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・参事
今井 忠	日本自閉症協会・副会長

中野 伊知郎	侑愛会 星が丘寮・施設長
片桐 公彦	みんなでいきる・理事
福島 龍三郎	はる・理事長
中山 清司	自閉症eサービス全国ネット・代表
研究協力委員	
竹矢 恒	あんぷ・代表
大黒 哲史	大阪府立砂川厚生福祉センター・統括主査
池内 豊	旭川荘 おかやま発達障害者支援センター・発達支援課長

縄岡 好晴	明星大学人文学部・准教授
米澤 巧美	光友会・課長補佐
田熊 立	千葉県発達障害者支援センター・副センター長
森口 哲也	福岡市社会福祉事業団 障がい者地域生活・行動支援センターかへむ・所長
加藤 潔	はるにれの里 自閉症者地域生活支援センターなないろ・所長
片山 智博	侑愛会 発達障害者支援センターあおいそら・センター長
松尾 浩久	北摂杉の子会 地域支援部 ・コンサルタント
坂井 翔一	はるにれの里 札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる・センター長
加藤 健生	相模女子大学人間心理学科・助教
加藤 永歳	東京都手をつなぐ育成会・事務局次長／国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・客員研究員
林 大輔	大府福祉会 たくと大府・施設長
信原 和典	『エール』鳥取県発達障がい者支援センター・地域支援マネージャー
濱瀬 享也	おひさま・児童発達支援管理責任者
前野 篤史	滋賀県脊髄損傷者協会・副所長
山本 剛士	エシカファーム・施設長
中野 喜恵	にしおこっぺ福祉会 清流の里・施設長
長葭 康紀	岩手県立療育センター相談支援部・発達障がい支援係長
中村 俊雅	オフィスぼん・管理者補佐

小崎 大陽	しが夢翔会 大津発達障害者支援センター・専門員
宇山 秀一	国立障害者リハビリテーションセンター 発達障害情報・支援センター・発達障害支援推進官
桑原 綾子	ライフサポートここはうす ・副理事長
川西 大吾	旭川荘 研修センター・副所長
岡村 隆弘	あくしゅ・管理者
長江 清和	国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター・センター長
石本 直巳	国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター・主任研究員
成田 秀幸	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・診療所長
原 昭徳	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・研修養成課長
槻岡 正寛	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・研修養成課長補佐
中澤 典子	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・研修養成課主査
松本 佳雅	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・副寮長
村岡 美幸	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・研究係長
高橋 淳	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・研究係主任
内山 聡至	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・研究係

※所属は、令和6（2024）年3月末時点

## A. 研究目的

厚生労働省が令和4（2022）年度に行った「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」の報告書において、障害福祉サービス事業所内で、支援チームの中核となって実践を推進する中核的人材

の養成、事業所の外部からコンサルテーションを行う指導的人材（広域的支援人材）（以下、広域的支援人材）の確保、地域の他の事業所や行政機関、教育機関、医療機関等との協力体制の仕組みづくり等が提言された<sup>1)</sup>。

本研究は、強度行動障害者支援のための広域的支援人材の確保・養成および地域支援体制構築のためのモデルを整理し、モデルの試行・検証を行い社会実装に向けたプロセスを明らかにすることを目的とした。

3年計画の3年目である令和6（2024）年度は、強度行動障害の状態にある児者を受け入れ、適切に対応ができる事業所を地方自治体において確実に確保していくために、①座学だけではなく、実際の支援現場で標準的な支援<sup>2)</sup>に取り組みながら成功体験を積むことができる研修の全国実施とそのプログラムの提言、②①の研修を展開する際の指導的な役割を果たす者（広域的支援人材）の養成と、その人材を生かす地域支援体制に関する効果的な情報共有方法を明らかにし、実装に取り組むことを目的とした。

## B. 研究方法

令和6（2024）年度は以下の研究を実施し、各研究報告に対する検討委員からの意見を収集した。検討委員会の開催日時は表1の通り。

表1 検討委員会の開催日時

日時	内容
第1回:令和6年9月18日	令和6年度計画の検討
第2回:令和7年2月18日	令和6年度結果の報告、検討委員からの意見収集

### 1. 強度行動障害者支援のための広域的支援人材養成を見据えた中核的人材養成研修プログラムの作成

#### ■ ワーキンググループの設置

分担研究者および強度行動障害者支援に関する有識者、実践者によるワーキンググループを設置し、本研修内容および本研修実施結果を踏まえた研修プログラムの検討を行った。

#### ■ 研修の試行、アンケート調査

- 調査対象：全都道府県から推薦を受けた受講者95名（1都道府県あたり2名）およびサブ・トレー

ナー47名（1都道府県あたり1名）

- 調査時期:令和6（2024）年8月から令和7（2025）年3月
- 調査方法：アンケート調査
- 調査内容：研修前後において複数尺度を用いた研修効果の把握および研修の改善点等を把握するためのeラーニングの理解度、研修内容・運営に関する意見等

※研修日程、研修の構成・内容等は分担報告書を参照

#### ■ 関係団体との意見交換

- 調査対象：令全国手をつなぐ育成会連合会、全日本自閉症支援者協会、日本知的障害者福祉協会、日本自閉症協会、全国地域生活支援ネットワーク
- 調査時期：令和7（2025）年1月から2月
- 調査方法：ヒアリング調査
- 調査内容：過本研修に関する評価、改善点等

### 2. 広域的支援人材の研修に関する研究—広域的支援人材及びその候補者がこれまでに受けてきたトレーニングから見える必要な要素について—

- 調査対象：令和5（2023）年度中核的人材養成研修のディレクター、トレーナー17名、及び令和6（2024）年度に開催した広域的支援人材（候補者含む）を対象としたイベント（情報アップデートDay）参加者のうち、発達障害者支援センター職員、発達障害者地域支援マネージャー、広域的支援人材名簿登録者、中核的人材養成研修の講師等で、コンサルテーション経験のある者41名
- 調査時期：令和6（2024）年10月から11月
- 調査方法：アンケート調査
- 調査内容：過去に受けたトレーニング等

### 3. 強度行動障害の状態にあるものへの地域支援体制整備に関する研究—地域支援体制のデータベース化を目指して—

- 調査対象：都道府県・政令市
- 調査時期:令和6（2024）年10月から令和7（2025）年3月
- 調査方法：メールによる情報提供
- 調査内容：全日本自閉症支援者協会が令和3

(2021)年度に実施した「強度行動障害者支援に関する中核的な人材の養成に関する研究」で整理した図に関する項目等

#### 4. 教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する研究-管理職を対象として-

- ・ 調査対象：令和6（2024）年度に国立のぞみの園が実施した強行研修・指導者研修を受講した職員が所属する学校、8校の管理職10名
- ・ 調査時期：令和6（2024）年11月から令和7（2025）年2月
- ・ 調査方法：ヒアリング調査
- ・ 調査内容：職員派遣経緯、受講効果、校内への共有方法、課題等

#### 5. 分担研究者による関連課題についての研究

- ・ 安達 潤：「強度行動障害者支援へのICFシステム導入によるQOL支援について」

中核的人材養成研修受講者、サブ・トレーナーを対象に、ICFシステム導入の効果確認（①eラーニングの評価アンケート、②ICFによるQOL支援の評価アンケート）を行った。③研修前後の対象者概要（ICFのフォーム）をQOL支援の観点から分析した。④研修前後のICF評価結果の分析により強度行動障害者支援に関連するICF項目を絞り込んだ。

- ・ 井上雅彦：「強度行動障害の支援者養成研修における機能的アセスメントの効果」

機能的アセスメントの研修効果について確認するため、中核的人材養成研修受講者、サブ・トレーナーを対象に、研修内容やツールのわかりやすさ、研修での取り組み状況に関するアンケート調査を実施、分析を行った。

- ・ 會田千重：「地域支援体制強化に向けた取り組み（佐賀県の事例）について」

佐賀県で取り組まれている強度行動障害に関する医療、福祉、教育を対象にした研修と体制整備の経過について整理した。

#### 【倫理面への配慮】

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研

究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号 05-07-01、06-09-03）。

#### C. 研究結果

##### 1. 強度行動障害者支援のための広域的支援人材養成を見据えた中核的人材養成研修の試行調査

###### ■ 研修の試行、アンケート調査

研修修了後に修了者が感じている研修の効果について回答を求めたところ、「効果があった」が66.7%、「やや効果があった」が29.7%であった。

謙虚なリーダーシップ尺度、心理的安全性尺度、知識共有尺度、支援の環境調整実施尺度、問題行動評価尺度短縮版を用いて研修前後の状況についてt検定を行った結果、心理的安全性尺度の1項目を除き、全ての尺度項目において、状況の改善を示す有意な差が認められた。また、行動障害の支援尺度についても研修後の支援の実施率が向上していた。

研修内容・運営に関する意見は、

- ・ 研修ボリューム（ICFシートやスキルアセスメント等）が多く、負担感が高い
  - ・ 強度行動障害者支援者養成研修の内容やワークシートとの整合性、関連性を整理してほしい
  - ・ eラーニングは何度も視聴できるためありがたい
  - ・ 架空事例を用いたワークシートの記載例がほしい
  - ・ 研修の全体像を早めに理解できるよう伝えてほしい
  - ・ サブ・トレーナー、トレーナー向けにコーチングやコンサルテーションに関する講義がほしい
- 等であった。

サブ・トレーナーがトレーナーから学んだ点として、

- ・ コーチング、コンサルテーションの方法
  - ・ 事業所や支援の歴史、文化、現在の環境状況を踏まえた助言
  - ・ 意見を出しやすい雰囲気づくり
- 等であった。

###### ■ 関係団体との意見交換

関係団体からの意見において、共通していた点は、

- ・ 本研修の仕組みに異論はない
- ・ 本研修の意義、重要性を行政に理解してもらう必要がある

- ・ 本研修修了後のフォローアップ、中核的人材を含めたネットワークづくりが重要である等であった。

## 2. 広域的支援人材の研修に関する研究—広域的支援人材及びその候補者がこれまでに受けてきたトレーニングから見える必要な要素について—

トレーニング方法について、「コンサルテーション等への同行・観察」「コンサルテーションの実践・フィードバック」「スーパービジョン」「OJT」「強度行動障害支援者養成研修」「実践者等との交流」「インシデントプロセス法による事例検討」等であった。トレーニング内容について、「TEACCH 5Days トレーニングセミナー」「ABA」「PECS」「TTAP」のほか、コーチングスキルなどのマネジメントスキル等を学んでいる者もいた。

## 3. 強度行動障害の状態にあるものへの地域支援体制整備に関する研究—地域支援体制のデータベース化を目指して—

28 都道府県 10 政令指定都市から回答が得られた。取り組み内容にもよるが、多くて 10~12 自治体程度が取り組んでいる状況で、今後、整備が求められる状況がうかがえた。

## 4. 教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する研究—管理職を対象として—

派遣経緯として、「都道府県教育委員会の予算事業の一環」「児童生徒の激しい行動に対する危機感」があった。研修内容を活用した事例検討が一部の職員間で行われているものの、全体的な情報共有には課題が残っていることがわかった。

## 5. 分担研究者による関連課題についての研究

安達の研究より、ICF システムの位置づけと QOL 支援の重要性には高い理解と評価を得たが、ICF システムの活用については評価項目の多さと評価システムの操作方法の複雑さが指摘された。ICF システム、氷山モデル、機能的アセスメントの支援に QOL 支援の観点がかかり反映されていた。ICF 項目の絞り込みの

結果が令和 3 年度学術振興会萌芽研究（研究代表者 安達潤）において行った強度行動障害の QOL 支援における ICF の項目有用性調査と一致し、絞り込みの妥当性が確認された。

井上の研究より、対象者の QOL を考慮し本人のニーズに基づいた機能として代替行動を設定することには課題があることがわかった。また、事前の工夫、代替行動の設定という個々の支援要素だけでなく、それらの相互作用が行動改善の鍵となることが示唆された。

會田の研究より、佐賀県での強度行動障害に関するネットワーク構築、施策の経過、様々な県内の機関が相互に乗り入れることで、情報・知識の共有やチームマネジメントへの取り組みができやすくなった。また事例についてのフォローアップ研修で早期にアドバイザー派遣を実施することで、事業所へのコンサルテーションやチームマネジメントがより有効に行えることがわかった。

## 6. 検討委員からの意見

- ・ 強度行動障害状態の人への支援では、保護者を含む関係者が協力し合うことが求められ、その基盤となるのが ICF の活用だと考える
- ・ ICF を土台に、事例を要因別に類型化するとともに、本人の中で起きていることを平易に説明することが、関係者の理解向上につながると考えられる
- ・ 中核的人材の「組織的な」活用・養成注目した事業所評価が重要になる
- ・ 都道府県・政令市における中核的人材や広域的支援人材の必要数や活動状況の把握が今後必要になる
- ・ 広域的支援人材の養成を見据えて中核的人材養成研修に位置付けられた研修修了後のフォローアッププログラム、例えば、トレーニングセミナーやコンサルテーションへの同行等が重要である（図 1、2）
- ・ 広域的支援人材は集中的支援に関わることになるが、集中的支援後のフォローアップについては、広域的支援人材と地域支援マネージャーが一体的に

動かないと継続が難しいことが推察される

- ・ 地域支援体制整備について、地域格差の最小化に向けた体制整備のプロセスに関するヒントが発信されていくことが望ましい
- ・ 教育分野との連携にあたっては、管理職の理解を得ていくこと、例えば校長会へのアプローチが重要になる
- ・ 行動障害が悪化し、学校に行けなくなった場合に、広域的支援人材が学校に入れるか検討することが必要になる
- ・ 長期的な視点で、中核的人材養成研修や広域的支援人材養成の展開と標準化、医療・教育・家族支援も含めた予防と緊急対応の総合的アプローチの整備が必要（図3）

#### D. 考察

##### 1. 強度行動障害者支援のための広域的支援人材養成を見据えた中核的人材養成研修プログラムの作成

本研修における事業所での6ヶ月間の実践により、受講者、事業所の支援、利用者の行動について改善を示す変化が各尺度やアンケートの回答からみられ、強度行動障害支援を向上するために効果的であると考えられた。

今後の都道府県での本研修実施を見据え、研修のボリューム調整や修了者を含めたネットワーク構築、事務局運営マニュアルの作成、講師や運営ができる人材の確保・養成が課題となると考えられた。

##### 2. 広域的支援人材の研修に関する研究-広域的支援人材及びその候補者がこれまでに受けてきたトレーニングから見える必要な要素について-

広域的支援人材の質の維持・向上を図る上で、中核的人材養成研修内でのOJT以外に必要なトレーニング方法や内容を整理することができた。具体的な方法は、「実践者同志の交流」「知識の獲得」であり、内容は、「効果的なアセスメントツールの習得」「利用者とのコミュニケーション方法」「マネジメントスキル」であると考えられた。

##### 3. 強度行動障害の状態にあるものへの地域支援体制

##### 整備に関する研究-地域支援体制のデータベース化を目指して-

強度行動障害の地域支援体制整備に必要な要素について、未実施事項も含めデータベース化することで、広域的支援人材の活用や都道府県間連携が図りやすくなり、国内の強度行動障害の状態にある人の地域支援体制整備の促進が図られるのではないかと考えられた。

##### 4. 教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する研究-管理職を対象として-

研修内容の活用を進めるためには、受講者を校内の強度行動障害についての担当と位置づけ、継続的な情報発信ができる環境を作ることや、外部専門的人材との定期的な連携ができる環境づくり等の対応が特別支援学校等の管理職に必要とされていると考えられた。

##### 5. 分担研究者による関連課題についての研究

安達は、強度行動障害支援へのQOL向上の意識づけはICF観点の導入で可能となったが、QOL支援をより広く進めていくにはICFシステムを容易に活用するための改善の必要性について提言した。

井上は、代替行動の設定に対するQOL的視点の強化、知識や経験が十分でない参加者や実効度の低い参加者に対する個別的な配慮などを充実させ、より実用的なプログラムへの発展の必要性について提言した。

會田は、地域支援体制整備について、各地域の発達障害者支援センター、基幹相談支援センター、発達障害者地域支援マネージャー等の動きや、自立支援協議会や発達障害者支援地域協議会での強度行動障害への取り組みなど地域事情を把握すること、医療や教育の会議体、親の会などの関係団体も含め多方面からの働きかけの必要性について提言した。

#### D. 総合考察

本研究により、強度行動障害支援における受講者や受講者の所属事業所内チームのポジティブな変化、アセスメント、QOL支援の広がり、モデル利用者の

課題となる行動の改善、QOL 向上など支援向上に対する中核的人材養成研修の有用性が示された。サブ・トレーナーは、広域的支援人材の役割として示されている事業所外からの助言の方法（コーチング、コンサルテーション等）を、トレーナーから学んでおり、中核的人材養成研修を継続することでトレーナー、広域的支援人材の養成にも繋がると考えられた。より効果的に学びを深めるために、検討委員からの提案があった修了者を対象としたフォローアップを行っていく必要があると考えられた。

トレーナーや広域的支援人材となった後は、実践の共有、トレーナーや広域的支援人材に求められる役割や必要な学びを共有する機会を設けることで、活動の質の均一化や各地域の支援体制整備促進に繋がっていくと考えられた。そして、実践や学びを共有する場として、広域的支援人材の役割・認識の共有や各地域の実践に関する情報交換を行う仕組み（情報アップデート Day）は有効であると考えられた。

地域支援体制整備について、医療・教育等との連携が必要であり、これらを含めた全国の整備状況に関する情報をデータベース化することで、体制整備が促進されると考えられた。

## E. 結論

本研究を通し、中核的人材養成研修のプログラムの提言および広域的支援人材の養成イメージを明らかにするとともに、地方自治体における次の広域的支援人材の候補者を、中核的人材養成研修を行う過程で見つける人材発掘と全国各地で継続的に行う育成の仕組みを開発することができた。また、地域支援

体制の構築に向けた継続的な情報交換を行う仕組み作りに着手した。

広域的支援人材の役割・認識の共有や各地域の実践に関する情報交換を行う情報アップデート Day および中核的人材養成研修を次年度以降も継続しつつ、ネットワークを構築し、今後の都道府県・中核的人材養成研修の開催に向けた地域支援体制づくりを推進していく。

さらに、既存の強度行動障害支援者養成研修、中核的人材養成研修や広域的支援人材の研修、その他必要な現任者研修へとつながる一連の強度行動障害者支援に関する人材育成を効果的に行えるよう検討していく。

## 【文献】

- 1) 厚生労働省 (2023) : 強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書.
- 2) こども家庭庁・厚生労働省 (2024) : 強度行動障害を有する児者への地域の支援体制整備の促進について.

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

## 中核的人材・広域的支援人材の養成（全体案）

より系統的で実践的なアプローチとして

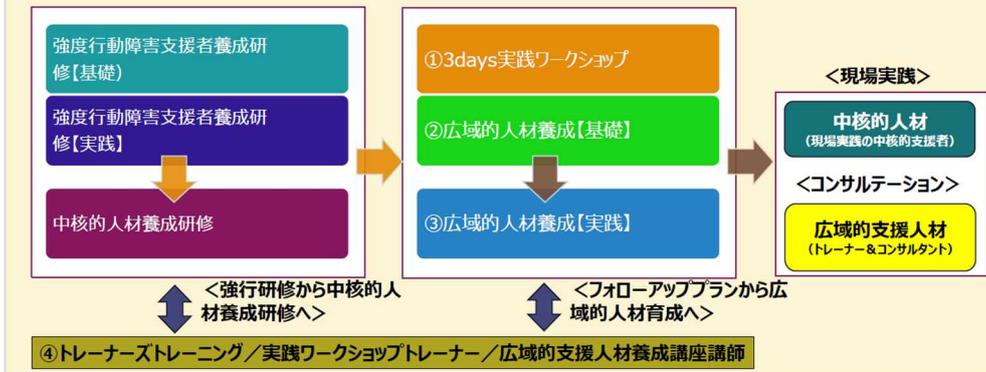


図1 人材養成の全体案

## 中核的人材養成研修のフォローアッププラン

より系統的で実践的なアプローチとして

- ①モデル付き3days実践ワークショップ
  - 受講生18名⇒中核的人材養成研修修了者、同等と見なす者：18名（6名×3グループ）
  - トレーナー養成（シャドウ）3名⇒トレーナー・事務局推薦、広域的支援人材養成研修修了者
  - アシスタント3～6名⇒トレーナー・事務局推薦
- ②広域的支援人材養成講座【基礎】：6回シリーズ、オンライン+宿題
  - コンサルテーションとコーチング（3回）
  - 現場でのアセスメントと支援の実際（3回）
- ③広域的支援人材養成講座【実践】：3回シリーズ
  - 訪問コンサルテーション/オンラインコンサルテーションにシャドウとして同行参加

図2 中核的人材養成研修のフォローアッププラン案

## 全国レベルの強行対応向け人材育成とその発展

長期展開のイメージ

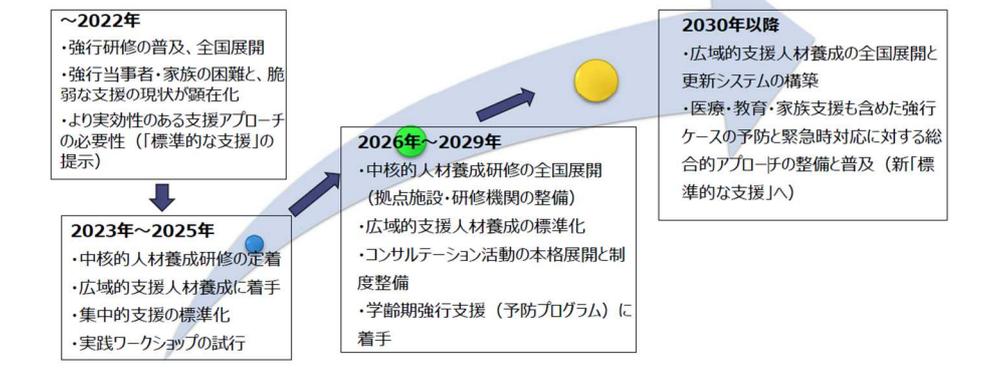


図3 強度行動障害に関する人材養成とその発展案

別添4-1

強度行動障害者支援のための広域的支援人材養成を  
見据えた中核的人材養成研修プログラムの作成

分担研究報告書

令和6年度厚生労働科学研究費補助金  
(障害者政策総合研究事業)

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究 (22GC1015)  
分担研究報告書

強度行動障害者支援のための広域的支援人材養成を見据えた  
中核的人材養成研修プログラムの作成

研究代表者：日詰正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
分担研究者：安達 潤 (北海道大学)  
研究協力者：中山清司 (自閉症 e サービス全国ネット)  
田熊 立 (千葉県発達障害者支援センター)  
米澤巧美 (光友会)  
縄岡好晴 (明星大学)  
加藤建生 (相模女子大学)  
坂井翔一 (はるにれの里)  
原 昭徳 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
槻岡正寛 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
内山聡至 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

令和5(2023)年度厚生労働科学研究において実施した「中核的人材養成モデル研修」を改善し、令和6(2024)年度は全都道府県を対象に研修を開催した。広くコンセンサスの得られる「中核的人材養成研修」のプログラムを作成することを目的とし、受講者とサブ・トレーナーを対象にアンケート調査、関係団体へのヒアリングを行った。その結果、効果として本研修における実践により、受講者、事業所の支援、利用者の行動について改善を示す変化が見られた。課題として、研修内容調整や修了者を含めたネットワーク構築、講師や運営ができる人材の確保養成等が考えられた。本研究を踏まえ、関係団体、WG等からの意見を踏まえ中核的人材養成研修のプログラムを提言する。今後は継続的に本研修を実施しながら、都道府県での実施を見据えた調整とトレーナーができる人材の確保・養成を行っていく必要がある。

A. 研究目的

1. 背景

令和5(2023)年3月に厚生労働省がとりまとめた「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」報告書<sup>1)</sup>において、事業所における強度行動障害支援の核となる「中核的人材」と、事業所の外部から事業所への技術的アドバイス等を行う指導的立場である「広域的支援人材」の確保・養成

が位置づけられた。この報告書を踏まえ、国立のぞみの園では、令和5(2023)年度厚生労働科学研究において、広域的支援人材の養成を一体的に行う「中核的人材養成モデル研修(以下、モデル研修)」を、10地域40名を対象に実施した<sup>2)</sup>。モデル研修は受講者の所属事業所の利用者1名に対し、研修内容に沿った実践を受講者に行ってもらった。その結果、「研修の流れを整理し、研修の全体像や

実施内容をわかりやすく可視化すること」「講義は事前のeラーニング視聴とし、研修当日のグループ討議時間確保すること」「受講者の負担軽減ため、研修課題の整理、サポート体制の強化をすること」等が改善点とされた。

この中核的人材養成研修は、令和8年度まで、「のぞみの園が設置する施設が行う研修その他これに準ずるものとして厚生労働大臣が認める研修に限る」<sup>3)</sup> されており、今後の都道府県での実施を見据えた研修プログラムの作成が必要である。

## 2. 目的

本研究は、広くコンセンサスの得られる「中核的人材養成研修（以下、本研修）」のプログラムを作成することを目的とした。

## B. 研究方法

本研究は、以下の方法により行った。

### 1. ワーキンググループの設置によるプログラムの検討

分担研究者、モデル研修講師、強度行動障害者支援に関する有識者、実践者によるワーキンググループ（以下、WG）を設置し、本研修内容および本研修実施結果を踏まえた研修プログラムの検討を行った。

### 2. 研修の受講者等に対するアンケート調査

- 対象：全都道府県から推薦を受けた受講者 95 名（1 都道府県あたり 2 名）およびサブ・トレーナー 47 名（1 都道府県あたり 1 名）  
※受講者が 1 名のみ、サブ・トレーナーの推薦がない都道府県が 1 つずつあった。
- 期間：令和 6（2024）年 8 月から令和 7（2025）年 3 月
- 内容：本研修の実施（プログラムは図 1）による、研修効果および改善点等を把握するため、表 1 の通りアンケートを実施した。

### 3. 関係団体との意見交換

- 対象：全国手をつなぐ育成会連合会、全日本自閉症支援者協会、日本知的障害者福祉協会、日本自閉症協会、全国地域生活支援ネットワーク
- 期間：令和 7（2025）年 1 月から 2 月

- 内容：本研修に関する評価、改善点等

## ■ 倫理面への配慮

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号 05-07-01、06-09-03）。

なお、本研修における関係者の定義は表 2 の下の通りとした。

表 1 アンケート一覧

目的	内容等
研修による受講者・事業所・支援チームの変化およびモデル利用者の行動の変化等の把握 ※①～⑥は第1回研修前と第6回研修後に回答 ※⑦は第3～6回研修後回答	①講座なりリーダーシップ尺度（受講者のチームリーダーとしての捉え方）
	②心理的安全性尺度（支援チームの心理状況）
	③知識共有尺度（支援チームの情報共有の状況）
	④行動障害の支援尺度（モデル利用者への支援状況）
	⑤支援の環境調整尺度（事業所の環境調整状況）
	⑥BPI-S（モデル利用者の課題となる行動の頻度と重症度）
	⑦チーム支援の実行状況チェック（支援チームでの研修の取り組み状況）
eラーニング講義の評価、改善点の把握	各 eラーニング講義の理解度・良かった点・改善点等
研修内容、運営の評価、改善点の把握	研修各回における研修運営等に対する意見
サブ・トレーナーがトレーナーから学んだことの把握	研修の進め方・説明、実践に対する助言、事業所訪問時の助言、話し方・伝え方、自身に不足している点や学びが必要な点

表 2 令和 6 年度中核的人材養成研修関係者の定義

受講者	事業所において、①対象者の QOL 向上を柱として、チームで標準的支援（障害特性を踏まえた機能的アセスメントを行い、強度行動障害を引き起こしている環境を調整する）に取り組み、②家族や管理者、外部コンサルタントに対して、客観的な記録をもとに状況を説明することができる「中核的人材」の役割が期待される者
サブ・トレーナー	研修において、③トレーナーを補佐し、受講者が①②を身に着けることができるようにサポートしつつ、トレーナーの発言内容やタイミング、動き方等を把握・吸収することで、④研修後に自分の地域で、広域的支援（集中的支援、地域づくり）に取り組むことが期待される者
トレーナー	強度行動障害支援者養成研修（指導者研修）等の講師、運営に携わった経験や発達障害者支援センター等において事業所支援経験がある（広域的支援人材の役割を担える）者であって、受講者が①②を学べるように研修を進行し、サブ・トレーナーが③④の体験ができるように配慮する者として、国立のぞみの園の事務局が指名した者
トレーナーSV	トレーナーとしての力量がある者で、ディレクターの補佐として、トレーナーの相談役、受講者サポート等を担う者として、国立のぞみの園の事務局が指名した者
ディレクター	トレーナーとしての力量がある者で、トレーナーの相談役、研修全体の進行管理、統括を担う者として、国立のぞみの園の事務局が指名した者

## C. 研究結果

### 1. ワーキンググループでの検討によるプログラムの確定

モデル研修からの改善点をワーキンググループで検討した結果、その内容は下記の通りであった（【】はモデル研修からの改善点、・は本研修での対応内容）。

【研修の流れを整理し、研修の全体像や実施内容をわかりやすく可視化すること】

- ・研修の流れを氷山モデルのマトリックスを用いて5つのフェイズに整理し（図1）、フェイズに合わせて研修構成を変更した

【eラーニングを活用し、グループ討議時間確保すること】

- ・eラーニングは、知識を学ぶ「講義」とワークシート等の使い方を学ぶ「演習」の構成とした
- ・eラーニングは20分程度とし、支援者が業務中に視聴しやすいようにした
- ・研修当日のグループ討議の時間を、モデル研修の90分から130分に増やした

【サポート体制の強化をすること】

- ・シート類の記入負担軽減のため、項目を削減した
- ・グループ討議のサポートや受講者・トレーナーへの助言等を行うスタッフ（トレーナーSV）を新たに配置した
- ・トレーナーによる受講者への助言、モデル利用者の状態像把握をより効果的に行うため、受講者がモデル利用者の動画を撮影し、研修各回で共有することや、受講者の事業所訪問を研修期間中に1回必ず行うこととした

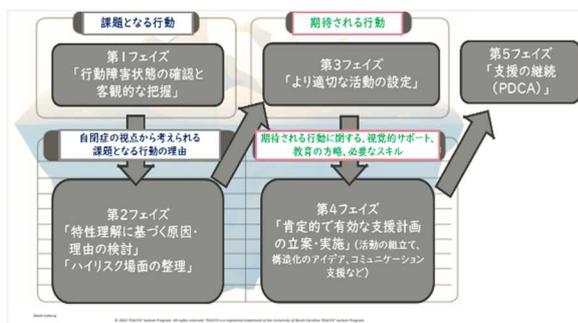


図1 氷山モデルマトリックス

## 2. 本研修の実施・アンケート回答結果

### ■ 本研修の概要

#### 【目的】

強度行動障害支援者養成研修の内容を踏まえて、支援現場において適切な支援を実施し、組織の中で適切な指導・助言ができる人材の養成

#### 【日時】（表3）

- ・全6回の研修（月1回のペースで開催）
- ・第1回から第5回研修は西日本ブロック（12グループ）と東日本ブロック（12グループ）に分けて実施、第6回研修は西日本ブロック、東日本ブロックの合同開催

#### 【実施体制】（図2）

- ・近隣の2自治体で1グループを構成（ネットワークづくりの観点）
- ・1グループの構成：受講者4名、サブ・トレーナー2名、トレーナー1名
- ・トレーナーSVを4グループに1名配置
- ・本研修の全体管理を行うディレクターを1名配置

表3 令和6年度開催日時

研修等	日程(西日本)	日程(東日本)
事前打合せ①	7月19日 13:30~15:30	
事前打合せ②	8月19日 13:30~15:30	
第1回研修(オンライン)	8月26日 9:30~12:00	8月26日 14:00~16:30
第2回研修(集合)	10月1日 14:00~16:30	9月26日 14:00~16:30
第3回研修(オンライン)	10月29日 9:30~12:00	10月29日 14:00~16:30
第4回研修(オンライン)	11月26日 9:30~12:00	11月26日 14:00~16:30
第5回研修(オンライン)	12月24日 9:30~12:00	12月24日 14:00~16:30
第6回研修(オンライン)	2月10日 9:30~12:00	2月10日 14:00~16:30

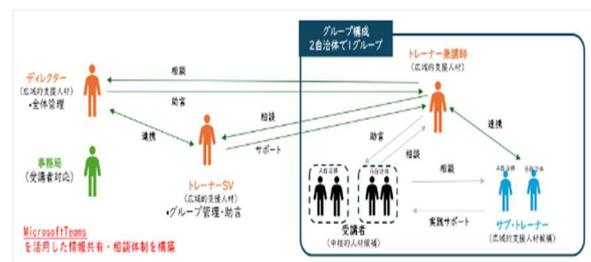


図2 令和6年度実施体制

■ フォローアップの仕組み

研修期間中、トレーナーによる研修内容や実践に関する相談対応を迅速に行うため、ICT（Microsoft Teams、Zoom）を活用したフォロー体制を整えた。

また、トレーナーによる受講者の所属事業所への訪問フォローアップを研修期間中に必ず1回行った。訪問フォローアップには、サブ・トレーナーの同行を必須とし、トレーナーの受講者への関わりや助言を学んでもらうこととした。

■ 本研修の修了判断（表4・5）

本研修の修了にあたっては、「アセスメントに基づく支援の実施状況」の自己評価とトレーナー評価、「チーム支援の実行状況」の自己評価を基に、本研修の取り組み状況を踏まえ、全研修日程終了後に事務局が修了判断を行った。修了基準に満たなかった者については、年度末までのトレーナー、事務局による継続フォローアップを行い、その取り組み状況を踏まえ、事務局が再度修了判断を行った。

表4 アセスメントに基づく支援の実施状況の評価項目

課題となる行動を本人視点から選び、具体的に表現できているか
課題となる行動について客観的な視点から記録が取れているか
研修で使用しているアセスメントを基に、背景要因の整理、仮説立てができていないか
アセスメントを基に、本人の QOL 向上に寄与する期待される行動の目標設定を具体的にできているか
アセスメントを基に支援計画の立案・実施ができていないか
実施した支援の結果について分析を行っているか
必要な場合に、支援の改善案を検討し改善策を実施しているか

表5 チーム支援の実施状況の評価項目

チームに必要なメンバーの勤務等を調整し、会議を設定したか
会議の参加者がポジティブな討議ができるようなグラウンドルール（他社が発言中は口を挟まない、否定をしないなど）を明示したか
会議の目的と終了時間を参加者に伝えているか
参加者全員が会議で発言できるように会議をコントロールしているか
終了時、会議の参加者の意見を整理し、まとめたか。また、会議に参加していないチームメンバーにも情報を共有するようにしているか
支援の手立てや記録の方法を決める際は、具体的に、実行可能性や予測される効果などを検討し、参加者で確認したか
支援の手立てを決める際は、『いつ・だれが・何を行うのか』を行動レベルで決め、手順書等の作成につなげたか
実施記録については『いつ・どのような方法で共有するのか』を確認したか
支援の進捗管理のために、次回の会議の設定や、必要なタイミングで他のスタッフに確認することなど、適時リマインドをおこなっているか
支援を実行した際、一定の経過を見た後、振り返りの会議を設定しているか
振り返りの会議では記録を確認し、その結果に影響しているポジティブな要因やネガティブな要因、関連する課題などを検討し整理したか
支援の取り組みを通して、常にチームのメンバーが尽力を働き、チームでのまとまりを高めているか
支援の実行況を確認し、次のアクションについてチームとして方向性を共有できているか

■ アンケート回答結果

全6回の研修全てに参加した修了者を対象にアンケート回答の分析を行った。

【研修の効果】（図3）

研修修了後に修了者が感じている研修の効果について回答を求めたところ、「効果があった」が66.7%、「やや効果があった」が29.7%であった。

受講者が感じた効果の主な意見としては下記の通りであった。

- ・ アセスメントの視点が広がった
- ・ チームの支援力向上を図ることができた
- ・ 課題となっている行動の改善ではなく、豊かな生活のために、利用者ができていることをどのように活かしていくかと考えられるようになった
- ・ フォローアップ体制があったことで、研修内容の理解が深まり、実践が進みやすくなった

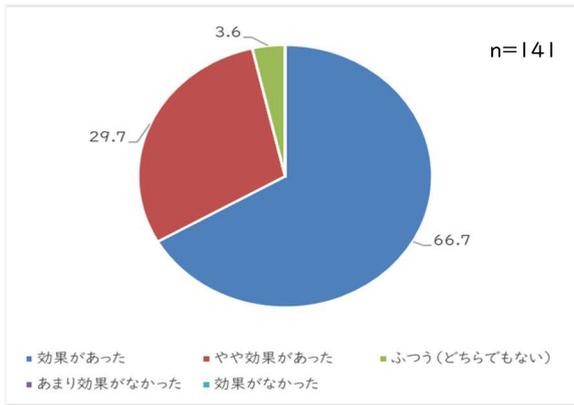


図3 研修の効果に関する回答の構成比

【受講者・チームに関する尺度】（表6、7、8）

尺度①謙虚なリーダーシップ尺度<sup>3)</sup>、尺度②心理的安全性尺度<sup>3)</sup>、尺度③知識共有尺度<sup>3)</sup>を活用して、受講者および受講者の所属事業所内チームの研修前後の変化を把握した。t 検定を行った結果、尺度②「チームメンバーがミスをする、しばしば白い眼で見られる」の項目を除いた尺度①②③全ての項目で改善を示す有意差が認められた。

【支援に関する尺度】（表9、10、図4）

尺度④行動障害の支援尺度<sup>4)</sup>、尺度⑤支援の環境調整実施尺度<sup>5)</sup>を活用して、モデル利用者に対する支援状況、事業所全体の環境調整の実施状況に関して研修前後の変化を把握した。その結果、尺度④について研修後の支援の実施率が向上していた。尺度⑤について、全ての項目において事業所における環境調整の実施度向上を示す有意差が認められた。

【対象者の行動に関する尺度】（表11）

尺度⑥問題行動評価尺度短縮版（BPI-S）<sup>6)</sup>を活用して、モデル利用者の課題となる行動の状況について研修前後の変化を把握した。t 検定を行った結果、全ての項目において行動の改善を示す有意な差が認められた。

【研修中のチーム支援の実行度】（図5）

本研修におけるチーム支援の実行状況について、研修が進むにつれてチーム支援の実行割合が向上していた。

表6 謙虚なリーダーシップ尺度回答

n=141

	研修前		研修後		p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
批判であっても、フィードバックを積極的に求める	5.61	1.02	5.90	1.06	0.002**
自分が何かのやり方がわからないときに、そのことを認める	6.18	0.86	6.43	0.56	0.001**
自分よりも他人のほうが多くの知識やスキルを持っているとき、そのことを認める	6.47	0.71	6.63	0.52	0.016*
他人の長所に注目する	6.09	0.81	6.37	0.61	0.000**
他人の長所をよく褒める	5.80	0.93	6.08	0.83	0.001**
他人の独創的な貢献に対して感謝を示す	6.06	0.75	6.29	0.66	0.001**
他人から意欲的に学ぼうとする	6.21	0.77	6.43	0.62	0.001**
他人のアイデアに耳を傾ける	6.22	0.62	6.41	0.57	0.001**
他人の助言に耳を傾ける	6.12	0.68	6.38	0.59	0.000**

\* = p < .05      \*\* = p < .001

表7 心理的安全性尺度回答

n=141

	研修前		研修後		p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
チームメンバーがミスをする、しばしば白い眼で見られる	2.67	1.29	2.53	1.25	0.21
このチームのメンバーは、問題や困難について話し合うことができる	5.57	0.99	5.99	0.69	0.000**
このチームのメンバーは、自分とは異なるという理由で他者を拒絶する可能性がある	2.88	1.22	2.51	1.20	0.001**
このチームでは、リスクを取っても安全だ	4.57	1.08	5.04	1.15	0.000**
このチームでは、他のメンバーに助けを求めることは困難だ	2.54	1.16	2.18	1.13	0.006**
このチームには、私の努力を無駄にしようにするメンバーはいない	4.96	1.66	5.48	1.56	0.000**
このチームのメンバーと一緒に仕事をすると、私ならではのスキルや才能が価値を認められ、生かされている。	5.24	1.06	5.70	0.97	0.000**

\* = p < .05      \*\* = p < .001

表8 知識共有尺度回答

n=141

	研修前		研修後		p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
私たちは、ビジネスの提案書と報告書を互いに共有している	3.71	0.76	3.94	0.68	0.001**
私たちは、ビジネスのマニュアル、モデル、方法論を互いに共有している	3.60	0.77	3.85	0.68	0.000**
私たちは、互いの成功談および失敗談を共有している	3.91	0.62	4.10	0.64	0.002**
私たちは、新聞・雑誌・専門誌・テレビから得たビジネスの知識を共有している	3.32	0.82	3.47	0.77	0.046*
私たちは、職務経験から得たノウハウを互いに共有している	3.83	0.67	4.02	0.58	0.002**
私たちは、互いの居所や人となり共有している	3.67	0.73	3.83	0.63	0.017*
私たちは、教育と訓練から得た専門性を共有している	3.65	0.68	3.94	0.61	0.000**

※ビジネス支援に関することとして回答を得た      \* = p < .05      \*\* = p < .001

表9 行動障害の支援尺度回答

n=141

	研修前		研修後	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
問1 意思表出を適切に行えるように支援している	1.50	0.60	1.29	0.53
問2 困った行動のもつ機能(役割)を分類し、その機能(役割)に応じた行動を同じ行動と教えている	1.48	0.60	1.18	0.51
問3 日常生活動作(排泄、入浴、着替えなど)を自立して適切に行えるように、支援ツールを使うなど環境の工夫をしている	1.61	0.75	1.35	0.65
問4 トークンシステム(決められた目標を達成するとポイントがもらえ、ポイントがたまると欲しいものがもらえる)を実施している	2.04	0.75	1.83	0.81
問5 適切な行動を教える場合、まずは本人の現状に合わせた達成しやすい目標を立て、少しずつ目標をステップアップさせながら	1.52	0.67	1.16	0.42
問6 提言させたい行動をしていない時、言葉がけをしたり、少しの間一緒にその行動をすることがある	1.39	0.65	1.39	0.70
問7 するべきことを伝える際、本人が理解しやすいように言葉づかいや伝えるタイミングを工夫している	1.23	0.47	1.13	0.38
問8 見通しをもって活動が行えるように、事前に活動の内容や終了の目安を伝えている	1.26	0.51	1.14	0.42
問9 するべきことを伝える際、視覚的にわかりやすい絵図や写真などを使用している	1.50	0.67	1.17	0.49
問10 するべきことの順序がわかりやすいように、スケジュールを提示している	1.56	0.75	1.28	0.60
問11 活動内容やスケジュールに変更がある場合、事前にそのことを伝えている	1.38	0.68	1.28	0.61
問12 活動や課題を与える際、本人の好みや能力に合わせて活動の内容や分量を調整している	1.21	0.45	1.16	0.42
問13 活動や課題を与える際、本人が自分で決定や選択できる言葉を取り入れている	1.62	0.66	1.45	0.65
問14 困った行動が起こるのを予防するために、苦手を刺激を取り除いたり、和らげたりするなど周囲の環境を調整している	1.37	0.61	1.16	0.45
問15 困った行動が起こりやすい場面では、絶えず関心付き1対1で対応している	1.46	0.70	1.48	0.71
問16 普段の対応では手に負えなくなった緊急の場合、応援を要請できる人がいる	1.23	0.51	1.18	0.50
問17 困った行動が起こるのを予防するために、好みの活動や余暇活動が出来るような時間や場所を用意している	1.32	0.58	1.13	0.39
問18 疲れたり、調子が悪くなったりした場合に、一人で過ごすことのできる場所(パーソナルスペース)を用意している	1.30	0.63	1.19	0.50
問19 本人の支援を安定した一貫性のあるものとするために、必要に応じてミーティングを実施していますか	2.23	0.75	1.98	0.66

表10 支援の環境調整実施尺度回答

n=141

	研修前		研修後		p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
包括的なアセスメント (総合的なアセスメントの実施)	2.67	1.11	2.36	1.04	0.003**
継続的な支援の見直し (週や月単位の継続的なアセスメント)	2.44	1.16	1.89	0.83	0.000**
生活環境の構造化 (日常生活における物理的構造化等の整備)	2.70	1.26	2.20	1.03	0.000**
見通しがもてる工夫 (1日単位のスケジュールが機能している)	2.92	1.39	2.48	1.19	0.000**
表出性コミュニケーション	3.24	1.10	2.76	1.08	0.000**
余暇や楽しい活動の提供	2.56	1.14	2.19	1.01	0.000**
全項目合計点	16.54	5.68	13.89	4.79	0.000**

\*p<.05    \*\*p<.001

表11 BPI-S 回答

n=141

	研修前			研修後			p値
	最大値	平均値	標準偏差	最大値	平均値	標準偏差	
自傷行動(頻度)	26	6.25	5.10	20	4.33	4.39	0.000**
自傷行動(重症度)	19	4.18	3.51	18	3.06	3.16	0.000**
攻撃的/破壊的行動(頻度)	36	9.87	7.92	26	6.39	5.64	0.000**
攻撃的/破壊的行動(重症度)	24	7.54	6.10	24	5.64	5.30	0.000**
常同行動(頻度)	48	20.13	10.94	47	18.35	10.87	0.001**

\*p<.05    \*\*p<.001

n=141

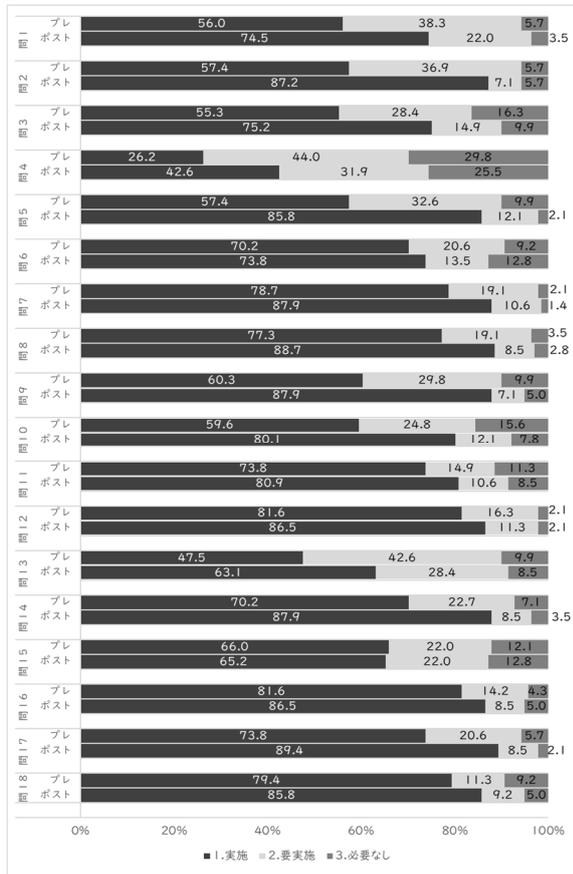


図4 行動障害の支援尺度回答 構成比

n=141

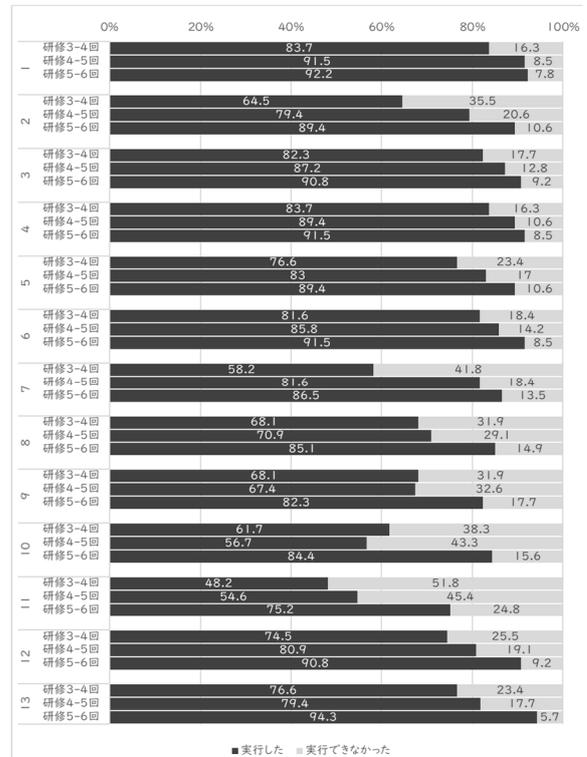


図5 研修中のチーム支援の実行度回答構成比

※回答項目は表5参照

【eラーニングの理解度・意見】(図6、表12)

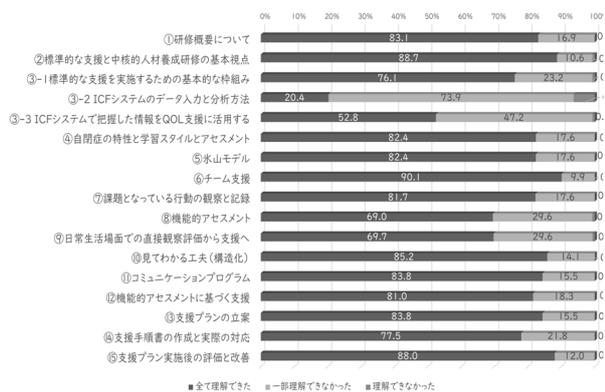
eラーニングの理解度について、「一部理解ができなかった」と回答したのが最も多かった

のは③-2「ICFシステムのデータ入力と分析方法」の71.1%、次いで多かったのは③-3「ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する」の47.9%であった。

eラーニングに関しては、

- ・ 何度も視聴できるためありがたい
  - ・ 事例動画があることで理解が深まる
  - ・ 架空事例を用いたワークシートの記載例がほしい
  - ・ eラーニング、ワークシートの全体像や運動性について詳細な説明がほしい
- eラーニングの時間が長くてもいいため、詳細な説明がほしい等の意見があった。

図6 eラーニング理解度回答の構成比 n=141



【研修運営に関する意見】(表13)

研修運営に関する改善点の主な意見としては下記の通りであった。

- ・ 集合研修の回数、研修各回の時間、訪問フォローアップの回数を増やしてほしい
- ・ 研修の全体像を早めに理解できるよう伝えてほしい
- ・ 情報共有の機会を増やしてほしい
- ・ パソコンスキルが高くないものには、ICTツールの活用は難しいため扱いを検討してほしい (Microsoft Teams に慣れるまで大変)

【研修内容に関する意見】(表14)

研修内容に関する改善点の主な意見としては、下記の通りであった。

- ・ ワークシートの関連性を明確にし、理解を深めるための工夫がほしい
- ・ 強度行動障害支援者養成研修の内容やワークシートとの整合性、関連性を整理してほしい
- ・ 研修各回の実施内容や時間配分をより明確にしたい
- ・ 研修ボリューム (ICFシートやスキルアセスメント等)が多く、負担感が高い。都道府県でも実施できるように内容を精選してほしい
- ・ オンライン研修だけでは、実践力の向上は難しい。模擬実践 (例えば、トレーニングセミナー等)が必要である
- ・ サブ・トレーナー、トレーナー向けにコーチングやコンサルテーションに関する講義がほしい

【サブ・トレーナーがトレーナーから学んだ点】(表15)

サブ・トレーナーが学んだ主な点は下記の通りであった。

- ・ 傾聴、受容をし、肯定的な視点からの助言
- ・ 受講者に気づかせるための質問、助言
- ・ 受講者の理解に応じた、用語の使い方、説明
- ・ 利用者アセスメントの視点と支援の引き出しの多さ
- ・ 事業所や支援の歴史、文化、現在の環境状況を踏まえた助言
- ・ 意見を出しやすい雰囲気づくり
- ・ コーチング、コンサルテーションの方法

【サブ・トレーナーが感じているトレーナーになるために必要な学び】(表16)

サブ・トレーナーが感じている必要な学びの主な回答は下記の通りであった。

- ・ 伝えるスキル (コーチング、コンサルテーション等)
- ・ ファシリテーション力
- ・ 人 (利用者、支援者)・事業所に対するアセスメント力
- ・ 多様なケースに対する支援・コンサルテーション経験

### 3. 関係団体との意見交換（表 17）

関係団体からの意見において、共通していた点は下記の通りであった。

- ・ 本研修の仕組みに異論はない
- ・ 本研修の実践状況の評価によって、修了の可否を判断することは質の担保の観点から適切である
- ・ 受講者の力量がバラバラであり、受講者の選定条件をより明確に示してほしい
- ・ 本研修の意義、重要性を行政に理解してもらう必要がある
- ・ 本研修修了後のフォローアップ、中核的人材を含めたネットワークづくりが重要である
- ・ 強度行動障害支援者養成研修と本研修の差が大きく、検討が必要である

#### 4. 次年度以降に向けた検討

本研修および団体等からの意見収集終了後、ワーキンググループで次年度以降に向けた研修の改善について検討を行った。ワーキンググループからの意見は下記の通りであった。

- ・ e ラーニングだけで支援技術を学ぶのは難しく、アセスメントから支援計画を立てるにはトレーナーの力量が必要となる
- ・ トレーナーが研修の核であり、トレーナー養成は現在の研修内容だけでは難しい
- ・ トレーナーは早めに受講者の事業所に訪問したほうが、モデル利用者、事業所アセスメントができ、研修サポートが行いやすくなる
- ・ 修了者の質の担保のため継続サポートが必要である
- ・ 都道府県での研修実施に向けた内容や事務局運営の標準化が必要である

#### D. 考察

本研修は、外部人材を活用して事業所における強度行動障害へのチーム支援の核になる中核的人材の養成と事業所や中核的人材への助言等を行う広域的支援人材の養成を一体的に行うものである。以下、本研修の効果と今後の課題について考察する。

##### 1. 本研修の効果

本研修における事業所での6ヶ月間の実践により、

受講者、事業所の支援、利用者の行動について改善を示す変化が各尺度やアンケートの回答からみられ、強度行動障害支援を向上するために効果的であると考えられた。

受講者の変化について、事業所チームやモデル利用者をポジティブな視点でとらえられるようになったこと、モデル利用者への支援だけではなく、事業所全体の支援にも波及していたことは、本研修における実践の効果だと考えられた。

モデル利用者について、課題となっている行動の頻度や重症度が改善していたことに加え、事業所における環境調整を実施している割合が増えていたことから、行動減少のための支援だけではなく、生活全般の環境調整が事業所として行われるようになっており、結果として生活の質の向上にも繋がっていると考えられた。

##### 2. 本研修の今後の課題

今後の都道府県での本研修実施を見据え、研修内容調整や修了者を含めたネットワーク構築、事務局運営マニュアルの作成、講師や運営ができる人材の確保養成が課題となると考えられた。

###### ■都道府県での本研修実施に向けた内容調整・ネットワークづくりの必要性

e ラーニングの内容は概ね理解できているが、講師による差が大きく生じないように引き続き調整していく必要があると考えられた。また、本研修の全体像や強行研修との繋がり・変化を早い内から受講者がイメージできるようにすること、研修で使用するシート類の削減が求められおり、工夫が必要であると考えられた。

また、本研修修了者が今後の都道府県で開催する研修の講師や運営を担うことが想定され、修了者の継続的なフォローや近隣県での合同開催を見据えたネットワークづくりが必要と考えられた。

###### ■本研修の講師や運営ができる人材の確保養成のために必要な要素

講師や運営ができる人材（トレーナー）の養成にあたって、コンサルティングやコーチングといった受講者との関わり方の学びと実践が重要だと考えられるが、現時点の本研修ではこれらの方法について

サブ・トレーナーやトレーナーが講義等で体系的に学ぶ内容は盛り込めていない。サブ・トレーナーの学びをより深めることに加え、トレーナーの養成、質の担保を考えると、現在の研修の仕組みに加え、サブ・トレーナーやトレーナー向けにコンサルテーション、コーチング等に関する講義を本研修内に取り入れる必要があると考えられた。

## E. 結論

本研修の結果、関係団体、WG等からの意見を踏まえ中核的人材養成研修のプログラムを提言する（表18、19）。今後は継続的に本研修を実施しながら、都道府県での実施を見据えた調整とトレーナーができる人材の確保・養成を行っていく必要がある。

## 【文献】

- 1) 厚生労働省（2023）：「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」報告書。
- 2) 国立のぞみの園（2024）：令和5年度厚生労働科学研究費補助金事業「強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究」報告書。
- 3) 厚労省通知（2024）：令和6年度障害福祉サービス等報酬改定等に関するQ&A VOL. 2問11。  
<https://www.mhlw.go.jp/content/001250243.pdf> 2025年4月14日最終閲覧
- 4) Matsuo, Tsujita, Kita, Ayaya, & Kumagaya (2023) Developing and Validating Japanese Versions of Psychological Safety Scale, Knowledge Sharing Scale and Expressed Humility Scale. *Management and Labour Studies*, 1-14.
- 5) 全日本手をつなぐ育成会（2013）：平成24年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害の評価基準等に関する調査について」報告書。
- 6) 全日本自閉症支援者協会（2021）：令和3年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害者支援に関する 中核的な人材の養成に関する研

究」報告書。

- 7) 稲田尚子, 井上雅彦（2016）：平成28年度厚生労働科学研究「医療・教育・福祉の連携による行動障害のある児・者への支援方法に関する研究」分担報告書「行動障害の評価尺度BPI (Behavior Problems Inventory) 日本語版開発に関する研究」。

## G. 研究発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表 12 eラーニングに関するアンケート回答(抜粋)

<p><b>eラーニング①「研修概要について」</b></p> <p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スライドが視覚的に見やすく理解しやすかった</li> <li>・ 研修の概要、目的、やるべきことの全体像と中核的人材の役割を理解することができた</li> <li>・ 中核人材が果たす事業所内での役割と広域人材との連携についての具体的なイメージが持てた</li> <li>・ 事前課題や事前の動画視聴についても案内されていたので理解できた</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どの程度強度行動障害に関する支援を実践したかによって、理解度が変わると思われる。具体的に従来の強行研修(基礎・実践)の限界がわかる解説があるとよいかもしい</li> <li>・ モデル研修においてどこが大変だったか等、前年度実施した報告書の内容に触れるか、案内を入れるとより理解が進むと思う</li> <li>・ フォローアップの説明について、具体的な事例を挙げながらトレーナーやサブ・トレーナーとのやり取りの説明があると、より想像しやすく、相談しやすくなると思った</li> <li>・ 事前課題に対しての説明に時間を割いても良かった</li> <li>・ Teams の使い方や資料のダウンロード方法がわかりにくく、ICT の使い方に慣れていないと厳しい</li> <li>・ ファイルのアップロード方法等の説明は、静止画での説明ではなく、実際の手順等を動画での説明のほうがわかりやすい</li> </ul>
<p><b>eラーニング②「標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点」</b></p> <p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標準的な支援の確認と中核的人材の役割・必要性を理解できた</li> <li>・ アセスメント・環境調整の重要性、構造化が有効であること等を再確認することができた</li> <li>・ 強行研修(基礎・実践)とのつながりがわかりやすく説明されていた</li> <li>・ 支援をチームで行うことの重要性を理解することができた</li> <li>・ 「標準的な支援」について資料だけではなく講義で説明している点良かった</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スライドの文字が多いため、どの部分の説明をしているのかわかりにくかった</li> <li>・ 参考になる取り組みの例を挙げるとわかりやすいのではないか</li> <li>・ 加算の条件等制度について、もう少し詳しい説明があると良い</li> <li>・ 来年以降の人材の広がり方がよくわからなかった</li> <li>・ 中核的人材の役割は、所属する事業所内の役割なのか、法人内の他事業所等においても役割を担うのか(法人内他事業所においては広域的人材が担うのかを説明してほしい)</li> </ul>
<p><b>eラーニング③-1「標準的な支援を実施するための基本的な枠組み」</b></p> <p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題のとなる行動の原因を探る上で、環境調整支援の3層構造が有効であることがわかった</li> <li>・ ICF 観点の整理の必要性がわかった</li> <li>・ 環境調整は、その人の視点で考えることが大切であると再確認できた</li> <li>・ 「穏やかな生活」「分かりやすい生活」「快適な生活」を補完し合うことで QOL を高めていくという観点に気づくことができた</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3層構造について具体的な内容(簡単な支援等)が示されていないと、イメージが沸かない受講者もいるのではないか</li> <li>・ 「穏やかな生活」「分かりやすい生活」「快適な生活」という主観的な表現だが、具体的な「達成や到達」をどのように評価していくのかが心配な点である</li> <li>・ ICF をもう少し詳しく説明してほしい。</li> <li>・ 情報量が多く、一度の視聴では理解できない。</li> </ul>

### e ラーニング③-2「ICFシステムのデータ入力と分析方法」

#### 【良かった点】

- ・ ICFシステムの全体像を把握することができ、Excel画面での説明は分かりやすかった
- ・ ICFシステムは、5つのカテゴリに体系化されており、対象者の状態像と支援の優先順位が付けやすい印象を受けた
- ・ 整理をすることで、アセスメントが不十分であることが理解できた
- ・ 環境要因を細かく分析されている点良かった
- ・ 詳細な説明で、各シートの使用方法・データ転送・転写などの操作方法もわかりやすかった
- ・ オンデマンド形式なので「見直し」することができて良かった

#### 【改善点】

- ・ 一度見ただけでは理解が難しく、繰り返しの視聴やデータに触れてみないとわからない部分もあると感じた
- ・ ICFシステムの操作について、静止画だけでなく、動画又は説明書のようなものが必要ではないか
- ・ ICFシート全体を把握しながら受講だとより良かったのではないか
- ・ 環境因子シート=ICFシート(環境因子)なのか迷い、表記を統一してほしい
- ・ ①架空事例を使った入力ワーク、②部分的な質問項目で実際に入力してみるワーク等があるとよりわかりやすいのではないか
- ・ 入力項目が多いので整理が必要であり、地域の現場で実施することは難しい
- ・ 環境因子分析結果ファイルで悪影響という表現は、環境そのものは悪ではないが、環境が本人にとって困惑等の要因になっていると感じたので、違う表現のほうがいい

### e ラーニング③-3「ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する」

#### 【良かった点】

- ・ ICFでの情報の取りまとめ方・支援前後の修正がざっくり理解できた
- ・ 固定観念に捉われない発想が重要であると学ぶことができた
- ・ 支援の成果全体をICFでまとめていくことにより、チーム支援で共有しやすいツールになる
- ・ 適切な支援を行い、強みを活かす取り組みがあると、こだわりや行動障害関連項目の減少等ポジティブな内容が説明され、事前学習としてよかった
- ・ ICFで支援前後の変化を確認すると、本人のしんどさの軽減、阻害・促進要因を分析・まとめることでQOL向上の視点で考えやすくなった
- ・ ご本人の強みに着目し支援を計画していくことは、実際の支援現場でも非常に有効である

#### 【改善点】

- ・ 受講しながらシートを入力できると、理解しやすくなると思う
- ・ ICFフォームへまとめる良さや難しさがある
- ・ 内容が難しい箇所があり、何度も視聴する必要がある
- ・ 実際に進めようとする、アセスメントが不足していると感じた
- ・ チーム支援を検討する際、分析は中核的人材となる受講者中心に検討していくのか。情報を活用していくための検討は難しいと思う
- ・ 「着想」が自由に生まれる支援の組み立てができるようになるには、大変ハードルが高い
- ・ もう少しかみ砕いて説明してほしい

### e ラーニング④「自閉症の特性と学習スタイルとアセスメント」

#### 【良かった点】

- ・ 図表を用いた具体的な説明で、ワークシートの記入例もあり、参考になった。
- ・ 支援のアイデアは「本人が好むこと」という言葉がわかりやすかった。
- ・ 動画による説明はイメージがしやすくわかりやすかった。
- ・ 個々の学習スタイルを理解できるよう、その人のことを知る姿勢が大切であると感じた
- ・ 自閉症の特性の理解=情報処理の仕方を知る=学習スタイルの理解につながり、今後のQOL向上や社会スキル習得のための支援の手がかりとなることが理解できた
- ・ アセスメントにおいて、インフォーマルアセスメントを軸に実践し、個々にあった構造化を組み込んでいく必要性を再認識した
- ・ 障害特性と学習スタイルが1つのスライドに比較・対比できる形でまとめてあり、わかりやすい

**【改善点】**

- ・ 演習動画では、複数の特性を拾うことができること等のイメージをつけるとより良いのではないかと
- ・ 最初に演習と言っていたので、演習なのか、ワークシートの使用方法なのかわかりにくかった。
- ・ ワークシートの解説を、もう少し詳細にしてほしい
- ・ 違う事例での説明・考え方も聞きたかった
- ・ 「学習スタイル=環境調整に対する潜在的なニーズ」という表現がわかりにくいのではないかと
- ・ 基礎理解が乏しいと理解が難しいのではないかと
- ・ 支援チームでアセスメントを行う際、学習スタイルとして評価する作業は、自閉症の理解と実際に行動を観察する目が養われていなければ難しい

**e ラーニング⑤「冰山モデル」****【良かった点】**

- ・ 冰山モデルマトリックスの5つのフェイズごとの観察、考え方や整理の仕方が具体的に示されていて理解が深まった
- ・ チーム内において共有ツールであることを再確認することができた
- ・ 期待される行動の視点が不足しており、行動の意味を考える大切さを改めて感じた
- ・ 実際に書き出すことで、その場で考えるだけでは見つけられなかった可能性を見出すことができた。
- ・ 行動障害を考える際、アセスメントがエピソード記憶や慣れた環境から離れることで、本来の学習スタイルをより正確にできるよう、意識的にしっかりと分ける必要があると思った
- ・ 障害特性から理解するというのを理解しているつもりだが、目先の行動に囚われていると改めて感じることもできた
- ・ 「仮説—検証」を繰り返していくということを改めて認識した

**【改善点】**

- ・ 参考事例とワークシートの記入例があるとよい
- ・ ワークシートの冰山モデルが強行研修と異なるため、繋がりが分かりにくく整理が必要である
- ・ 記入したワークシートをどのように評価するか等の指示があればより良かった
- ・ ハイリスク場面のチェックシートの解説をしてほしかった

**e ラーニング⑥「チーム支援」****【良かった点】**

- ・ チェックリストとして、チェックポイントが整理されているためわかりやすく、チーム支援の意識づけに繋がると感じた
- ・ 事業所で何が不足しているか具体的に整理されていて、課題を明確にすることができた
- ・ 話し合いのみで終了してしまい、自分たちの行動変容に繋がらないことの多さに気づいた
- ・ 前向き・ポジティブな取り組みが重要だと感じた
- ・ 各フェイズにおけるチーム支援のためのポイントが学べた点がよかった
- ・ チームアプローチということが支援の体制や安定を生む要因だと思った
- ・ チーム支援におけるファシリテーションの基礎を確認できた
- ・ ルールを決めて、伝えてから始めることを毎回意識することが大切だと感じた

**【改善点】**

- ・ チェックリストの各項目が支援現場にどのように作用するのか、図式があると良い
- ・ 実際のケースで検証した事例や記録の様式・図解を知りたい
- ・ 管理者の矜持を問うメッセージも必要ではないかと
- ・ 事業所での実行は難しさを感じる
- ・ 「ブレスト」というワードが結びつかなかった
- ・ カタカナ言葉(ブレスト・クリアリティ等)の説明をしてもらえると意味を理解しながら視聴できる。

**e ラーニング⑦「課題となっている行動の観察と記録」****【良かった点】**

- ・ スキャッタープロットでは行動が起きやすい状況・起きにくい状況をしることができ、ABC分析では本人の視点から行動の原因を探ることができるということを認識できた。

- ・ 記録の共有の仕組化を意識して取り組もうと思った。
- ・ 一目瞭然で全体像が見えるスキャッタープロットは驚きであり、今後活かしていきたいと感じた。
- ・ 本人の視点から環境との相互作用を捉える説明に納得した。
- ・ 記録を取るポイントについて、模範例もありわかりやすくまとまっていた。
- ・ 応用行動分析の基本的な考え方について、簡潔にまとめられていてわかりやすかった。
- ・ スキャッタープロットは、予防支援に効果的とわかった。記録が簡潔なので記録漏れも少なく、現場で活用しやすいと考えた。
- ・ ABC 記録は、課題となる行動に対し起きている理由を本人の視点や意味から推測できる記録であり、記入ポイントを支援者が明確に理解して記入する必要があると考えた。

#### 【改善点】

- ・ 行動観察について、「結果」をどのように判断するかについて補足があってもよかったです。
- ・ 具体的な事例を紐づけつつ、現場で活用していく中での難しさを説明してほしい。
- ・ 演習後の説明について、記入のポイントに沿っての説明があるとよりわかりやすかった。
- ・ ABC 分析の演習動画は、強行研修のように共通のものがあると研修しやすいと思う。
- ・ 映像の事例をもう1例増やしてほしい。
- ・ 参考文献の案内があってもよいのではないかと。

#### e ラーニング⑧「機能的アセスメント」

##### 【良かった点】

- ・ 機能的アセスメントを個人と環境の相互作用の視点からわかりやすく説明されていた
- ・ 機能分類が「社会的」「個人的」の領域に区別されたことで、行動の憶測を整理しやすくなった
- ・ 「課題となっている行動が果たしている役割」「行動によって示された本人のニーズ」を考えることは支援を進める上で重要なヒントとなることが認識できた
- ・ 平易な言葉で解説してもらえてわかりやすかった
- ・ 望んだ環境を得るための行動＝ニーズとしてとらえることができるということは、意思決定支援にも通じると感じた

##### 【改善点】

- ・ FAST の具体例をもっと細かく示してほしい
- ・ FAST と BPI-S の関係性について理解に時間を要した
- ・ 行動の機能について、フローチャートでまとめてあると、より分かりやすく選択できるのではないかと
- ・ ストラテジーシートの説明を増やしてほしい
- ・ ストラテジーシートの下段までまとめてワーク・取り組みを行いたかった
- ・ ストラテジーシートの説明後、コミュニケーションの代替行動は繋がりがわかりにくい印象なので、行動の機能の説明後か下段の説明後がよいのではないかと

#### e ラーニング⑨「日常生活場面での直接観察評価から支援へ」

##### 【良かった点】

- ・ 日常生活場面の行動観察の視点が6領域に分類されており、理解しやすかった
- ・ ここまで細かく具体的なインフォーマルアセスメントに触れたことがなかったので、大変ありがたい
- ・ 評価の付け方が細かく設定分けされていて、実践でも迷うことが少ない印象を受けた
- ・ 共通のアセスメントツール・シートを使用し、評価を客観的に行うことで、チーム全体の利用者像に統一感をもたらすことができると感じた
- ・ スキルチェック方法を行うことで、対象利用者の出来ること・出来ないことの細かい部分の理解ができていないことに気づくことができた

##### 【改善点】

- ・ 非常にレベルの高い内容であり、短時間で習熟することは難しいと感じた
- ・ 訓練を受けた支援者でないと評価は難しいと思う
- ・ 評価の経験がない場合、評価方法のイメージが持ちにくいのではないかと
- ・ もう少し具体例や評価中の動画を見たかった
- ・ 得られた結果を支援内容や支援現場に活かす手段をもう少し詳しく説明してほしい
- ・ 本研修に適應するならば、認知レベルの項目だけでもよいのではないかと

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 評価項目が多く、文章説明だけではイメージしにくいので、解説等があるとよい</li> <li>・ モデルにより評価できない項目もあると思うので、その場合の代替評価策も確認できるとよい</li> </ul>
<b>e ラーニング⑩「見てわかる工夫（構造化）」</b>
<p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 構造化の例が、生活介護とグループホームに分けられ、困難さと強みの側面からの説明と写真による例示で支援の根拠がわかりやすく理解が深まった。</li> <li>・ 強行研修（基礎・実践）との関連、変更点が明確であった</li> <li>・ 構造化が目的ではなく、利用者の立場で期待されていることが理解でき、自立的な行動を引き出すための手がかりとされていたことが印象的であった</li> <li>・ スキル・強みの等のアセスメントが前提で構造化が行われるということが強く意識できる内容であった</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 強行研修（基礎・実践）から、難しい用語に変更した理由がわからない。話がとんだため混乱した</li> <li>・ 新旧の用語について、強行研修・中核的人材養成研修、どちらのものとして使用するのかわからなかった</li> <li>・ 以前と呼称が変わっている部分（物理的構造化→物理的整理統合、視覚的構造化→マテリアルストラクチャー等）の解説がほしかった</li> <li>・ 境界の強弱も特性により変化することを理解しなければ、整理統合の配慮が活かされないと思うので、その部分を強調するべきである。</li> </ul>
<b>e ラーニング⑪「コミュニケーションプログラム」</b>
<p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ コミュニケーションの困難さを、表現・理解・やりとりの3点から論じられていてわかりやすかった</li> <li>・ 表出コミュニケーションの要素が、現場感覚とあわせてわかりやすい内容となっていた</li> <li>・ 無発語・発語の有る方、両方のコミュニケーションの困難さが取り上げられていてよかった</li> <li>・ 言葉掛けが多いことが良いということではなく、混乱させず理解できる伝え方が重要であると再認識できた</li> <li>・ コミュニケーション能力をアセスメントし理解することで、混乱なく意思疎通を図れるようにしていく重要性を学ぶことができた</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 重要な項目なので、時間が長くなっても、詳細の説明をしてほしい</li> <li>・ 写真や映像でさらに多くの具体例を見せてほしい</li> <li>・ 導入時に、なぜコミュニケーションが苦手なのかという説明を特性や学習スタイルに基づいて簡単な説明があってもよいのではないか</li> <li>・ 講義だけでコミュニケーションの具体的な教え方を習得することは難しいと感じる</li> <li>・ ワークシートが研修内で、どの部分に位置付けられているのかわからなかった</li> </ul>
<b>e ラーニング⑫「機能的アセスメントに基づく支援」</b>
<p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 強化・弱化について、平易な言葉かつ図で示されていてわかりやすかった</li> <li>・ ストラテジーシートの記入について、考えていく順番が視覚的に示されており理解しやすかった</li> <li>・ 代替行動だけではなく、「望ましい行動・QOLの向上」として取り上げられていてよかった</li> <li>・ 先行条件が構造化・ICFの促進的環境因子の導入・阻害要因の除去、というまとめが理解しやすかった</li> <li>・ 行動の問題に対し、特性理解の他に機能アセスメントは欠かせないと思う</li> <li>・ 強行研修の基礎・実践ともに機能分析はカリキュラムに盛り込まれていないので、このような教材を使用し、事業所で学習できるとよい</li> <li>・ 負の強化・罰を「禁止されている」と明確に表現されていたことがよかった</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ メリット無しのイメージがわからない場合のために、具体例の追記があるとよいのではないか</li> <li>・ 支援の三層構造について、前半でイメージできるようになるとより効果的だと思う</li> <li>・ 支援の論理的な部分への言及をもっとしてもよいのではないか</li> <li>・ 重度の方の事例も提示されると、入所施設は現場に活かせると思う</li> <li>・ ストラテジーシートの上・下段を同じ講義で扱ってほしい</li> </ul>

<p>e ラーニング⑬「支援プランの立案」</p>
<p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援計画を立て、その後の生活にどのように影響するかという視点が少なかったと再認識した</li> <li>・ 複数のアセスメントを活用・分析することで、より具体的な支援計画に繋がると理解できた</li> <li>・ アセスメントと支援計画の繋がりは、意識していても薄れやすいと感じるので、再認識できた</li> <li>・ 保護者の願いに合わせすぎ、アセスメントとの結びつきや本人のニーズを叶えることが出来ていないことが多々あることに気づいた</li> <li>・ 難しい言葉を極力使用せず、イメージしやすい言葉で整理されていたので、わかりやすかった</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実際に支援計画を作成することを考慮し、項目ごとの説明をもう少し詳細にしてほしい</li> <li>・ 実際の事例等があると、さらに理解が進むと思う</li> <li>・ 強行研修にも組み込んでよいのではないか</li> <li>・ アセスメント、ICF、ワークシートとの繋がりの説明がほしい</li> <li>・ 「支援計画」について、「個別支援計画」「支援計画シート」と混同したので、文言を整理してほしい</li> <li>・ 支援計画シートや手順書が独自の様式となっているので、より専門的な講義をしてほしい</li> </ul>
<p>e ラーニング⑭「支援手順書の作成と実際の対応」</p>
<p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事例動画があることで、課題分析から支援手順書作成にあたっての理解が深まった</li> <li>・ 教え方（指示）の階層性が勉強になった。</li> <li>・ 課題分析は、支援計画から手順書を作成する上で大切な作業であることが理解できた</li> <li>・ 支援の振り返りの際に、結果を見える化することで支援者間の共有がしやすいと感じた</li> <li>・ 適切にできた活動をさらに広げる流れになっていてわかりやすかった</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援の目標となる自立の概念についての説明があるとよかった</li> <li>・ 強行研修との関連をわかりやすく整理してほしい</li> <li>・ 重要な部分なので、数回に分ける等もっと詳細にしてほしかった</li> <li>・ 支援手順書がチームで共有されない背景として考えられる要因・改善策の例を挙げてほしい</li> </ul>
<p>e ラーニング⑮「支援プラン実施後の評価と改善」</p>
<p><b>【良かった点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ PDCA サイクルを意識し、支援の工夫・コンサルテーションの活用・客観的な評価の大切さを再認識できた</li> <li>・ アセスメントは支援の全過程で永続的に行われるということをわかりやすく説明してくれた</li> <li>・ 常にアセスメントの視点を持ち、チームで共有する大切さを再認識できた</li> <li>・ 外部人材（コンサルタント）の活用という発想はなかったが、コンサルタントが入ることで客観的な視点で話ができるのではないかと思った</li> </ul> <p><b>【改善点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ チームで評価できる具体性が必要という事例がもっと多く示されるとよいと思う</li> <li>・ 再アセスメント時の視点の持ち方・支援計画シートの部分をもう少し詳しく聞きたい</li> <li>・ 記録や支援手順書のシートは、推奨される決まったフォーマットがあるとよいのではないか</li> <li>・ 外部コンサルタントを頼る基準の明示がほしい</li> </ul>

表13 研修運営に関するアンケート回答(抜粋)

- ・ 受講生同士でチーム支援を検討している仕組み作りがあればよいと思う
- ・ グループ討議について、受講生とトレーナーとのやり取りになってしまい、もう少しグループ討議の時間が必要
- ・ トレーナーへの質問がしっかり出来るよう、期間を長く設定し1回の講義時間も長くしていただくにより実りのある研修になるのではないかと
- ・ 研修時間がもう少し長いほうが、交流やアドバイスをいただける時間を確保できたと思う
- ・ 対面式の集合研修やOJTの機会がもう少し多い方が良い
- ・ 集合研修や事業所への訪問フォローアップで直接会って話をしたことで、相互理解や取り組みが明確になったように思う
- ・ 受講者の事業所への訪問フォローアップは少なくとも2回は必要だと考える(インテーク期は必須、実践のタイミングの計2回目が望ましい)
- ・ 訪問による現場の確認は有効だったので、早い時期で訪問ができるとう良い。実際の施設の雰囲気や支援の様子・チーム支援の状況をトレーナーが確認できると、その後の助言等への好影響があった
- ・ 中間・研修最終回後に、懇親会があればうれしかった
- ・ 研修修了者に対し、継続的に学び続けられる場所や繋がりが必要だと思う
  
- ・ eラーニングは、実践・課題を行う上で何度も見直すことが出来てよかった
- ・ 説明がすべて動画だったので、理解するまで時間がかかった
- ・ ワークシートの活用方法について、オンタイムの講義形式のコマがあっても良いのではないかと
- ・ 個々の学習の内容や研修目的・内容等を共有できる場が少なかったように感じた
- ・ 受講者が早めに研修全体のイメージを持てるよう工夫できると良い
- ・ 対象者の同意書を発送する時点(事前課題取り組み前)で、どのような対象者であると講義が進めやすいかの記載があると、講義をスムーズに進められるのではないかと
- ・ 最終評価前に、中途評価があると後半の研修における留意点・シートの活用等の課題点が明確になり、より高い精度で取り組めるのではないかと
- ・ 毎回、ディレクターの話があることで、支援者支援の原点を確認でき、大変よかった
  
- ・ 受講者レベル・事業所の状況に合わせたマネジメントを、トレーナーが進捗確認できるよう明確な軸を設定したほうが良い
- ・ トレーナー自身がほかの状況を把握する機会がないように感じた。どんな場面でどのような判断をもとに選択しているか等、トレーナーの養成要素も含まれると思う
- ・ 資料作成に関するフォローを、トレーナー、サブ・トレーナーが事前に共通理解できる機会が必要ではないかと
  
- ・ パソコンの知識と技術がなく、何度も説明を聞いたが、支援以上に難しく Teams の操作がとても大変だった
- ・ 事前学習として、Teams の使用方法の練習が必要
- ・ 研修に必要な情報を確認する際、メール・Teams・ファイル・チャット等複数あり、慣れるまでに時間を要した
- ・ Teams や Excel シートの使い方について、受講者が増えることを想定し、シンプルな仕組みにしたほうがよい
  
- ・ サブ・トレーナーがケースを取り上げる意味は大きかったが、サブ・トレーナーの役割を担いながらトレーナーのサポートがないと負担が大きくなる。サブ・トレーナーの取り組む部分の再検討と明瞭化を期待する
- ・ 研修プログラムにサブ・トレーナー向けのトレーナー技術養成講義や演習が必要である
- ・ 画一的に実施することは難しい受講者が多い仕組みという印象
- ・ 中核的人材養成研修の事務局運営のコツをまとめたマニュアルが作成されると、自治体担当者が助かるのではないかと

表14 研修内容に関するアンケート回答(抜粋)

- ・ 研修後、実施して記録などの提出締め切りまでの期間が短く、その間にチームで検討・実施して記録にまとめるのは仕事をしながら行うことは厳しかった
- ・ 研修期間がタイトで内容のボリュームとあっていないように思う
- ・ 支援期間内では効果測定が難しい事例もあるので、研修期間がもう少し長くても良いのではないか
- ・ 研修を持続的なものにするために、課題量の調整が必要だと思う
- ・ スキルを身につけるという面では、もう少し時間が必要であると感じた。
  
- ・ 幅広くアセスメントがとれた反面、そのデータを支援組み立ての際にどのように関連付けて考えるのかわかりにくく感じた
- ・ アセスメントの量が膨大で現場への負担が大きい。量が減ると現場で活用しやすいのではないか
- ・ 日常生活行動場面アセスメントシート・ICFシートと分析アプリの連動操作が難しかった
- ・ ワークシートの活用意図を明確にし、理解して使用する方が学習効果は高いと感じるため、各回で使用の意味等に補足があると良いのではないか
- ・ ワークシートの活用は、各ケースの個別性があるため、固定様式ではなく必須のものとはケースにより扱うもの等オプションで選択、トレーナーの指示で活用するようにできるといいのではないか
- ・ 各ワークシートの使用方法は、もっと丁寧に1~2時間程度説明しないときちんと理解できないと思う
- ・ 資料が多すぎることで「難しい」というイメージがついてしまい、偏見に繋がる可能性がある
- ・ ICFシートは負担が大きく、費用対効果で考えると事業所での継続は負担が大きいと感じる
  
- ・ チームで支援を行うことの体制を作るきっかけになり、共通の支援を行い記録やデータを分析し支援の方略を考えることで、成果が得られるという経験をチームができ、チームの支援力向上を図ることができた
- ・ 現場職員と一緒に考え、実践を繰り返したことで、現場職員の対象利用者の課題行動に対する捉え方が変わり、対象利用者の見せる姿の変化に繋がった
- ・ 「考える楽しさ」や「達成感」と同時に「負担感」を感じた
- ・ 研修と実践を行うことでより学びが多かった
- ・ チームに協力を得ようとしても、強度行動障害に取り組み始めたばかりの施設では基盤がなく、通常業務と並行して行うことは難しかった
- ・ 支援チームでの話し合いで良いアイデアを引き出すコツ・職員に対してどのような声掛けをすれば動いてもらえるか等、職員への支援についての意見もグループ内で聞きたかった
  
- ・ 初回に、昨年度の受講者の事例報告があると、全体のイメージを持って研修に臨めるように感じる
- ・ 事前課題のICFシートの作成に苦勞したので、次年度以降は記載例があると、何を期待されている欄かのイメージができ、より詳細な表現が出来ると感じた
- ・ 課題により、何のために・どのような効果があり・どのように使用されるのかがわかりにくいものもあるので、講義動画で言及してもらえると、見通しがつきモチベーションも上がると思う
- ・ 全体的な流れが見えにくかったため、研修各回の最初に最終回までの流れを確認してもらえると、チームでの役割とゴールをイメージしながら取り組めると思う
  
- ・ 各ワークシートの強行研修(基礎・実践)との関連性、研修プロセスにおける関連性を最初に説明したほうが養成研修とのつながりも意識しやすい
- ・ 強行研修(基礎・実践)で学び、講師として伝えてきた冰山モデルが全く違う形になっており、戸惑った
- ・ 強行研修からステップアップするなら、用語やワークシート等は統一させた方がいいのではないか
- ・ 強度行動障害支援者養成研修(基礎・実践)とのつながり感がもっと欲しかった
  
- ・ 中核的人材が備えておくべき内容(学習スタイル、特性、構造化、記録や冰山、ABCなど)は多岐にわたっており、それなりの経験がないと身につかない内容である
- ・ 何を中心に、どのような時間配分でカリキュラムを組み立てるか、を明確にしたほうが良い
- ・ 各都道府県で実施できるよう、可能な限りシンプルで実践的な研修を明確化してほしい
- ・ 技術面を伝達する際、eラーニングのみでは難しく、トレーニングセミナーのような知識と技術を結ぶ模擬実践が必要である
- ・ 中核的人材養成研修修了者を配置した場合の加算請求の根拠・記録等の事務処理について等、見通しについての説明があると良い。

表15 サブ・トレーナーがトレーナーから学んだことに関するアンケート回答(抜粋)

- ・ 意見がいいやすい「場」づくり(心理的安全性の確保)の方法
- ・ 受講者のやる気を削がない言葉掛け・視野、気づきを広げる話題の提供方法
- ・ 他者を否定せず、常に傾聴し、肯定的に関わる姿勢
- ・ 課題となる点を、指摘ではなく疑問で確認し、受講者の気づきを促す技術
- ・ 取り組みに対するポジティブなフィードバックによるモチベーションマネジメント
- ・ グループ討議の目的・目標・報告の流れ・時間配分等、具体的な明示
- ・ 受講者のモチベーションを保ちながら進め、十分でないところを「理解できた・納得できた・活用できる」までの指導方法
- ・ 答えを教えるのではなく、導きを学ばせるスキル
- ・ 助言が指導・指示に偏らないよう、考えの根拠などを聞き、修正・導きつつ、受講者主体で進めていた点
- ・ 受講生の理解度を確認しながら進め方を工夫している点
- ・ 受講生が支援に対しどのように考えているのかを聞き出す姿勢より、信頼関係を構築することがコンサルテーションを実施する上で大切な土台であるということ
- ・ 受講者の経験からの悩みや疑問に対し、自らの経験と知識を結び付け助言しているので、臨場感をもって取り組み・課題を実践に繋ぐことができていたこと
- ・ 管理職も巻き込んで行うことで理解促進を図っていたこと
- ・ 対象利用者や支援者の具体的な動きの確認、事業所の環境を丁寧に確認し、現状で実施可能なレベルを探りながらアドバイスするスタンスの大切さ
- ・ 事業所訪問時の利用者や職員に対する配慮
- ・ モデル利用者へのアセスメントのみではなく事業所全体を含んだアセスメント力
- ・ 現況を受容し、寄り添い助言している点
- ・ 肯定的な表現で伝え、修正が必要な場合は、受講者の考えを受け止め納得できる形で理由を添えた助言方法
- ・ 声のトーンやスピードも助言の上では重要な要素であるということ
- ・ 専門用語は極力使わず、分かりやすく伝わりやすい表現で説明している点
- ・ 受講者や施設の支援の意図をよく聞いてから助言していた点

表16 サブ・トレーナーが感じているトレーナーになるために必要な学びに関するアンケート回答(抜粋)

- ・ 知識だけではなく、強度行動障害支援の実践経験
- ・ 外部施設でのコンサルテーションの実践現場を見る機会
- ・ 伝えるスキル(コーチング・ティーチング・コンサルティング・カウンセリング)に関する学び
- ・ 支援力だけではなく、コミュニケーション力・ファシリテーション技術
- ・ コンサルテーションに特化した研修の受講・学び・実践
- ・ 組織のアセスメント力
- ・ 組織、管理者、現場の支援者、それぞれの立場を理解した助言方法

表17 関係団体ヒアリング回答(抜粋)

<p><b>全国手をつなぐ育成会連合会 (ヒアリング日時:令和7年1月20日 / 対応者:4名)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研修の仕組みに異論はない(研修の受講枠は、人口比を考慮してもらいたい)</li> <li>・ 研修を丁寧に取り組んでいくことは納得できるものの、普及を考えると遅い気もする</li> <li>・ 加算のために受講をする研修ではないことを、行政のマインドから変えていく必要がある</li> <li>・ 様々な研修を受講している熱心な人材に、中核的人材養成研修を受講してもらいたい</li> <li>・ 強行研修と中核的人材養成研修を活用することで、地域の基盤整備ができるのではないか</li> </ul>
<p><b>全日本自閉症支援者協会 (ヒアリング日時:令和7年2月7日 / 対応者:3名)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研修の仕組みに異論はない。全国的な研修実施の方法は今回の形式(オンライン活用)が妥当</li> <li>・ 都道府県からの受講者の選定が課題。要件を明確に示す必要がある。サブ・トレーナーの選定についても基準が必要になる</li> <li>・ 組織として取り組む姿勢が必要であり、受講後にトップがどのように取り組むかが大事である</li> <li>・ 地域の支援力向上に寄与し、広域的支援人材になれるような人材を都道府県が選定できるよう、継続的な育成が必要である</li> <li>・ 都道府県での研修実施は、都道府県別ではなく、ブロックで分けて近隣都道府県が合同で研修するほうが現実的ではないか</li> <li>・ 課題量・研修内容の精査が必要。都道府県での研修実施となった場合の質の担保が課題になる</li> <li>・ 研修修了者が増えてきたときに、地域でのネットワーク構築が課題になる</li> </ul>
<p><b>日本知的障害者福祉協会 (ヒアリング日時:令和7年2月13日 / 対応者:3名)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 強度行動障害の研修について、実践・現場実習の場の充実がポイントである</li> <li>・ 実践しながら助言を受けつつ学ぶ形式の研修を全国的に実施できたのは、画期的であった</li> <li>・ 支援技術に偏重した研修プログラムにするのではなく、権利擁護や虐待防止、支援者のサポート体制づくり等も必要ではないか</li> <li>・ 強行研修から中核的人材養成研修の内容の差が大きいため、調整が必要である</li> <li>・ 研修後のフォローアップや現場で学ぶ現任研修の仕組みが重要である</li> <li>・ 研修受講者の質の担保の観点から一定の水準を設ける必要がある</li> <li>・ 受講者、事業所の質がバラバラであり、力量の把握が課題。受講者の選定基準を明確に示してもらいたい</li> <li>・ 研修の普及や現場サポートにあたり、行政や事業所長の理解が必須。説明会などが必要である</li> </ul>
<p><b>日本自閉症協会 (ヒアリング日時:令和7年2月19日 / 対応者:3名)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ フォローアップもあり、研修の仕組みとしてよい</li> <li>・ 修了基準に満たない人に修了書を出さないのはよい。参加するだけの研修になってはいけない</li> <li>・ 受講者が孤立しない工夫(同じ事業所からの複数参加等)や管理者の理解を得ていく必要がある</li> <li>・ 研修内容に、家族支援や関係機関との連携の視点が必要ではないか</li> <li>・ 管理者が中核的人材の活用を考えていく必要がある</li> <li>・ 支援者が繋がることで働くモチベーションにもなるため、地域の中でネットワーク構築が重要である</li> <li>・ 「強度行動障害を有する者」ではなく、「強度行動障害の状態にある者」ではないか。表現を検討していただきたい</li> </ul>
<p><b>全国地域生活支援ネットワーク (ヒアリング日時:令和7年2月25日 / 対応者:5名)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研修内容のレベルが高く、強行研修との差が大きい</li> <li>・ 研修内容のボリューム、ワークシートの精査が必要である</li> <li>・ 研修によって、支援知識・技術の向上だけではなく、ネットワークづくりにつながった</li> <li>・ 受講者の選定方法が都道府県によってばらつきがあることは課題と感じている</li> <li>・ 都道府県内で助言ができる人材の養成のため、サブ・トレーナーの在り方、選定方法が大切である。受講者がサブ・トレーナーになっていく流れがよいと思っている</li> <li>・ 研修の重要性、意義を行政に理解してもらうことが重要である</li> <li>・ 修了者が事業所のチームで実践し続けられるよう、実践の評価ができるガイドラインや継続的なOJT、実践発表、研修等のフォローが必要と考えている</li> <li>・ 無理なく継続して実施できる研修体制の構築が必要である</li> </ul>

表18 中核的人材養成研修プログラム

氷山モデル MX	科目名	事前学習 (eラーニング)	研修各回・グループ討議 (オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	事前課題	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な枠組み ③-2ICFに基づくQOL支援		1.5h	【モデル情報・事業所情報の整理】 モデル情報シート、事業所情報シート(ハイリスク場面)、BPI-S ICFシート(プレ:相談支援等と連携して作成)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④自閉症の特性と学習スタイル ⑤氷山モデル ⑥チーム支援	研修ガイダンス・管理者の役割【講義】 モデルを含む現場支援の状況・優先課題の確認	2.5h	支援現場・モデルの様子の動画撮影 特性ワークシート、氷山モデルワークシート
フェイズ1	(2)特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題となっている行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面での直接観察	モデルの紹介と質疑(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの評価場面の動画撮影(10程度の評価項目をトレーナーが指示) ABC記録、ストラテジーシート(上段) スキャッタープロット(プレ)、FAST
フェイズ2	(3)課題行動に対する支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかる工夫(構造化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	優先課題(標的行動)の検討と仮説立て	2.5h	ハイリスク場面の整理、標的行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルワークシート、構造化ワークシート、 コミュニケーション指導計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェイズ3	(4)支援プランの立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手順書の作成と実際の対応	実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(課題分析)の作成と実施 支援場面の動画撮影①、実践報告書(構成案)の作成
フェイズ4	(5)支援プランの見直し(PDCAサイクル)	⑮実施後の評価と改善	現場実践の途中経過報告(仮説-検証)	2.5h	支援場面の動画撮影②、実践報告書(発表用資料)の作成 スキャッタープロット(ポスト)、チーム支援実行状況チェックシート② ICFシート(ポスト:相談支援等と連携して作成)
	(6)実践報告会		現場支援の実践報告	3h	
フェイズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補講		各受講生の事業所に訪問する、オンラインで聞き取り(トレーナー・サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

表19 中核的人材養成研修プログラムと告示対応表

	該当する告示の科目						
中核的人材養成研修の科目	<p>強度行動障害を有する者に対する標準的な支援に関する講義</p> <p>環境調整に向けたアセスメントに係るシート等の使用方法に関する講義</p> <p>(1.5H)</p>	<p>チーム支援及び管理者の役割に関する講義</p> <p>事業所におけるアセスメントの実施状況の振り返りに関する演習</p> <p>(2.5H)</p>	<p>環境調整のプロセスに関する講義</p> <p>アセスメントに関する演習</p> <p>(2.5H)</p>	<p>環境調整に係る計画の策定に関する講義</p> <p>環境調整に係る計画の策定に関する演習</p> <p>(2.5H)</p>	<p>環境調整の実践の振り返りに関する演習</p> <p>環境調整に係る課題の設定及びその改善に関する講義</p> <p>(2.5H)</p>	<p>機能的アセスメント(強度行動障害を有する者の行動の要因に係るアセスメントをいう。以下同じ。)に関する講義</p> <p>機能的アセスメントを踏まえた個別支援計画の作成に関する演習</p> <p>生活の質の向上に向けた支援に関する講義</p> <p>(2.5H)</p>	<p>強度行動障害を有する者に対する標準的な支援に係るチーム支援の実践の振り返りに関する演習</p> <p>(3H)</p>
事前課題	●						
(1)研修ガイダンスとチーム支援	●	●					
(2)特性理解とアセスメント	●	●	●	●		●	
(3)課題行動に対する支援の検討(行動の分析)			●	●		●	
(4)支援プランの立案と実施			●	●		●	
(5)支援プランの見直し(PDCA サイクル)					●	●	
(6)実践報告会							●
フォローアップ・補講							●

別添4-2

## 広域的支援人材の研修に関する研究

—広域的支援人材及びその候補者がこれまでに受けてきたトレーニングから  
見える必要な要素について—

分担研究報告書

令和6年度厚生労働科学研究費補助金  
(障害者政策総合研究事業)

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究(22GC1015)  
分担研究報告書

広域的支援人材の研修に関する研究  
—広域的支援人材及びその候補者がこれまでに受けてきたトレーニングから  
見える必要な要素について—

研究代表者：日詰 正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
研究協力者：村岡 美幸 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
中澤 典子 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

本研究は、広域的支援人材の活動の質の維持・向上を図る上で、必要な要素を抽出・整理することを目的に、令和5(2023)年度中核的人材養成研修のディレクター、トレーナー17名、及び令和6(2024)年度に開催した広域的支援人材(候補者含む)を対象としたイベント参加者のうち、発達障害者支援センター職員、発達障害者地域支援マネージャー、広域的支援人材名簿登録者、中核的人材養成研修の講師等で、コンサルテーション経験のある者41名を対象に、自閉スペクトラム症の方への支援やコンサルテーションの実施に際し、過去に受けたトレーニングについて、メールによるアンケート調査を2024年10月～11月に行った。本研究により、広域的支援人材の質の維持・向上を図るためには、中核的人材養成研修内でのOJTに加えて、「実践者同志の交流」「効果的なアセスメントツールの習得」「利用者とのコミュニケーション方法やマネジメントスキルの獲得」などが必要だと考えられた。

A. 研究目的

1. 背景

令和6(2024)年度障害福祉サービス等報酬改定においては、状態が悪化した強度行動障害の状態にある児者に対し、高度な専門性と豊富なコンサルテーションの経験を有する広域的支援人材が、事業所等を集中的に訪問等(情報通信機器を用いた地域外からの指導助言を含む)し、標準的な支援(適切なアセスメントと有効な支援方法の整理をともに行い、環境調整を進めること)に基づいた支援の実施に寄与することを評価する「集中的支援加算」が創設された。

広域的支援人材は、都道府県が、①国立のぞみの園が実施する中核的人材養成研修の指導者(ディレ

クター・トレーナー等の名称で受講者に対して)である者、②厚生労働省の補助金事業「発達障害者支援体制整備事業」によって配置された発達障害者地域支援マネージャーである者、③その他、強度行動障害を有する児者への支援に知見を有すると都道府県等が認める者、この①から③のいずれかに該当する者を選定・依頼し、名簿を作成公開することとなっている<sup>1)</sup>。

上記の①については、先行研究として令和3(2021)年度の厚生労働省障害者総合福祉推進事業「強度行動障害者支援に関する中核的な人材の養成に関する研究」(実施主体:全日本自閉症支援者協会)の一環として行われたモデル研修に関わった者を中心に令和5(2022)年度、令和6(2023)年度

の中核的人材養成研修を行い、令和6（2023）年度末時点では全国で34名が該当している。

さらに、将来的なトレーナー候補として中核的人材養成研修ではサブ・トレーナーという役割を位置づけ、グループ演習やフォローアップ訪問を行う際に、トレーナーの受講者に対する助言の仕方等をOJTの形で学ぶようにしており、令和6（2023）年度末時点では全国で56名が該当している。

本研究では、広域的支援人材の選定方法の②、③で依頼をされた者も含め、活動の質の維持・向上を図る上で、必要な要素を抽出・整理することを目的とする。

## B. 研究方法

令和5（2023）年度中核的人材養成研修のディレクター、トレーナー17名、及び令和6（2024）年度に開催した広域的支援人材（候補者含む）を対象としたイベント参加者のうち、発達障害者支援センター職員、発達障害者地域支援マネージャー、広域的支援人材名簿登録者、中核的人材養成研修の講師等で、コンサルテーション経験のある者41名を対象に、自閉スペクトラム症の方への支援やコンサルテーションの実施に際し、過去に受けたトレーニングについて、メールによるアンケート調査を2024年10月～11月に行った（回収数58件、回収率100%）。

表1 アンケート調査回答者の概要（複数回答）

発達障害者支援センター職員・ 発達障害者地域支援マネージャー	20 (34.5%)
広域的支援人材名簿登録者	5 (8.6%)
中核的人材養成研修の講師等	41 (70.7%)

n = 58

### ■ 倫理面への配慮

国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号06-09-03）

## C. 研究結果

(1) これまで受けてきた自閉スペクトラム症の方

への支援に関するトレーニング方法

トレーニングの方法は、「講義を受ける」「コンサルテーション等への同行・観察」「コンサルテーションの実践・フィードバック」「研修等の企画運営」「会議等の検討の機会」「スーパービジョン」「OJT」「強度行動障害支援者養成研修」「実践者等との交流」「インシデントプロセス法による事例検討」「研修の講師、企画運営」等であった（表2）。

(2) これまで受けてきた自閉スペクトラム症の方への支援に関するトレーニング内容

トレーニング内容は、「TEACCH 5Days トレーニングセミナー」「ABA」「PECS」「TTAP」等であった。

「TEACCH 5Days トレーニングセミナー」は、国内だけでなく、米国で開催しているセミナーに参加している者もいた（表2）。

そのほか、コーチングスキルなどのマネジメントスキルなど、中間管理職以上に求められるスキルを学んでいる者もいた。

表2 広域的支援人材（候補者含む）が受けているトレーニングの一例

OJT (On-the-Job Training)	受ける
コンサルテーション	同行
コンサルテーション	コンサルティ
コンサルテーション	コンサルタント
TEACCH 5 Days トレーニングセミナー	受講
TEACCH 5 Days トレーニングセミナー	シャドー
強度行動障害支援者養成研修 (指導者研修)	講師
強度行動障害支援者養成研修 (指導者研修)	企画運営
インシデントプロセス法による事例検討	事例検討

## D. 考察

本研究により、広域的支援人材の質の維持・向上を図る上で、中核的人材養成研修内でのOJT以外に必要なトレーニング方法や内容を整理することができた。具体的な方法は、「実践者同志の交流」「知識の獲得」であり、内容は、「効果的なアセスメントツールの習得」「利用者とのコミュニケーション方法」「マネジメントスキル」であると考えられた。

## E. まとめ

以上の結果を踏まえ、令和7年度以降に開催する広域的支援人材を対象とした研修等の企画を、広域的支援人材に期待される役割と照らし合わせ検討する。

### <文献>

- 厚生労働省・子ども家庭庁：状態の悪化した強度行動障害を有する児者への集中的支援の実施に係る事務手続等について  
(<https://www.mhlw.go.jp/content/001270362.pdf>)

### <資料>

表3 トレーニング一覧

1	スーパービジョン	受ける立場
2	スーパービジョン	スーパーバイザー
3	事例・実践等報告	
4	アセスメントツールを学ぶ研修	受講
5	OJT	受ける立場
6	OJT	する立場
7	コンサルテーション	同行
8	コンサルテーション	コンサルタント
9	コンサルテーション	コンサルティ
10	コンサルテーション（講義）	受講
11	コンサルテーション同士の情報交換	
12	アセスメント方法を学ぶ研修	受講
13	TEACCH5days トレーニングセミナー	受講

14	TEACCH5days トレーニングセミナー	シャドー
15	TEACCH5days トレーニングセミナー	事務局
16	TEACCH5days トレーニングセミナー - Beyond the Basics	受講
17	TEACCH5days トレーニングセミナー	受講
18	TEACCH5days トレーニングセミナー	事務局
19	TEACCH5days トレーニングセミナー	トレーニー
20	TEACCH5days トレーニングセミナー	シャドー
21	TEACCH5days トレーニングセミナー - コンサルテーション研修	受講
22	TEACCH5days トレーニングセミナー - Beyond the Basics	受講
23	TEACCH3Days トレーニングセミナー	受講
24	TEACCH3Days トレーニングセミナー	事務局
25	TEACCH3Days トレーニングセミナー	トレーナー
26	TEACCH2Days トレーニングセミナー	シャドー
27	TEACCH 資格申請時 動画のスーパービジョン	受講
28	Fundamentals of Structured TEACCHing	
29	TEACCH アセスメント研修	受講
30	TEACCH 研究会	参加
31	TEACCH 研究会	アシスタント
32	TEACCH 研究会	講師
33	TEACCH 研究会	トレーナー
34	TEACCH 研究会トレーニングセミナー	受講
35	TEACCH 自立トレーナー	受講
36	TEACCH コンサルテーション技術 (ジャック・ウォール)	受講
37	トレーニングセミナー	開催
38	トレーニングセミナー	見学
39	トレーニングセミナー	アシスタント
40	自閉症支援のためのワークショップ	受講
41	自閉症 e サービス トレーニングセミナー	
42	自閉症 e サービス トレーナー養成講座	受講
43	自閉症 e サービス 全国ネット トレーナー ートレーニング	
44	自閉症カンファレンス	

45	自閉症 e サービス基礎研修	受講
46	自閉症 e サービス実践ワークショップ	受講
47	TTAP ワークショップ	受講
48	TTAP ワークショップ	受講
49	TTAP アセスメントセミナー	受講
50	川崎医療大学自閉症セミナー	
51	ABA	受講
52	PECS	受講
53	PECS Pyramid Educational Consultants UK PECS Training	受講
54	Moving from the Picture Exchange Communication System (PECS) to Speech Generating Devices (SGDs) Talk	受講
55	PECS ワークショップ	受講
56	PECS ベーシック 2 day	受講
57	Guide to Managing Challenging Behaviours Parent Workshop	
58	強度行動障害支援者養成研修	受講
59	強度行動障害支援者養成研修[基礎]	受講
60	強度行動障害支援者養成研修[実践]	受講
61	強度行動障害支援者養成研修(指導者研修)	事務局
62	強度行動障害支援者養成研修(指導者研修)	講師
63	強度行動障害支援者養成研修フォローアップ研修	コーディネート
64	強度行動障害支援者養成研修アドバイザー派遣	コーディネート
65	強度行動障害アドバンス研修(東京)	事務局
66	強度行動障害支援者養成研修 テキストのコンテンツ作り	
67	強度行動障害支援者養成研修トレーナートレーニング(東京都)	受講
68	強度行動障害支援者養成研修(福岡市)	講師
69	強度行動障害支援者養成研修(長崎県)	講師
70	強度行動障害支援者養成研修(国研修)	受講
71	強度行動障害支援者養成研修(京都府)	受講
72	強度行動障害支援モデル事業(京都府)	受講
73	行動援護従業者養成研修	講師
74	強度行動障害支援者養成実地研修	受講
75	行動支援研修(福岡市)	講師

76	発達心理学	受講
77	応用行動分析学	受講
78	応用行動分析学	トレーニング
79	ABA 研修会	受講
80	認知心理学	受講
81	行動コンサルティング	受講
82	コーチングスキル	受講
83	マネジメントスキル	受講
84	第三者評価	
85	チームリーダー	担い手
86	運営管理職	担い手
87	現場訪問	
88	インシデントプロセス法による事例検討	講師
89	全国の実践者・研究者との交流	
90	メンターへの相談・助言	
91	個別指導プログラム 構造化の基礎を学習	
92	中核的人材養成研修	受講
93	中核的人材養成研修	トレーナー(SV)
94	中核的人材養成研修	サブ・トレーナー
95	筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻博士前期・後期課程におけるトレーニング	受講
96	機能的アセスメントによる環境調整、行動改善を学ぶ研修	受講
97	地域支援マネージャー研修	受講
98	東社協アドバンス研修トレーナートレーニング	受講
99	東京都支援力育成派遣事業(コンサル)でのトレーナートレーニングOJT	
100	CARS2(小児自閉症評定尺度 第2版)	
101	横浜市強度行動障害者への施策検討委員会への参加	
102	PBS(積極的行動支援)	
103	発達障害者支援ケアマネジメント支援事業 フォローアップ研修	
104	発達障害者地域支援マネージャー研修[基礎編]	受講
105	発達障害者地域支援マネージャー研修[応用編]	受講
106	フォーマルアセスメント実施のための研修	受講

107	国立障害者リハビリテーションセンター主催の研修	受講
108	感覚	受講
109	愛着障害	受講
110	表出コミュニケーション	受講
111	強度行動障害 SV インターン	同行
112	臨床心理士資格所有（心理検査や心理療法に関する学会等への定期的な参加）	
113	症例検討	
114	佐賀県それいゆのコンサルテーション研修会	受講
115	行動障害セミナー（福岡県発達障がい者支援センター 北九州地域）	トレーナー
116	構造化セミナー（福岡県発達障がい者支援センター 北九州地域）	トレーナー

強度行動障害の状態にあるものへの  
地域支援体制整備に関する研究  
—地域支援体制のデータベース化を目指して—

分担研究報告書

強度行動障害支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究 (22GC1501)

分担研究報告書

強度行動障害の状態にあるものへの地域支援体制整備に関する研究

—地域支援体制のデータベース化を目指して—

分担研究者：日詰 正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究協力者：村岡 美幸 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

本研究は、都道府県・政令指定都市の強度行動障害の状態にあるものへの地域の支援体制の整備状況を明らかにし、データベース化による情報共有の仕組みの構築を目指すことを目的に、都道府県と政令指定都市 67 自治体へ、強度行動障害の状態にある人の受け入れ事業所数、関係団体等との連携状況、研修の実施状況などを調査した。本稿は、回答のあった 38 自治体のうち、取り組みが書かれていた内容を中心に紹介している。取り組み内容にもよるが、多くて 10～12 自治体程度が取り組んでいる状況で、今後、整備が求められる状況がうかがえた。強度行動障害の状態にある人への地域支援体制のデータベース化は、各自治体での必要な取り組みが未整備である時期にこそ必要なため、早急に取り組む必要があると考えられた。

A. 研究目的

1. 背景

強度行動障害の状態にある人の地域生活には、多くの課題がある。令和3年(2021)度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害児者の実態把握等に関する調査研究事業報告書」(PwC コンサルティング合同会社, 2021)では、自傷、他害、暴言、大声、奇声、異食、物を壊す等の理由で障害福祉サービス等事業所が利用を断り、結果、自宅でひきこもるため、家族がその対応に追われていることや、近隣等への迷惑行為、例えば、隣家に放尿をする、下半身を露出する、家電を屋外に放り投げるなどの行為により警察が出動したケースがあること、さらには障害に対する理解不足や過去の事業所とのトラブル、他者が介入すると不穏になるといった理由で、家族や本人が障

害福祉サービスの利用に消極的であること等が課題として述べられている<sup>1)</sup>。

これらの課題は、支援者の技量不足、人材不足、地域支援体制の未構築等が要因として考えられる中で、令和3(2021)年度に一般社団法人全日本自閉症支援者協会が「強度行動障害者支援に関する中核的な人材の養成に関する研究」で整理した地域支援体制構築のための要素、具体的には、強度行動障害の状態にある人の受入れを積極的に行っている事業所数や連携団体、強度行動障害支援に特化した受入事業、強度行動障害支援者養成研修の企画・運営、強行支援の発展を願う組織を超えた継続的チーム、事業所コンサルテーションの仕組み、広域で専門的な強度行動障害相談体制、トレーニングセミナー<sup>注</sup>、広域で現実的な強度行動障害支援の検討会議、広域で

継続的な実態調査と公表の実施・拡充<sup>2)</sup>が求められる。

地域支援体制構築のための要素の実施・拡充のためには、他の自治体の取組み情報が参考となる。

## 2. 目的

本研究は、都道府県・政令指定都市の強度行動障害の状態にあるものへの地域の支援体制の整備状況を明らかにし、データベース化による情報共有の仕組みの構築を目指すことを目的とした。

## B. 研究方法

都道府県及び政令指定都市を対象に、全日本自閉症支援者協会が令和3（2021）年度に実施した「強度行動障害者支援に関する中核的な人材の養成に関する研究」で整理した図<sup>2)</sup>をベースに「強度行動障害支援の実績ある法人数」「連携している関係団体・親の会」「強度行動障害支援に特化した受入事業」「強度行動障害支援者養成研修の企画・運営状況」「強行支援の発展を願う組織を超えた継続的チームの有無」「事業所コンサルテーションの仕組み」「広域で専門的な強度行動障害相談体制」「トレーニングセミナーの実施状況」「広域で現実的な強行支援の検討会議」「広域で継続的な実態調査と公表」についてメールで情報提供を求めたほか、本調査独自の項目として、「医療との連携状況」「教育との連携状況」についても情報提供を求めた。その際、データベース化をすることを伝えた上で、自治体名の公表の可否を確認し、同意書の提出を求めた。情報提供を求めた期間は、令和6（2024）年10月～令和7（2025）年3月だった。

情報提供は、47都道府県20政令指定都市中、28都道府県10政令指定都市から得られた（情報提供率56.7%、うち都道府県59.6%、政令指定都市50.0%）。

なお、本稿では、「障害／障がい」の表記に

ついて、事業名等は回答のまま記載する。

## ■ 倫理面への配慮

国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号06-09-03）。

## C. 研究結果

### 1. 強度行動障害支援の実績ある法人

この設問には、大きく2種の回答があった。1つ目は、自治体での養成研修や事業に参画している事業所数の数、2つ目は、重度障害者支援加算の算出や強度行動障害加算体制整備済みの事業所数であった。そのため、1・2法人という回答もあれば、130事業所という自治体もあった。また、「強度行動障害支援の実績のある法人全数を把握できていない」もしくは「把握していない」と回答した自治体もあった。

### 2. 連携している関係団体・親の会

連携している自治体の連携団体等は、表1のとおりであった。「連携はしていない」と回答した自治体もあった。

表1 連携している関係団体等一覧

関係団体等
自閉症協会
知的障害福祉協会
手をつなぐ育成会
精神福祉家族会連合会
自閉症児者の未来を考える会
医師会
発達障害者支援センター
基幹相談支援センター
アスペ・エルデの会
LD親の会

### 3. 強度行動障害支援に特化した受入事業

強度行動障害支援に特化した受入事業は、コンサルテーションや研修会、ワーキンググ

ループの開催等であった。令和6（2024）年度の予算額が記載されていた自治体を、金額の大きい順に整理したのが表2である。

表2 強度行動障害支援に特化した受入れ事業等令和6（2024）年度予算額一覧

自治体名	事業等	予算額（R6）
福岡市	強度行動障がい者集中支援事業	47,063千円
兵庫県	強度行動障害地域生活支援事業	19,437千円
鳥取県	支援チームを運営する事業	10,056千円
群馬県	事業所コンサルテーション、研修会、発表会の実施、施設整備に係る補助金	約10,000千円
京都府	京都式強度行動障害モデル事業	5,000千円
堺市	堺市強度行動障害支援体制整備事業	3,747千円
大阪府	大阪府立砂川厚生福祉センター利用者地域移行支援事業補助金事業	1,800千円

事業の予算額が最も高い福岡市では、支援拠点施設「か〜む」で、24時間体制でマンツーマンでの集中支援を行い、個々の行動問題の分析及び障がい特性に応じた支援計画を作成し、行動問題の軽減を図るとともに、民間障がい福祉サービス事業者と連携し、受け入れ事業所の調整・拡大を図る「強度行動障がい者集中支援事業」を平成27（2015）年度より開始した。さらに、令和6（2024）年度から、「か〜む」の利用者を事業所等で受け入れる際、環境設定費用を上限100万円まで助成するほか、「か〜む」に移行支援の専門職員を配置し、受入事業所等への助言や1年間のケース会議参加など、移行後の継続的支援を行っている。

兵庫県では、緊急性の高い強度行動障害者を短期から中間集中支援し、再度地域生活を送ることができる仕組みを構築するとともに、地域での受け皿ともなる事業所の支援員スキルを向上させる取り組みを行っている。

鳥取県では、令和2（2020）年度から在宅の強度行動障がい児者の安定的なサービス利用を目指して関係機関で支援方法の共有・検討を継続的に行うモデル事業を実施しており、令和5（2023）年度からより広範な関係団体が関与する協議会を立ち上げた。現在は支援現場への指導者派遣を月1、2回実施、個別ケースに係るワーキンググループを毎月開催するとともに、年2回の協議会で各ケースの進捗を関係機関に共有している。その際の指導者謝金、環境調整に要する費用を対象とした市町村間接補助金、情報共有ツールの使用料等に予算を使っている。

群馬県では、事業所コンサルテーション及び研修会、発表会の実施、施設整備に係る補助金としての予算であった。

京都府は知的障害、発達障害のある御本人がその障害により生活上の困難が生じている際、委託先である2つの法人によって、ご本人に一定期間、事業実施法人の入所施設及び付帯する支援機能を活用してもらい、アセスメントを行うほか、ケースによっては受入支援を行わず、現在の支援事業所からの情報提供をもとに、支援内容に対して助言等を継続して実施する支援を行っている。

堺市は訪問コンサルテーション、実地研修、実践報告会を中心に事業を実施しているほか、大阪府は大阪府立砂川厚生福祉センターいぶきにて、平成24（2012）年度より強度行動障がい支援特化型施設として、府内の強度行動障がいの状態にある方を受け入れ、専門性の高い支援を提供し、地域移行を促すと共に、いぶき利用者のグループホーム等への受け入れに係る設備改修及び整備を実施した場合、その経費に対し予算の範囲内（利用者1人あたり1,800千円）で補助金を交付していることがわかった。

また、予算額は記されていなかったものの、福井県は施設整備に関する補助金を、千葉市は、以前定められていた「強度行動障害者特

別支援加算」の適用要件を緩和した市単事業を、横浜市は、医療型短期入所サービスの利用にあたり、強度行動障害支援者養成研修(基礎研修)修了者が、重度障害者支援加算(強度行動障害)対象者にサービスの提供を行う事業所について、市独自の加算を行っていることがわかった。

以上、自治体が予算化した主な項目を整理したのが図1である。

環境調整費	会議開催費
人材育成費 コンサルテーション	研修開催費

図1 自治体が予算化した主な項目

#### 4. 強度行動障害支援者養成研修の企画・運営状況

強度行動障害支援者養成研修の企画・運営は、自立支援協議会、社会福祉協議会、発達障害者支援センター、民間の指定・委託事業所が企画・運営している中で、株式会社や一般社団法人、有限会社の参入も一定数確認された。

#### 5. 強行支援の発展を願う組織を超えた継続的チームの有無

岡山県、京都府、静岡県、大阪府、鳥取県、富山県、福井県、横浜市、静岡市、福岡市、北九州市、兵庫県では強行支援の発展を願う組織を超えた継続的チームがあることがわかった。具体期には、自立支援協議会をベースとしたチームや、強度行動障害支援者養成研修の関係者等をベースとしたチーム、知的障害者福祉協会や発達障害者支援センター、発達障害地域支援マネージャー等を中心としたチームであった。

#### 6. 事業所コンサルテーションの仕組み

岡山県、群馬県、広島県、鳥取県、富山県、兵庫県、堺市、札幌市、静岡市、横浜市で事

業所のコンサルテーションが実施されていることがわかった。具体的には、強度行動障害の支援に精通した専門家や発達障害者地域支援マネージャーの派遣等が行われていた。

#### 7. 広域で専門的な強度行動障害相談体制

岡山県、京都府、広島県、秋田県、神奈川県、石川県、鳥取県、富山県、横浜市、千葉市、和歌山県が整えていることがわかった。具体的には、基幹相談支援センターや発達障害者地域支援マネージャー、自立支援協議会、地域生活支援拠点等の協力により、相談支援体制が整えられていた。

#### 8. トレーニングセミナーの実施状況

群馬県、札幌市、静岡市、福岡県で実施していることがわかった。中でも群馬県は、社会福祉法人が実施していたが、収支が見合わないため、令和7(2025)年度より県主催で実施することがわかった。

#### 9. 広域で現実的な強度行動障害支援の検討会議

岐阜県、京都府、群馬県、佐賀県、鳥取県、福井県、福岡県、堺市、札幌市、千葉市、北九州市、兵庫県が実施をしていた。主な検討内容は表3のとおりであった。

表3 強度行動障害支援の検討会議内容

会議の内容	
緊急時の受入れ対応について	強度行動障害の支援における人手不足や受け入れ先の確保について検討
ケースの検討	2~3カ月に1回、委託先事業所と府、適宜、市も参画して実施
地域支援体制の整備について	ケースの課題や支援体制の整備に関して、他分野との連携や事業者支援のあり方と共に検討
研修	事例検討や勉強会を開催

## 10. 広域で継続的な実態調査と公表

岐阜県、京都府、群馬県、石川県、長野県、札幌市、千葉市、福岡市、大阪府が実施していた。実態調査結果を公表している自治体は、自治体調査を実施していると回答した9自治体中2自治体（千葉市、福岡市）であった。

また、岐阜県では在宅で生活をおくる強度行動障害児者約770名を把握し、在宅で生活する強度行動障がいのある人やその介護者が具体的にどういった支援を求めているか把握に努める必要があると考えていた。

## 11. 医療・教育との連携状況

岐阜県、京都府、群馬県、山形県、大阪府、長崎県、鳥取県、富山県、横浜市、札幌市、北九州市、兵庫県、福岡県が連携していた。具体的には、協議会メンバーに医療や教育関係者を含めていたほか、特別支援学校の先生に強度行動障害支援者養成研修の受講を促していたり、教育関係者にトレーニングセミナーに参加してもらいながら連携していた。

## D. 考察

本研究は、強度行動障害の状態にある人への地域支援体制のデータベース化による情報共有の仕組みの構築を目指すことを目的に、都道府県・政令指定都市に情報提供を求めた。

38自治体から回答はあったが、結果で記したのは取り組みが記載されていた10～12の自治体の内容であり、「未実施」については本稿では紹介していない。強度行動障害の地域支援体制整備に必要な要素について、未実施事項も含めデータベース化することで、広域的支援人材の活用や都道府県間連携が図りやすくなり、国内の強度行動障害の状態にある人の地域支援体制整備の促進が図られるのではないかと考えられた。

## E. 結論

強度行動障害の状態にある人への地域支援体制のデータベース化は、各自治体で必要な

取り組みが未実施である要素が多い時期にこそ必要であるため、早急に取り組む必要がある。

注 トレーニングセミナーとは、自閉症の人たちの療育・教育・支援に携わる人に、自閉症についての理解と、個々の自閉症の人たちに対応するための技術を習得してもらうための実践実技研修である。

### <文献>

- 1) PwC コンサルティング合同会社：令和3年（2021）度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害児者の実態把握等に関する調査研究」事業報告書
- 2) 全日本自閉症支援者協会：令和3年（2021）度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害者支援に関する中核的な人材の養成に関する研究」事業報告書

別添4-4

教育分野における強度行動障害者養成研修の

活用に関する研究

—管理職を対象として—

分担研究報告書

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究 (22GC1015)  
分担研究報告書

教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する研究  
—管理職を対象として—

研究代表者：日詰 正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
研究協力者：内山 聡至 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
長江 清和 (国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター)  
石本 直巳 (国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター)

研究要旨

本研究は、令和5年度厚生労働科学研究「強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究」分担報告書「教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する調査」の結果を踏まえ、職員を派遣した学校の管理者の視点から、“研修内容の活用”を進めるための条件を把握することを目的とした。令和6年度強度行動障害者養成研修を受講した職員が所属する8校の管理職10名を対象にヒアリング調査を実施した。その結果、研修内容を活用した事例検討が一部の職員間で行われているものの、全体的な情報共有には課題が残っていることがわかった。研修内容の活用を進めるためには、受講者を校内の強度行動障害についての担当と位置づけ、継続的な情報発信ができる環境を作ることや、外部専門の人材との定期的な連携ができる環境づくり等の対応が特別支援学校等の管理職に必要とされていると考えられた。

A. 研究目的

1. 背景

教育分野における強度行動障害に対する対応について、文部科学省が令和3(2021)年1月にとりまとめた「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告」では、「強度行動障害のある児童生徒に対して適切に対応することができるよう、教育と福祉が連携して、(略)強度行動障害支援者養成研修等の専門的な研修を、特別支援学校の教師等が障害福祉サービス事業所職員とともに受講する機会を設けたりすることが期待される」と記載された<sup>1)</sup>。また、令和6年7月には、文部科学省より、教育と福祉の連携による支援が適切に行われる

よう対策を講じること等の事務連絡(「強度行動障害を有する児童生徒への支援の充実について(通知)」)が各都道府県等の教育委員会へ発出された<sup>2)</sup>。

こうした動きと並行して、令和5年4月に厚生労働省の強度行動障害者支援者養成研修(以下、「強行研修」という。)の運営要領が改正され、その受講対象に特別支援学校の教師等が加えられた<sup>3)</sup>。国立のぞみの園が実施する強行研修・指導者研修(基礎コース・実践コース)においても令和5(2023)年度から特別支援学校の教師等の受講を受け入れが開始されている。

令和5年度厚生労働科学研究「強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および

び地域支援 体制の構築のための研究」分担報告書「教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する調査」では、国立のぞみの園の強行研修・指導者研修を受講した教師8名を対象に、受講後の“研修内容の活用状況”に関するヒアリング調査を実施した<sup>4)</sup>。その結果、受講後の研修内容の活用・普及・定着が進んでいない状況と、その理由として“学校現場で組織的に研修成果を生かしていくための計画性が乏しいこと”が理由となっていることを把握した。

## 2. 目的

本研究では、上記の研究結果を踏まえ、職員を派遣した学校の管理者の視点から、“研修内容の活用”を進めるための条件を把握することを目的とした。

## B. 研究方法

本研究は、以下の方法により行った。

【方法】訪問によるヒアリング調査

【期間】令和6（2024）年11月から令和7（2025）年2月

【対象】令和6（2024）年度に国立のぞみの園が実施した強行研修・指導者研修を受講した職員が所属する学校、8校の管理職10名（校長6名、教頭4名）

【内容】以下の5点とした。

1) 職員を参加させた経緯・背景は何か

- 2) 研修参加の支援をどう行ったか
- 3) 職員の受講効果をどう認識しているか
- 4) 研修内容を校内職員にどう共有したか
- 5) その他、課題と感じていること

## ■ 倫理面への配慮

国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号06-09-03）。

## C. 研究結果

国立のぞみの園が開催した強行研修・指導者研修（基礎・実践）への参加状況、受講者の役職は表1の通りであった。

以下、上記のヒアリングに対する主な回答を整理した。（各回答の詳細は表2）

1) 職員を参加させた経緯・背景は何か

- ・ 都道府県教育委員会の予算事業の一環として、強度行動障害児教育に関する研修派遣が年間計画に位置づけられている。
- ・ 児童生徒の激しい行動に、管理者を含めて校内の複数の職員がかかわっている現状があり、危機感が高まっている。

2) 研修参加の支援をどう行ったか

- ・ 研修参加期間（2～4日）の業務を他の職員に任せる事前調整を行うこと、そのために周囲の職員の理解を得るための説明が行われている。

表1 調査対象学校の強行研修参加状況（国立のぞみの園主催のみ）

自治体	学校	学部	R5 基礎	R5 実践	R6 基礎	R6 実践
①	A	小・中・高	●コーディネーター	—	—	●コーディネーター
	B	小・中・高	—	—	●コーディネーター	—
②	C	小・中・高	●コーディネーター		●教諭(小学部教務主任)	
③	D	小・中	●教諭(中学部担任)		●コーディネーター	
	E	小・中・高	●教諭(高等部担任)		●教諭(中学部学年主任)	
	F	小・中・高	●中学部主事		●コーディネーター	
④	G	小・中・高	●コーディネーター	—	●教諭(自立活動専任)	—
	H	小・中	—	—	●教諭(重複学級担任)	—

※コーディネーター = 特別支援教育コーディネーター

- ・コーディネーターや教務主任、自立活動専任など直接的な担任児童生徒を持たない場合には、業務の事前調整が容易である。

### 3) 職員の受講効果をどう認識しているか

- ・期待をしていた児童・生徒の状態の改善については、すぐには感じられていない。
- ・一方、職員間で情報を共有するためのワークシートの使用を提案するなど、受講した職員の情報発信の姿勢が積極的になったことはポジティブな変化としてとらえている。

### 4) 研修内容を校内職員にどう共有したか

- ・研修で学んだ内容の学校全体での情報共有は、時間を確保することが難しいため、受講した職員の自主的な情報発信に任せることが多い。
- ・ただし、児童生徒の激しい行動に関わっている職員間では、研修内容を活用して事例検討を行っている場合もある。

### 5) その他、課題と感じていること

- ・受講させたい研修の開催時期によっては、学校行事との兼ね合いで、参加させられない事情がある。
- ・学校現場では「強度行動障害」に関する研修を受ける機会・予算が乏しいことから、基礎的な知識を、別に補う必要がある。
- ・研修内容の学校現場での活用は、予算面や専門性などの課題があり、行政や校外の専門的人材から支援を必要としている。

## D. 考察

本調査により、学校の管理職の視点から、“研修内容の活用”を進めるための条件として、強行研修・指導者研修を受けた職員を孤立させないために、

- ① 受講者を、校内の強度行動障害についての担当と位置づけ、強度行動障害について継続的な情報発信ができる環境を作ること
- ② 受講者が、研修でつながりのできた外部専門的

人材と、定期的な訪問、オンラインでの相談などができる環境を作ること

などの対応が、特別支援学校等の管理職に必要とされていると考えられた。

## E. 結論

学校の管理者の視点から、“研修内容の活用”を進めるための条件についてヒアリングをとして把握した。

## 【文献】

- 1) 文部科学省（2021）：新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告。
- 2) 文部科学省（2024）：強度行動障害を有する児童生徒への支援の充実について（周知）。
- 3) 厚生労働省（2023）：強度行動障害支援者養成研修事業の実施について（運営要領）の一部改正について。
- 4) 国立のぞみの園（2024）：「教育分野における強度行動障害者養成研修の活用に関する調査」、令和5年度厚生労働科学研究「強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究」分担報告書

## G. 研究発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表2 ヒアリング回答内容

### 1) 職員を参加させた経緯・背景

- ・ 都道府県教育委員会の予算事業の一環として、強度行動障害児教育に関する研修派遣が年間計画に位置づけられているため
- ・ 児童生徒の激しい行動に、管理者を含めて校内の複数の職員がかかわっている現状があり、危機感が高まっているため
- ・ 行動障害を生むスイッチを入れる人にならないよう早期対応が必要との認識があったため
- ・ 受講者からの参加希望があったため
- ・ コーディネーターは、校内への普及、組織体制整備を見据え、学校全体を把握できており、指導助言の立場であるため

### 2) 研修参加の支援

- ・ 参加することの意味を先生方がしっかり理解してもらうため、職員会議等々にて研修内容を周知し、誰が受講するかを伝えた
- ・ 受講者に意向確認する段階で同じ学級の教師で話し合ってもらった
- ・ 予定を組む際に、一人抜けても指導が滞りない内容をあててもらった
- ・ 担任をもっていない教師が、研修中クラスに入るよう人員調整した
- ・ 担任をもっていない職員の場合には、参加にあたっての業務調整はしやすい

### 3) 受講効果の認識

- ・ 支援の根拠があることで、自信をもって保護者や他の教師に関わることができている印象がある
- ・ 学部内の課題解決に向けた体制づくり、他学部とのつながりづくりなどにも積極的な姿勢がみられた
- ・ 校内で強行研修のワークシートを用いて事例検討を行ったことで、支援の共通言語ができた様子が見られた

### 4) 研修内容の校内職員への共有

- ・ 校内のオンライン掲示板で研修資料を共有したが、閲覧状況は不明である
- ・ 受講者の所属学部で研修資料等共有し、3学期に校内の全教師を対象に都道府県事業と強行研修の報告を行った
- ・ 受講者が強行研修受講後に、強度行動障害の基礎知識に関する資料を作成し、校内報で共有した
- ・ 受講者（コーディネーター）をリーダーとして校内研究班を組み、ワークシートを活用して事例検討、校内全体への報告会を行った
- ・ 児童生徒への対応に困った担任が、受講者（コーディネーター）に頻繁に相談しに行っているため、普及効果はあると認識している
- ・ 各学部の研究係へ受講者（コーディネーター）が話をしに行き、学んだことを落とし込んでいった

### 5) その他、課題と感じていること

#### **【参加の難しさ】**

- ・ 平日は授業者学校行事等があり参加が難しく、長期休業中やオンライン開催であれば参加しやすくなる
- ・ 都道府県から1名ではなく、複数人が受講できるよう研修の間口を広げてほしい
- ・ 学校予算として受講費を確保できるかが課題である
- ・ 業務軽減の流れがあり、校内研修に加え強行研修への参加となると負担感が出てくる
- ・ 管理職の先生が強度行動障害に対する意識をもってもらえると研修にも参加させてもらいやすくなる

**【学校現場における強度行動障害について学ぶ場の乏しさ】**

- ・ 各教師の中に強度行動障害の状態をどうとらえるか共通のものがないため、強度行動障害への対応の具体的なイメージができない
- ・ 強度行動障害の基本的な理解があれば、研修内容や支援に関する広がり方がスムーズであったと思う
- ・ 教育現場では、強度行動障害、自閉症の理解や特性に合わせた支援の認識が不足している

**【研修内容の学校現場での発信・活用】**

- ・ 研修を受けたが専門家ではないため、受講者を活用するという理解が他の教師は至っていない
- ・ 研修や研究の分掌以外の教師が参加すると発信するシステムが現状ない
- ・ 研修の年度計画が定まっているため、伝達研修の実施は難しい
- ・ 強度行動障害に対する標準的な支援方法について、正しい知識を誰でも閲覧できる環境があれば、校内でも推進しやすくなる
- ・ 研修内容を実践するにはサポートが必要
- ・ 強度行動障害への支援について、校内で介入する存在が必要

別添 4 - 5

強度行動障害者支援への ICF システム導入による  
QOL 支援について

分担研究報告書

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究 (22GC1015)

分担研究報告書

強度行動障害者支援への ICF システム導入による QOL 支援について

研究分担者：安達 潤 (北海道大学大学院教育学研究院)

研究協力者：なし

研究要旨

**A 研究目的)** 強度行動障害者支援において「行動問題の軽減」に留まらず生活の質の向上に向けた QOL 支援として ICF システム (ICF を援用した支援システム) を導入し、受講者における QOL 支援の重要性の理解と ICF システムによる評価と QOL 支援の実際を検討するとともに ICF システムのより平易な活用に向けた改善を行うことを目的とした。

**B 研究方法)** ICF システムの強度行動障害者支援における位置づけと活用について事前講義を行い、日常生活行動場面アセスメントと ICF システムの評価を連動させて評価労力を軽減し ICF システムの評価は研修前後で実施した。ICF システム導入の効果確認については、①研修終了後に事前講義の評価アンケート、②ICF による QOL 支援の評価アンケートを実施した、③研修前後の対象者概要 (ICF のフォーム) を QOL 支援の観点から分析した。④研修前後の ICF 評価結果の分析により強度行動障害者支援に関連する ICF 項目を絞り込んだ。

**C 研究結果)** ①と②ICF システムの位置づけと QOL 支援の重要性には高い理解と評価を得たが、ICF システムの活用については情報の多さと複雑さが指摘された、③ICF システム、冰山モデル、機能的アセスメントの支援に QOL 支援の観点がかかなり反映されていた。④絞り込みの結果が令和3年度の ICF の項目有用性調査と一致し、絞り込みの妥当性が確認された。

**D 考察)** ICF の位置づけと QOL 支援の評価は高かったが、それは ICF システムだけに直結するものではなく、機能的アセスメント・冰山モデル・ICF システムの3つを相互関連するものとして捉えつつ困難性を軽減する支援として理解した結果と考えられる。ICF システム活用の複雑さは QOL 支援の進展を阻む一要因となりえる。

**E 結論)** 強度行動障害者支援への QOL 向上の意識づけは ICF 観点の導入で可能となったが、QOL 支援をより広く進めていくには ICF システムを容易に活用するための改善が求められる。

A. 研究目的

1. 背景

強度行動障害を呈する人たちの多くは背景に自閉スペクトラム症 (以下、ASD と記載する) の特性を有する人たちである。強度行動障害とは、生活の中に潜在する「彼らの世界の捉え方と周囲環境のミスマッチ」が生活不適応をもたらし、その結果として表面に現れてくるものであるという冰山モデルで説明される。強度行動障害は、激しい自傷や他傷、物壊

しなどの行動問題 (以降、本報告では課題行動と表記する) で特徴づけられるため、支援者にとって対応が難しく「課題行動の軽減や消失」が目的となりやすい。しかし冰山モデルに従えば、ASD の世界の捉え方 (認知特性) の理解なしに適切な支援を行うことは難しく、その結果、外側から課題行動を抑え込む、課題行動が発生する生活場面を制限するといった「虐待との連続線上」にある対応が発生しやすい。そのため、強度行動障害者支援は「課題行動の軽減や消失」が目的となりやすく、その目的達成の判断は

「支援者の労の軽減や消失」に置き換えられてしまうリスクを孕むものである。その結果、支援の焦点となっている特定の場面での課題行動の軽減や消失によって支援者側に目的達成感が生じるものの、強度行動障害を呈する人たちの生活の快適さが根本的に改善されないために、新たな課題行動が発生してくることもある。以上のことは、課題行動の軽減や消失が強度行動障害者の生活改善の必要条件ではある一方、十分条件を満たすものではない可能性を示唆している。

## 2. 目的

本研究では、昨年度に引き続き、強度行動障害者の生活改善に向けた QOL 支援として ICF システムを導入し、その効果を検討する。なお、本研究のもう一つの目的として、今年度の ICF 評価結果の分析に基づき強度行動障害支援に特化した ICF 項目の抽出を試みる。

## B. 研究方法

### 1. 事前講義

#### 1) 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み

本講義では、環境調整支援の第一層に ICF システムアセスメントによる快適な生活の提供、第二層に学習スタイル・障害特性の考慮による冰山モデルに基づく環境支援：手立て・介入方法、第三層に機能的アセスメントによる行動支援を位置づけ、それら三層が相互補完することの重要性を示した。図1、図2は講義中のスライドで、三層構造の説明と概念図を示したものである。

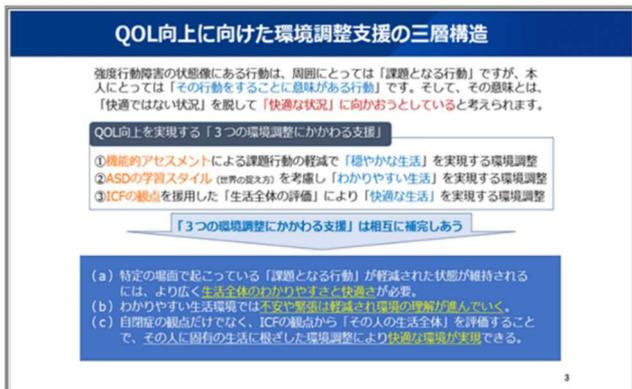


図1 環境調整支援の三層構造の説明

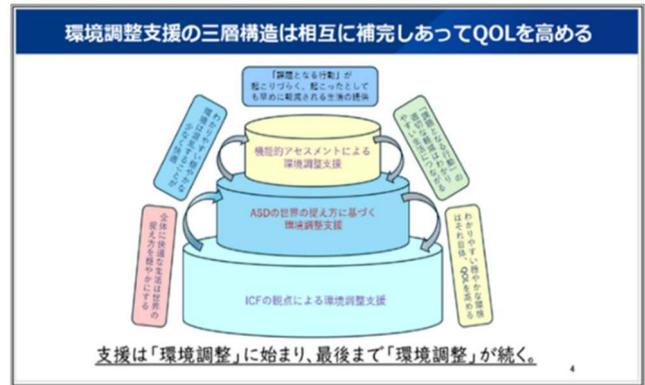


図2 環境調整支援の三層構造 概念図

続いて本講義では、三層構造の第一層である「ICFによるQOL支援」の説明を行い、1) ICFの概略説明、2) 環境因子と活動と参加それぞれのQOL支援例と考え方、3) ICFの観点を取り入れたQOL支援の基本的考え方を伝えた。1)では「知的障害や自閉症といった診断ラベルだけでなく、その障害特性が困難性として現れてくる「活動と参加」そして困難性の発生に影響する「環境因子」という2つの観点を合わせて分析していく」ことを強調し、2)の環境因子では環境因子が「人、物、感覚刺激」で構成されることを伝えとともに、支援例として「人」では「適度な大きさの声でゆっくり話しかける」、「物」では「自身の背格好にフィットした椅子と作業机」、「感覚刺激」では「窓からの光を和らげるスクリーン方ブラインド」などを示した。そして環境因子によるQOL支援が「自閉症の人たちにとって快適な環境調整を行えば、彼らも周囲の環境に馴染みやすく、周囲の状況を学んでいきやすい」状況を保証するものであり、それ自体が予防的支援となることを説明した。

次いで2)の活動と参加では強度行動障害における課題行動の背景には「彼らがより快適な状況に向かおうとする」ことの結果であり、その背景には「日々の活動や参加がご本人にとって負担や困難が大きい状況」があることを伝え、「困難さが軽減される場面や支援の把握がQOL向上を目指す環境調整支援となる」ことを示した。支援例としては「自立課題をステップごとに超ゆっくりモデル提示すると真似できる」ことに気づくことで、それを日常生活用品の使い方を学ぶ場面に応用し、生活の中での自律性を高める形でQOLを向上させていくことができる、

また「余計な刺激がない方が、作業に集中できる」ことに気づくことで、それを食事の場面に応用して「壁のポスターが見えない席にしたほうが、食事が進む」といった QOL 向上につながるのと説明を行った。さらに活動と参加における QOL 支援では「場面や支援によって活動や参加がどう変わるか」を評価し、「その人に固有の生活に根ざした環境調整支援の実現」が大切であることを強調した。最後に、図3のスライドにより、ICF の観点による QOL 支援を実施する際の留意点を説明した。

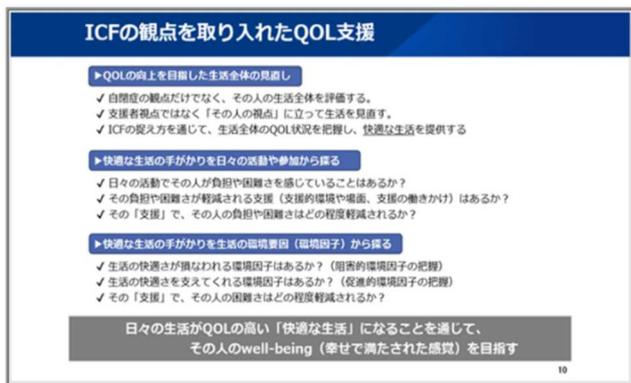


図3 ICF の観点による QOL 支援の留意点

## 2) ICF システムのデータ入力と分析方法

令和5年度研究で ICF システムによる評価労力の大きさが指摘されており、その対応として、今年度は、三層構造の第2層に対応する「日常生活行動場面アセスメント」(名称: Rainbow) と ICF システムの活動と参加の評価を共有可能な項目について連動させ、日常生活行動場面アセスメントを実施すれば、部分的に ICF システムの評価が行われる仕組みを導入した。環境因子については令和5年度に使用したエクセルシートをそのまま用いて評価を求めた。

「日常生活行動場面アセスメント」と「ICF システムの活動と参加の評価」を一つのエクセルに統合して実現したが、活動と参加の評価結果を ICF システムの5つの支援カテゴリである「強み」「支援維持」「支援修正」「支援考案」「情報なし」に分類するためには、連動版エクセルの「A&P シートに転写用」シートをテキストコピーして、[強行支援 ID] 活動と参加) 6-16y\_情報入力シート ver2. 22. xlsx] の「連動版から転写」シートに移す必要があり、さらに、[強行支援\_ICF データ分析アプリ\_ver1. 0. xlsm] を

起動して表示シートに配置されたフォームボタンを押下してマクロを実行して[強行支援 ID] 活動と参加) 6-16y\_情報入力シート ver2. 22. xlsx]を読み込んでカテゴリ分類を実行する必要があった。

ICF システムのデータ入力と分析方法の事前講義では、直前の事前講義である「ICF による QOL 支援」で述べた観点で情報を把握しデータ入力すること、日常生活行動場面アセスメントと ICF 項目の連動、エクセルツールの操作を説明した。特に、連動と操作については項目数を減らすために、操作が複雑になったこともあり、各操作ステップを辿りながら説明を行った。

### 3) ICF システムの情報を QOL 支援に活用する

この講義は、令和5年度では研修の中間時点で行ったものであり、令和5年度の受講者から「研修の最初に試聴したかった」との声があったことから事前講義として行った。

講義では「目指すのは「ご本人の困難さ(生活上のしんどさ)の軽減」であり、ICF による QOL 支援の4つのポイントを伝えた。具体的には、活動と参加では①「強みの活動を他の生活場面で広く活用」とともに②「支援維持調整」の項目で把握された支援を他の生活場面でも活用する、環境因子では③「促進環境の提供すなわち快適な環境の提供」とともに④「阻害環境の除去すなわち不快な環境の除去」である。次いで、活動と参加の「強み」についてはダウンタイム(何もすることがない時間)に強みの活動を導入して短時間の余暇支援を実施する具体例に加え、図4のスライドを例示してこだわり対象の除去に活用する具体例の工夫を伝えた。また「支援

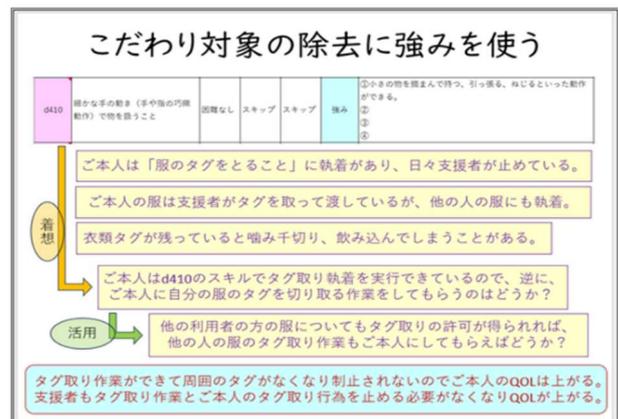


図4 こだわりへの「強み」活用例

維持調整」については所有物を見分けるためのパーソナルカラーの利用、複数物からの選択が容易になるよう提示物の数を減らすなどの支援例を示した。これら「支援維持調整」の支援例は第二層の学習スタイルを考慮した冰山モデルに基づく支援とつながるものであるが、これらの支援例を示すことによって、第2層の支援も QOL 支援につながっているとの説明を加え、ICF 評価の結果として「支援維持調整」の項目が少ない場合には、学習スタイルの分析から導出された支援方法を「適応が悪く QOL が下がっている生活場面」に応用することも強調した。

環境因子については、生活の中で利用者の快適さにつながるものに触れる機会を増やすことが QOL 支援につながることを伝え、「ドリンクの新商品を確認できる機会を増やす」「企業ロゴや広告などの印刷物を破損防止でラミネイト加工して提供する」といった支援例が考えられることを説明した。また、快適な感覚刺激の提供機会を増やすことも QOL 支援につながることを伝え、「日当たりの良い部屋を好んで過ごしている」場合にはそういった場所の提供、「静かな場所では穏やかな表情でリラックスしている」場合には周囲音が下がる工夫が QOL 支援につながることを説明した。また阻害的環境因子の除去も QOL 支援となることを伝え、図5のスライドを例示して、環境因子として把握された情報から着想して活動と参加で把握された情報と組み合わせた QOL 支援を工夫することもできることを説明した。

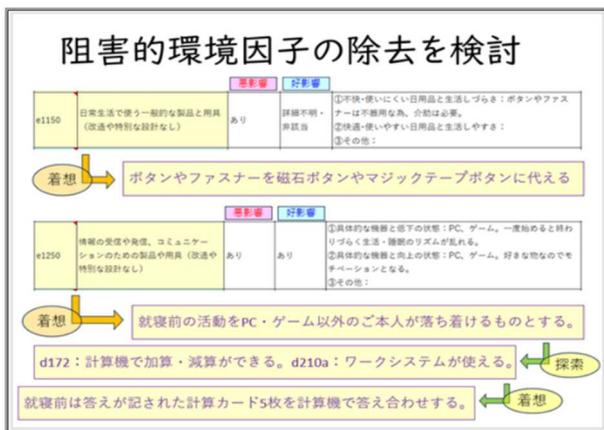


図5 阻害的環境因子を除去する支援

## 2. ICF システム導入の効果検討

### 1) 事前講義に関するアンケート

本研修における事前講義は、本稿に記載したものの他に、「標準的な支援と中核的人材養成研修の基本的視点」「自閉症の特性と学習スタイルとアセスメント」「冰山モデル」「チーム支援」「機能的アセスメント」など、本研修で学ぶ強度行動障害支援に係る概念や支援スキルをテーマとする 15 の講義動画が用意された。事前講義のアンケートはこれら個々の講義動画について、一括したアンケートで各講義視聴期間後の大凡 1 ヶ月を回答期間として Microsoft Forms によりネット上で行われた。本稿で報告する 3 つの講義のアンケート実施・回答期間は 7 月 19 日から 8 月 26 日である。但し、設定期間内に回答が寄せられなかった場合には、その後も回答可能な設定とした。アンケート内容は、各講義動画に係る理解度と改善度である。理解度については「全て理解できた」「一部理解できなかった」「理解できなかった」の三択、改善度については「改善点なし」「改善点あり」の二択でアンケートが実施された。加えて、各講義への意見（自由記述）が設定された。

### 2) ICF システムによる生活全体の QOL 評価に関するアンケート

このアンケートは「環境調整支援の三層構造」と「ICF システムによる QOL 支援」に焦点を当てたもので、研修実施後に Microsoft Forms によりネット上で行われた。

アンケートは「1. 環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか?」、「2. 「ICF の観点による環境調整支援」は対象者の QOL 向上に大切だと思いますか?」、「3. ICF システムの評価で要支援者にとって快適ではない生活場面を把握できましたか?」、「4. ICF システムの評価で要支援者に快適な生活を提供する手がかりは得られましたか?」、「5. 「ICF の観点による環境調整支援」を実際に行うことができましたか?」、「6. ICF システムによる生活全体の QOL 評価は日々の支援の中で使っていけると感じますか?」、「7. 生活全体の QOL 評価で用いた ICF システムについて今後改善すべき点があれば教えてください。」の 7 つで構成され、

7を除く6つの設問について四択のリッカート選択肢を付し、1,2,6,7についてはそれぞれ、3,4,5については3設問全体の回答に対して、その回答理由の自由記述を求めた。リッカートの回答選択語は、設問に応じて、設問1,2,6は[そう思う、多少そう思う、あまり思わない、思わない]とし、設問3は[把握できた、多少把握できた、あまり把握できなかった、把握できなかった]、設問4は[得られた、多少得られた、あまり得られなかった、得られなかった]、設問6は[できた、多少できた、あまりできなかった、できなかった]とした。

### 3) 研修前後のICFフォームの検討

令和5年度同様、研修での学びを通じた実践効果を可視化するためにICFの相互関連図の各要素(健

康状態、心身機能構造、活動・参加、環境因子、個人因子)をスライド1枚に配置したICFフォームに研修の事前事後でそれぞれ、研修にかかる実践のモデル利用者の概要をまとめて記載し、事後については、事前からの変化箇所を赤字で記載することを求めた。

ICFフォームの活動と参加および環境因子には令和5年度と同様に「QOLに影響している項目を選定する」との指示が記載されており、QOL支援を念頭に、モデル利用者の概要を把握・記載するフォームとなっている。図6aに示すのは、事前用ICFフォームの記載例(モデル利用者の概要(プレ))である。図6bは事後用(ポスト)の記載例である。

研修前後のICFフォームの検討では、全事業所に

モデル利用者の概要(プレ)		※記載例
健康状態 重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、朝起きられない		
<b>心身機能・構造</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>作業に取り組めない(実行機能の問題)</li> <li>物の位置が気になる(ルール学習の強さ)</li> <li>生活関連刺激の苦手さ(感覚特性、独特な注意)</li> <li>対人刺激の苦手さ(社会的認知、感覚特性?)</li> <li>見て学習することが得意(暗黙的学習の難しさ)</li> </ul>	<b>活動・参加(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>(強み) 記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】(絵や写真は理解できる)</li> <li>(強み) まねをして学ぶこと【d130】(見て学ぶことができる)</li> <li>(支援修正) 一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】</li> <li>困難あり: 何をしようかわからない、作業に取り組むことができない</li> <li>支援あり: プレハブでワークシステムを用いてパズル→余暇(漫画)のスケジュール実施</li> <li>効果小: 活動に取り組むことができるが、24時間365日マンツーマン対応で持続困難</li> <li>(支援修正) 場面に応じた行動のコントロール【d250】</li> <li>困難あり: 他利用者の物の置き方が気に入り、他者への暴力行為あり</li> <li>支援あり: 24時間365日マンツーマンによる見守り支援</li> <li>効果小: 支援員の制止で暴力行為に至らないが、ご本人のQOLは上がらず、24時間365日マンツーマン対応で持続困難</li> <li>(支援参考) 基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】</li> <li>困難あり: GHの共用スペースで他利用者と関わるスキルがない。加えて、他利用者への暴力行為があり制止される。</li> <li>支援なし: 支援員の関わりは暴力の制止のみにとどまっている。(ご本人のQOLは上がらず、本2項目には効果なし)</li> </ul>	
<b>環境因子(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>阻害環境: 共用スペースでの生活 (【e240,250,260等】生活関連刺激や対人刺激【d710,750】への苦手さ?) : 睡眠薬【e110b】</li> <li>促進環境: ワークシステム (【e1351】仕事のしやすさを支援する製品と用具) : 生活介護事業所でのプレハブ設置(生活関連刺激や対人刺激の除去) : 職員3名で交代しながらの個別対応 (【e340,440】)</li> </ul>		<b>個人因子</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>50代男性</li> <li>障害支援区分6</li> <li>行動関連項目12点</li> <li>発達年齢4歳3か月</li> <li>グループホーム(5人暮らし)</li> <li>生活介護事業所に通所</li> </ul>

図6a ICFフォーム(プレ)の記載例

モデル利用者の概要(ポスト)		※記載例	変更箇所を赤字にしてください
健康状態 重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、 <del>朝起きられない</del>			
<b>心身機能・構造</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>作業に取り組めない(実行機能の問題)</li> <li>物の位置が気になる(ルール学習の強さ)</li> <li>生活関連刺激の苦手さ(感覚特性、独特な注意)</li> <li>対人刺激の苦手さ(社会的認知、感覚特性?)</li> <li>見て学習することが得意(暗黙的学習の難しさ)</li> </ul>	<b>活動・参加(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>(強み) 記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】(絵や写真は理解できる)</li> <li>(強み) まねをして学ぶこと【d130】(見て学ぶことができる)</li> <li>(維持調整←支援修正) 一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】</li> <li>困難あり: 何をしようかわからない、作業に取り組むことができない</li> <li>支援あり: パーティションで空間を仕切った共有スペースで、スケジュール・ワークシステム・手順書を用いて支援</li> <li>効果大: 共有スペースでも他利用者を気にすることなく、活動に取り組むことができた。<u>ご本人のQOLも向上。</u></li> <li>また、持続的なチーム支援が可能になった</li> <li>(維持調整←支援修正) 場面に応じた行動のコントロール【d250】</li> <li>困難あり: 物の置き方が気に入り、他者への暴力行為あり</li> <li>支援あり: 物の位置を写真で提示</li> <li>効果大: 物の置き場で困らなくなった、支援員が常につきずとも暴力行為がなくなった。<u>ご本人のQOLも向上。</u></li> <li>(維持調整←支援参考) 基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】</li> <li>困難あり: GHの共用スペースで他利用者と関わるスキルがない。加えて、他利用者への暴力行為があり制止される。</li> <li>支援あり: 共用スペース空間をパーティションで仕切った。(生活関連刺激や対人刺激の低減)</li> <li>効果大: 他利用者と関わるようになってはいるが、暴力行為はなくなった。<u>ご本人のQOLも向上。</u></li> </ul>		
<b>環境因子(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>阻害環境: 共用スペースでの生活 (【e240,250,260等】生活関連刺激や対人刺激【d710,750】への苦手さ?) : 睡眠薬【e110b】(全体支援で行動が落ち着いたら眠気が取れない) → 減薬で眠気消失</li> <li>促進環境: ワークシステム、スケジュール、手順書、パーティション、置き場の整理(物の位置を決めて写真で提示) (【e1351】仕事のしやすさを支援) : 生活介護事業所でのプレハブ設置(生活関連刺激や対人刺激の除去) : 職員3名で交代しながらの個別対応 (【e340,440】) : 共用スペース空間を(パーティションで)仕切って生活 (【e1151】日常生活での使いやすさを支援)</li> </ul>		<b>個人因子</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>50代男性</li> <li>障害支援区分6</li> <li>行動関連項目11点</li> <li>発達年齢4歳3か月</li> <li>グループホーム(5人暮らし)</li> <li>生活介護事業所に通所</li> </ul>	

図6b ICFフォーム(ポスト)の記載例

ついて事後の ICF フォームを総覧して QOL 支援の観  
点が明確に読み取れるものを抽出する。その際、実  
践報告の記載も参照して ASD 特性と環境のミスマッ  
チを解消する環境調整支援だけでなく、生活におけ  
る快適さの向上が読み取れる支援を特に抽出するこ  
とを考慮する。そして ICF フォームにおける事前事  
後の変化を確認するとともに、当該の支援の QOL 向  
上における意味合いとその効果をまとめる。加えて、  
これら抽出された事業所について 2) の「ICF システ  
ムによる生活全体の QOL 評価に関するアンケート」  
に示される回答状況を分析する。

#### 4) ICF 評価結果の分析に基づく強度行動障害に特 化した ICF 項目の絞り込み

##### a) 活動と参加の評価結果と強度行動障害支援に 特化した項目の絞り込み

本研修では、ICF システムの評価を研修の事前と  
事後に行っている。活動と参加の評価は先に述べた  
5 つの支援カテゴリーで分類できるため、活動と参  
加 67 項目のそれぞれについて、受講事業所の評価を  
支援カテゴリーごとにカウントする。その結果に基  
づいて支援カテゴリー別に評価数の項目順位を示す。  
このことによって強度行動障害支援において評価対  
象となりやすい活動と参加項目と評価から外れる活  
動と参加項目を把握する。

さらに、事前と事後の評価の変化を調べて、事前  
評価よりも事後評価が向上している項目、逆に低下  
している項目を明らかにする。このことによって、  
強度行動障害支援において、支援効果が現れやすい  
ICF 項目と効果が現れづらい ICF 項目が示される。

以上の第一次分析結果に基づいて、最初に強度行  
動障害支援に感度の高い項目を絞り込む。絞り込み  
に際しては「強み」「支援維持」「支援修正」の 3 つ  
のカテゴリー評価となりやすい項目について、事前  
評価と事後評価のそれぞれで評価順位の高い項目を  
比較検討し、全体として評価対象となりやすいだけ  
でなく、支援の手がかりが得られやすい項目を選定  
する。次に、この選定結果に、事前事後の評価値変  
化分析により改善効果が見られやすい項目とそうで  
ない項目を対応させて「評価対象となりやすく、支  
援の手がかりが得られやすく、改善効果の見られや

しい項目」を絞り込む。以上の分析手順によって、  
強度行動障害支援に特化した ICF 項目をリストアッ  
プして暫定第一案とする。さらに、「支援考案」の評  
価を受けやすい項目、すなわち支援現場で支援の必  
要性はあるが支援ができていない状況となりやすい  
項目を選定する。その中から、強度行動障害支援に  
重要と思われる項目を選定して、暫定第一案に加え、  
暫定第 2 案の活動と参加項目リストを作成する。

最後に、令和 3 年度に分担研究者が代表を務めた  
挑戦的研究（萌芽）「ICF に基づく情報把握共有シス  
テムの発達障害支援における実践検証と活用方法の  
検討」で実施した「強度行動障害の QOL 支援におけ  
る有用性調査」（未公表）の結果を、暫定第 2 案と対  
応させ、R3 年調査結果で高い有用性評価を得た項目  
を第 1 選定項目群に、その次の有用性評価を得た項  
目を第 2 選定項目群とする。ところで令和 3 年度調  
査とは、強度行動障害支援を行っている事業所 15 箇  
所を対象に、活動と参加および環境因子のすべての  
項目について強度行動障害の QOL 支援における有用性  
を「有用である＝1 から有用でない＝5」の 5 段階  
で評定してもらい、評定値平均が 1.0 以上 2.0 未満  
を第 1 選択群、2.0 以上 2.5 未満を第 2 選択群、2.5  
以上を第 3 選択群としたものである。

今回の研究でも強度行動障害支援に特化した ICF  
活動と参加項目リストを第 1 選定群、第 2 選定群と  
2 段階構成に割り付けるが、これは強度行動障害者  
の多様性を包括した評価を可能とするため、第 1 選  
定群を必須評価項目、第 2 選定群を利用者の状態像  
に応じた評価項目とするためである。また、第 1 選  
択群と第 2 選択群を設定するに際しては強度行動障  
害支援に係る重要性を考慮して項目数の調整を行う。

##### b) 環境因子の評価結果と強度行動障害支援に特 化した項目の絞り込み

環境因子についても、研修前後で事前評価および  
事後評価を行っている。環境因子の評価は、周囲の  
人達の環境因子と人以外の環境因子について行っ  
ているが、評価結果の分析は人以外の環境因子につ  
いて行う。周囲の人達については、強度行動障害の  
人たちが生活の中で関わりを持つ対象者が比較的限  
定されているため、令和 3 年度調査結果を考慮して絞

り込みを行う。

人以外の環境因子は「第1章 製品と用具」「第2章 自然環境と人間がもたらした環境変化」「第5章 サービス」の3カテゴリー全26項目であり、これに第3章と第4章に属しているが直接の人ではない2項目（e460 団体やグループの障害観、e465 社会全体の価値観、習慣、慣行、宗教教義など）を加えた28項目を分析対象とする。これらの項目については生活に対する阻害・促進、阻害のみ、促進のみ、影響なし、情報なしの5つの支援カテゴリーで評価するため、人以外の環境因子28項目のそれぞれについて、受講事業所の評価を支援カテゴリーごとにカウントする。その結果に基づいて支援カテゴリー別に評価数の項目順位を示す。このことによって強度行動障害支援において評価対象となりやすい環境因子項目と評価から外れる環境因子項目を把握する。

次に事前と事後の評価の変化を調べて、事前と事後の両評価に促進評価が含まれる項目、事後にのみ促進評価が含まれる項目を選定することで、生活機能の促進に関与する環境因子を把握する。把握された項目の中には阻害・促進項目も含まれるため、純粋に促進のみの項目ではないが、促進の影響を有する環境因子項目を広く把握することができる。また、事前事後とも阻害のみおよび事後で阻害のみの評価に変化した項目を選定することで、生活機能の阻害に関与する環境因子を把握する。把握された全項目は、事後に阻害のみとなっているため、これらの項目は研修終了時点で阻害のみと評価された環境因子項目である。

以上の分析結果に基づいて、最初に強度行動障害支援に感度の高い項目の絞り込みを行う。絞り込みに際しては「阻害・促進」「阻害」「促進」の3つのカテゴリー評価となりやすい項目に絞って、事前評価と事後評価のそれぞれで評価順位の和を求めて、再度、事前・事後の評価を総合した評価順位を確認する。和を求めた理由は、生活機能への各環境因子の影響度を把握するため、活動と参加の手順とは異なり、事前・事後順位の単純和で絞り込みを行う。次いで「影響なし」「詳細不明」についても同様の手順で絞り込みを行う。次に、この選定結果に、事前

事後の評価値変化分析により事前・事後に促進評価を含む項目と事前事後とも阻害のみおよび事後に阻害のみの項目を対応させて「評価対象となりやすく、促進あるいは阻害の影響を与えやすい項目」を選定するとともに、強度行動障害支援の大きな背景要因と考えられる「第5章 サービス」の項目を除外し、暫定第1案の環境因子項目リストを作成する。

最後に、令和3年度の本研究で実施した活動と参加項目全体に対する「強度行動障害のQOL支援における有用性調査」の結果を、暫定第1案と対応させ、R3年調査結果で高い有用性評価を得た項目を第1選定項目群に、その次の有用性評価を得た項目を第2選定項目群とする。周囲の人の環境因子については強度行動障害支援における重要性を考慮して項目を選定してリストに加えた。

なお、強度行動障害支援に特化したICF環境因子項目リストを第1選定群、第2選定群と2段階構成にするのは、強度行動障害者の多様性を包括した評価を可能とするため、第1選定群を必須評価項目、第2選定群を利用者の状態像に応じた評価項目とするためである。また、第1選択群と第2選択群を設定するに際しては強度行動障害支援に係る重要性を考慮して項目数の調整を行う。

## ■ 倫理面への配慮

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号05-07-01、06-09-03）。

## C. 研究結果

### 1. 事前講義の評価アンケート

#### 1) 事前講義の理解度と改善度

本アンケートの回答数は141で、参加事業所数が141であるため、回答率は100%であった。本稿に係る事前講義は講義群全体の3番目に位置づくもので、「③-1 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み」「③-2 ICF活動とシステムのデータ入力と分析方法」「③-3 ICF活動とシステムで把握した情報をQOL支援に活用する」の3つである。

講義③-1に対する理解度の結果は「全て理解でき

た73.9%、一部理解できなかった23.9%、理解できなかった0.7%」であった。改善度については「改善点なし79.6%、改善点あり19.01%」であった。講義③-2に対する理解度の結果は「全て理解できた19.7%、一部理解できなかった71.1%、理解できなかった5.6%」であった。改善度については「改善点なし64.8%、改善点あり32.39%」であった。講義③-3に対する理解度の結果は「全て理解できた52.1%、一部理解できなかった71.1%、理解できなかった5.6%」であった。改善度については「改善点なし93.0%、改善点あり7.04%」であった。

## 2) 各講義への意見概要

意見概要については、各講義について「よかった点」および「改善点」を抜粋して示す。

講義③-1のよかった点は「強度行動障害の方に対するQOL支援の視点を明確に提示してくれたこと」

「本人視点から考える大切さ」であり、改善点は「3層構造について、簡単な支援の具体的な内容が示されていないと、それらの支援の経験がない受講者にはイメージができない可能性がある。ICFの解説をしてほしい。」であった。講義③-2のよかった点は「全体像を把握できたのがよかった」「分析のヒントになった」であり、改善点は「データ入力の方法が複雑で理解するのが難しい。静止画ではなく動画で説明があったらいい。一回の講義だけで理解できない」であった。講義③-3のよかった点は「QOL向上の4つの視点を通して、対象者を見ること、ポジティブな視点を学ぶことができた」「詳細なアセスメントができる」であり、改善点は「シートを打ち込みながらや記入事例の提示があるとよかった。実際に事業所で他の人に作成してもらうことが難しさを感じる。」であった。

## 2. ICFシステムによる生活全体のQOL評価に関するアンケート

### 1) 設問1「環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか？」

図7に示すように、「そう思う」が81.1%、「多少そう思う」が16.7%であり、97.8%が肯定的な回答であった。また「思わない」の回答は0%であった。

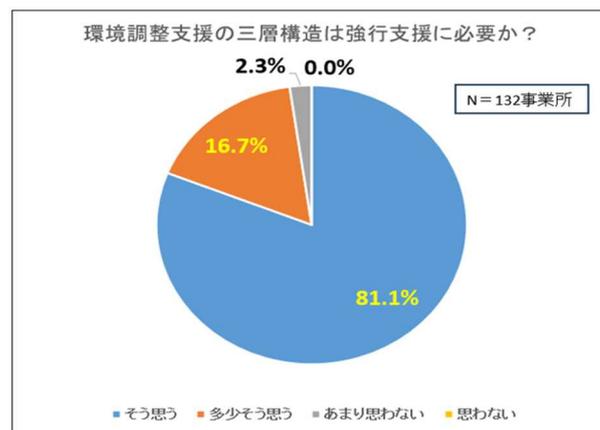


図7 設問1の結果

次に回答の理由を「そう思う」の回答と「あまり思わない」の回答から抜粋して示す。

#### a) 「そう思う」の回答理由 (抜粋)

①「ターゲット行動に対する機能分析からのアプローチ事例が多く、そもそもの本人主体の幸せ・豊かきの観点が抜け、目指すべき方向が定まらず、その場しのぎのアプローチになりがち。(フォローアップの際に、“その場で過ごす支援”を目の当たりにし、“何のための支援か?”を考えさせられた。)三層に分けて考えることでわかりやすいと思った。」

②「冰山モデルやストラテジーシートは支援でよくもちいられるが、主に他害行為や自傷行為での問題解決として使用されるが、表現は悪いが「手のかからない」(何もしない・ただ座っている等の) ご利用者様に対するICFの考え(参加や活動に対する視点)もご利用者様のQOL向上には必要な観点と思うため。」

③「以前より強度行動障害の方の状態緩和や状態憎悪予防の為にTEACCHプログラムの考え方やABAの考え方は活用させて頂いていましたが、それが実質的に当事者の生活の質向上につながっているかについて十分な説明を行えていなかった様に思います。その意味ではICFシートの視点は今後当事者生活の質の向上を検証する為に有効な手立てとなる可能性を感じました。」

④「現場ではどうしても目の前にある困っている行動に対するアプローチが主題となりがちなので、三層構造の捉え方は、よりQOLを意識するアプローチが出来る手立てとなりました。」

⑤「ICFの観点による環境調整支援(QOL)視点が大切。行動障害がなくなること、支援者の指示に従える

ことが目的となりかねない為。」

⑥「自閉スペクトラム症の特性だけに着目した支援ではなく、まずは人としての安心・安全が優先されることでQOLを向上させる土台や基盤が整備されることにつながるを考えるため」

⑦「実際に三層にあてはめて支援を考えていった際に、これまで見ていなかった特性や能力に着目することができ、新たな視点での支援方法が見つかり、有益な環境調整ができたと感じたため。」

b) 「あまり思わない」の回答理由 (抜粋)

①「この3層を理解できる人が現場にどれくらい居るのか疑問。ICF システムの項目の多くがポジティブな評価であったとして、それがQOLが高い状態であると言えるかは議論の余地が多くあるように思われる。支援哲学の一形態に過ぎないとも思う。」

②「それぞれ”環境調整支援”となっているところにも疑問がある。行動障害のある人への支援は環境調整だけではなく(環境調整による成果は絶大であるが)、望ましい行動や社会のルール、人との関り方を”教える”というアプローチも重要であると認識している。学習するための環境を調整するということは言えるが、それでも学習することがあるというのが前提である。行動障害のある人たちに、『何を教えるか』といった視点も合わせて持ちたいと思う。」

2) 設問2「ICFの観点による環境調整支援」は対象者のQOL向上に大切だと思いますか?

図8に示すように、「そう思う」が87.1%、「多少そう思う」が11.4%であり、98.5%が肯定的な回答であった。また「思わない」の回答は0%であった。

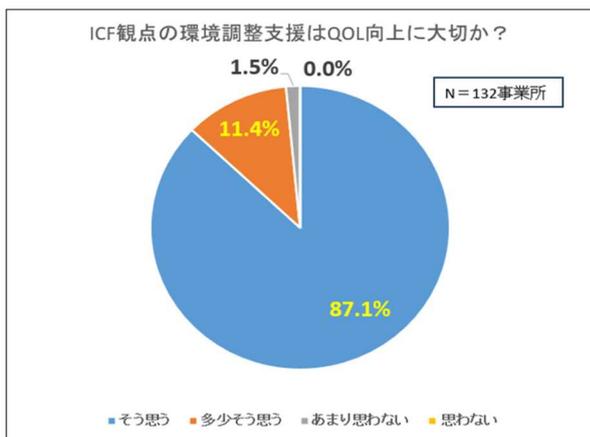


図8 設問2の結果

a) 「そう思う」の回答理由 (抜粋)

①「支援者はともすれば自らが携わる支援環境の中でのみ支援を組み立てることに終始してしまっているのではないか、生活の範囲を支援者が決定してしまっているのではないか、などと気付かせてくれるものでした。」

②「QOL向上を考えると、対象の方の能力・機能だけを見るのではなく、対象の方の物理的環境や人的環境が相互に影響していることも視点に入れる必要があると思います。」

③「従来、私たちの施設では行動障害の緩和にばかり焦点が当てられ、生活全体を評価する視点に乏しかった。快適な生活を提供するにあたり、ICFの観点による環境調整支援は重要になると考える。」

④「支援に苦勞する事業所ではどうしても「自分たちが困る」視点であったり、「自分たちが助かる」形へシフトしがちになるので、主役・主体が誰であるのか、「困っているのはだれか」を考えていくために大切だと思う。」

⑤「特性に対する支援対応や配慮は、ご本人に適應するものとししないものがある事から」

⑥「快適環境の提供、困難さの軽減の両方において、利用者の特性や状態像に責任を求めている。現場実践の中では利用者のQOL視点よりも課題行動の除去に目が向きやすい。しかし、分かりやすく、過ごしやすい環境を準備することで課題行動は課題ではなく強味になったり、行動が落ち着いて新たなストレングスに気づくことが出来る。ICFの観点ではそうしたことが分かりやすくまとめられている。」

⑦「ICFで利用者の「活動と参加」と「環境因子」を掘り下げて考察した結果、本人の課題行動の予防への新たなアプローチが見つかり、対症療法だけで対応していた支援方法が変わったため。」

⑧「ICFの観点で、対象の方の生活全体を把握、評価することで、特に言葉のない方や意思表出が少ない方の状態や思いへの理解に繋がると感じています。また、全体を把握し調整することで、結果的にQOLは向上すると感じています。」

b) 「あまり思わない」の回答理由 (全)

「重度のかたには該当しない設問が多く判断しに

くい」

①「ICF システムの項目の多くがポジティブな評価であったとして、それが QOL が高い状態であると言えるかは議論の余地が多くあるように思われる。」

3) 設問 3 「ICF システムの評価で要支援者にとって快適ではない生活場면을把握できましたか？」

図 9 に示すように、「できた」が 35.6%、「多少できた」が 52.3%で、87.9%が肯定的な回答であった。「できなかった」が 0.8%であった。

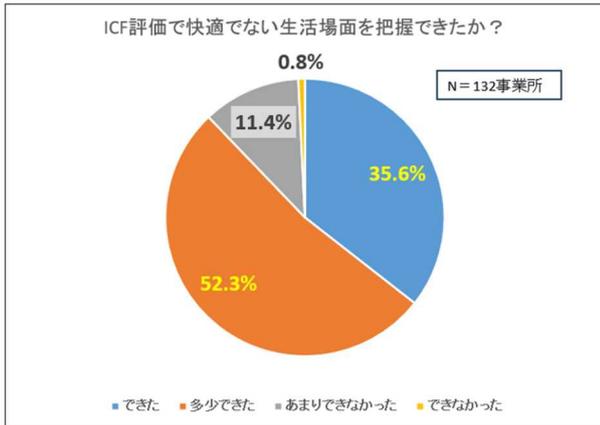


図 9 設問 3 の結果

4) 設問 4 「ICF システムの評価で要支援者に快適な生活を提供する手がかりは得られましたか？」

図 10 に示すように、「できた」が 29.5%、「多少できた」が 59.1%で、88.6%が肯定的な回答であった。「できなかった」は 0.0%であった。

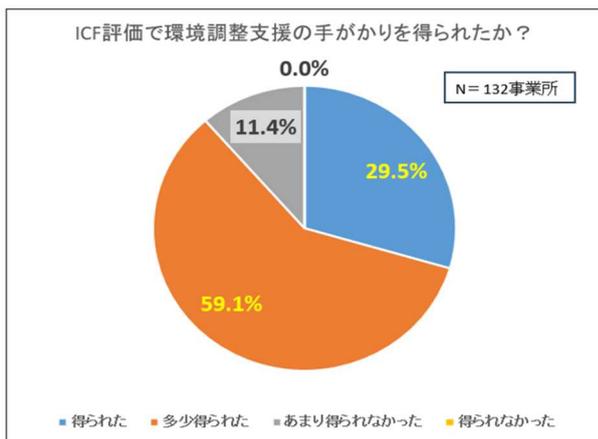


図 10 設問 4 の結果

5) 設問 5 「ICF の観点による環境調整支援を実際に行うことができましたか？」

図 11 に示すように、「できた」が 18.9%、「多少できた」が 59.1%で、78.0%が肯定的回答であった。「できなかった」は 0.8%であった。

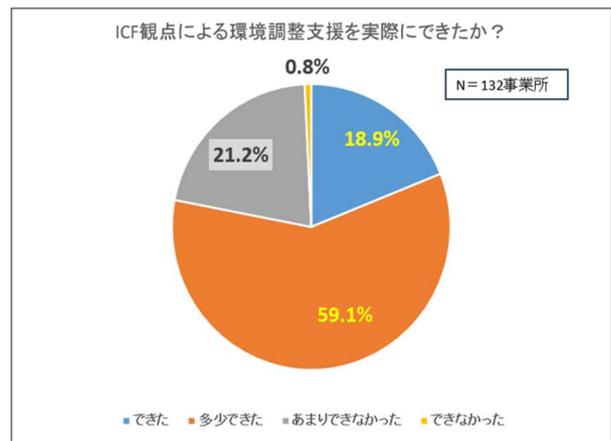


図 11 設問 5 の結果

6) 設問 5 の回答による 3 設問の回答タイプ

a) 「できた・多少できた」に係る回答タイプ

表 1 に示すように、8 種類の回答タイプが認められた。主な回答タイプでは「把握できた・得られた・できた」(type01) が 16 回答、「把握できた・多少得られた・多少できた」(type05) が 17 回答、「対照できた・多少得られた・対照できた」(type08) が 44 回答であった。

表 1 設問 5 が「できた・多少できた」に係る回答タイプ

回答type	設問3	設問4	設問5	回答数
type01	把握できた	得られた	できた	16
type02	多少把握できた	多少得られた	できた	7
type03	把握できた	得られた	多少できた	17
type04	把握できた	多少得られた	多少できた	8
type05	多少把握できた	得られた	多少できた	3
type06	多少把握できた	多少得られた	多少できた	44
type07	あまり把握できなかった	多少得られた	多少できた	2
type08	あまり把握できなかった	あまり得られなかった	多少できた	4

b) 「あまりできなかった」に係る回答タイプ

表 2 に示すように、8 種類の回答タイプが認められた。主な回答タイプでは「あまり把握できなかった、あまり得られなかった、あまりできなかった」(type02) が 6 回答、「多少把握できた、多少得られた、あまりできなかった」が 11 回答であった。

表 2 設問 5 が「あまりできなかった」に係る回答タイプ

回答type	設問3	設問4	設問5	回答数
type01	把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type02	あまり把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	6
type03	あまり把握できなかった	多少得られた	あまりできなかった	3
type04	多少把握できた	あまり得られなかった	あまりできなかった	3
type05	多少把握できた	多少得られた	あまりできなかった	11
type06	把握できた	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type07	把握できた	多少得られた	あまりできなかった	1
type08	把握できた	得られた	あまりできなかった	2

7)設問5の回答が「できた・多少できた」に係る  
主な回答タイプの回答理由

a) type01 回答 (把握できた・得られた・できた)  
の回答理由 (抜粋)

①「ICF システムの評価で対象児童の生活を細かく分析することができたため、できていること、芽生えていること、難しいことを、項目ごとに把握することができた。特に、難しいことについては、本人の特性に合わせて、何が難しくさせているのかを考えて、難しくさせている刺激などを除去し、できていることをうまく利用し、特に視覚化や見通しを伝えて、活動を繰り返し、成功体験を積むことで、落ち着いて取り組むことができるようになった。」

②「作業場面において、嫌刺激となる音や声、視覚的に気になるものがあることで課題行動に繋がっている事がチーム全体で把握できた。他利用者と活動時間をずらす、場面と活動の対一対対応を徹底し、細部への注目の強みを活かし、環境調整を行った。結果として課題行動は無くなり、作業、活動に集中できるようになり、生活のリズムにも好循環を生んだ。」

③「聴覚過敏かなと思っていたが、調べていくうちに、特定の利用者の動きや声が気になっていることがわかったり、集中できる個別課題や、ヘッドフォンを使用してのテレビ鑑賞など今まで行えていなかった支援を取り入れる事ができた。」

④「整理することにより、ICF の観点を持って支援を考えることが多くなった。」

⑤「ICF の観点による環境調整支援を行ったことにより、利用者へのアプローチが変わったことと利用者もストレスがなくなりつつあり課題行動の減少に繋がったため。」

b) type03 回答 (把握できた・得られた・多少できた) の回答理由 (抜粋)

①「ICF シートで色々な観点から探っていくことで、それをもとに QOL を向上させるための手立てを考えて実施することができたため。」

②「当施設は、ASD の方に対して、支援者が指導的な考えで接していない (ASD の方のペースを尊重している) のは、ICF の評価から良くわかった。その分、

ASD の方の余暇活動が下がるという結果が出ており、「支援者の支援での価値観」が良くわかり、支援の変更点も良くわかった。」

③「感覚の過敏さなど、本人にしか分からない事があると思う。支援者の価値観ではなく、本人の感覚や価値観に合わせた支援が大切だと感じたから」

④「項目が細かかったので、それに回答していくことにより、今まで気づけなかったことに気づき、支援に取り入れることができたから」

⑤「対象となる児童に必要な環境調整として換気扇やプロペラに対する興味がご本人の衝動的な行動につながることをチームで確認できたため、適切に興味の対象に触れてもらう環境調整は行ったが、通院や買い物などを含め、生活上でそれら全てを取り除くことは現実的に困難であるため、完全に環境を調整するには至っていないため。」

c) type06 回答 (多少把握できた・多少得られた・多少できた) の回答理由 (抜粋)

①「ICF の観点で考えるのは重要で、理解できたが、今回の研修では重点的に取り組むことができなかった。氷山モデルやストラテジーシートが行動によりつなげることができると考えてしまったためである。そのため、来年度も取り組み、実践し、理解を深めたい。」

②「支援導入後の ICF 検証のところで「支援なし」⇒「効果小」になりました。これから更に支援の更新を図る必要を感じました。」

③「本人にとっての不快感除去や新たな体験や経験ができるように取り組めたから。問題行動の減少が見られたから。」

④「ICF の観点から、何を分かっている、何を分かっているのかを細かく整理ができたため、その視点を元に支援を組み立て実行することができた。」

⑤「初めて行う内容で上手く取り組めたとは思わないが、取り掛かる事は出来たと思う。」

⑥「今回の研修では、アセスメント・ICF シートを活用させてもらったが、記入をおこなっていくにあたってアセスメントを深めることは実感できたが、それらのシートをどのように活用するのか、研修の組み立てとして、どのように繋がっていくのが理

解しづらかった。」

⑦「自分自身が、ICFシステムの活用経験が積み重なっていないため、十分な成果を得られたかどうか判断に迷うため。しかし、支援者自身の意識向上にはつながっているため、一定の成果はあったように感じています。」

⑧「情報量が多すぎる。分析に至るまでの時間がかかりすぎる。時間コストのわりには整理されたものは分かりにくい。実践においては、環境調整の限界もあり悩ましさは残る。ただ、ICFシートで情報を整理する過程で拾っていなかった情報を拾うこともできた。」

#### 8) 設問5の回答が「あまりできなかった」に係る主な回答タイプの回答理由

a) type02 回答 (あまり把握できなかった・あまり得られなかった・あまりできなかった) の回答理由 (抜粋)

①「他のシートの方が使い慣れているためそこから分析支援をおこなった。」

②「ICFシステムの評価システムが難しく、理解も追いつかなかつたため、それを活用することがあまりできなかった。」

③「中核的人材養成研修においてアセスメントシートが多く、膨大な量から活用できるアセスメント項目を絞っていくには相当の時間を要するから。」

④「設問が多くどこから取り組んでいけばよいのかが分からず優先順位がつけられなかった。」

b) type05 回答 (多少把握できた・多少得られた・あまりできなかった) の回答理由 (抜粋)

①「ICFシステムは初めて得た知識で運用するには知識と経験が必要であると考えます。」

②「わざわざICFシステムで評価せずとも、普段から本人を観察したりスタッフ間でやり取りすることで、本人の強み・弱みやスキルを把握していれば、QOLの向上に役立てることができる。」

③「質問項目や連動する項目が多く、自分自身が整理してつかむことが難しかったから。環境調整に関しては学習スタイル等の特性、氷山モデル、ストラテジーシート中心で考えたから。」

④「ICFの視点は重要ですが複雑すぎると感じています。」

⑤「この項目には、どんなことを記入すればいいのかが分からない部分があり、もっと記入が出来れば活用が出来たと思う。」

#### 9) 設問6「ICFシステムによる生活全体のQOL評価は日々の支援の中で使っていけると感じますか？」

図12に示すように、「そう思う」が27.3%、「多少そう思う」が57.6%で、84.9%が肯定的な回答であった。「思わない」は3.8%であった。

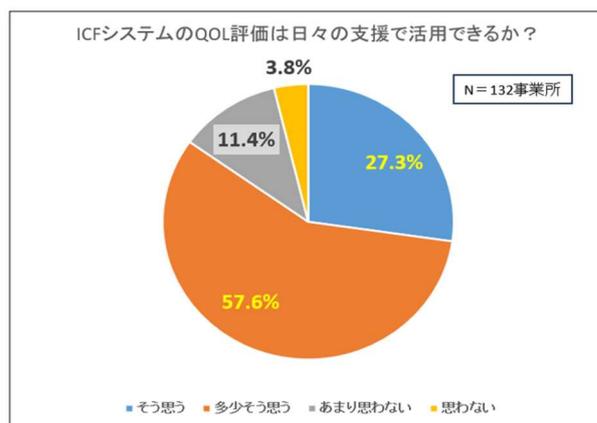


図12 設問6の結果

a) 「そう思う」の回答理由 (抜粋)

①「生活の質という大きな枠組みについて、詳細にアセスメントすることができ、支援の前後の変化を追うことができるため、有意義な評価システムであると思います。このアセスメントの分量は支援の中では必要であり、またこれらを実施することで支援者側の視点やスキルの向上につながるものであると思う一方で、アセスメントの分量が多岐にわたるため、アセスメント自体はそれほど負担ではありませんが、アセスメント後の入力作業に時間がかかるため、やや負担感があることも否めません。」

②「生活の中で自身の好みに合わせた生活空間の提供や活動を実施し、QOLの向上において個別的な視点を取り入れられた。また、個別的な取り組みを行う中でQOLの向上のみでなく、行動障害の緩和にもつながった。今回の件を好事例とし、他利用者にも同様の取組みを行うことができると考える。」

③「対象者様と周囲の関係を探るうえで使っていけると感じました。」

④「一つの問題行動が減少しても生活全体を見渡した時、まだまだ問題行動の芽となる環境があるので QOL 評価を参考にしてより過ごしやすく向上できる支援を常に模索していく必要がある。」

⑤「今回の事例をもとにすれば実用可能と考えられる。アセスメントが細かい分運用に時間が掛かる可能性は感じます。」

⑥「ここまで細かく対象者の QOL 評価をしたことはなかったが、この評価により本人の強み弱みが理解できるので強みは生活の中に活かし、弱みについてはサポートをするという支援の組み立てが出来るから。」

⑦「その人の生活を考える際、障害だけで考えないことの重要性を理解することができたため」

⑧「評価がカテゴリ分けされ、分かりやすい。支援の工夫につながり、強みを活かした支援に結び付けられると感じる。」

⑨「ICF シートにまとめることで強みや課題点が明確になり、支援の組み立てには有効だと思いました。」

b) 「思わない」の回答理由 (抜粋)

①「複雑すぎて量が多すぎる。支援現場の人材や体制に課題が多く、この手続きを踏まないと行動障害の支援ができないと捉えられ、行動障害への取り組み事態が高いハードルとなる。」

②「ICF の視点を持つことはとても重要です。そのため、この視点を中核的人材に必要なと思います。ただ、このアセスメントシートは複雑すぎることで、量が多すぎて現場では使えない状況です。ICF の視点の講義くらいでとどめるのかアセスメントシートをもっと簡易的なものにするのか検討いただけると幸いです。」

③「考え方としては大切であるが、別のシートに情報があれば、ICF システムを使用しなくても QOL 評価はできる。また、ICF システム自体がわかりにくく、使いづらいと感じるため、わざわざ使いたいと思わない。ただ、ケース検討会などで複数の人間と情報を共有する際に ICF シートで情報をまとめることは有効であり、その際に ICF システムを活用することは有効だと思う。」

④「実施コストが高く、これをアセスメントできる職員を育てることが現実的ではない。」

10) 設問 7「生活全体の QOL 評価で用いた ICF システムについて今後改善すべき点があれば教えて下さい。」

136 の回答総数中「改善点は特になし」旨の回答数は 43 で 31.6%であった。その中には「これだけ多くの視点で評価をしていくことが大切であることを学びました。」「一利用者に対して理解するにはこのくらいの量は本来必要だったと考えるきっかけとなりました。この形で良いと思います。」「ICF 自体の考え方が浸透し、より短時間で環境面の調整に目を向けられると支援の充実につながると感じる。」などの回答が認められた。

以下、設問 6 の回答が「そう思う」の場合と「あまり思わない・思わない」の場合に分けて、当設問の自由記述回答を示す。

a) 設問 6 が「そう思う」に係る回答

①「やはり打ち込みに際して負担感が否めません。特に負担になるのは、アセスメントと言うよりも、アセスメント入力作業だと感じます。今回は、エクセルシートでの打ち込みでしたので、よりユーザビリティを高めて、打ち込みがわかりやすく、分析もしやすいアプリケーションパッケージになると、負担感は劇的に減ると思います。そうなると、かなり有益な評価システムになると思いました。」

②「入力がもう少し簡易になり、ボタン切り替えで多面的な評価が見られて活用のための出力が出来るようになると、ありがたいなと思います。全てのライフステージに対応できるようになれば良いと思います。」

③「簡素化できるところがあるとさらに良くなると思う。」

④「入力項目ごとに、必要なアセスメント方法が明記されていると使用しやすい。」

⑤「チーム内で理解しあえるような、評価のまとめ方の必要を感じた」

⑥「今回分析ファイルが MAC に対応できてなくてデータの変換を事務局に委ねたのですが、そこは是非改善していただけると嬉しいです。」

⑦「技術的に難しいかと思いますが、1ファイルで使用できるとありがたいと思います」

b)設問6が「思わない」に係る回答

①「大まかな項目にし、対象者によって必要な情報を記載やチェックできる方法など、総量を減らしシンプルでないと活用される可能性は低い。」

②「全てにおいてもっと簡単に扱える様にしてほしい」

③「少なくとも知的レベルおよびASD特性の重症度によって項目が絞られるシステムがほしい。また、Excelはユーザビリティが低くメンテナンス性が悪いいためHTML等で作成してしまったほうが良いと思われる。」

④「項目を絞って必要な部分だけでも評価することによって現状が把握できればと良いと思う。」

⑤「もう少し簡易的なものにできれば活用の幅が広がる。」

⑥「PCでの操作が難しかったこと。中核的人材養成研修においてはICFの考え方は重要であるが、アセスメントととって分析していくことが今後も必要なのはわからない。」

### 3. 研修前後のICFフォームの検討

#### 1)抽出されたICFフォーム数および当該事業所のICFアンケート回答結果

参加事業所が提出した132の全ICFフォームから「B.研究方法 2. 3)研修前後のICFフォームの検討」に記載した観点で「QOL支援の観点が明確に読み取れる」ものを抽出した結果、45のICFフォームを抽出した。これらに該当する45事業所について、設問3・設問4・設問5の回答パターンを確認した結果を、表3に示す。なお、1事業所についてはICFア

ンケートが未回答となっている。表3に示すように、設問5の回答は「できた」が11、「多少できた」が28、「あまりできなかった」が5であった。

また、設問1「環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか？」の回答は「そう思う」が41で93.2%、「多少そう思う」が2で4.5%、「あまり思わない」が1で2.3%であった。設問2「ICFの観点による環境調整支援は対象者のQOL向上に大切だと思いますか？」の回答は「そう思う」が40で91.0%、「多少そう思う」が2で4.5%、「あまり思わない」が2で4.5%であった。ICFシステムの活用に係る設問6の回答は「そう思う」が17で38.6%、「多少そう思う」が23で52.3%、「あまり思わない」が3で6.8%、「思わない」が1で2.3%であった。

#### 2)抽出されたICFフォームに示されるQOL支援の内容(抜粋)

①「促進環境として把握されたモデル利用者の興味関心を活用した余暇活動をダウンタイム(何もすることがない時間)に導入し、不穏行動制止のための職員マンツーマン見守りから30分の一人遊びが可能となり、日常生活の安定につながった。」

②「文字が読めるという強みを活用して、食事時のおかわりの選択ボードとおかわりカードを準備して満足感のある食事を保証するとともに、一人の遊びスペースで好みの物で遊ぶ支援によって快適な時間を過ごさせている。」

③「居室をテレビ設置可能な部屋に変更し、テレビ、DVDの設置を行うなど、居室をご本人が居心地良く過ごせる部屋に変更することに加え、本人が望む「散歩」を日課として取り入れてくれた。」

④「ご本人がその場その場で対処していた(カーテンを閉めたがる)光への苦手さ(事前フォームで把握されていた)に対して、光刺激が強い場面でアイマスクを提供して、ご本人の快適さを保証。」

⑤「家族に協力してもらい、入浴の事前準備をして登所することで、利用日の確実な入浴が一貫したスケジュールとして実現でき、清容面が改善。」

⑥「ご本人の不安軽減に必要な情報を伝達し心理的安定を保証する支援。本が好きだが破損してしま

表3 抽出されたフォームに係る設問3・4・5の回答タイプ

回答type	設問3	設問4	設問5	回答数
type01	把握できた	得られた	できた	10
type02	多少把握できた	多少得られた	できた	1
type03	把握できた	得られた	多少できた	9
type04	把握できた	多少得られた	多少できた	3
type05	多少把握できた	得られた	多少できた	1
type06	多少把握できた	多少得られた	多少できた	14
type07	あまり把握できなかった	多少得られた	多少できた	1
type08	把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type09	あまり把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type10	多少把握できた	多少得られた	あまりできなかった	2
type11	把握できた	多少得られた	あまりできなかった	1

うので「図書館の本」という建付けで、読んで返却するように設定する支援で破損しなくなった。」

⑦「食事時の不穏行動を促進的環境因子である構造化環境の着想から、食事介助方法のバラツキにあると考え、食事を差し出す方向を統一し、静かに食べられたことに称賛する支援。」

⑧「甘い匂いに惹かれるためか周囲の人に密着して首元の匂いを嗅ぐ行動が、自室に芳香剤を置く支援の実施により軽減。匂いを嗅いで表情が和らぐ様子も見られる。」

⑨「ご本人にとって不快な環境因子(ファスナー)に配慮して、ファスナーがついていない衣服を提供する支援、寝具についても童謡の支援を実施。」

⑩「気温・湿度上昇により不快感が増大するため空調で対応し、本人が快適な湿度、温度設定にするとともに、アトピーにはシャワー浴を行う支援を実施。」

#### 4. ICF 評価結果の分析に基づく強度行動障害に特化した ICF 項目の絞り込み

##### 1) 活動と参加項目の絞り込みの結果

表 4a に強度行動障害支援 ICF 活動と参加項目の第 1 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番号、その右列は項目タイトル、タイトルが type の 2 列は「強み」「支援維持」「支援収支」の評価を受けた度合いであり、3ctgry は 3 支援カテゴリすべてで高頻度の評価、2ctgry および 1ctgry は表中

頻度の評価、2ctgry および 1ctgry は表中に示す支援カテゴリで高頻度評価であった項目である。その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において事前から事後に改善効果が認められた項目である。当該列中の○は上位 75%以上、△は 50%から 74%の頻度で改善が認められた項目である。

表 4b に強度行動障害支援 ICF 活動と参加項目の第 2 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番号、その右列は項目タイトル、タイトルが type の 2 列は「強み」「支援維持」「支援収支」の評価を受けた度合いであり、3ctgry は 3 支援カテゴリすべてで高頻度の評価、2ctgry および 1ctgry は表中に示す支援カテゴリで高頻度評価であった項目である。その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において事前から事後に改善効果が認められた項目である。当該列中の○は上位 75%以上、△は 50%から 74%の頻度で改善が認められた項目である。

表 4 a 強度行動障害支援 ICF 活動と参加項目 第 1 選択群

第1選択項目 (20項目) ; 事前・事後統合	type	R3_調査結果			R7_事前事後
		第1	第2	第3	改善効果
d110	注目する、注意して見る、見分ける、見て確認するなど目的をもって見ること	3ctgry	○		○
d115	注意して聞く、聞き分ける、聞いて確認するなど目的をもって聞くこと	3ctgry	○		○
d130	まねをして学ぶこと	考案	○		△
d161	課題や作業が終わるまで注意を逸らさないこと	2ctgry 維持・修正	○		○
d177	意志決定すること	考案	○		○
d210a	一つの作業や活動を一人ですること	3ctgry	○		○
d230a	日課(日々のお決まりの作業や活動)を一人で行うこと	3ctgry	○		○
d240	ストレスや不安を伴う作業や活動の遂行	2ctgry 維持・修正		○	○
d250	場面に応じた行動のコントロール	2ctgry 維持・修正		○	○
d3151-2	記号やシンボルの理解、絵や写真の理解	3ctgry	○		○
d3351-2	記号やマーク、絵や写真によるメッセージの伝達	1ctgry 維持	○		△
d440	細かな手の動き(手や指の巧緻動作)で物を扱うこと	1ctgry 強み	○		○
d455	移動すること	1ctgry 強み	○		○
d445	手と腕をうまく使って物を扱うこと	考案	○		△
d510	自分の体を洗うこと	2ctgry 維持・修正	○		○
d530	排泄、生理のケア	考案	○		
d540a	衣服の着替え、履き物の脱ぎ履き	3ctgry	○		○
d550	食べること	考案	○		○
d571	危険を回避し安全を保つための配慮や注意	1ctgry 修正	○		○
d880	一人でもまたは誰かと遊ぶこと	その他	○		

表 4 b 強度行動障害支援 ICF活動と参加項目 第2 選択群						
第2選択項目 (18項目) ; 事前・事後統合	type		R3_調査結果			R7_事前事後
			第1	第2	第3	改善効果
d120	触覚や嗅覚や味覚を用いてそれが何であるかや違いを確認するなど	2ctgry	強み・維持	○		
d175	問題を解決すること	その他			○	○
d160	何かに注意を集中すること	2ctgry	維持・修正		○	○
d210b	他者と協力して一つの作業や活動をする	2ctgry	維持・修正	○		△
d220a	複数の作業や活動を一人ですること	1ctgry	維持	○		△
d310a	話し言葉で伝えられたメッセージの理解	考案			○	△
d3150	表情やジェスチャーが伝えるメッセージの理解	1ctgry	強み	○		○
d325	書き言葉によるメッセージの理解	考案			○	○
d330	話し言葉によるメッセージの伝達	1ctgry	強み		○	△
d331	声によるメッセージの伝達	3ctgry		○		
d3350	表情やジェスチャーによるメッセージの伝達	3ctgry		○		○
d415	同じ姿勢を保つ (姿勢の保持)	3ctgry		○		△
d540b	場面や気候に応じた衣服や履き物の選択	2ctgry	維持・修正		○	△
d560	飲むこと	1ctgry	維持	○		
d570	健康に注意すること	考案		○		△
d760	家族との対人関係	3ctgry			○	
d860	日常的なお金の使用や貯蓄	考案		○		△
d920	レクリエーションとレジャー	その他			○	△

## 2) 環境因子項目の絞り込みの結果

表 5a に強度行動障害支援 ICF 環境因子項目の第1 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番号、その右列は項目タイトル、その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において「評価対象となりやすく、促進あるいは阻害の影響を与えやすい項目」で該当する順位群である。

表 5b に強度行動障害支援 ICF 環境因子項目の第 2 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番

号、その右列は項目タイトル、その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において「評価対象となりやすく、促進あるいは阻害の影響を与えやすい項目」で該当する順位群である。

表 5 a 強度行動障害支援 ICF環境因子項目 第1 選択群					
環境因子	第1 選択項目 (15項目)	R3_調査結果			R6 評価
		第1	第2	第3	順位群
e110a	食べ物や飲み物	○			1
e110b	薬や栄養補助剤	○			1
e1150	日常生活で使う一般的な製品と用具 (改造や特別な設計なし)	○			1
e1151	日常生活での使いやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	○			2
e1250	情報の受信や発信、コミュニケーションのための製品や用具 (改造や特別な設計なし)	○			1
e1251	情報の受信や発信、コミュニケーションを支援するために工夫・改造された製品と用具。	○			1
e250	音	○			1
e2250	気温	○			1
e2251	湿度	○			1
e2253 -2255	雨や雪、風などの天候、降水量や風速、四季の変化など	○			1
e240	光	○			1
e310	家族や近い親族の物理的支援と心理的支援	○			-
e410	家族や近い親族の特性理解と多様な観点	○			-
e355	医療・保健・福祉の専門職の物理的支援と心理的支援	○			-
e450	医療・保健・福祉の専門職の特性理解と多様な観点	○			-

環境因子	第2選択項目 (12項目)	R3_調査結果			R6 評価
		第1	第2	第3	順位群
e11520	一般的な遊び用の製品と用具 (改造や特別な設計なし)	○			1
e11521	遊びやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	○			2
e1300 (注)	作業(学習)のための一般的な製品と用具 (改造や特別な設計なし)		○		1
e1301 (注)	作業(学習)のしやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	○			2
e225	振動	○			2
e2252	気圧	○			2
e260	匂いや空気	○			2
e340	対人サービス提供者の物理的支援と心理的支援	○			-
e440	対人サービス提供者の特性理解と障害観	○			-
e420	知人、仲間、同僚、隣人、地域の人たちの物理的支援と心理的支援	○			-
e425	知人、仲間、同僚、隣人、地域の人たちの特性理解と障害観	○			-

(注) ICF原語は「学習」だが強度行動障害版では作業(学習)とする。

## D. 考察

### 1. 事前講義の評価アンケート

#### 1) 講義③-1 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み

本講義は三層構造について説明したもので、理解度は「すべて理解できた」が73.9%、改善度も「改善点なし」が79.6%と良好な結果であった。また意見概要でも良かった点として「QOLの視点を明確に示してくれた」「本人視点から考える大切さ」が示され、講義の目的は達成されたと言える。一方、意見概要の改善点として「具体的な内容が示されていないと支援経験のない受講者にはイメージができない可能性がある」が示され、内容が多少抽象的であった点の修正が今後の課題である。

#### 2) 講義③-2 ICF環境因子システムのデータ入力と分析方法

本講義は、日常生活場面行動アセスメント(Rainbow)とICFシステムの評価を単一のエクセル内で連動していることと両評価の評価法、ICFシステムのデータ分析方法を説明したものであるが、理解度は「すべて理解できた」が19.7%に留まり、80.3%は一部またはまったく理解できなかったという結果であった。また改善度も「改善点なし」は64.8%に留まった。この理由は、連動の仕組みとICFシステムのデータ分析方法が非常に複雑であったことである

う。連動については、日常生活場面行動アセスメントを評価すれば、その項目に対応するICF項目が評価される仕組みとしたが、別評価であるため、エクセル内では別シートに評価結果が表現される。また、ICFシステムのデータ分析には3つのエクセルを別エクセルへのシート転写やデータエクセルの読み込みといった操作が必要であり、エクセル操作の初心者では対応ができないものであったと思われる。実際、意見概要の改善点については「データ入力等の方法が複雑で理解するのが難しい」「一回の講義だけで理解ができない」が示されている。良かった点としては「全体像を把握できた」「分析のヒントになった」が示されているが、「すべて理解できた」が19.7%であったことを考えると、このような意見を持てたのは受講者のごく一部であったと思われる。以上より、日常生活場面行動アセスメントとICFシステム評価を連動させて評価労力を軽減させるという試みはうまくいかなかったと評価するのが妥当である。特に、評価方法と評価データの分析方法という「方法」に係る講義でこのような結果となったことは、受講者の負担増にもつながっており、今後の改善が必須であることを強く示すものである。

#### 3) 講義③-3 ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する

本講義は、標題の通り、ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する実際例を示しながら、QOL支

援の考え方と実践を説明したものである。理解度は「すべて理解できた」が52.1%、改善度は「改善点なし」が93.0%であり、講義自体には問題はないが、その内容理解は十分ではなかった。意見概要では良かった点が「QOL向上の4つの視点を通して、対象者を見ること、ポジティブな視点を学ぶことができた」が示される一方、改善点として「シートを打ち込みながらや記入事例の提示があるとよかった」が示され、具体性が十分ではないことが示唆された。実際、ICFによる生活場面評価を支援に活かす実践はこれまでほとんど行われていない。そのため、本講義で示した支援の考え方が受講者にとって馴染みがなかったことが考えられる。実際、「ICFシステムによる生活全体のQOL評価に関するアンケート」の自由記述回答には「ICFシステムは初めて得た知識」「初めて触れたアセスメント方法」「他のシートの方が使い慣れている」という内容が認められた。

以上、本研修におけるICFシステムの位置づけと活用に係る3つの講義への全体アンケート結果を考察してきたが、強度行動障害における三層構造の考え方とICF観点のQOL支援を4つのポイントで示すことを通じて「本人視点の大切さ」と「ポジティブな視点でご本人を捉えることの大切さ」が受講者に伝わったものと考えられる。

## 2. ICFシステムによる生活全体のQOL評価に関するアンケート

### 1) 設問1と設問2について

設問1は「環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか?」、設問2は「ICFの観点による環境調整支援」は対象者のQOL向上に大切だと思いますか?」であったが、これらの設問への回答は「そう思う」が80%以上で、「多少そう思う」を合わせると95%以上の肯定的回答であった。この結果は、事前講義の講義③-1と③-3で説明した内容が受講生に伝わったことを示すものと考えられる。実際、両講義への「そう思う」の回答理由に示されていた内容として設問1では「機能分析からのアプローチ事例には本人主体の幸せ・豊かさの観点が抜けている」「何もしない・

ただ座っているだけの利用者へのQOL向上にはICFの考えが必要」「強度行動障害の状態緩和へのTEACCHやABAの活用が当事者のQOL向上につながるかが説明できなかったが、ICFの視点は有効な手立てとなる」「ASDの特性だけに着目した支援ではなく、人としての安全安心を優先させることがQOL向上につながる」、設問2では「生活の範囲を支援者が決定してしまっているのではないか」「QOL向上には、個人の能力・機能だけでなく環境の相互影響を捉える視点が必要」「これまでの支援の焦点は行動障害の緩和ばかりで、生活全体を評価する視点が乏しかった」「ICFでの考察によって対症療法だけの支援対応が変わった」が示されている。これらの回答理由は、ICFシステムの導入が「機能分析や冰山モデルによる強度行動障害支援をQOL支援の観点から補完するもの」として受講者に認知されたことを示唆している。ICFシステムは、機能分析と冰山モデルと同じように「環境調整支援が重要であること」を伝える。しかし機能分析と冰山モデルには「課題行動が消退あるいは軽減する」という意味でのQOL向上は存在するものの、それ以上のQOL向上の概念は明示的には含まれていない。ICFシステムの補完機能は「支援対象者の生活を総点検して、快適さに欠ける生活場面を把握し、それを改善する」ことを通じて、QOL支援を具体的に明示することにある。ただし実際に支援対象者がQOLの向上を感じているか否かを確認することは難しく、設問1と設問2の「あまり思わない」については「ICFシステムの項目の多くがポジティブな評価であったとして、それが、QOLが高い状態であると言えるかは議論の余地がある」との回答理由が認められた。このような限界はありつつも設問1と設問2の回答分布と回答理由は、強度行動障害支援にICFを位置づけたことによって「支援対象者のQOL向上を意識的に考えることの必要性が受講生に伝わった」という点で意味があったと思われる。以上の議論に対する補完的考察となるが、設問1の「あまり思わない」の回答理由として「環境調整支援をするだけでなく、“教える”というアプローチも重要である」旨の回答が認められた。この意見が伝えようとする内容には肯ける部分もある一方、「環境

調整支援の欠如した学びのアプローチ」が ASD の人たちにとって学びづらい環境であることも事実である。私たちは、環境調整支援の大切さを多くの人たちに伝えていくことの難しさを自覚しつつ、ASD の人たちにとって快適な環境を提供していかなければならない。

## 2) 設問 3・設問 4・設問 5 について

設問 3 は「ICF システムの評価で要支援者にとって快適ではない生活場면을把握できましたか?」、設問 4 は「ICF システムの評価で要支援者に快適な生活を提供する手がかりは得られましたか?」、設問 5 は「ICF の観点による環境調整支援」を実際に行うことができましたか?」であり、これらについては 3 設問とも、設問 1・2 と比べて、「そう思う」が減少して 20-30%、「多少そう思う」が 60%程度に増加した。これら 3 設問の回答理由に示されていた内容として、表 1 の type01、type03、type06 の回答パターンについては、type01 では「ICF システムの評価で対象児童の生活を細かく分析することができた」「作業場面の嫌刺激が課題行動につながっていることが共有できた」「聴覚過敏との誤解が解け、特定利用者の動きや声が気になっているとわかった」「ICF の観点で支援を考えることが多くなった」、type03 では「ICF シートで色々な観点から探っていくことで QOL 向上の手立てを考えて実施できた」「細かな項目に回答していくことで、今まで気づかなかった気づきを支援に取り入れられた」が示されていた、type06 では「冰山モデルやストラテジーシートが行動によりつながると考えた」「本人にとっての不快感の除去や新たな体験や経験ができるよう取り組めた」「初めて行う内容で上手く取り組めたとは思わないが、取り掛かる事は出来た」「ICF システムの活用経験が積み重なっていないため、十分な成果を得られたかどうか判断に迷う」「情報量が多すぎる。分析に至るまでの時間がかかりすぎる。」が示されている。Type06 の回答には ICF システムの活用に関する否定的な内容もありシステム改善の必要性を示している。「初めて行う内容」であり「情報量が多すぎて時間がかかる」、そして「冰山モデルやストラテジーシートが行動によりつながると考えた」との回答は、受講者が ICF システムに

ついて感じることを端的に表していると思われる。

実際、表 2 の type02、type05 の回答理由については、type02 では「他のシートの方が使い慣れている」「ICF システムの評価システムが難しく、理解も追いつけなかった」「設問が多くどこから取り組んでいけばよいのかが分からず優先順位がつけられなかった」、type05 では「ICF システムは初めて得た知識で運用するには知識と経験が必要」、「普段から本人を観察して強み・弱みやスキルを把握していれば、QOL の向上に役立てられる」「環境調整に関しては学習スタイル等の特性、冰山モデル、ストラテジーシート中心で考えた」が示された。

以上、設問 3・4・5 の回答理由が示すことは「ICF システムは支援対象者の生活を細かく捉えて新たな気づきをもたらすとともに QOL 支援につながる一方、初めてのアセスメントで馴染みがなく情報量が多く複雑なため、使うのが難しい」ということである。先にも述べたが、この後半部分の課題については、改善に向けた修正が必須と考えられる。

## 3) 設問 6 と設問 7 について

設問 6 は「ICF システムによる生活全体の QOL 評価は日々の支援の中で使っていけると感じますか?」であるが、設問 3・4・5 と同様、「そう思う」が 30%弱で、「多少そう思う」が 60%、「思わない」が約 4%であった。回答理由の内容としては「そう思う」では「このアセスメントの分量は支援の中では必要であり支援者側の視点やスキルも向上するが負担感はある」「個別的な取り組みを行う中で QOL の向上のみでなく、行動障害の緩和にもつながった」「今回の実例をもとにすれば実用可能と考えられるが、運用に時間は掛かる。」が示された一方、「思わない」では「複雑すぎて量が多すぎる」「ICF システム自体がわかりにくく、使いづらいと感じる」が示されている。これらの回答内容では「そう思う」「あまり思わない」の両方において「ICF システムの複雑さと情報量の多さ、時間を要すること」が指摘されており、この点、改善に向けた修正が必須である。

設問 7 は「生活全体の QOL 評価で用いた ICF システムについて今後改善すべき点があれば教えてください。」であったが、「打ち込みの負担感が大きい」「ア

アプリケーションパッケージにしてもらいたい」「入力の簡易化・簡素化」「分析アプリの MAC 対応」「1 ファイルでの使用」「項目を絞って必要な部分の評価のみ」などが示された。

以上、設問6と設問7の回答は、③-2の事前講義が受講者にとってわかりづらかったことを直接に反映した結果であると思われる。その一方で、ICF システムの活用が支援対象者の詳細な理解と QOL 支援につながるとの肯定的評価もあり、この評価に沿った支援の実施を現実的に可能なものに落とし込んでいく作業が求められる。

最後に、ICF システムによる生活全体の QOL 評価に関するアンケートの結果について留意しておくべき点について言及したい。それは、次の「ICF フォームの検討」に係る考察とも関連することであるが、設問2と設問5の設問文にある「ICF の観点による環境調整支援」と設問3と設問4の設問文にある「ICF システムによる評価」の2つの表現が、受講者の理解として完全には重なっていない可能性である。ICF システムによる評価とは、支援対象者について「①支援がない場合の困難性を捉え、②その困難性が軽減する支援や場면을記述し、③その軽減の効果の大きさを捉える」というもので、②によって得られた支援の手がかりを支援に活用するものである。しかし②の「困難性が軽減する支援や場面」には、ASD 特性にマッチした環境調整やストラテジーシートで描かれる課題行動前後の環境調整も問題なく記述し得る。実際、分担研究者自身が行った事前講義③-3では、そのような仮想事例を ICF システムの評価シートを示しつつ、QOL の支援の事例として説明している。さらに三層構造の事前講義では、ICF の観点による環境調整支援、学習スタイルに基づく環境調整支援、機能分析による環境調整支援を相互に関連しつつ、強度行動障害の標準的な支援を実現していくための全体的枠組みとして提示している。以上のことから、本アンケートのタイトルは「ICF のシステムによる生活全体の QOL 評価について」であったものの、設問2と設問5は三層構造に示される総体としての支援、設問3と設問4はそれよりも狭い範囲の ICF システムによる評価に基づく支援として、受講

者が捉えた可能性がある。加えて、今回の ICF 評価は同じエクセルファイルの中で日常生活場面行動アセスメントと連動させるという仕組みを設定した。このことが、上記のような理解の混線をもたらした可能性が考えられる。

### 3. 研修前後の ICF フォームの検討

#### 1) ICF フォームの抽出結果について

抽出の基準は「ASD 特性と環境のミスマッチを解消する環境調整支援だけでなく、生活における快適さの向上が読み取れるもの」であり、45 の ICF フォームが該当し、これは全体の 31.9%に当たる。ただし確認しておくべきは、残りの 68%の ICF フォームに記載された支援も課題行動の消退や軽減には十分に効果的で、モデル利用者の方々は、落ち着いた生活を取り戻しているということである。

そもそも ICF フォームは研修で学んだ内容を活用した支援の結果を、ICF 関連図の要素に重ねて配置することで、支援の全体像とその研修前後での成果をわかりやすく示すことを目的としている。その意味では、ICF フォームに記載することと、ICF システムを支援に活用することは密接に関連するものではない。実際、研修資料として ICF フォームの記載例として示したもの(図 6a, 図 6b)に記載されている支援内容は、パーティション、スケジュール・ワークシステムの活用、生活品の配置位置を写真で示すなどが記載されており、気になる刺激の遮蔽や視覚的情報提示といった ASD 支援の王道的内容となっている。加えて、講義③-3「ICF システムの情報を QOL 支援に活用する」のスライド資料では、「自分の持ち物を色で示す」「複数物からの選択では提示する物の数を減らす」「事前に選択カードで決めておく」「ワークシステムの活用」(図 5)のように、視覚支援を ICF システムで把握した情報を活用した QOL 支援として例示している。

ここで確認しておくべきは、この結果が「抽出に該当しなかった ICF フォームにおいて QOL 支援が認められなかった」のではないことである。多くの ICF フォームに記載された支援内容は、ASD 特性と環境とのミスマッチを考慮して環境調整を行う冰山モデルに合致したものであるし、機能分析を通じて課題

行動が生じる先行要因と後続要因が明らかとなり、ストラテジーシートの作成・検討によって支援を決定した。これらの研修内容は結果的に、ICF システムによる生活場面の評価だけでなく、ASD 特性と環境とのミスマッチを解消する冰山モデルによる支援、機能分析による支援のすべてを QOL 支援につなぐ形となっている。そのため、「QOL 支援」を強調した ICF フォームには三層構造のすべての支援が記載されたと考えられる。

以上より、抽出基準に該当する ICF フォームにフォームは全体の約 32%であったが、抽出に該当しなかった ICF フォームにおいても、記載されている支援を QOL 支援の観点から意味づけているものが多く、この点、QOL 支援を強調するという本研究の研修設定においては良い結果が得られたと考えられる。

#### 2) 抽出された ICF フォームの QOL 支援内容について

抽出された ICF フォームの支援内容は「ダウンタイムへのご本人の興味関心活動の導入」「ご本人が快適に過ごせる居住環境の設定」「ご本人の経験に照らしてわかりやすいルールの導入で課題行動が消退した支援」「ご本人の清潔面での QOL に焦点を当てた入浴支援」「ご本人の気持ちを尊重し、それを把握するための支援」「ご本人の好きな香りを、自然に提供する支援」「ご本人が気になる物を生活から取り去る支援」などである。これらは快適な暮らしを創出するために必要な工夫という観点で支援の着想や支援の実際を捉えられるものであり、支援対象者が ASD 特性を有していてもなくても、QOL の向上につながる内容と考えられる。そして結果で取り上げた支援の中には、支援対象者の QOL という観点から支援が考案されたために、支援対象者だけでなく支援者双方の QOL が維持されたものもある。例えば支援事例⑧の「甘い匂いに惹かれるためか周囲の人に密着して首元の匂いを嗅ぐ行動が、自室に芳香剤を置く支援の実施により軽減。」では「周囲の人が課題行動のトリガー刺激である」という理解に立てば、当該の支援者の関わりを停止するという対応につながったかもしれない。そうではなく「当該の支援者がつけている化粧品や香水の匂いが課題行動のトリガー刺激である」という理解に立ったとしても「それらの支援者は当該利用者に関わる際には、化粧も香水もつけない

ようにする」という対応になったかもしれない。しかし、そういった対応は生活の中で気持ちが安らぐ時間をご本人から奪うこととなり、結果的に、不穏行動は解消せず、代替的に自立活動が導入されて「落ち着いた時間を過ごす」という支援になってしまった可能性もある。しかし、この支援事例では、ご本人の興味関心対象が人ではなく香りであることを把握し、芳香剤を使うことでご本人の安らぎの時間を保証するとともに、周囲の支援者への生活制限(化粧品を使わないこと)が回避され、双方の QOL 向上と維持につながっている。

先に、「2. 1)」の考察において「ICF システムの補完機能は三層構造を通じて機能分析や冰山モデルに QOL 支援の概念をつなぐことにある」と述べたが、抽出対象となった ICF のフォームに記載された支援を特徴づける QOL 支援の捉え方が ICF システムを通じて広がっていくことによって三層構造の考え方が支援実践に実効的に機能するものとする。

#### 4. ICF 評価結果の分析に基づく強度行動障害に特化した ICF 項目の絞り込み

##### 1) 活動と参加項目について

表 4a, 表 4b に示した、強度行動障害支援の ICF 活動と参加項目は、第 1 選択群が 20 項目、第 2 選択群が 18 項目であり、令和 6 年度に使用された 67 項目の 43%減となっている。また、評価の指針として、第 1 選択群は全項目を必須の評価とするが、第 2 選択群は支援対象者の状態像に応じて評価するものとしており、評価項目選定の柔軟度も高くなり、支援対象者の多様性に少ない項目数で対応できるものと考えられる。また、選定された項目は、方法で述べた令和 6 年度の評価データを分析して絞り込まれた項目を令和 3 年度調査で「強度行動障害の QOL 支援への有用性」の評定により設定された第 1 選択項目群、第 2 選択項目群と非常に高い一致率を示しており、強度行動障害支援における高い妥当性を有するものと考えられる。ただし、ICF フォームの検討を通じて、評価・活用された項目には、第 1 選択群・第 2 選択群には入っていない項目もあり、これらを、評価労力を上げない形で補完することは課題である。

##### 2) 環境因子項目について

表5a, 表5bに示した、強度行動障害支援のICF環境因子項目は、第1選択群が15項目、第2選択群が12項目であり、令和6年度に使用された42項目の36%減となっている。社会制度などの環境因子である第5章は全項目を削除している。また、評価の指針として、第1選択群は全項目を必須の評価とするが、第2選択群は支援対象者の状態像に応じて評価するものとしており、評価項目選定の柔軟度も高くなり、支援対象者の多様性に少ない項目数で対応できるものと考えられる。ただし、ICFフォームの検討を通じて、評価・活用された項目には、第1選択群・第2選択群には入っていない項目もあり、これらを、評価労力を上げない形で補完することは課題である。

## E. 補記

### 1. ICFシートとICF把握データの分析アプリの改善

#### 1) ICFシートの改善

令和6年度に使用した活動と参加のICFシートは、日常生活場面行動アセスメントとの評価と連動して、ICFシートの対応後目の評価がなされるものであったが、併せて当該項目のICF原本の項目タイトルを構成するその他の活動についても評価できるようになっていた結果、ICFのシートのすべての項目を評価するとなると、かなり多くの項目数となっていた。加えて、ICFシステムは一般の尺度とは異なり、2-3ヶ月から半年と行った長期間の支援経過の中で少しずつ評価を蓄積していくことを想定しているため「支援メモ」のその時々記録を行い、「支援のまとめ」に「①支援がない場合の困難性、②困難性が軽減する場面や支援。③軽減効果の大小、④その他」を補足情報として記入するという形式となっていた。そして、ICFのデータの分析アプリで支援カテゴリーに分類する際には「支援のまとめ」のみが反映されるものとなっていた。そのため、ICFシートの構成が複雑であるとともに、最終結果に反映されない記録欄もあり「記録と分析の全体の流れ」を事前に理解しないと使いづらいものとなっていた。そのため、活動と参加のICFシートに係る改善方針としては、(a)日常生活場面行動アセスメントとの連動の廃止、

(b) ICF原本の項目タイトルを構成するその他の活動の評価の廃止、(c)支援メモ欄の廃止である。これらの結果、活動と参加のICFのシートは、先述した強度行動障害支援版の各項目について「①支援がない場合の困難性、②困難性が軽減する場面や支援。③軽減効果の大小」を評価し、その補足情報をメモするというシンプルな構成とする。

環境因子のICFシートについては、日常生活場面行動アセスメントとの連動はなく、そもそもシンプルなものであるが、先に述べた通り、強度行動障害支援版のICF環境因子項目に応じて項目数を減じた。

#### 2) 分析アプリの改善

令和6年度に使用した分析アプリは、活動と参加のデータについては、日常生活場面行動評価と連動したエクセルから特定のシートを別エクセルに転写紙、そのエクセルを読み込んで支援カテゴリーに分類するという操作が複雑なものであった。環境因子についても、ICFシートを分析アプリに読み込んで支援カテゴリーに分類する必要があった。以上のICF環境因子データの入力から分析への手順が複雑すぎて、受講者の理解を阻んでしまったことは既に述べた。このため分析アプリの改善方針としては、活動と参加のICFシート、環境因子のICFのそれぞれに分析アプリ機能をマクロ設定して、ワンクリックで支援カテゴリーに分類してシートごとに示すエクセルを生成できるものとする。このことにより、ICFのデータの入力と分析を一つのエクセルファイルで行えるようになり、分析操作も、別ファイルの読み込みを必要としないワンクリックでの分析結果のファイル生成ができるものとする。

以上の分析アプリ機能を含むICFシートの開発によって、今回のアンケートで寄せられた、ICFシステムの改善の主な要望には応えられると考える。ただし、要望された改善点である「分析アプリがMACで動かない」に対しては、対応ができなかった。

## F. 結論

強度行動障害支援にQOL支援の観点をつなぐため、標準的な支援を実施するための基本的な枠組みとして提示した「環境調整支援の三層構造」にICFの観

点による環境調整支援を位置づけ、その具体的ツールとして ICF システムを導入して研修と実践を進めた。その結果、環境調整支援の三層構造と ICF の観点による QOL 支援の重要性は受講者に十分伝わった一方、ICF システムを活用した評価と支援活用については、受講者によってバラツキが出た。ICF システムの活用がうまく行かなかった原因として、ICF システムの情報量が多く複雑、評価ツールの操作がわかりづらい、といったことが把握された。一方、環境調整支援の三層構造の提示や ICF のフォームにおける QOL 支援の強調を通じて ICF の観点による QOL 支援の考え方は、ICF システムだけでなく、氷山モデルに基づく支援や機能的アセスメントによる支援にも、QOL 支援の観点が反映されることが認められた。

今回の研究において、ICF の観点を強度行動障害支援に導入して QOL 支援を意識することにつながることが可能と思われた。但し、今後、ICF システムを使いやすくするための改善作業は必須である。

#### **G. 研究発表**

なし

#### **H. 知的財産権の出願・登録状況**

なし

別添4-6

強度行動障害の支援者養成研修における  
機能的アセスメントの効果

分担研究報告書

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究 (22GC1015)  
分担研究報告書

強度行動障害の支援者養成研修における機能的アセスメントの効果

分担研究者：井上 雅彦 (鳥取大学医学系研究)

研究協力者：稲田 尚子 (大正大学)

【研究要旨】

機能的アセスメントは、本人視点から環境との相互作用中で行動問題の原因や背景を理解し、効果的な支援を実現するために必要不可欠な評価である。本報告では中核的人材養成研修における機能的アセスメントの研修効果について検証するため、研修終了後研修参加者にインターネットによる調査を実施し146名分の回答を得た。分析結果からは、構造化や課題調整といった事前の工夫が積極的に取り入れられていたが、代替行動については設定していないとした参加者が3割程度存在した。また指示に従う行動を代替行動に設定する傾向が高く、対象者のQOLを考慮し本人のニーズに基づいた機能として代替行動を設定することには課題があることが示された。事前の工夫の効果と代替行動の定着状況の交互作用が問題行動の頻度および強度に与える影響について分析した結果、事前の工夫、代替行動の設定という個々の支援要素だけでなく、それらの相互作用が行動改善の鍵となることが示唆された。機能的アセスメントにおける高い自己効力感が示され一定の研修効果が示されていた。今後は代替行動の設定に対するQOL的視点の強化、知識や経験が十分でない参加者や実効度の低い参加者に対する個別的な配慮などを充実させ、より実用的なプログラムへの発展が期待される。

A. 研究目的

2023年の「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」の報告書においては「強度行動障害を有する者への支援においては、障害特性を正しく理解し、機能的なアセスメントを行う等の根拠のある-標準的な支援を行うことを基本」とすることが明記された。これにより「機能的アセスメント」という概念は、我が国の強度行動障害支援において重要なアセスメントとして位置づけられ、中核的人材養成研修においても、アセスメン

トの一つとして取り入れられた。

しかし一方では、機能的アセスメントベースのアプローチが定着し、拡大していくためには、それに基づいた実践のエビデンスに加えて、支援者養成における実装効果などの科学的なデータを蓄積していく必要がある(井上, 2024)。

本報告では中核的人材養成研修における機能的アセスメントの研修ツールについて、研修参加者に調査を実施し、分析を行うとともに今後の課題について検討を行う。

## B. 研究方法

### (1) 調査対象者

2024 年度に実施した中核的人材養成研修に参加した参加者で期限までに回答のあったもの 146 名

### (2) 研修内容

中核的人材養成研修としては全 6 回の講座が行われ、機能的アセスメントに関連する研修内容はそのうちの 1 回 (2.5 時間) であり、以下のような内容であった。

#### ① 課題となっている行動の観察と記録

課題となっている行動の具体化、記録の役割、演習 (ABC 記録とスキッタープロットの取り方の説明)

#### ② 機能的アセスメント

機能的アセスメントとは、行動の機能の種類、ストラテジーシートとそれに基づいた演習

### (3) 調査内容

中核的人材養成研修の全過程の終了後、インターネットによる調査を行った。調査内容は以下の通りであった。

#### ① 実施した研修やワークのわかりやすさとツールの使いやすさ

#### ② 研修で取り上げた問題行動

行動が生じる状況、行動の形態、推定される機能は何か。

#### ③ 取り組み

事前の工夫、代替行動、強化、クールダウンについて

事前の工夫の効果、代替行動の定着度、強化の工夫や、クールダウンの実行度、頻度と強度の改善について質問した。

#### ④ 自己効力感と効果への寄与

#### ・倫理面への配慮

調査については、鳥取大学医学部倫理審査委員会の審査にて承認を得た (承認番号 23A63)。

## C. 結果

### 実施した研修やワークのわかりやすさとツールの使いやすさについて

実施した研修やワークのわかりやすさについては良好な結果を得た (図 1)。またツールの使いやすさ (図 2) については ABC 行動観察シートの評価が高く、アプリについては相対的に低いものであった。

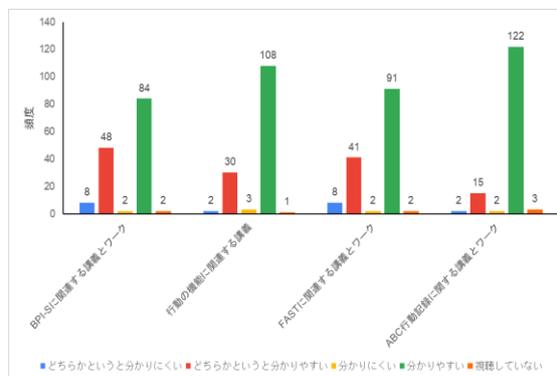


図 1 研修やワークのわかりやすさ

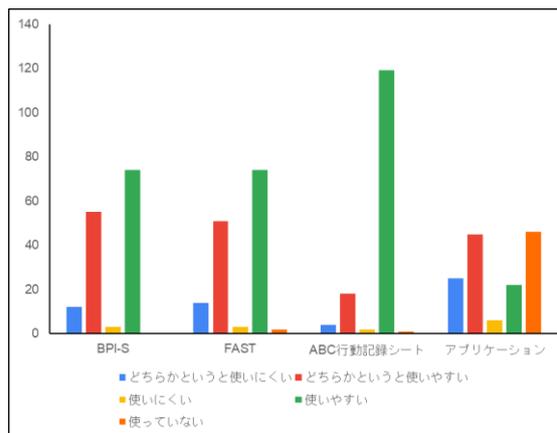


図 2 ツールの使いやすさ

### 研修で取り上げた問題行動

表 1 は、問題行動が生じた状況の分類とその割合を示している。最も多かったのは

「その他」であり、全体の 52.7%を占めた。次いで、「一人の時間」および「支援者・職員の指示」がそれぞれ 15.1%と同率で見られた。「活動の切り替え」(7.5%)や「要求が通らない時」(3.4%)は比較的少なかった。

表 1 問題行動が生じている状況

カテゴリ	頻度	%
一人の時間	22	15.1
支援者・職員の指示	22	15.1
活動の切り替え	11	7.5
要求が通らない時	5	3.4
集団の刺激	4	2.7
個別療育・課題	4	2.7
感覚・身体刺激	1	0.7
その他	77	52.7

表 2 は、参加者が研修で取り上げた問題行動の形態とそのカテゴリ別の頻度を示している。最も多かったのは「その他」(52.7%)であり、分類困難または多様な行動が含まれていた。特定されたカテゴリでは「他者への攻撃」が 27.4%と高く、対人関係に関わる問題行動が比較的多く見られた。「不適切な発声」(6.2%)、「自傷行為」(5.5%)、「物の破壊」(5.5%)といった他のカテゴリは比較的 low 頻度であった。

表 2 問題行動の形態

行動カテゴリ	例	頻度	%
他者への攻撃	叩く、ひっぱる、蹴る	40	27.4
不適切な発声	奇声、大声、叫ぶ	9	6.2
物の破壊	教材を投げる、破く	8	5.5
自傷行為	自分の頭を叩く、かきむしる	8	5.5
常同行動・繰り返し	電気を点けて回る、同じ動作の繰り返し	3	2.1
不適切な行動	徘徊、寝転ぶ、逃走	1	0.7
その他	上記以外の行動(文脈依存)	77	52.7

参加者が研修で取り上げた問題行動の推定された機能(%) (図 3) については社会的要求(注目・要求)が多く、社会的回避(拒否)と続いた。

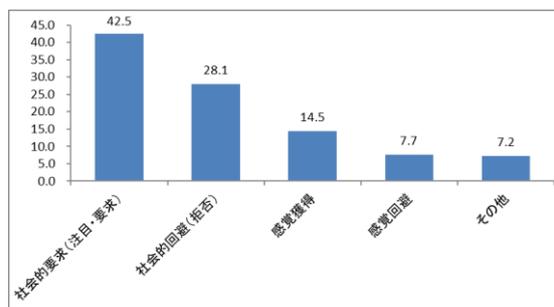


図 3 推定された問題行動の機能(%)

## 取り組みについて

「事前の工夫」に関する分析では、「構造化・予告」が最も多く 41.1%を占めた。次いで、「活動や課題の工夫」が 23.3%、「視覚的支援」が 10.3%と続いた。「環境調整」(3.4%)や「声かけ・指示の工夫」(2.7%)は比較的少数であった(表 3)。

表 3 「事前の工夫」のカテゴリ

事前工夫のカテゴリ	例	頻度	%
構造化・予告	例:「スケジュール提示」「ワークシステムの使用」	60	41.1
活動や課題の工夫	例:「課題の調整」「余暇活動の導入」	34	23.3
視覚的支援	例:「コミュニケーションカード」「視覚支援ツール」	15	10.3
環境調整	例:「静かな部屋の選定」「音環境の調整」	5	3.4
声かけ・指示の工夫	例:「定期的に声かけ」「わかりやすい指示」	4	2.7
その他	例:「状況に応じたその他の工夫」	28	19.2

「代替行動」のカテゴリ別の分析では、「その他」が最も多く全体の 37.7%を占めた。次いで「なし」が 29.5%であり、約 3 割のケースでは代替行動が設定されていなかった(表 4)。

表 4 「代替行動」のカテゴリ

代替行動のカテゴリ	例	頻度	%
作業や活動参加に関する代替行動	例:「掃除を手伝う」「活動に参加する」	28	19.2
視覚的に要求・報告する行動	例:「カードを支援者に渡す」「PECSを使う」	14	9.6
言語的に要求・報告する行動	例:「手伝ってと言う」「教えてと言う」	6	4.1
なし	例:「なし」「特になし」	43	29.5
その他		55	37.7

また事前の工夫(環境調整)、代替行動、代替行動に対する強化、問題行動が生じた場合の効果や対応について図 4 に示した。「事前の工夫の効果」については、「効果があっ

た」とする回答が 52.1%を占め、「やや効果があった」との回答と合わせると約 9 割近くの支援者が何らかの肯定的効果を認識していたことが示された。「対象者は代替行動をすることができたか」の設問では、「定着した（安定してできている）」とした回答が 34.2%、「ときどきできる」が 30.8%であり、一方「設定していない」という回答も 25.3%あった。「強化の工夫の実行度」に関しては、「一貫して実践した」が 46.6%と最も多く、「たまに実践した」（13.7%）とあわせて約 6 割が一定の頻度で強化手続きを実行していることが示された。「クールダウンの手だての実行度」では、「一貫して実践した」が 43.8%、「たまに実践した」が 26.7%であり、全体の約 3 分の 2 を占めた。

頻度と強度の減少（図 5）については頻度と強度ともに 8 割以上がなんらかの改善が見られたことを報告した。

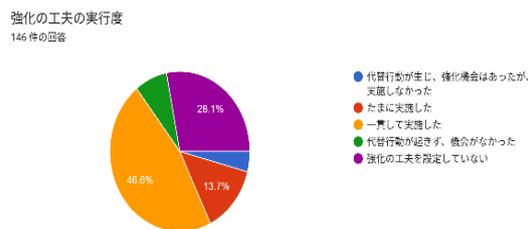


図 4 事前の工夫と代替行動及び問題行動が生じた場合の効果や対応

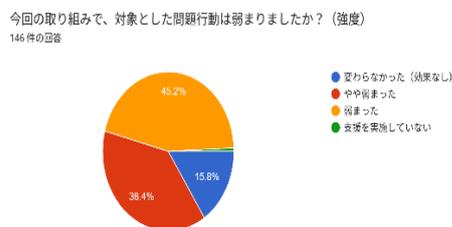
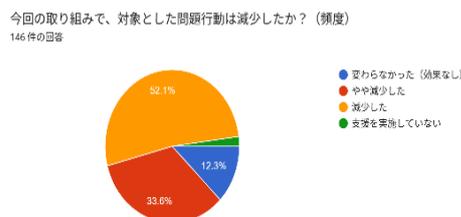
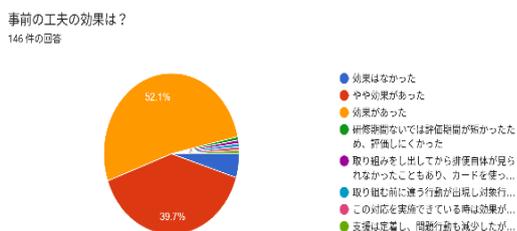


図 5 頻度と強度の減少



さらに事前の工夫の効果および代替行動の定着状況が、対象とした問題行動の頻度および強度の変化に及ぼす影響について検討するため、クロス集計しカイ二乗検定を実施した。

その結果「事前の工夫の効果」と「問題行動の頻度の変化」との関係には有意な関連が認められた ( $\chi^2(21) = 66.90, p < .001$ )。

また、「代替行動の定着状況」と「問題行動の頻度の変化」( $\chi^2(12) = 59.48, p < .001$ )、「事前の工夫の効果」と「問題行動の強度の変化」( $\chi^2(21) = 49.96, p < .001$ )、代替行動の定着状況」と「問題行動の強度の変化」( $\chi^2(12) = 46.64, p < .001$ )にも統計的に有意な関係が確認された。残差分析により、工夫や代替行動の定着がある群では、問題行動の頻度・強度が有意に改善していたことが示された。

さらに、事前の工夫の効果と代替行動の定着状況の交互作用が、問題行動の頻度および強度に与える影響を検討するため、三変数のクロス集計とカイ二乗検定を実施した。三変数クロス集計の結果から、事前の工夫と代替行動の定着状況の組み合わせが、問題行動の頻度および強度の変化に対して統計的に有意な影響を与えることが明らかとなった。特に、問題行動の頻度の変化に関しては  $\chi^2(84) = 122.93, p < .001$  と非常に強い関連が示され、問題行動の強度においても、 $\chi^2(84) = 106.86, p = .0422$  と有意な結果が得られた。

### 自己効力感と効果への寄与

図6に機能的アセスメントに関連した5つの設問（「FASTが活用できるか」「ABC行動観察が活用できるか」「機能を推定できるか」「機能推定が効果に寄与しているか」「FBA（機能的アセスメント）の実施が支援計画立案に寄与したか」）についての回答を円グラフで示した。

いずれの設問においても「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答が大多数を占めており、特に「ABC行動観察が活用できるか」「機能推定が効果に寄与している

か」「FBAの実施が支援計画立案に寄与したか」の項目では、「そう思う」が過半数を大きく占めていた。

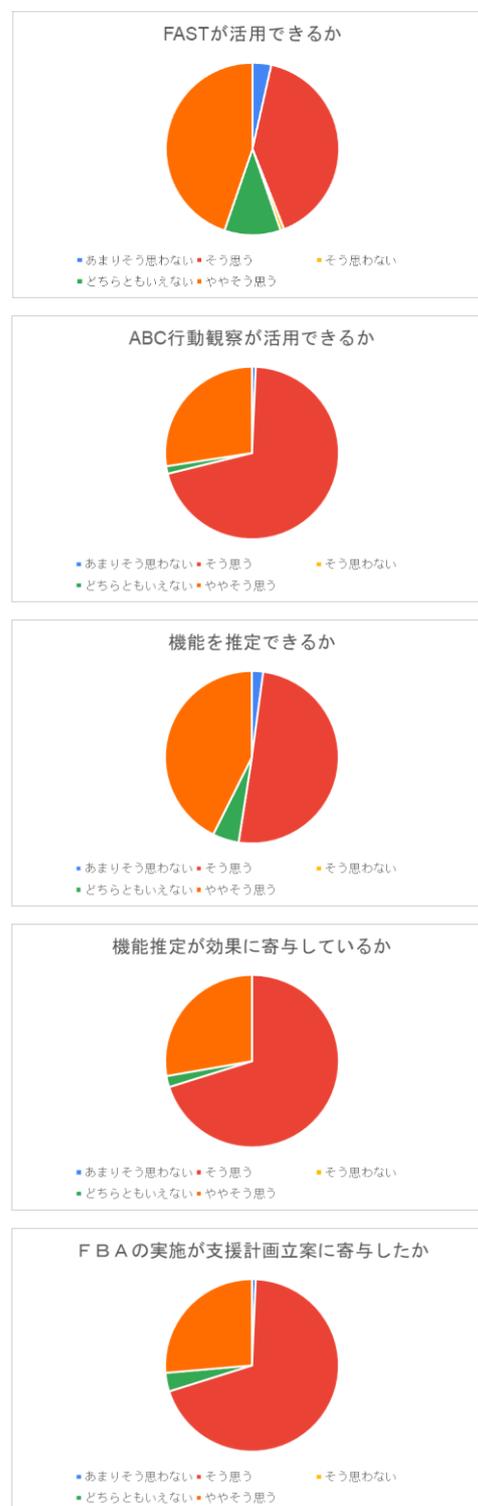


図6 自己効力感と効果への寄与

## D. 考察

実施した研修やワークのわかりやすさとツールの使いやすさについては、概ね良好に値が得られたがアプリについては低いものであった。これは研修中に利用法などを紹介した動画などを提示していなかったことなどの要因が考えられる。

問題行動が生じた状況の分類とその出現割合では、明確なカテゴリに分類しにくい多様な状況で問題行動が起きていることがうかがえる一方で、特に一人の時間や職員からの指示がきっかけとなっている場合も一定数存在することが示唆された。また参加者が取り上げた問題行動の形態としては、支援者への身体的攻撃や暴力行為が多かった。問題行動の推定された機能との関係からは、指示場面で生じる攻撃行動で社会的要求機能を持つ行動を多く取り上げていたことが推察される。

本調査において、事前の工夫として最も多く用いられていたのは「構造化・予告」(41.1%)であった。これは、活動の流れや見通しを明確にすることで、対象者が安心して行動できるよう支援する実践が広く行われていることを示している。また、「活動や課題の工夫」(23.3%)や「視覚的支援」(10.3%)も一定数確認され、対象者の特性に応じた個別的な調整が重視されていることが推察される。

一方で、代替行動の設定については「その他」(37.7%)や「なし」(29.5%)が比較的高い割合を占めていた。これは、明確な代替行動が定義されなかったケースや、実施者の中で代替行動の設定そのものが難しいと感じられたケースが多かった可能性がある。代替行動として最も多かったのは「作業や活動参加に関する行動」(19.2%)であり、これは望ましい活動への参加を促すことで問題行動の置き換えを図るというアプローチが比較的多く取られていたことを示している。一方で問題行動の機能として多かった「社会的要求」に

対して、代替するコミュニケーション行動を提供し、対象者のニーズを実現するための代替行動が設定されている例は少なく、支援者の提示した指示や活動に従わせる行動だけではなく、対象者のQOLを向上させるための代替行動の設定を行っていくための研修の重視やそのための環境設定が必要であると考えられる。

支援実践の実行度とその効果に関する調査結果は、本調査の結果、事前の工夫は多くの場面で効果を発揮しており、代替行動の定着も一定程度進んでいることが示された。また、強化やクールダウンといった支援方略も約4割が一貫して実施していた。一方で、「未実施」「決定していない」といった回答も一定数存在し、支援の一貫性や計画性に課題があることも明らかとなった。これらの結果は、行動支援の継続的なモニタリングと支援者への実践的支援体制の強化の必要性を示唆している。

また事前の工夫（環境調整）、代替行動、代替行動に対する強化、問題行動が生じた場合の効果や対応については本研修内容が実際の行動変容に寄与している可能性を示唆している。事前の工夫に関しては、「効果があった」とする回答が過半数を占め、「やや効果があった」との回答も含めると多くの支援場面において予防的アプローチが有効に機能していたことがうかがえる。このことは、事前調整による問題行動の抑制が、現場において比較的实践可能かつ実効性のある手立てであることを裏付けている。

代替行動の獲得状況に関しては、対象者の過半数が「定着している」または「ときどきできる」と回答されており、適切な行動置き換えが一定の成果を上げていることが示された。ただし、「代替行動の未獲得」や「実行していない」とする回答も一定割合で見られ、研修途中のワークについて継続的なモニタリングと個別化が求められる。

また、行動変容を維持・強化するための工夫に目を向けると、「強化の工夫」や「クールダウンの手だて」について、「一貫して実施した」とする回答が4割以上を占める一方、「決定していない」「実施しなかった」とする回答も1割以上存在していた。この点からは、介入計画の策定段階における支援体制の不十分さや、支援者間の合意形成の課題が浮き彫りとなる。特に、クールダウンなど感情調整の支援が場当たりのになりやすい可能性も考えられ、今後は行動分析に基づいた一貫した支援計画の作成とその実行支援が重要である。

以上の結果から、事前の調整、代替行動の教授、強化の工夫、クールダウンの手続きといった一連の支援プロセスが部分的には実行され、一定の効果を生んでいるものの、依然として計画的な支援の全体像が十分に整っていない事例も多いことが示された。支援内容の一貫性と継続性を高めるためには、現場での実行可能性を踏まえた今後のマニュアル化、記録の標準化、そして支援者への研修・フィードバック体制の強化が不可欠である。

「事前の工夫の効果」と「代替行動の定着状況」に関して、それぞれ「問題行動の頻度の変化」と「問題行動の強度の変化」に関してクロス集計およびカイ二乗検定を実施した結果、事前の支援的工夫や代替行動の定着が、問題行動の軽減に対して重要な役割を果たしていることを示唆する。

「工夫があった」群では、個別化された支援や視覚的サポートによる予測可能性の向上が、行動の安定に寄与していた可能性がある。また、代替行動が「定着した」場合には、適応的な表出が促され、行動の頻度・強度がともに改善する傾向が認められた。一方、「支援しているがまだできていない」群では、強度の変化が乏しく、支援導入初期の課題が反映されていると考えられる。

事前の工夫の効果と代替行動の定着状況の

交互作用が問題行動の頻度および強度に与える影響を検討するため実施した三変数のクロス集計とカイ二乗検定においては、個々の支援要素だけでなく、それらの相互作用が行動改善の鍵となることが示唆された。これらの結果より今後、事前の工夫と代替行動の両輪による継続的な支援が、問題行動の安定的な軽減に不可欠であることが示唆された。

自己効力感に関連する項目からは、多くの参加者がFBA（機能的行動アセスメント）に関連する知識やツールを有効に活用できていると感じており、それが実際の支援実践においても効果を発揮しているという自信や実感につながっていることがうかがえる。特に「ABC行動観察」や「FBAの支援計画立案への寄与」についての肯定的な評価は、実際の現場において行動観察の手法が実践的に役立っていること、またFBAが支援戦略の構築に直結していると認識されていることを示している。

ただし、一部の項目（「機能を推定できるか」「FASTが活用できるか」など）では「どちらともいえない」「ややそう思う」といった中立～やや肯定的な回答も一定数見られたことから、FBAの理解や活用には、経験や支援環境、研修機会の差が影響している可能性も考えられる。今後はこうした個人差への配慮や、さらなる活用支援の充実が求められる。

## 【文献】

- 1) 厚生労働省（2023）：「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」報告書。
- 2) 井上雅彦（2024）強度行動障害の客観的なアセスメントパッケージの実用化に向けた研究 報告書
- 3) Iwata, B. A., Dorsey, M. F., Slifer, K. J., Bauman, K. E., & Richman, G. S. (1982/1994). Toward a functional

analysis of self-injury. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 27(2), 197–209.

- 4) Hanley, G. P., Jin, C. S., Vanselow, N. R., & Hanratty, L. A. (2014). Producing meaningful improvements in problem behavior of children with autism via synthesized analysis and treatment. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 47(1), 16–36.

**G. 研究発表**

なし

**H. 知的財産権の出願・登録状況**

なし

別添4-7

地域支援体制強化に向けた取り組み  
(佐賀県の事例) について

分担研究報告書

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および  
地域支援体制の構築のための研究(22GC1015)  
分担研究報告書

地域支援体制強化に向けた取り組み(佐賀県の事例)について

分担研究者: 會田千重 (国立病院機構肥前精神医療センター)

研究協力者: 福島龍三郎 (社会福祉法人はる)

研究要旨

佐賀県での地域支援体制強化(医療・福祉・教育・行政が連携した体制整備のモデル〜チーム佐賀)について報告し、質的な分析による考察を加えた。

佐賀県では、強度行動障害支援に関して国立病院機構の強度行動障害治療専門病棟、自閉症支援に特化したNPO法人があることに加え、2013年に開始された強度行動障害支援者養成研修を契機として、研修実施事業所や講師・ファシリテーター・専門家・親の会のネットワークが広がった。主要メンバーや講師がトレーニングセミナーや各事業所・医療機関・学校で独自に主催する研修の担当者となっている点も特徴的であった。更に強度行動障害支援に関する有志による組織が設立されたことで、事例検討会が2年間にわたって実施され、結果として現在のフォローアップ研修につながっている。フォローアップ研修には、「佐賀県発達障害者支援地域協議会強度行動障害部会」が関わり、行政とも密に連携する体制ができ、スムーズな「アドバイザー派遣」制度の運用が可能となった。また、2021年度に行われた実数調査で佐賀県の知的障害者療育手帳交付数9,581人(2021年調査)のうち、行動関連項目10点以上842名の占める割合は8.8%となっている。18才未満の強度行動障害の人数が実際より少ないと思われることや、医療機関入院中の人数は把握できていない事などから、2025年度に、より本格的な実態調査も予定されている。

今後は2024年12月に設立された「一般社団法人佐賀県強度行動障害支援推進協議会」の積極的な運営によって、計画的・継続的・実効的な地域支援体制づくりが期待される。

A. 背景・目的

強度行動障害者支援のための指導的人材養成と地域支援体制の構築は、厚労省が提案している全国的な流れをベースに、各地域の福祉・医療資源や教育分野との連携の程度、行政の関与の手厚さなどを考慮しながら、推進していく必要がある。利用できる資源の地域格差や圏域・地域の広さ、各分野の連携の現状により、指導的人材養成と地域支援体制の構築に苦戦している地域も多いと考える。

今回の研究では、九州の地方都市である佐賀県での地域支援体制強化に向けた取り組みを通して、指導的人材養成と地域支援体制の構築のために必要な多分野ネットワークづくりの手法、相互に乗り入れ研修を計画・運用する際の具体的な工夫、研修と指導的人材養成がスムーズに連動していくための留意点などを明らかにすることを目的とする。

## B. 方法

以下の5つの視点より佐賀県での地域支援体制強化（医療・福祉・教育・行政が連携した体制整備のモデル～チーム佐賀）について報告し、質的な分析による考察を加える。

- 1) 佐賀県の地域特性と 2021 年強度行動障害人数調査の結果
- 2) 強度行動障害に対する全国的な対策と佐賀県でのネットワークづくり
- 3) 佐賀 CB (Challenging Behavior) 支援ネット
- 4) その他の県内の動きや専門部会
- 5) 佐賀県の新しい取り組み

## C. 結果

□医療・福祉・教育・行政が連携した体制整備のモデル（チーム佐賀）の紹介

### 1) 佐賀県の地域特性と 2021 年強度行動障害人数調査の結果

佐賀県は人口 78 万 7076 人（2025 年 1 月現在）、10 市 10 町から成り、その中で障害福祉圏域 5 圏域での支援・施策が行われている地域である。2021 年 11 月の強度行動障害人数調査では、市町村支給決定ベースの調査が行われ、行動関連項目 10 点以上（18 歳以上）が 890 人（うち療育手帳取得者 842 人）、強度行動障害児判定基準 20 点以上（18 歳未満）が 55 人（うち療育手帳取得者 40 人）という結果となっている。

総務省統計報告による佐賀県の知的障害者療育手帳交付数は、9,581 人（2021 年調査）であり、うち上記の行動関連項目 10 点以上 842 名の占める割合は 8.8%となっている。この数値は、海外の研究で何らかの行動上の問題（challenging behavior 以下 CB）のある人の数が、知的発達症のある人の成人の 10-20%という数値よりやや少ない（ただし評価基準は異なる）。また R3 年度実施の厚労省の調査研究において報告された、障害支援区分認定調査結果データを活用した強度行動障害を有する者の人数の推計（行動関連項目の合計点が 10 点以上は約 15%であり、20 点以上の人は約 1.2%）と比較しても少ない。

2021 年度調査では、18 才未満の強度行動障害の人数も実際より少ないと思われることや、医療機関入院中の人数は把握できていない事などから、2025 年度に新たな調査を実施予定である。

### 2) 強度行動障害に対する全国的な対策と佐賀県でのネットワークづくり

強度行動障害対策の歴史的背景は図 1 のとおりであるが、佐賀県では国立病院機構肥前精神医療センターが医療機関での強度行動障害対策を 1972 年に始め、自閉症支援に特化した NPO 法人それいゆが 2001 年に開設されたことが特色となっている。そのほかにも、佐賀県では 2013 年に開始された強度行動障害支援者養成研修を県の指定を受けた社会福祉法人はる、後に佐賀県社会福祉士会が運営してきた。また、その研修で中心メンバーとなっていた支援者や強度行動障害に関わる医療関係者が「佐賀行動障害支援者ネットワーク」を作り、勉強会や参加事業所の見学会を始め、それが別名「佐賀 CB (Challenging Behavior) 支援ネット」へと繋がった。

### 3) 佐賀 CB (Challenging Behavior) 支援ネット

「佐賀 CB 支援ネット」の前身である「佐賀行動障害支援者ネットワーク」は 2018 年 5 月に発足した。当初は対面で情報交換や勉強会、参加事業所の見学会を行っていたが、コロナ流行後はリモート形式となり、「佐賀 CB 支援ネット」として 2020 年度から年 3 回の外部講師も含めた研修会を始めた。2021 年度からはそれに加え年 3 回の事例検討会を開始し、2022 年度まで継続した。特別支援学校 4 校・普通小学校 1 校の教師と 2 つの保育園関係者、19 の福祉事業所スタッフ、医療機関スタッフ、2 か所の発達障害者支援センターと県療育支援センタースタッフ、県障害福祉課、自閉症協会保護者、などで組織されている（図 2）。3 年間の研修会・事例検討会の参加総数はのべ 416 名以上に上った。

佐賀 CB 支援ネットの効果は以下である。

①地域で連携しているメンバー同士が、お互いの支援・研修体制等を共有できた

②事例検討会を通して、それぞれの強みを生かす検討ができた（冰山モデルシートを使って）

③現場のやりがいや困り感も共有することで、お互いの組織の文化を知り、地域の資源をさらに有効に活用しやすくなった

④県障害福祉課に強度行動障害の人数調査の依頼をすることで、佐賀県下の強度行動障害児（者）の実態が初めて明らかになった（前述の2021年11月調査）

#### 4) その他の県内の動きや専門部会

・専門部会での強度行動障害に関する連携・研修に関する検討（佐賀県発達障害者支援地域協議会「強度行動障害支援部会」：2022年度より）

・佐賀県健康福祉部へ「強度行動障害」への理解と支援者養成に関する要望書（佐賀県自閉症協会：2022年）

・知事直轄の医療・福祉・NPO関係者の意見交換会（さが現場の声と想いをつなぐ懇親会：2017年より32回開催）

・県議会議員を加えた教育・医療・福祉・行政の勉強会（佐賀県強度行動障害支援勉強会：2022年より計4回開催）

・佐賀県議会における強度行動障害支援に関する質疑（2022年度より）

現在の「チーム佐賀」は、精神科病院医師、自閉症専門機関スタッフ、特別支援学校教諭、施設入所支援スタッフ、通所系事業所スタッフ、児童系事業所スタッフ、相談支援専門員、発達障害者支援センタースタッフ、大学教員、家族、行政担当者など約20名であり、上記の様な多方面の県内の動きが、佐賀県における地域支援体制の強化には欠かせないと考える。

#### 5) 佐賀県の新しい取り組み

2023年、佐賀県は新規事業として「強度行動障害支援者サポート事業」を開始し、図3・図4の様に「強度行動障害支援者フォローアップ研修」「ダイジェスト版強度行動障害研修（強度行動障害支援者養成研修の未受講者対象）」や「強度行動障害支援部

会（佐賀県発達障害者支援地域協議会）」「強度行動障害支援アドバイザー（強度行動障害支援事業所に対するコンサルテーション）」が予算化され、実施している。

#### 【強度行動障害支援者フォローアップ研修】

「強度行動障害支援者フォローアップ研修」の目的は、強度行動障害児者の支援に現場で携わっている者の支援技術等の向上や支援事業所間の連携強化などを図ることで、支援対象者及びその家族の負担軽減・不安解消・メンタルフォローにつなげるものである。今後は福祉事業所における中核的人材の育成とも関連すると思われる。内容は佐賀CB支援ネットの事例検討会をさらに発展させたものとなっており、2024年度は教育から3名・福祉事業所から10名（児童5名・成人5名）・医療機関から3名の研修生が、講義・グループワーク・事例検討を行った。事例対象者の年齢は7歳～70歳まで幅広く、内容としては冰山モデルに応用行動分析（機能的アセスメント）の講義も取り入れたものになっている。かつ同じく県の事業費で各事業所・学校・医療機関に「アドバイザー派遣」を行い、OJTにより困難ケースへの対応方法を具体的にアドバイスすることにも取り組んでおり、今後は地域の広域的支援人材の育成にも関連していくと思われる。2023年度と比較し、2024年度は「アドバイザー派遣」の1回目を研修前半の早い時期に設定したことで、ファシリテーターが各事業所・学校・医療機関の実際の体制を知り、チームマネジメントについて検討しやすくなった。

また「佐賀CB支援ネット」の2023年度活動で行った「強度行動障害支援者フォローアップ研修」ファシリテーターを対象とした実践勉強会「事業所へのアドバイスの実際（東京都・鳥取県の事例研修を通して）：鳥取大学 井上雅彦先生」に引き続き、2024年度も「佐賀県強度行動障害アドバイザー研修：一般社団法人あんぷ 竹矢恒氏」を実施した。各機関による専門研修やTEACCH®プログラム研究会による研修なども加えて、様々な県内の機関が相互に乗り入れることで、情報・知識の共有やチームマ

ネジメントへの取り組みができやすくなったと思われる。

【一般社団法人佐賀県強度行動障害支援推進協議会】  
また計画的・継続的・実効的な地域支援体制づくりのプラットフォームを目指して「一般社団法人佐賀県強度行動障害支援推進協議会」が2024年12月に設立された。今後は協議会の中で以下のような事業内容を計画している。

- (1) 強度行動障害支援に関する政策提言（要望書の提出）
- (2) 強度行動障害支援に関する普及啓発（フォーラムの開催）
- (3) 強度行動障害支援に関する人材育成（強度行動障害支援者養成研修/フォローアップ研修の開催）

#### D. 考察

□地域支援体制の現状評価と今後の課題

「チーム佐賀」での地域支援体制を、本研究班でも使用している模式図（図5）に当てはめて考えると表1のようになる。

【構築・活動がされている】

- ・広域で現実的な強行支援検討会議
- ・広域で継続的な実態調査と公表
- ・強度行動障害支援者養成研修の企画・運営
- ・強行支援の発展を願う組織を超えた継続的チーム
- ・事業所コンサルテーションの仕組み
- ・トレーニングセミナー（5DAY）
- ・強度行動障害支援の実績のある法人
- ・業界団体 / 親の会

以上に加え、今後「一般社団法人佐賀県強度行動障害支援推進協議会」の積極的な運営によって、計画的・継続的・実効的な地域支援体制づくりが期待される。

【残された課題】

- ・強度行動障害支援に特化した受け入れ事業（鳥取県等で行われているような強度行動障害支援に特化した受け入れ事業：「とっとり版強度行動障

害児者先導的支援事業）

- ・広域で専門的な強度行動障害相談体制整備（医療機関長期入院者の退院移行相談も含めて）
  - ・中核的人材や広域的支援人材の育成とネットワーク化
  - ・基幹相談支援センターや地域生活支援拠点との連携
  - ・困難ケースのマネジメント機能
  - ・標準的な支援を実装している教育・医療・福祉の関係機関を増やすこと
- 以上の課題が挙げられる。

#### E. 結語

□各地域の体制や医療との連携度合いに応じた手法の提案

全国的には、地域支援体制には格差があり、資源や連携手法なども一様ではない。厚労省の提案する「強度行動障害を有する者の地域支援体制」を実現するためには、各地域の発達障害者支援センター、基幹相談支援センター、発達障害者地域支援マネージャー等の動きや、自立支援協議会や前述の発達障害者支援地域協議会での強度行動障害への取り組みなど地域事情を把握することが必要である。要保護児童対策地域協議会で、強度行動障害の状態にある児童を把握・検討する場合もある。更に医療（医師会や精神科医会など）・教育（教育委員会や特別支援学校校長会など）の会議体、自閉症協会や手をつなぐ育成会などの関係団体も含め、多方面からの働きかけを検討することも重要と考える。

全国的な、医療も含めた地域事情や情報交換については、肥前精神医療センターが事務局を務めている「強度行動障害医療学会」が2020年10月から研究会として発足し、2023年4月に学会となった。強度行動障害の治療を行う医療機関はまだ少数で、国立病院機構の専門病棟や児童思春期病棟を持つ医療機関、福祉事業所の嘱託医である精神科病院、地域の公的病院精神科の一部などに限られる。「強度行動障害医療学会」には全国44都道府県の280名を超える医療・福祉・教育・行政等の関係者が参加しているため、各地域の支援体制構築のヒントが得

られると考える（一般社団法人強度行動障害医療学会 <https://kyou-kou.sakura.ne.jp/>）。

【文献】

- 1) 福島龍三郎：国立重度知的障害者総合施設のぞみの園令和6年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究」情報アップデート Day since2024「第2部：地域の支援体制づくり “チーム佐賀” はこうして生まれ育っている」
- 2) Lars-Olov Lundqvist：Prevalence and risk markers of behavior problems among adults with intellectual disabilities: A total population study in Örebro County, Sweden  
Research in Developmental Disabilities  
Volume 34, Issue 4, April 2013, Pages 1346-1356

- 3) 「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」の報告書  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_32365.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_32365.html)
- 4) 令和3年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害児者の実態把握等に関する調査研究」事業報告書 PwC コンサルティング合同会社  
令和4年3月
- 5) 一般社団法人強度行動障害医療学会  
<https://kyou-kou.sakura.ne.jp/>

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

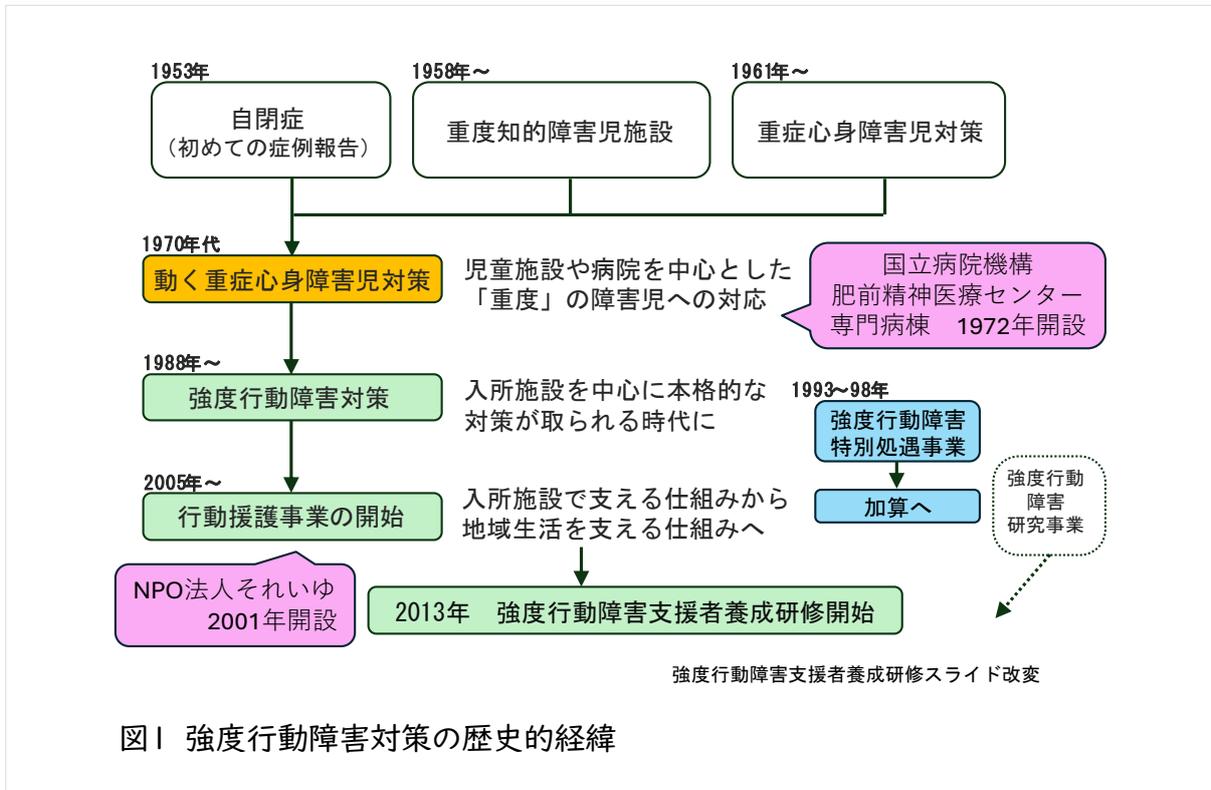


図1 強度行動障害対策の歴史的経緯

(構成メンバー50名以上)

\* 2020年度より  
年3回のリモート研修会

+

\* 2021・2022年度  
年3回の事例検討会

↓  
総参加者数 416名

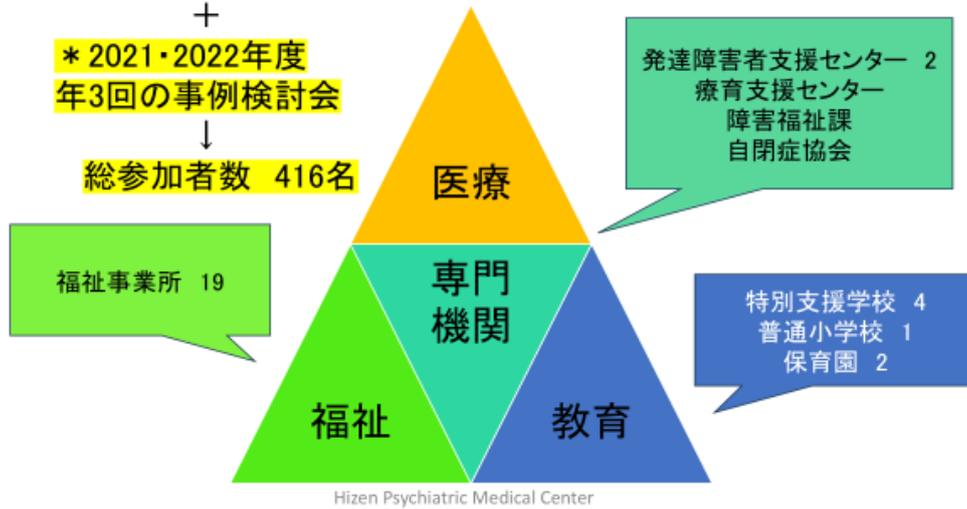
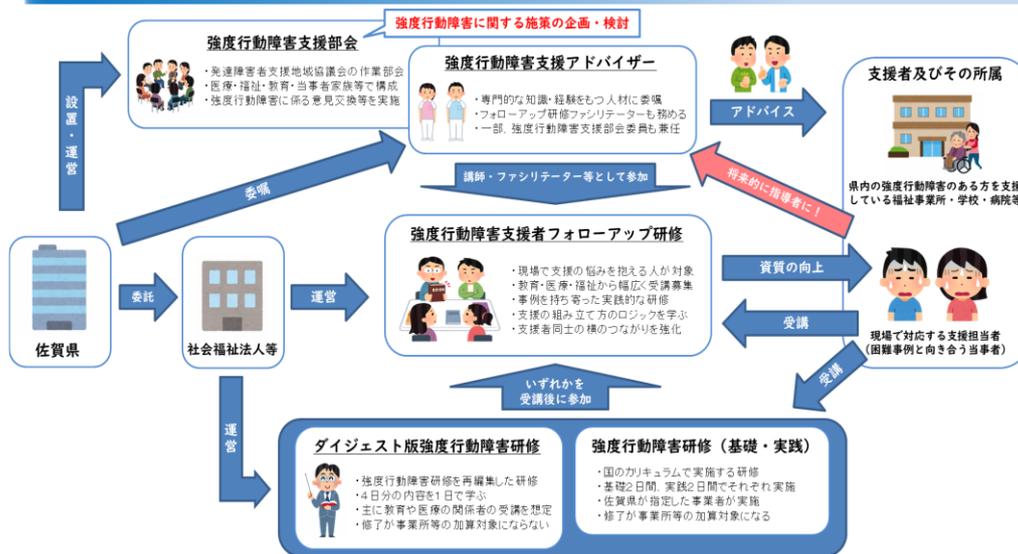


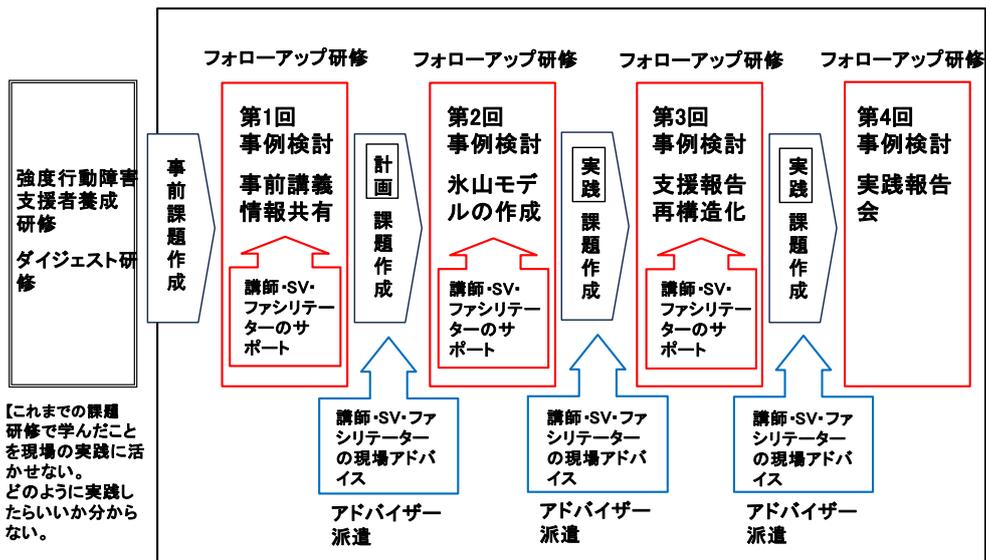
図2 2022 年度までの佐賀 CB 支援ネット活動

佐賀県強度行動障害支援者サポート事業について



佐賀県作成資料

図3 佐賀県の取り組み



「研修と現場を丁寧につなぐ」  
 研修で学んだことを現場で実践するためのサポート  
 講師・SV・ファシリテーターのOJTにより現場の実践者を育成

図4 フォローアップ研修とアドバイザー派遣の仕組み

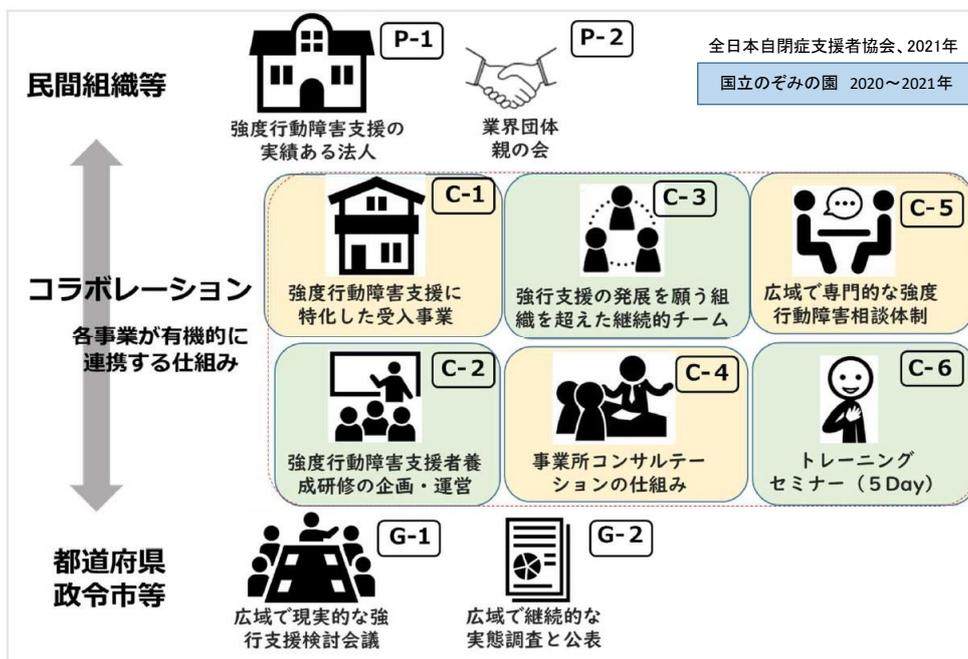


図5 地域支援体制構築のための視点(参考)

表1 佐賀県における地域支援体制と今後の課題

地域支援体制	佐賀県の状況
広域で現実的な強行支援検討会議	佐賀県発達障害者支援地域協議会強度行動障害支援部会
広域で継続的な実態調査と公表	R3に一部実施、R7に本格的な調査を実施予定
強度行動障害支援に特化した受け入れ事業	
強度行動障害支援者養成研修の企画・運営	協議会において強行研修、フォローアップ研修を企画・運営予定
強行支援の発展を願う組織を超えた継続的チーム	強行研修、フォローアップ研修講師を中心としたチーム有
事業所コンサルテーションの仕組み	フォローアップ研修とセットで実施
広域で専門的な強度行動障害相談体制	
トレーニングセミナー(5DAY)	それいゆにおいて3DAYS研修を実施
強度行動障害支援の実績のある法人	肥前精神医療センター、それいゆ、はる、他入所施設等
業界団体 / 親の会	佐賀県自閉症協会、佐賀県強度行動障害支援推進協議会

# 資 料

## 資料 1.

令和 6（2024）年度 中核的人材養成研修 募集要項

## 資料 2.

令和 6（2024）年度 中核的人材養成研修 eラーニング資料

## 資料 3.

令和 6（2024）年度 中核的人材養成研修 研修各回資料

## 資料 4.

令和 6（2024）年度 中核的人材養成研修 ワークシート・  
実践報告フォーマット

## 資料 5.

令和 6（2024）年度 情報アップデート Day 募集要項

# 令和6年度 中核的人材養成研修 — 受講者の募集について —

## 中核的人材養成研修の日程

	内容・対象	方法	日程	西日本チーム	東日本チーム	
説明会	Teamsの使い方 受講者事前課題 の周知 事前視聴案内	動画視聴	6月頃			
第1回目	3頁目参照	WEB (LIVE)	8月26日 (月)	9:30~12:00	14:00~16:30	
第2回目		集合		9月27日 (金)		14:00~16:30
				10月1日 (火)	14:00~16:30	
第3回目		WEB (LIVE)	10月29日 (火)	9:30~12:00	14:00~16:30	
第4回目		WEB (LIVE)	11月26日 (火)	9:30~12:00	14:00~16:30	
第5回目		WEB (LIVE)	12月24日 (火)	9:30~12:00	14:00~16:30	
第6回目	WEB (LIVE)	2月10日 (月)	9:30~12:30 もしくは 14:00~17:00	14:00~17:00		
フォロー アップ	トレーナー サブ・トレーナー 事務局	受講者 事業所 訪問	適宜 (1回)			

※西日本チーム：近畿・中国・四国・九州  
東日本チーム：北海道・東北・関東・甲信・北陸・東海  
(参照：総務省統計局 地域区分)

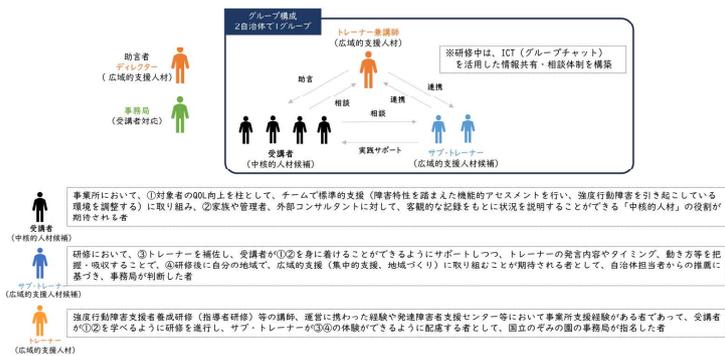
主催：独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

## 中核的人材養成研修 — 受講者用募集要項 —

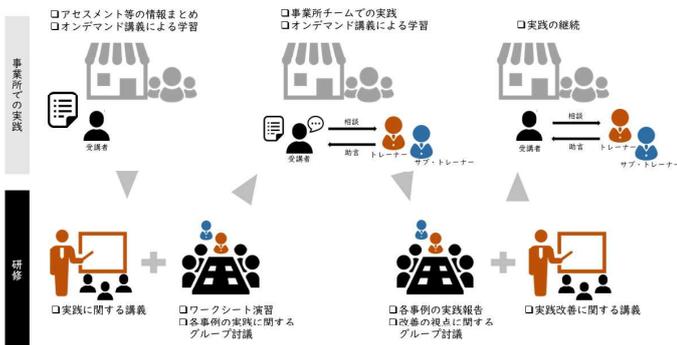
目的	中核的人材養成研修は、“強度行動障害支援者養成研修”の内容を踏まえて、支援現場において適切な支援を実施し、組織の中で適切な指導・助言ができる人材の育成を目的としています。
対象者	チームで支援を行う上で、適切なマネジメントを行い中心的な役割を果たすことが期待されることから、下記の募集要件を全て満たす者としてします。 なお、中核的支援人材研修の受講者を選定する際には、障害分野に加えて、障害児分野の支援者も含めて検討をお願いします。
募集要件	① 強度行動障害支援者養成研修(実践研修)を修了し、内容を十分に理解している者 ② 強度行動障害の状態にある利用者の直接的な支援を行っており、事業所において支援の中核的な役割を担っている(その予定を含む)者 ③ 事業所所属長の承諾を得て、全回参加し、事例報告ができる者 ④ 事業所所属長又はそれに代わる者が、第1回目の研修・第6回目の実践報告会に参加可能であり、研修参加後の職場体制整備に前向きであること ⑤ グループチャット(Microsoft Teams)による情報共有ができる者
募集人数	各都道府県から2名
申込方法	推薦者を都道府県でお取りまとめいただき、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園ホームページから申込書(Excel ファイル)をダウンロードし、申込案内に従い記入した申込書を下記のメールアドレスまで添付して送信してください。
申込期日	令和5年5月30日(木) 17時00分まで(申込期日を過ぎたものは受け付けません)
申込後の流れについて	都道府県担当者へ受講者決定通知を、各受講者へ受講案内をメール等でお送りします。メールにてご連絡となりますので、メールアドレスをご記入の際には間違えないようにご注意ください。 ※ メールが届かない場合は、都道府県担当者に確認させていただきます。
受講環境について	Zoomを使用したオンライン研修及び集合研修となります。演習では、グループに分かれ、ワークシートの画面共有や文字入力などの作業がありますので、パソコンでの受講をお願いします。グループチャット(Microsoft Teams)を使用します(機器説明会を研修前に行います)。推奨環境については、別紙をご参照ください。
修了証について	令和6年度中核的人材養成研修の修了証は、6回開催される全ての内容を正しく理解し、必要な演習を適切に実施、および事例報告をした者に交付します。なお、受講者側に起因するトラブルへの対処している時間が15分以上あったり、受講態度が著しく不良であったりする場合は、修了証を交付しません。 ※修了証は、研修全日程終了後に発送します。
お問合せ	独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 〒370-0865 群馬県高崎市寺尾町2120番地2 TEL：027-320-1357 E-mail：nozomi-seminar-01@nozomi.go.jp 総務企画局事業企画部研修・養成課 担当：槻岡(つきおか)・長井

## 中核的人材養成研修とは

中核的人材養成研修は、“強度行動障害支援者養成研修”の内容を踏まえて、支援現場において適切な支援を実施し、組織の中で適切な指導・助言ができる人材の育成を目的としています。



## 中核的人材養成研修の構成

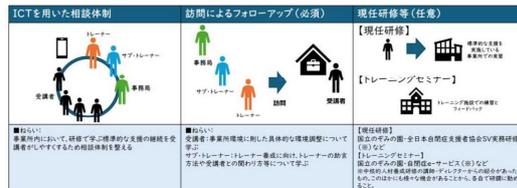


## 中核的人材養成研修のプログラム ※プログラムは変更になる可能性があります

	時間	科目名・役割	研修内容(グループ討議)
事前課題	1.5	eラーニングの視聴等	
第1回目	2.5	チーム支援とガイダンス	モデルを含む現場支援の状況・課題整理
実践		eラーニングの視聴 / 事業所における実践	
第2回目	2.5	特性理解とアセスメント	モデル紹介と質疑(特性理解)
実践		eラーニングの視聴 / 事業所における実践	
第3回目	2.5	支援プランの検討	優先課題(標的行動)の検討
実践		eラーニングの視聴 / 事業所における実践	
第4回目	2.5	支援プランの立案	構造化・コミュニケーション支援等の検討▶試行
実践		eラーニングの視聴 / 事業所における実践	
第5回目	2.5	支援プランの実施と修正	支援プランの実施報告と質疑
実践		事業所における実践	
第6回目	3.0	実践報告	実践報告
フォロー	1回	訪問フォローアップ等	

## 【フォローアップ】

- 受講者の実践サポートの観点から研修期間中・研修後にフォローアップを実施します。



## その他

- ・ 本研修は、各受講者が実際に支援を提供するご利用者様の支援記録等を持ち寄り、助言者と受講者間で討論を重ねながら、支援計画を作成して、行動や様子の変容を振り返りつつ支援の質向上を目指す内容となっております。そのため、個人情報等が含まれる内容となりますので、本研修で知り得た個人情報に関して、同意書の提出をお願い致します。 ※同意書は受講決定後に受講者へ郵送いたします。
- ・ 本研修は、募集要件に記載してあります“強度行動障害支援者養成研修(実践研修)を修了”を確認するため、受講申し込み時に修了証のコピー提出をお願いしております。

# 令和6年度 中核的人材養成研修 — サブ・トレーナーについて —

## 中核的人材養成研修の日程

	内容・対象	方法	日程	西日本チーム	東日本チーム	
説明会	Teamsの使い方 受講者事前課題の周知 事前視聴案内	動画視聴	6月頃			
事前打合せ	ディレクター トレーナー サブ・トレーナー 事務局	WEB (LIVE)	7～8月頃			
第1回目	4頁目参照	WEB (LIVE)	8月26日 (月)	9:30～12:00	14:00～16:30	
第2回目		集合		9月27日 (金)		14:00～16:30
				10月1日 (火)	14:00～16:30	
第3回目		WEB (LIVE)	10月29日 (火)	9:30～12:00	14:00～16:30	
第4回目		WEB (LIVE)	11月26日 (火)	9:30～12:00	14:00～16:30	
第5回目		WEB (LIVE)	12月24日 (火)	9:30～12:00	14:00～16:30	
第6回目	WEB (LIVE)	2月10日 (月)	9:30～12:30 もしくは 14:00～17:00		14:00～17:00	
フォローアップ	トレーナー サブ・トレーナー 事務局	受講者 事業所 訪問	適宜 (1回)			

※上記で記している時間は、「研修時間」です。前後30分、準備と振り返りがあります。第6回のみ、研修時間が3時間となります。

※西日本チーム：近畿・中国・四国・九州  
東日本チーム：北海道・東北・関東・甲信・北陸・東海  
(参照：総務省統計局 地域区分)

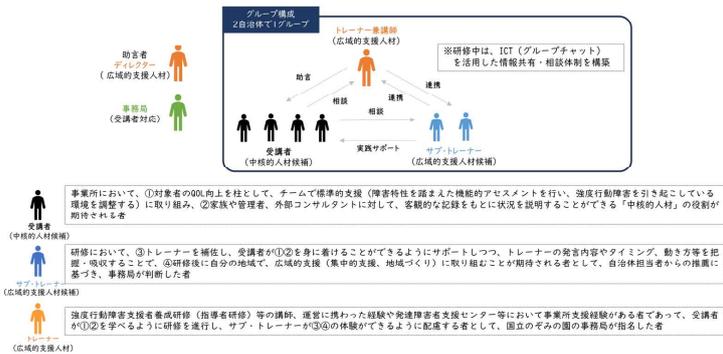
主催：独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

## 中核的人材養成研修 — サブ・トレーナーについて —

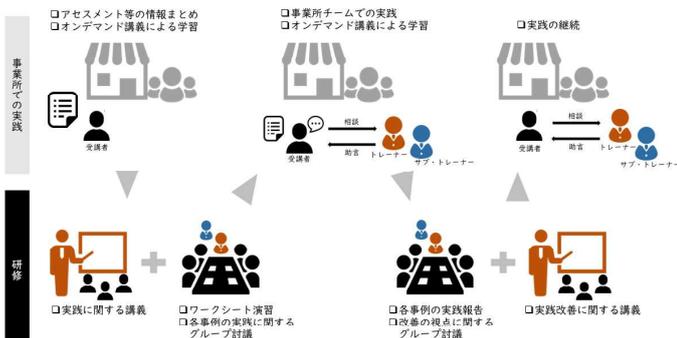
目的	中核的人材養成研修は、「強度行動障害支援者養成研修」の内容を踏まえて、支援現場において適切な支援を実施し、組織の中で適切な指導・助言ができる人材の育成を目的としています。
対象者	将来的に本研修の指導者となること、各地域における強度行動障害支援の核になることが期待されることから、下記の募集要件を満たす者とします。 なお、中核的支援人材研修のサブ・トレーナーを選定する際には、障害分野に加えて、障害児分野の支援者も含めて検討をお願いします。
募集要件	① 地域のために動くことに対する所属先の理解がある者 ② 強度行動障害支援に関する豊富な知識・経験があり、他事業所等への助言経験がある者 ③ 強度行動障害支援者養成研修（実践研修）修了かつ強度行動障害支援者養成研修の講師等の経験がある者 ④ 強度行動障害支援に関する事業、地域の連携体制づくり・人材養成等に関与している者 ※ ①は必須、②～④はいずれかに該当する者
募集人数	各都道府県から1名
申込方法	推薦者を都道府県でお取りまとめたいただき、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園ホームページから申込書（Excel ファイル）をダウンロードし、申込案内に従い記入した申込書を下記のメールアドレスまで添付して送信してください。
申込期日	令和6年5月30日（木）17時00分まで（申込期日を過ぎたものは受け付けできません）
申込後の流れについて	都道府県担当者へ受講者決定通知を、サブ・トレーナーへ受講案内をメール等でお送りします。メールでのご連絡となりますので、メールアドレスをご記入の際にはお間違のないようご注意ください。 ※ メールが届かない場合は、都道府県担当者に確認させていただきます。
受講環境について	Zoomを使用しているオンライン研修及び集合研修となります。演習では、グループに分かれ、ワークシートの画面共有や文字入力などの作業がありますので、パソコンでの受講をお願いします。グループチャット（Microsoft Teams）を使用します（機器説明会を研修前に行います）。推奨環境については、別紙をご参照ください。
修了証について	令和6年度中核的人材養成研修の修了証は、受講者と同様、6回開催される全ての講義・演習を受講した者に交付します。なお、サブ・トレーナー側に起因するトラブルへの対処している時間が15分以上あったり、受講態度が著しく不良であったりする場合は、修了証を交付しません。 ※修了証は、研修全日程終了後に発送します。
お問合先	独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 〒370-0865 群馬県高崎市寺尾町2120番地2 TEL：027-320-1357 E-mail：nozomi-seminar-01@nozomi.go.jp 総務企画局事業企画部研修・養成課 担当：槻岡（つきおか）・長井

## 中核的人材養成研修とは

中核的人材養成研修は、「強度行動障害支援者養成研修」の内容を踏まえて、支援現場において適切な支援を実施し、組織の中で適切な指導・助言ができる人材の育成を目的としています。



## 中核的人材養成研修の構成



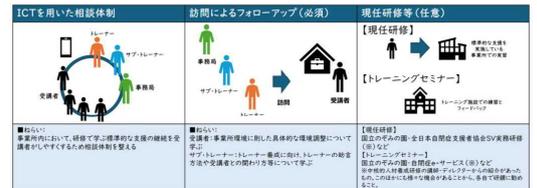
## 中核的人材養成研修のプログラムと 研修と研修の間のサブ・トレーナーの役割

	時間	科目名・役割	研修内容（グループ討議）
事前課題	1.5	eラーニングの視聴等	
第1回目	2.5	チーム支援とガイダンス	モデルを含む現場支援の状況・課題整理
実践		受講者のフォロー	
第2回目	2.5	特性理解とアセスメント	モデル紹介と質疑（特性理解）
実践		受講者のフォロー	
第3回目	2.5	支援プランの検討	優先課題（標的行動）の検討
実践		受講者のフォロー	
第4回目	2.5	支援プランの立案	構造化・コミュニケーション支援等の検討▶試行
実践		受講者のフォロー	
第5回目	2.5	支援プランの実施と修正	支援プランの実施報告と質疑
実践		受講者のフォロー	
第6回目	3.0	実践報告	実践報告
フォロー	1回	訪問フォローアップ等	

※プログラムは変更になる可能性があります

### 【フォローアップ】

■ 受講者の実践サポートの観点から研修期間中・研修後にフォローアップを実施します。



### その他

- 本研修は、各受講者が実際に支援を提供するご利用者様の支援記録等を持ち寄り、助言者と受講者間で討論を重ねながら、支援計画を作成して、行動や様子の変容を振り返りつつ支援の質向上を目指す内容となっております。そのため、個人情報等が含まれる内容となりますので、本研修で知り得た個人情報に関して、同意書の提出をお願い致します。※同意書は受講決定後に受講者へ郵送いたします。
- 本研修は、募集要件に記載してあります「強度行動障害支援者養成研修（実践研修）を修了」を確認するため、受講申し込み時に修了証のコピー提出をお願いしております。

## 研修概要について

本講義で使用するワークシート

- なし

水山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	研修概要	①研修概要について ②中核的人材養成研修の目的 ③研修の基本構造 ④-1標準的な支援を実施するための基本的な手順 ④-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ④-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート、事業所情報シート(ハリスク編)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ④水山モデル ④チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活行動増進アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェイズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	④課題となっている行動の観察と記録 ④診断的アセスメント ④日常生活現場での記録観察	[9/27、10/1] モデルの紹介と実践 (動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの詳細情報の動画撮影 ABC記録とストラテジーシート(上段)、スキッチャープロット(プル) FAST
フェイズ2	③課題行動に対する支援の検討(行動の分析)	④見てわかるエピソード(録音化) ④コミュニケーションプログラム ④機能アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先順位(目標行動)の検討と実践	2.5h	ハリスク編の整理、目標行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェイズ3	(4)支援プランの立案と実施	④支援プランの立案 ④支援手帳書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳書(録音含め)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、実践報告書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェイズ4	④実践プランの見直し(PDCAサイクル)	④実践後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(録音含め)	2.5h	支援現場の動画撮影③、実践報告書の作成 スキッチャープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェイズ5	(4)実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェイズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補修		未受講生の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー/サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 研修の流れにおける本講義の位置

### この講義の内容とねらい

#### この講義の内容

- 中核的人材養成研修の目的
- 中核的人材養成研修の概要
- 事前課題について

#### この講義のねらい

- 中核的人材養成研修の背景、目的、内容等の理解をとおし、研修受講体制を整える

## 中核的人材養成研修の目的

## 中核的人材養成研修が、なぜ必要か

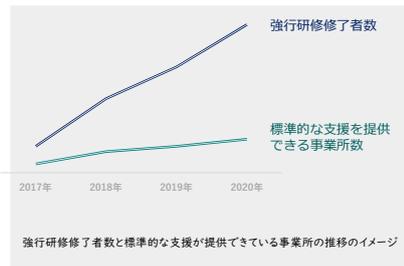
強行研修修了者※  
基礎修了者 122,556人(2013~2022年)  
実践修了者 65,799人(2014~2022年)  
研修修了者は一定数確保できた

しかし、実践を持続している事業所は一部(図1)

実践を持続できるようになるための研修が必要

2023年度~ 中核的人材養成研修 開催

※強行研修=強度行動障害支援者養成研修



## 中核的人材の役割

### 中核的人材の役割

- ① 強行研修の内容を事業所内の支援チームに説明できる
- ② 強行研修の内容をチームで実践できる
- ③ コンサルテーションを活用しながら実践が持続ができる
- ④ 法人内の他事業所のサポートができる

### 広域的支援人材の役割(参考)

- ① 都道府県内の事業所のサポートができる
- ② 他県のサポートができる(当面)



※参照:「広域的支援人材(指導的支援人材)の養成に関する研究」(国立のぞみ 2023)

## 中核的人材養成研修で何を学ぶのか

### 受講者(中核的人材候補)

- 強行研修で学んだ内容(標準的な支援)を、チームで実施し続けること
- コンサルテーションの活用

### サブ・トレーナー(広域的支援人材候補)

- 事業所が強行研修で学んだ内容(標準的な支援)を、チームで実施し続けられるようにサポートする方法
- ＝コンサルテーションの方法



※コンサルテーション＝一定期間継続的に組織(法人)外の人材(コンサルタント)から、支援員が専門的な知識やスキル等を学ぶこと

## 中核的人材養成研修の経過

### 2023年 一部地域でのモデル研修の実施

#### 【研修構成のポイント】

- 事業所内チームでの標準的な支援の実践
- 標準的な支援定着のための実践サポート(助言を受けられる+フォローアップ)

#### 【研修内容のポイント】

- 強度行動障害支援者養成研修とのつながり
- 環境調整の3つの視点
- ICFによる生活全体の把握
- 自閉症の学習スタイル
- 機能的アセスメント

改善点

✓研修の全体像が見えづらさ ✓研修各回の時間配分・実施内容 等

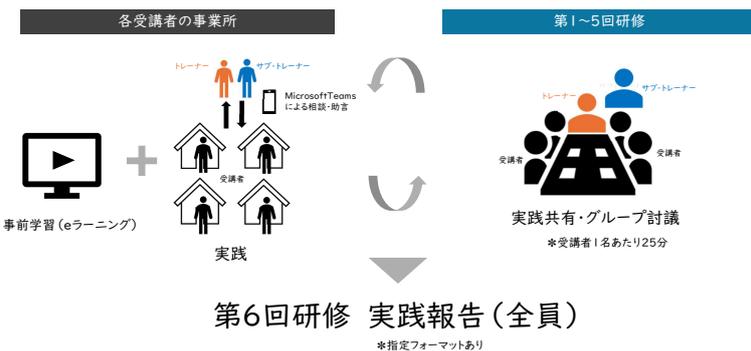
### 2024年 改善した研修の実施

- 講義のeラーニング化
- 研修当日のグループ討議の時間増

- PDCAサイクルのベース減
- モデル事例に即したシートの活用

## 中核的人材養成研修の概要

## 中核的人材養成研修(全6回)の構成



## 研修プログラム

担当	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ討議(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月)または実践シート類
山本 元治	事前課題	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-①標準的な支援を実施するための基本的な仕組み ③-②ICFシステムでのターゲット人かど分析 ③-③ICFシステムで把握した情報をQQに支援に活用する	-	1.5h	モデル情報、事業所情報の整理 モデルの基本情報シート、事業所情報シート(ハイリスク場面)、BPI-S ICFシートの環境図子(できるだけ実施)
フェイス1	(1)研修がターゲットとチーム支援	④自閉症の特性と学習スタイル ⑤水山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修デザイン モデルを含む現場支援の状況・留意課題の報告	2.5h	支援現場・モデルの様子動画撮影 特徴と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 自閉症行動場面アセスメントシート(4ICFシートの活動)参加
フェイス2	(2)特性理解とアセスメント・基盤構築	⑦課題と関与している行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面での直接観察	[9/27, 10/11] モデルの紹介と質疑(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの評価場面の動画撮影 ABC記録とストラテジーシート(上段)、スクリーンプロット(プル)FAST
フェイス3	(3)課題行動に対する支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかるエピソード(構造化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 像化課題(構造的行動)の検討と仮説立て	2.5h	ハイリスク場面の整理、構造的行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活動に参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェイス4	(4)支援プランの立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手帳書の作成と実施の対応	[11/26] 実施計画書の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳書(課題分析)の作成と実施 支援場面の動画撮影②、実践報告書の作成 スクリーンプロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート②
フェイス5	(5)実践プランの見直し(PDCAサイクル)	⑮実践後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(仮設・検証) [2/10] 現場支援の実践報告	2.5h 3h	実践報告書の作成 スクリーンプロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェイス6	(6)実践報告会	-	-	-	-
フェイス7	フォローアップ	-	トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催	-	-
補講	-	-	-	-	各受講者の事業所に訪問する、オンラインで参画(1回)サブ・トレーナーで対応)研修期間中、受講生への個別のフォロー(他支援をおこなって、サブ・トレーナーが対応)



### ③ICFシート

- ICFシートは「環境因子」と「活動と参加」の2種類があります
- 事前課題では、「環境因子」のシートをご記入ください
- 記入方法については、eラーニング③-2「ICFシステムのデータ記入と分析方法」をご覧ください

ICFコアセット 環境因子 進行支援 (6-16歳版採用) 情報把握シート 第3章-第4章

※環境因子の分類は、環境因子の分類と活動と参加の分類、活動と参加の分類と環境因子の分類の3つに分かれています。

1.2 各々の環境因子、活動と参加の分類

環境因子	環境因子の分類	活動と参加の分類
1.1.1.1 身体的環境	環境因子	活動と参加
1.1.1.2 社会的環境	環境因子	活動と参加
1.1.1.3 文化的環境	環境因子	活動と参加
1.1.1.4 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.5 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.6 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.7 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.8 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.9 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.10 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.11 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.12 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.13 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.14 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.15 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.16 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.17 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.18 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.19 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.20 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.21 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.22 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.23 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.24 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.25 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.26 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.27 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.28 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.29 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.30 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.31 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.32 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.33 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.34 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.35 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.36 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.37 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.38 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.39 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.40 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.41 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.42 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.43 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.44 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.45 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.46 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.47 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.48 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.49 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.50 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.51 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.52 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.53 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.54 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.55 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.56 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.57 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.58 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.59 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.60 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.61 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.62 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.63 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.64 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.65 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.66 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.67 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.68 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.69 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.70 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.71 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.72 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.73 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.74 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.75 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.76 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.77 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.78 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.79 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.80 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.81 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.82 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.83 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.84 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.85 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.86 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.87 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.88 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.89 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.90 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.91 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.92 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.93 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.94 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.95 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.96 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.97 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.98 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.99 環境因子	環境因子	活動と参加
1.1.1.100 環境因子	環境因子	活動と参加

### ④問題行動評価尺度短縮版 (BPI-S)

原本

項目	1	2	3	4	5
1. 問題行動の頻度	1	2	3	4	5
2. 問題行動の強度	1	2	3	4	5
3. 問題行動の持続性	1	2	3	4	5
4. 問題行動の悪影響	1	2	3	4	5
5. 問題行動のコントロール	1	2	3	4	5
6. 問題行動の社会的許容性	1	2	3	4	5
7. 問題行動の社会的有用性	1	2	3	4	5
8. 問題行動の社会的責任	1	2	3	4	5

中核的人材養成研修用記入フォーム

項目	1	2	3	4	5
1. 問題行動の頻度	0	1	2	3	4
2. 問題行動の強度	0	1	2	3	4
3. 問題行動の持続性	0	1	2	3	4
4. 問題行動の悪影響	0	1	2	3	4
5. 問題行動のコントロール	0	1	2	3	4
6. 問題行動の社会的許容性	0	1	2	3	4
7. 問題行動の社会的有用性	0	1	2	3	4
8. 問題行動の社会的責任	0	1	2	3	4

【参考】[https://dph.hoshogakugei.ac.jp/pdf/BPI-S/BPI-S%20Japanese%20\(Indo\).pdf](https://dph.hoshogakugei.ac.jp/pdf/BPI-S/BPI-S%20Japanese%20(Indo).pdf)

記入フォームは中核的人材養成研修用に作成したものです。配布は禁止いたします。BPI-Sの説明や活用方法を深く学びたい方は右記QRコードをご参照ください。

### MicrosoftTeamsへのアップロード方法

- 各グループチャットの【ファイル】をクリック
- 各受講者フォルダ内の該当フォルダにアップロード
- アップロードしたら、各グループチャットに報告

事前課題はここにアップロード

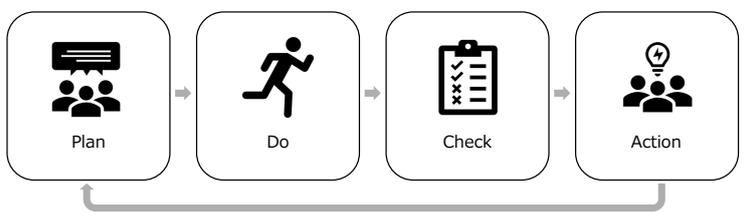
### アンケートフォームでの回答方法

- 配布資料「中核的人材養成研修実施概要について」5ページにある事前課題 回答フォームをクリック
- Microsoftformsへリンクしますので、項目に沿ってご回答ください
- 回答送信後の修正はできません
- 間違えた場合は、再度ご回答ください

項目	内容
事前学習 (eラーニング)	① 研修概要について ② 標準的な支援と中核的人材養成研修の基本概念 ③-1 標準的な支援を実施するための標準的な枠組み ③-2 ICFシステムからのゴール設定の考え方 ③-3 ICFシステムで整理した情報EQQOL表紙に活用する
現場実習	・電子化基本情報シート ・事前学習情報シート ・BPI-S ・ICFシート(情報因子)
研究に関する実習(グループ)	① 研修概要について ② 標準的な支援と中核的人材養成研修の基本概念 ③-1 標準的な支援を実施するための標準的な枠組み ③-2 ICFシステムからのゴール設定の考え方 ③-3 ICFシステムで整理した情報EQQOL表紙に活用する

### 研究へのご協力のお願い

- ・本研修は、研究事業の一環として実施しています
- ・2024年度に、中核的人材・広域的支援人材研修のパッケージの完成を目指します
- ・研修で活用する尺度、資料、講義内容は、みなさまのご意見を参考に調整します
- ・忌憚のないご意見をお寄せください



## 標準的な支援と 中核的人材養成研修の基本視点

水山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ研修(オンライン/集合研修)	時間	グループ研修後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	事前学習	①目標設定について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な視点 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・研修所情報の整理 モデルの基本情報シート、研修所情報シート(ハイルスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤水山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェーズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題のアセスメント ⑧日常生活場面の記録 ⑨日常生活場面の記録	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの親子場面の動画撮影 ASBC記録とストラテジーシート(上段)、スキップシート(プル) FAST
フェーズ2	③支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかるエピソード(録音) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫個別アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先順位(個別行動)の検討と実践	2.5h	ハイルスク場面の整理、個別行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活動と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ3	④支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手帳の作成と実践の対応	[11/26] 実践計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳(個別分析)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、実践報告書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェーズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑮実践の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑-応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、実践報告書の作成 スキップシート(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェーズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受援者の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー-サブトレーナーで対応) 研修期間中、受援者への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 研修の流れにおける本講義の位置

### 講義・演習の内容とねらい

#### この講義の内容

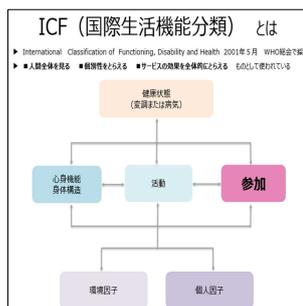
- 強度行動障害を有する者への標準的な支援
- 中核的人材養成研修の基本的な視点

#### この講義のねらい

- 標準的な支援を実施するためのアセスメントや基本的な支援方法を理解することができる
- 標準的な支援するポイントとしてチーム支援やマネジメントサイクルの必要性を理解できる
- 中核的人材の求められる役割や強度行動障害の地域支援体制のイメージが理解できる

## 強度行動障害を有する者への標準的な支援

## 強度行動障害を有する者への支援の考え方



WHOによって採択されたICF (国際機能分類) では、「障害」を健康状態 (診断) に加えて、生活機能 (心身機能/身体構造、活動、参加) と背景因子 (環境因子、個人因子) の観点で説明。

強度行動障害を有する者への支援にあたっては、知的障害や自閉症といった診断名だけでなく、その障害特性の現れである「活動と参加」そして強度行動障害の発生に影響している「環境因子」を含めた観点に合わせて分析していく。

「活動と参加」の困難性が発生する生活場面 (環境) から、個々の障害特性のアセスメントを実施し、強度行動障害の発生に影響している「環境因子」を把握・調整していくことで、QOLを高める支援を実践していく

## (参考) 強度行動障害を有する者への標準的な支援

## 標準的な支援のためのアセスメント

(強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書より)

○(中略)強度行動障害を有する者への支援にあたっては、知的障害や自閉スペクトラム症の特性など個人因子と、どのような環境のもとで強度行動障害を引き起こしているのか環境因子もあわせて分析していくことが重要となる。こうした個々の障害特性をアセスメントし、強度行動障害を引き起こしている環境要因を調整していくことが強度行動障害を有する者への支援において標準的な支援である。

**課題となっている行動の例**

- 先の実施し方が持てず何度も予定を破綻する
- 音に敏感で騒がしい部屋に入れない
- 「指名」が伝えられず動きを即いでしまう など

**本人の特性**

自閉スペクトラム症や知的障害など個々の障害特性

**環境・状況**

困り感やストレスの原因となっている環境や状況

**冰山モデル**

見えている行動だけに着目せず行動の背景を考慮することが重要  
\*強度行動障害支援者養成研修より

**標準的な支援**

障害特性を踏まえた\*機能的アセスメントを行い、強度行動障害を引き起こしている環境を調整する  
\*機能的アセスメント課題となっている行動がどのような意味(機能)をもっているか調べる

アセスメントに基づく支援計画を立て、実施し、実施内容を評価して次の支援につなげる

**予防的支援の重要性** (強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書より)

- 予防的観点を含めた標準的な支援を行うことが必要
- 強度行動障害を引き起こさなくても良い支援を日常的におこなうことが重要
- 支援者、家族、教育等の関係者が、標準的な支援の知識を共有し、地域の中に拡げていくことが重要

**障害特性のアセスメント**

【個々に違った自閉症の特性】

ここでは、自閉症の特性を次のように整理しています。

- 社会的な特性
- コミュニケーションの特性
- 想像力の特性
- 感覚の特性

「認知・記憶」「注意・注目」「運動」も確認することもあります

**機能的アセスメント**

【問題となっている行動がどのような意味(機能)をもっておきているのか】

不安や緊張から **逃れたい**

不安や緊張を **伝えたい**

不安や緊張に **気づいてほしい**

でも方法がわからない

気持ちを **行動** で表す

**家庭環境のアセスメント**

家族支援を進めることも必要であり、家庭環境のアセスメントも行い、家族も含めて、困り感やニーズの把握

## 標準的な支援のための環境調整

## 標準的な支援の効果

**自閉症は脳の機能的な障害**

情報 → 認知の違い、認識の違い、理解の違い → 行動の違い

非定型発達の人 (発達に特性のある人)

**支援のアイデア**

目で見てわかる支援が基本

6つの情報		5つの工夫	
いつ	時間の工夫	やりとりの工夫	
どこで	場所の工夫		
なにを	方法の工夫		
どのくらい			
つきは			
どうやって	見え方の工夫		

**強度行動障害支援技法のコンセンサス④**

調査結果 (n=100)

構造化	95%
コミュニケーション	90%
実物療法	85%
キーパーソン	80%
静穏環境	75%
生活リズム	70%
成功体験	65%
時間をかける	60%
許可導入	55%
障害理解	50%
対話方法の獲得	45%
折り合い	40%
集団生活	35%

「3つのグループごとの標準的な支援の成果の判断」

結果は「3つのグループごとの標準的な支援の成果の判断」

- 標準的な支援で最も成果があると判断されているのは「場所の工夫(物理的構造化)」
- 次いで「見通しの工夫(視覚的スケジュール)」「支援手順書」
- 活用しているグループほど、標準的な支援の成果は高いと判断している

## 強度行動障害を有する者への標準的な支援のプロセス

## 標準的な支援を提供するポイント

**【標準的な支援のプロセス】**

課題となっている行動

本人の特性 環境・状況

強度行動障害は特性と環境のミスマッチから生じる

必要なサポート

**アセスメント**

障害特性上、意思疎通が難しく行動観察が主となる客観的な行動観察を行うため記録の活用  
行動の理論に基づき行動の機能をアセスメント  
心理検査などの標準化されたアセスメントも有効

アセスメントと環境調整を繰り返し、困り感やストレス軽減し行動障害の減少、適応行動の増加を図る

**環境調整**

障害特性に合わせた環境を整える  
過度な刺激を減らす  
個々の理解に合わせた関わり方や教え方を行う  
適切な活動を提案し目標の組み立てを行う

「この支援の見直しの作業を繰り返しながら、本人にあった支援を整え、本人が力を発揮しやすい環境を作っていくのです (強行基礎 講義3スライドより引用)」

**支援手順書等**

- ・ 事業所内でのかわりや支援を統一して、標準的な支援を一貫して提供することが重要
- ・ 客観的な記録から支援の効果を確認し、PDCAサイクルを機能させる

**外部専門家の指導助言の活用**

- ・ 困難なケースは自分たちのチームだけで抱えず、事業所の課題、地域の課題として考えていく
- ・ 外部専門家を活用することで自分たちの支援の検証や新たな支援のアイデアを取り入れる

**予防的な支援**

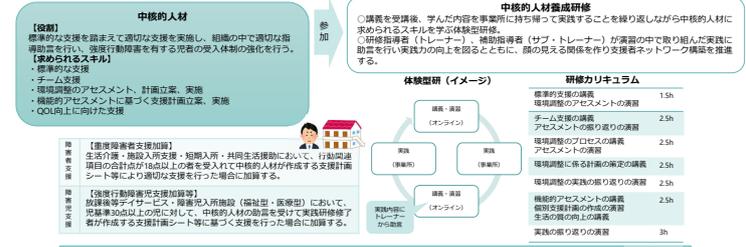
- ・ 強度行動障害の状態にならないように予防的な支援が必要
- ・ 自閉症の方たちの力が十分に発揮できるように日頃から、障害特性に基づいた支援を実施する

**医療との連携**

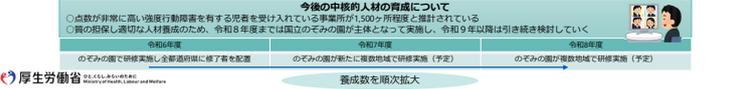
- ・ 強度行動障害の状態を医療により完全に治すことは難しく、日頃から医療と福祉の相互の連携を強化していくことが重要であり、連携した支援をすすめる

# 中核的人材について

- 強度行動障害の障害特性を正しく理解し、根拠のある標準的な支援※をチームで行うことを基本として、予防的な観点も含めて人材育成を進めることが重要。※標準的な支援とは個々の障害特性をアセスメントし、強度行動障害を引き起こしている環境要因を調整する支援
- 標準的な支援を踏まえて適切な支援を実施し、組織の中で適切な指導助言ができる現場支援で中心となる中核的人材の育成が必要



# 中核的人材養成研修の基本的な視点



# 中核的人材養成研修の実施予定について

令和6年2月7日 事務連絡「中核的人材養成研修の実施予定について」より抜粋

- 中核的人材養成研修については、令和5年度においては研修プログラム開発の一環としてモデル実施としていたところであるが、令和6年度障害福祉サービス等報酬改定により加算の算定要件に組み込むこととしたことから、令和6年度からは全ての都道府県を対象として実施することとする。
- 将来的には都道府県で研修を実施する体制を整備する予定であり、その体制が整うまでの間は、独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のそのまの園（以下「そのまの園」という。）において実施する研修を本研修と位置づけることとする。
- 行動関連項目等の合計点数が18以上（障害児においては児童基準30点以上）の強度行動障害を有する児童を受け入れている事業所は、現時点で全国に1,500ヶ所程度と推計されており、中核的人材も同程度以上の養成が必要であることから、全国的な研修実施体制を整備しつつ、段階的に受講人数を増加させていくこととしている。
- 令和6年度の研修受講者は、全都道府県2名ずつ計94名程度（指定都市及び中核市分を含む。）の推薦者を受け付ける予定としている
- また、受講者と合わせて、補助指導者（以下「サブ・トレーナー」という。）1名も募集することとしている。このサブ・トレーナーについては、受講者と同じグループにおいて、担当指導者（以下「トレーナー」という。）を補佐しながら演習を進めつつ、トレーナーの指導技術を学び、将来的には各地域でトレーナーとなることが期待されることから、強度行動障害支援に関する他事業所等への助言や地域連携体制づくりの経験、強度行動障害支援養成研修の講師等の経験がある者を募集要件とする予定である。
- 研修修了証の発行については、本研修の内容を正しく理解し、必要な演習を適切に修了できたと担当グループのトレーナーが判断した場合に交付することとしている。

# 強度行動障害を有する障害者等への支援体制の充実

**1 強度行動障害を有する者の受入体制の強化**

- 【強度行動障害支援計画（生活介護・施設入所支援）】
  - 区分6以外行動関連項目18点以上の郡市区分を新設する。
  - 強度行動障害支援計画（施設提供）終了後の施設閉鎖を廃止し、生活支援員による新たな体制とする（体制移行部分は廃止）。
  - 【移行】施設及び人員配置体制増加の施設に新たに配置される支援員（職員）生活支援員のうち基礎研修修了者の割合が20%以上
- 【強度行動障害支援計画（生活介護）】
  - 区分4、5の郡市区分を新設する。
  - 標準的な支援を実施するため、強度行動障害支援養成研修（実践研修）修了者が所属した支援計画シートおよび適切な支援を行った場合の評価を新設する（基礎研修修了者の配置のみの施設部分は廃止）。
  - 【強度行動障害支援計画（生活介護）】
  - 共同生活施設での受入体制を強化するため、利用者の状態や環境の変化等に適切するための個別のアセスメント等の評価を新設する。
  - 【強度行動障害支援計画（生活介護）】
  - 生活介護、施設入所支援、短期入所、共同生活施設において、行動関連項目の合計点数が18点以上の児童を受け入れて中核的人材が育成する支援計画シート等により適切な支援を行った場合に追加する。

| 生活介護、施設入所支援 | 生活介護  |
|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 施設数         | 100施設 |
| 職員数         | 100名  |
| 児童数         | 100名  |

**2 状態が悪化した強度行動障害を有する児童への集中的支援**

- 高度な専門性により地域を支援する人材（広域的支援人材）が、事業所等を集中的に訪問等（情報連携機器を用いた地域からの取得も含む）し、適切なアセスメントと有った支援方法の指導を行い現場支援を進め、支援を受けた場合の評価を新設する。年間3回以上、年間3ヶ月を限度
- 【訪問】事業所の評価
  - 広域的支援人材が訪問した児童の評価 1,000単位/日（月に4回を限度）
  - 状態が悪化した児童を受け入れた施設等の評価 500単位/日

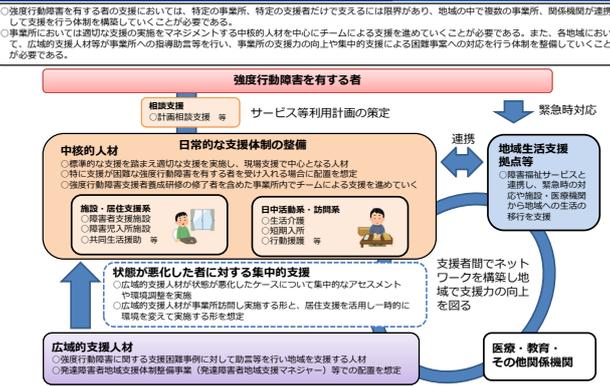
**3 行動関連項目における時間的支援の評価等**

- ユニズの高い時間的支援を評価する（長時間の支援は見直し）
  - 【行動関連項目評価】（例）
    - 所定時間追加以上時未実施の場合（移行）40時間 ⇒（見直し）43時間
    - 所定時間追加以上時未実施の場合（移行）1,940単位 ⇒（見直し）1,004単位
  - 【事業所評価】（例）
    - 所定時間追加以上時未実施の場合（移行）1,940単位 ⇒（見直し）1,004単位
    - 所定時間追加以上時未実施の場合（移行）1,940単位 ⇒（見直し）1,004単位

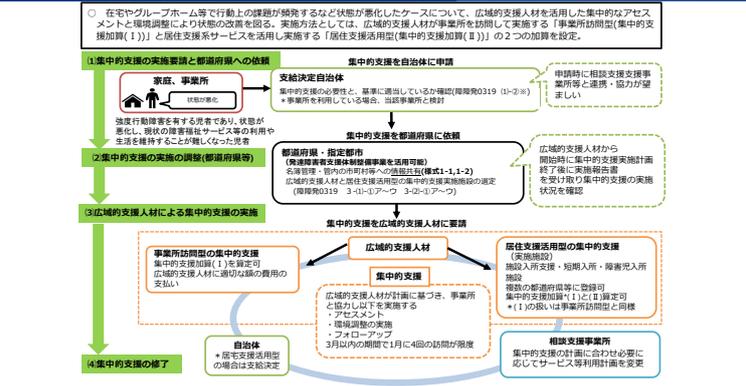
**4 重度障害者等包括支援における専門性の評価等**

- 訪問サービスにおいて有資格による支援を評価する。
  - 【訪問】有資格者包括支援 60単位/日（1.1日あたり）
- 筆跡のサービス事業者による連携した支援を評価する。
  - 【訪問】外部研修支援加算 200単位/日（月に4回を限度）

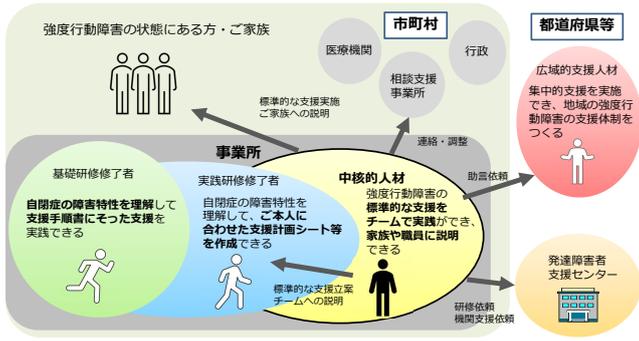
# 強度行動障害を有する者の地域支援体制のイメージ



# 状態が悪化した強度行動障害を有する者への集中的支援



## 中核的人材に求められること



## 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み

本講義・演習で使用するワークシート

- なし

氷山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本構造 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な枠組み ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ④-1ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート、事業所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤氷山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、氷山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェーズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題となる行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面の記録観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実演(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの野鳥場面の動画撮影 ASDC記録とストラテジーシート(上段)、スキッチャープロット(プル) FAST
フェーズ2	③支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかるエピソード(録音化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先順位(目標行動)の検討と実践立て	2.5h	ハリスク場面の整理、目標行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルワークシート、参加と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ3	④支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手帳書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳書(録音分析)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、支援報告書書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェーズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑮実施後の評価と改善	[12/24] 現場実装の途中経過報告(質疑-応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキッチャープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェーズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補綴		各受講生の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー-サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 研修の流れにおける本講義の位置

### 講義・演習の内容とねらい

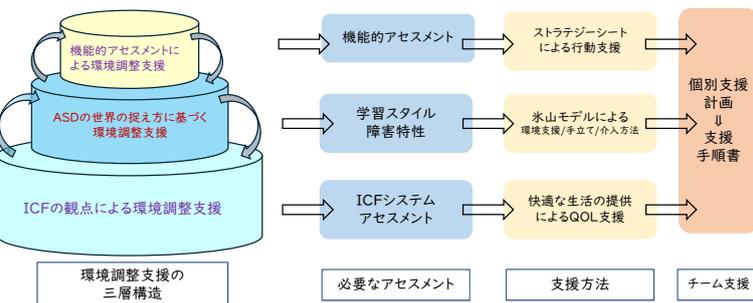
#### この講義の内容

- ① 環境調整支援の三層構造
- ② 環境調整支援 三層構造の第一層 >> ICFシステムによるQOL支援

#### この講義のねらい

- ① 「環境調整支援の三層構造」が機能的アセスメント、学習スタイルの評価、ICFアセスメントの3つで構成されること、及びこれら3つが相互補完的にQOL向上の支援へとつながることを理解する。
- ② ICFの観点で強度行動障害の状態像を整理するとともに、環境因子および活動と参加の情報把握から環境調整支援を実施し、強度行動障害の状態にある方の快適な生活とwell-beingを目指す。

## 環境調整支援の三層構造



## 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み(支援パッケージ)

# QOL向上に向けた環境調整支援の三層構造

強度行動障害の状態像にある行動は、周囲にとっては「課題となる行動」ですが、本人にとっては「その行動をすることに意味がある行動」です。そして、その意味とは、「快適ではない状況」を脱して「快適な状況」に向かおうとしていると考えられます。

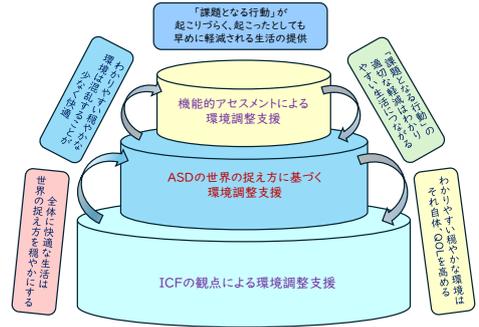
## QOL向上を実現する「3つの環境調整にかかわる支援」

- ①機能的アセスメントによる課題行動の軽減で「穏やかな生活」を実現する環境調整
- ②ASDの学習スタイル(世界の捉え方)を考慮し「わかりやすい生活」を実現する環境調整
- ③ICFの観点を援用した「生活全体の評価」により「快適な生活」を実現する環境調整

「3つの環境調整にかかわる支援」は相互に補充しあう

- (a) 特定の場面で起こっている「課題となる行動」が軽減された状態が維持されるには、より広く生活全体のわかりやすさと快適さが必要。
- (b) わかりやすい生活環境では不安や緊張は軽減され環境の理解が進んでいく。
- (c) 自閉症の観点だけでなく、ICFの観点から「その人の生活全体」を評価することで、その人に固有の生活に根ざした環境調整により快適な環境が実現できる。

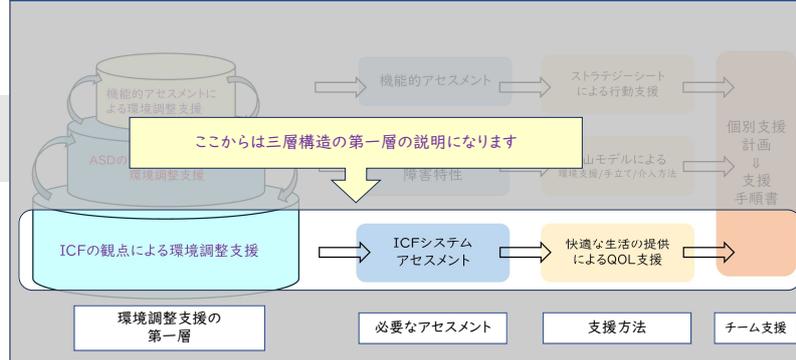
# 環境調整支援の三層構造は相互に補充しあってQOLを高める



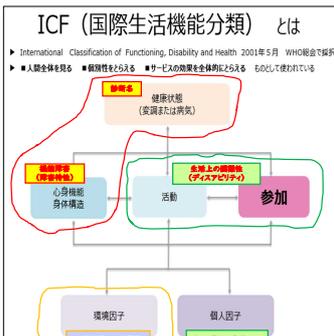
支援は「環境調整」に始まり、最後まで「環境調整」が続く。

## 環境調整支援 三層構造の第一層 >> ICFによるQOL支援

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 強度行動障害の状態像をICFの観点で整理する



○WHOによって採択されたICF(国際機能分類)では、「障害」を健康状態(診断)に加えて、生活機能(心身機能身体構造、活動、参加)と背景因子(環境因子、個人因子)の観点で説明。

○強度行動障害を有する者への支援にあたっては、**知的障害や自閉症といった診断ラベルだけでなく、その障害特性が困難性として現れてくる「活動と参加」、そして困難性の発生に影響する「環境因子」という2つの観点を合わせて分析していく。**

○「活動と参加」として現れてくる困難性を個々の障害特性を念頭に、その困難性が発生する生活場面(環境)との関連を考慮してアセスメントし、困難性の発生に影響している「環境因子」を把握・調整していくことは、強度行動障害の標準的な支援を生活の観点から支える基盤的支援であり、QOLの向上につながる。

## 環境因子:「快適環境の提供」という予防的支援

自閉症の人たちの生活環境が快適であれば、それは課題行動発生の予防的支援になります。

- ①「快適でHappyな対人環境」 = 周囲の人が受容的・肯定的・共感的な環境
- ②「過ごしやすい環境」 = 身の回りのものがわかりやすく使いやすい環境
- ③「穏やかに落ち着ける環境」 = 苦手な刺激を排した好ましい刺激に富む環境が大きな三本柱になります

快適な環境(例)	快適さをもたらす支援(例)
①快適な対人環境(例1)	人が多すぎない静かで落ち着いた環境
①快適な対人環境(例2)	適度な大きさの声でゆっくり話しかける
②過ごしやすい環境(例1)	簡単な操作で音楽が聴けるプレーヤー
②過ごしやすい環境(例2)	自身の背格好にフィットした椅子と作業机
③穏やかに落ち着ける環境(例1)	エアコンで適温に保たれた居室
③穏やかに落ち着ける環境(例2)	窓からの光を和らげるスクリーン型ブラインド

「自閉症の人たちにとって快適な環境調整を行えば、彼らも周囲の環境に馴染みやすく、周囲の状況を学んでいきやすい。」

## 活動と参加：「困難さの軽減」というQOL支援

人は誰も「快適ではない状況」を脱して「快適な状況」に向かおうとしています。  
強度行動障害の状態像を示す人たちも同じです。そして「快適ではない」という状態の背景には「日々の活動や参加がご本人にとって負担や困難が大きい状況」があります。  
その負担感や困難さを減らす支援はQOL向上支援であり、課題となる行動の予防的支援ともなります。

### 困難さが軽減される場面や支援の把握により、QOL向上を目指す環境調整支援

① 日々の生活で困難さが軽減される場面や支援への意識的な気づきと把握

：例1) 余計な刺激がないほうが、作業に集中できる …… という気づき  
：例2) 自立課題をステップごとに超ゆっくりモデル提示すると真似できる …… という気づき

② ご本人の困難さが軽減される場面や支援を生活の中に入れていくQOL支援

：例1) 食事の時に、壁のポスターが見えない席にしたほうが食事が進む  
：例2) 日常生活用品の使い方を超スローでモデル提示すると使い方を覚えられた

(a) 「活動と参加」を評価するのですが、活動や参加だけを環境から切り離して評価するのではなく「場面や支援によって活動や参加がどう変わるか」を評価します。  
(b) 自閉症の観点だけでなく、その人の生活全体を (a) の観点で評価することで、その人の固有の生活に根ざした環境調整にかかわる支援が実現できます。  
(c) そして、そのことが生活全体の快適さを実現していくことになります。

## ICFの観点を取り入れたQOL支援

### ▶QOLの向上を目指した生活全体の見直し

- ✓ 自閉症の観点だけでなく、その人の生活全体を評価する。
- ✓ 支援者視点ではなく「その人の視点」に立って生活を見直す。
- ✓ ICFの捉え方を通じて、生活全体のQOL状況を把握し、快適な生活を提供する

### ▶快適な生活の手がかりを日々の活動や参加から探る

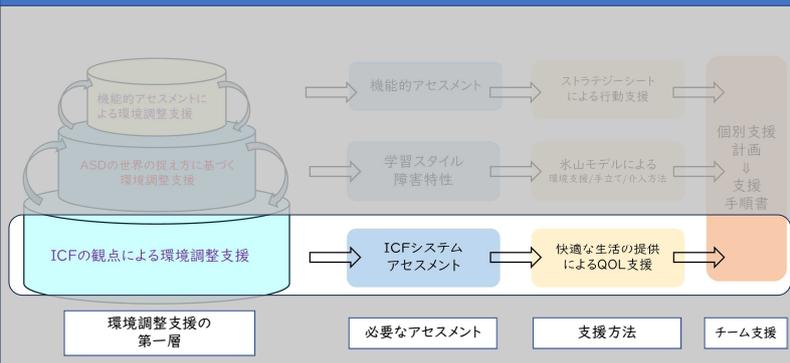
- ✓ 日々の活動でその人が負担や困難さを感じていることはあるか？
- ✓ 日常の中にその負担や困難さが軽減される環境や場面があるか、また支援の働きかけはあるか？
- ✓ そういった「環境や場面、支援の働きかけ」で、その人の負担や困難さはどの程度軽減されるか？

### ▶快適な生活の手がかりを生活の環境要因（環境因子）から探る

- ✓ 生活の快適さが損なわれる環境因子はあるか？（阻害的環境因子の把握）
- ✓ 生活の快適さを支えてくれる環境因子はあるか？（促進的環境因子の把握）
- ✓ その「支援」で、その人の困難さはどの程度軽減されるか？

日々の生活がQOLの高い「快適な生活」になることを通じて、  
その人のwell-being（幸せで満たされた感覚）を目指す

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み（支援パッケージ）



## ICFシステムのデータ入力と分析方法

本講義・演習で使用するワークシート

- なし

水山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ討議(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な情報 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート、事業所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤水山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活場面行動アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェイズ1	(2)特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題のアセスメント ⑧日常生活場面の記録 ⑨日常生活場面の記録観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践 (動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの詳細場面の動画撮影 ABC記録とストラテジーシート(上段)、スキヤッタープロット(プル) FAST
フェイズ2	(3)支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかるエピソード(録音化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先場面(最初の行動)の検討と実践	2.5h	ハリスク場面の整理、機能的行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活動と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェイズ3	(4)支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手帳の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳(録音分析)の作成と実践 支援現場の動画撮影②、支援報告書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェイズ4	⑮支援の見直し(PDCAサイクル)	⑯実践の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(録音・録画)	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキヤッタープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェイズ5	(6)実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補綴		各受講生の事業所に訪問する。オンラインで取り取り(トレーナー・サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 研修の流れにおける本講義の位置

### 講義・演習の内容とねらい

#### この講義の内容

- ICFシステムの情報把握とデータ分析 ~ 使用するエクセルファイルと手順 ~
- 環境因子シートの説明
- 活動と参加シートの説明
- 【活動と参加シートと日常生活場面行動アセスメント(レインボウ)との連動】
- 把握情報から支援の手がかりを得るための分析方法について

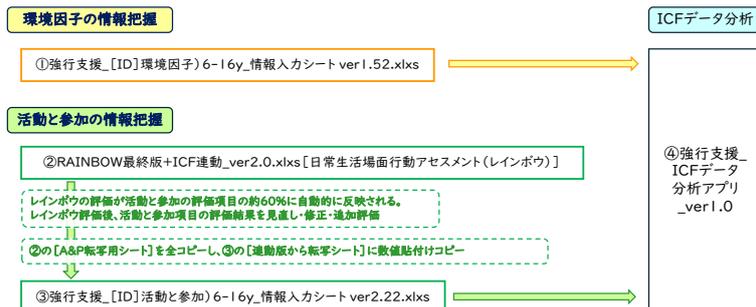
#### この講義のねらい

- ICFシステムの活動と参加および環境因子の情報把握を行うためのエクセルシートの使い方を理解すること。また、活動と参加シートについては、日常生活場面行動アセスメントに連動して評価がなされる仕組みについて理解すること。そして、活動と参加と環境因子の把握情報を分析して、支援の手がかりを得る方法について理解すること。

## ICFシステムの情報把握とデータ分析 ~ 使用するエクセルファイルと手順 ~

## ICF情報把握とデータ分析の手順

##これらの手順をpreで1回、postで1回の2回実施し、支援前後の変化を確認します##



# ①と③のエクセルファイルの基本情報への入力

ICFコアセット 環境因子 6歳-16歳用 情報把握シート 基本情						
支援チームID	支援対象者ID(必須)	イニシャル(任意)	生年/月/日	年齢	性別	回答者
			2024年9月			

ICFコアセット 活動と参加 6歳-16歳用 情報把握シート 基本情						
支援チームID	支援対象者ID(必須)	イニシャル(任意)	生年/月/日	年齢	性別 (7才以下)	回答者
			2004/5/3	20年2ヶ月		

支援チームID、支援対象者ID、チームリーダーIDは個人情報を保護しつつ支援対象者を特定するためのIDです。  
 「支援対象者ID」は回答分析アプリでシートを解析した結果が書き込まれるファイル名に反映されるため(必須)です。

## 環境因子シート

### 環境因子シートの記入(3章・4章)

### 環境因子シートの記入(3章・4章)

#### 第3章 物理的支援と心理的支援 / 第4章 特性理解と障害観 (周囲の人たち)

項目番号	項目タイトル	視点	状況把握	チェック	補足情報
e310	家族や近い関係の物理的支援と心理的支援	物理的支援 心理的支援	物理的支援 心理的支援	○	①物理的支援 ②心理的支援 ③その他
e410	家族や近い関係の特性理解と障害観	特性理解 障害観	特性理解 障害観	○	①特性理解 ②障害観 ③その他

The diagram illustrates the relationship between the 'Environment Factor Sheet' and the 'ICF Core Set' sheets. It shows how specific support and understanding are recorded in the ICF categories. For example, 'Physical support' and 'Psychological support' from the Environment Factor Sheet are mapped to 'Physical support' and 'Psychological support' in the ICF Core Set. Similarly, 'Understanding of characteristics' and 'Attitudes towards disability' are mapped to 'Understanding of characteristics' and 'Attitudes towards disability' in the ICF Core Set.

#### 1. 第3章・第4章の情報把握に際しての留意点

注1) **物理的支援**とは「具体物による支援や身体的な支援」のこと。「具体物による支援」は例えば、絵や文字で情報伝達する、スケジュールを事前提示する、タイマーを使う、漢字にフリガナを振る、文字を読みやすい大きさにするなど。「身体的な支援」は例えば、衣服の着脱・洗髪や爪切り・物や道具を使うことなどを手伝う、わかりやすい話し方をする(危険回避のために)手をつないで歩く、など。

注2) **心理的支援**とは「心理的な安定につながる支援」のこと。例えば、ほめる、なぐさめる、安心させる、元気づける、気持ちを落ちつかせる、受容的に関わる、自信や自己肯定感を支える、など。

注3) **特性理解**とは「対象児者の生活上の困難さを見者の特性の観点から理解すること」で、例えば、課題に長時間取り組むことの難しさを注意機能の問題として理解することなど。**障害観**とは「障害に対する考え方や信念」で、拒否的(抵抗感あり)または受容的(抵抗感なし)に障害を捉えること。

注4) **助言が必要**とは「物理的支援、心理的支援、特性理解が不十分なために、周囲の人たちが支援的でない、または逆境的な環境となっている場合」にチェックします。**助言が不要**とは「物理的支援、心理的支援、特性理解が十分であり、周囲の人たちが支援的な環境となっている場合」にチェックします。**抵抗感あり**は「障害の存在に拒否的な場合」、**抵抗感なし**は「受容的な場合」にチェックします。

#### 2. 第3章・第4章の補足情報に記入する内容の解説

- ①**物理的支援**: 周囲の人たちが実施している物理的支援の具体的内容や実施状況、それが支援的環境となっている程度を記載。未実施の場合は、物理的支援が特に必要な場面と具体的支援内容を記載。
- ②**心理的支援**: 周囲の人たちが実施している心理的支援の具体的内容や実施状況、それが支援的環境となっている程度を記載。未実施の場合は、心理的支援が特に必要な場面と具体的支援内容を記載。
- ③**その他**: 物理的支援や心理的支援を充実させていく上で障壁となっている状況があれば記載。

- ①**特性理解**: 周囲の人たちの特性理解の具体的内容や程度、それが支援的環境となっている程度を記載。特性理解が不十分な場合は、特に理解が必要な特性とその特性理解が必要な具体的な場面を記載。
- ②**障害観**: **抵抗感あり**では、それが支援環境の実現を阻む具体的な状況に記載。**抵抗感なし**では、周囲の人たちの障害に対する具体的なイメージ、それが支援的環境となっている具体的な状況に記載。
- ③**その他**: 特性理解の向上、障害観の転換を働きかけていく上で障壁となっている状況があれば記載。

# 環境因子の記入(1章・2章・5章)

項目番号	項目タイトルと環境因子の影響を把握する視点	把握状況	補足情報(当該項目の環境因子の具体的な影響)
e110a	食べ物の飲み物 生活の場下につき影響をもたらすもの	あり	①悪影響・生活場下の食品とその状態: ②好影響・生活上の食品とその状態: ③その他:
e110a	食べ物の飲み物 生活の場上につき影響をもたらすもの	あり	①悪影響・生活場下の食品とその状態: ②好影響・生活上の食品とその状態: ③その他:

※第4章の一部(障害観)および第1, 2, 5章の補足情報に記入する内容の解説  
(項目によって表現は変わるが、①生活への悪影響、②生活への好影響、③その他の構成となっている)

- ①生活への悪影響: 当該環境因子の具体的な内容と生活への悪影響の具体的な状況を記載。さらに当該の悪影響を生活全体から除去している程度や範囲(悪影響の除去による生活の快適度)を記載。
- ②生活への好影響: 当該環境因子の具体的な内容と生活への好影響の具体的な状況を記載。さらに当該の好影響を生活全体で充実させている程度や範囲(好影響の充実による生活の快適度)を記載。
- ③その他: 悪影響の除去や好影響の充実を図る上で障壁となっている状況があれば具体的に記載。

# 「環境因子」評価項目の第一選択・第二選択

項目番号	項目タイトルと環境因子の影響を把握する視点	把握状況	補足情報(当該項目の環境因子の具体的な影響)
e110a	食べ物の飲み物 生活の場下につき影響をもたらすもの	あり	①悪影響・生活場下の食品とその状態: ②好影響・生活上の食品とその状態: ③その他:
e110a	食べ物の飲み物 生活の場上につき影響をもたらすもの	あり	①悪影響・生活場下の食品とその状態: ②好影響・生活上の食品とその状態: ③その他:

# 活動と参加シート 【日常生活場面行動アセスメント(レインボウ)と連動】

# [RAINBOW最終版+ICF\_ver2.0.xlsx]のシートタブを確認

# 「RAINBOWの評価」と「ICF活動と参加の情報把握」との連動例

**日常生活場面行動アセスメント(レインボウ)**  
Rating Assessment for Individuals with ASD Behavior of Multiple daily lives

①認知レベル(◎項目)

1	色の区別ができる	●
2	顔の区別ができる	●
3	自分の名前と他人の名前の区別ができる	●
4	文字・数字の区別ができる	●
5	1~10の数を数える	●

**ICF評価(活動と参加)**

◎	できる(自立スキル)	A
○	ほぼできる(7割~;評価基準は項目メモ記載)	B
△	少しできる(評価基準は項目メモ記載)	C
×	まだ難しい(できない・全介助)	D
		E
		空白
		未入力

**レインボウと連動するICF活動と参加のシートタブ**

①認知レベル A: 独力でできる(読み) B: 特定の場面や支援でできる(支援維持) C: 特定の場面や支援で少しできる(支援) D: 特定の場面や支援でほとんどできない(支援) E: 支援なし

②活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

③活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

④活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑤活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑥活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑦活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑧活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑨活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑩活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑪活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑫活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑬活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑭活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑮活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑯活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑰活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑱活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑲活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

⑳活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉑活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉒活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉓活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉔活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉕活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉖活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉗活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉘活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉙活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉚活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉛活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉜活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉝活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉞活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㉟活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊱活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊲活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊳活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊴活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊵活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊶活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊷活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊸活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊹活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし

㊺活動と参加 A: 独力でできる B: 特定の場面・支援でできる C: 特定の場面・支援で少しできる D: 特定の場面・支援でほとんどできない E: 支援なし



## [A&Pシートに転写用]シート → [連動版から転写]シート

① RAINBOW最終版+ICF連動.xlsxの[A&Pシートに転写用]シートの左上角を右クリックし、シート全体をコピー

② シート全体が薄灰色と緑点線で囲まれてコピー状態となる

③ 強行支援\_1D]活動と参加.xlsxの[連動版から転写]シートの左上角を右クリックし、数値修飾付きの「マージアイコン」を実行

④ データ転写完了

## ICFシステムの把握情報から支援の手がかりを得るための分析手順

### 強行支援\_ICFデータ分析アプリ\_ver1.0.xlsm

① アプリとICFデータと同じフォルダに入れておく

② データ分析アプリの起動画面

③ ファイル読み込みウィンドウがポップアップ

④ 分析対象のファイルを選択して「開く」をクリック

セキュリティの警告がでた場合には「コンテンツの有効化」をクリック

### 「活動と参加」分析結果ファイル(ActRes...)

【強行支援なし(困難なし)】

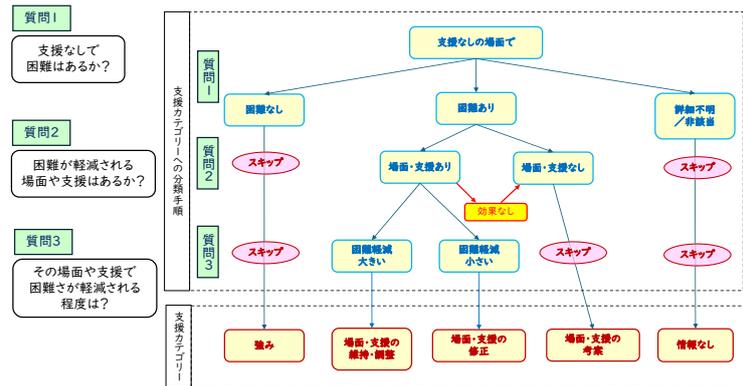
【場面や支援の検討・修正 (困難軽減の程度は小さい)】

【場面や支援の検討・修正 (困難軽減の程度は大きい)】

【情報なし (詳細不明・未読出)】

【場面や支援の考案 (困難軽減につながる場面や支援なし)】

### 「活動と参加」支援カテゴリー分類のアルゴリズム



### 「環境因子」分析結果ファイル(EnvRes...)

環境因子分析結果表:

項目ID	項目名	特徴	影響	備考
e1150	日常生活で使う一般的な製品と用具 (改造や特別な設計なし)	あり	なし	①不快・使いにくい日用品と生活しづらく、筋力が弱いフォークやスプーンは持ちづらくて重たくてしまうことが多く、その度に食事が中断してしまう。その他、細長いものを扱うのは苦手です。②快適・使いやすい日用品と生活しやすさ: ③その他: フォークやスプーンは少し柔らかめのプラスチックが付けて弱くなったものを使っている。
e240	光	あり	あり	①不快な光と不快時の状態: 蛍光灯やLEDライトは光量の多少に関わらず行動が落ち着かなくなりやすい。蛍光灯の部屋はできるだけ避け生活しており、本人が使いやすい自然光が好ましい。②快適な光と快適時の状態: 自然光や太陽光では本人の様子は特に変わらない。照明ができれば自然光が好ましい。

## ICFシステムで把握した情報を QOL支援に活用する

本講義・演習で使用するワークシート

- なし

## 研修の流れにおける本講義の位置

水山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ討議(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修結果について ②標準的な支援に中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な手順書 ④-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ⑤-3ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート、事業所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④自覚の特性と学習スタイル ⑤水山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェイズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題となっている行動の観察と記録 ⑧地域のアセスメント ⑨日常生活場面での記録観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの詳細場面の動画撮影 ASBC記録とストラテジーシート(上段)、スキップシート(プル) FAST
フェイズ2	③支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかる工夫(編成化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先順位(機能的行動)の検討と実践	2.5h	ハリスク場面の整理、機能的行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活動と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段)
フェイズ3	④支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手順書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(観測台)の作成と実践 支援現場の動画撮影①、支援報告書の作成(ICFシートの観測)、チーム支援実行状況チェックシート②
フェイズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑮実施後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑・応答)	2.5h	支援現場の動画撮影②、支援報告書の作成 スキップシート(プル)、ICFシート(プル) チーム支援実行状況チェックシート③
フェイズ5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェイズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補綴		各受給者の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー・サブトレーナーに対して) 研修期間中、受給者への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

- (1) ICFの観点によるQOL支援の4つのポイント
- > ポイント① 活動と参加 強みの活用
  - > ポイント② 活動と参加 支援の維持・調整項目の有効な支援の活用
  - > ポイント③ 環境因子 QOL促進環境の提供
  - > ポイント④ 環境因子 QOL阻害環境の除去
- (2) 支援の成果全体をICFフォームでまとめる

### この講義のねらい

- (1) 「活動と参加の評価」で把握された①「本人の強み」と②「本人の潜在力が発揮される有効な支援」を生活で活用していく支援の具体例を知ること。「環境因子の評価」で把握された③「QOLを促進する環境」を増やし、④「QOLを阻害する環境」を少なくしていく支援の具体例を知ること。
- (2) 支援の成果(対象児者のQOLの向上)をICFフォームでまとめて支援前後の変化を確認すること。

## (1) ICFの観点によるQOL支援の4つのポイント

### #活動と参加

- ① 「強み」の活動を他の生活場面で広く活用
- ② 「維持・調整」の支援を他の生活場面でも活用

### #環境因子

- ③ 促進環境の提供 …… 快適な環境の提供
- ④ 阻害環境の除去 …… 不快な環境の除去

目指すのは「ご本人の困難さ(生活上のしんどさ)の軽減」

## ポイント① 活動と参加

### 強みの活用

- ・ 「強み」の活動(ご本人のできることを)、
- ・ できるだけ多くの生活場面で活用していく工夫

## 「休憩」に余暇支援をつなぐ

d3551-2	記号やマーク、絵や写真によるメッセージの伝達	困難なし	スキップ	スキップ	強み	① ② ③ ④絵は本人が一番得意としている。支援ニーズ高い。
<p><b>確認</b> 「絵を描くこと」はご本人がリフレッシュできる活動かも</p>						
e11520	一般的な遊び用の製品と用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり			①不快・使いづらい遊び用品と防げる状態： ②快適・使いやすい遊び用品と保つ状態：24色の色鉛筆、水性ボールペン、スケッチブック、糊、セロハンテープ、 ③その他：
<p><b>応用</b> 「絵を描くこと」はご本人が楽しめる活動と思われる。</p>						
d310a	話し言葉で伝えられたメッセージの理解	困難あり	支援あり	小さい	支援修正	①意思決定に事後的に職員の名前を明確に聞く ②お昼ご飯を食べた後はお仕事お休みですと伝える ③お昼ご飯を食べる事は理解できているが、その後お休みですは理解できない ④4〜5回繰り返すが落ち着かない状態にはならない。
<p>「おやすみ」はそこでの活動が明示されていないので、どうしてよいかわからないが、「お絵かきの時間」とすれば、楽しくてリフレッシュもできそう。</p>						

## こだわり対象の除去に強みを使う

d410	指が女手の動き（手や指の巧緻動作）で物を扱うこと	困難なし	スキップ	スキップ	強み	①小さな物を掴まんで持つ、引っ張る、ねじるといった動作ができる。 ② ③ ④
<p><b>着想</b></p> <p>ご本人は「服のタグをとることに」執着があり、日々支援者が止めている。</p> <p>ご本人の服は支援者がタグをとって渡しているが、他の人の服にも執着。</p> <p>衣類タグが残っていると噛み千切り、飲み込んでしまうことがある。</p> <p>ご本人はd410のスキルでタグとり執着を実行できているので、逆に、ご本人に自分の服のタグを切り取る作業をしてもらうのはどうか？</p>						
<p><b>活用</b></p> <p>他の利用者の方の服についてもタグ取りの許可が得られれば、他の人の服のタグ取り作業もご本人にしてもらえばどうか？</p>						
<p>タグとり作業ができて、周囲のタグがなくなり、制止されないでご本人のQOLは上がる。支援者もタグとり作業とご本人のタグとり行為を止める必要がなくなりQOLが上がる。</p>						

## 有効な支援の例 → これらを広く活用

d110	注冊する、注意して見る、見分ける、見て確認するなど目的をもって見ること	困難あり	支援あり	大きい	支援維持	①自分のものと他の区別を理解することが難しい。 ②パーソナルカラーを赤に統一し、目印にしている。黄緑色所するや場所には赤いテープを貼り、決めている。 ③種類によりパーソナルカラーを理解し、目的のものを使用することができている。 ④好きな感覚・感覚がある。毎日、支援が実施されている。
d177	意思決定すること	困難あり	支援あり	大きい	支援維持	①複数のものから1つ選択するのは情報量が多く難しく、好きという認識で選ぶというよりは、パターンで選択してしまう。 ②パターンが固定されないよう、意思決定をする際は情報量を制限し、2つものから1つ選択する程度を繰り返している。 ③選択の経験は、他者から聞く意思の選択や、余暇活動時に目的を選択する場面で活用できている。 ④毎日、支援が実施されている。
d177	意思決定すること	困難あり	支援あり	大きい	支援維持	①買うものを決めても気が移り、コロコロと変わる。朝食決定後入店しても食べない ②選択カードを用意し事前に購入する物、食べる物を決め、購入、摂取するまでそのカードを持ってもらう ③気の移り、摂取拒否がなくなる ④

「支援の維持・調整」の項目の支援を他の生活場面でも活用することがQOLの向上につながります。支援の維持・調整の項目が少ない場合には、学習スタイルの分析から導出された支援方法を「適応が悪くQOLが下がっている生活場面」に応用してみてください。上記の3例は、学習スタイルの視点で生活支援が展開されています。

## ポイント② 活動と参加 > 支援の維持・調整 有効な支援の活用

- ① 支援の維持・調整の支援（有効な支援）を、他の場面でも活用できないかを検討し生活全体に広げていく。
- ② ここに分類された支援は、ご本人の学習スタイルに合っていることが多い。学習スタイルから支援を再検討することも有用。

## 使いやすいもの、楽しみにつながるもの 生活の中で触れる機会を増やす

	悪影響	好影響		
e1150	日常生活で使う一般的な製品と用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	①不快・使いにくい日用品と生活しづらさ： ②快適・使いやすい日用品と生活しやすさ：毛布（エスケア用）、入眠時に使用 ③その他：
e110a	食べ物や飲み物	詳細不明、非該当	あり	①悪影響・生活低下の食品とその状態： ②好影響・生活向上の食品とその状態：新商品（ジュースなど）があると確認している。外出しても、何か変わった商品がないか確認しあると嬉しそうにする。 ③その他：
e1250	情報の受信や発信、コミュニケーションのための製品や用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	①具体的女機嫌と低下の状態： ②具体的女機嫌と向上の状態：興味がある物の情報が入るため、テレビやネットを活用している。情報が手に入ると嬉しそうにし話が増える。 ③その他：コロナ禍では毎日の発信者人数を気にして調べていた。人数の変動で本人の調子が変わることはなかった。
e11521	遊びやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	なし	あり	①不快・使いづらい遊び支援用品と役立つなまき： ②快適・使いやすい遊び支援用品と役立つなまき：企業ロゴ・チャリ・広告、破損対策でラミネイト加工されたもの。 ③その他：

## ポイント③ 環境因子 QOL促進環境の提供

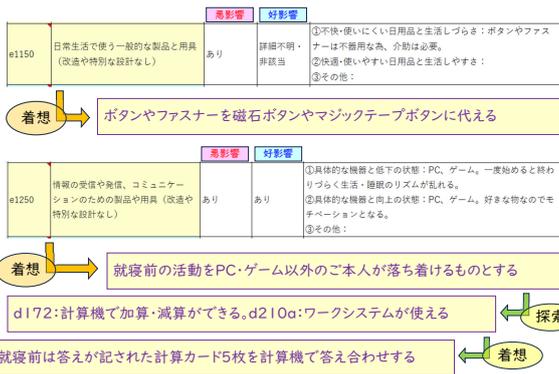
# 快適な感覚刺激の提供機会を増す

		高影響	好影響	
e250	音	あり	あり	①不快な音と不快時の状況：喧騒が苦手とする際には除くことがある。 ②快適な音と快適時の状況：静かな場所では穏やかな表情で体を横に揺らすなどリラックスした様子も見られる。 ③その他：
e240	光	詳細不明・非該当	あり	①不快な光と不快時の状況： ②快適な光と快適時の状況：日常のよい部屋を好んで過ごしている。 ③その他：
e240	光	なし	あり	①不快な光と不快時の状況： ②快適な光と快適時の状況：カーテンで日光をある程度遮断した薄暗い状況でリラックスして過ごしていることがある。 ③その他：
e2250	気温	あり	あり	①不快な気温と不快時の状況：酷暑(高熱)、寒寒(寒しそうな様子) ②快適な気温と快適時の状況：20~25度ほど ③その他：
e225	振動	なし	あり	①不快な振動と不快時の状況： ②快適な振動と快適時の状況：現時点では自宅の車と事業所の送迎車に限られるが、体を揺らし笑っていることも多く乗るのは好きであるように感じられる。 ③その他：

## ポイント④ 環境因子

## QOL阻害環境の除去

## 阻害的環境因子の除去を検討



## (2) 支援の成果全体を ICFフォームでまとめる

## 対象者の概要 (例) pre (支援前)

健康状態	活動・参加 (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を特定	個人因子
重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、朝起きられない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ (強み) 記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】 (絵や写真は理解できる)</li> <li>・ (強み) まねをして学ぶこと【d130】 (見て学ぶことができる)</li> <li>・ (支援修正) 一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】 困難あり：何をしようかわからない、作業に取り組みることができない 支援あり：プレハブでワークシステムを用いてバズル→赤紙 (漫画) のスケジュール実施 効果小：活動に取り組むことができるが、24時間365日マンツーマン対応で持続困難</li> <li>・ (支援修正) 場面に応じた行動のコントロール【d250】 困難あり：他の利用者との置き方が気になり、他者への暴力行為あり 支援あり：24時間365日マンツーマンによる見守り支援 効果小：支援員の制止で暴力行為に至らないが、ご本人のQOLは上がらず、24時間365日マンツーマン対応で持続困難</li> <li>・ (支援修正) 基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】 困難あり：GHの共有スペースで他の利用者との関係が、加えて、他利用者への暴力行為があり制止される。 支援なし：支援員の関わりは暴力の制止のみにとどまっている。(ご本人のQOLは上がらず、本2項目には効果なし)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 50代男性</li> <li>・ 障害支援区分6</li> <li>・ 行動関連項目12点</li> <li>・ 発達年齢4歳3か月</li> <li>・ グループホーム (5人暮らし)</li> <li>・ 生活介護事業所に通所</li> </ul>
心身機能・構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作業に取り組めない (実行機能の問題)</li> <li>・ 物の位置が気になる (ルール学習の強さ)</li> <li>・ 生活関連刺激の苦手さ (感覚特性、独特な注意)</li> <li>・ 対人刺激の苦手さ (社会的認知、感覚特性?)</li> <li>・ 見て学習することが得意 (暗黙的学習の難しさ)</li> </ul>	
環境因子 (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を特定		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 阻害環境：共有スペースでの生活 (【e240, 250, 260等】生活関連刺激や対人刺激【d710, 750】への苦手さ?)</li> <li>・ 睡眠薬【e110b】</li> <li>・ 促進環境：ワークシステム (【e135】仕事のしやすさを支援する製品と用具)</li> <li>・ 生活介護事業所でのプレハブ設置 (生活関連刺激や対人刺激の除去)</li> <li>・ 職員3名で交代しながらの個別対応 (【e340, 440】)</li> </ul>		

## 対象者の概要 (例) post (支援後)

健康状態	活動・参加 (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を特定	個人因子
重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、朝起きられない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ (強み) 記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】 (絵や写真は理解できる)</li> <li>・ (強み) まねをして学ぶこと【d130】 (見て学ぶことができる)</li> <li>・ (維持調整→支援修正) 一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】 困難あり：何をしようかわからない、作業に取り組みることができない 支援あり：パーテーションで空間を仕切った共有スペースで、スケジュール・ワークシステム・手帳を用いて支援 効果大：共有スペースで他の利用者との関係が、加えて、活動に取り組むことができた。ご本人のQOLも向上。</li> <li>・ (維持調整→支援修正) 場面に応じた行動のコントロール【d250】 困難あり：物の置き方が気になり、他者への暴力行為あり 支援あり：物の位置を写真で提示 効果大：物の置き場が気にならなくなった。支援員が常につかずとも暴力行為がなくなった。ご本人のQOLも向上。</li> <li>・ (維持調整→支援修正) 基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】 困難あり：GHの共有スペースで他の利用者との関係が、加えて、他利用者への暴力行為があり制止される。 支援あり：共有スペース空間をパーテーションで仕切った。(生活関連刺激や対人刺激の低減) 効果大：他の利用者との関係が、加えて、暴力行為はなくなった。ご本人のQOLも向上。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 50代男性</li> <li>・ 障害支援区分6</li> <li>・ 行動関連項目11点</li> <li>・ 発達年齢4歳3か月</li> <li>・ グループホーム (5人暮らし)</li> <li>・ 生活介護事業所に通所</li> </ul>
心身機能・構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作業に取り組めない (実行機能の問題)</li> <li>・ 物の位置が気になる (ルール学習の強さ)</li> <li>・ 生活関連刺激の苦手さ (感覚特性、独特な注意)</li> <li>・ 対人刺激の苦手さ (社会的認知、感覚特性?)</li> <li>・ 見て学習することが得意 (暗黙的学習の難しさ)</li> </ul>	
環境因子 (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を特定		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 阻害環境：共有スペースでの生活 (【e240, 250, 260等】生活関連刺激や対人刺激【d710, 750】への苦手さ?)</li> <li>・ 睡眠薬【e110b】 (全体支援で行動が落ち着いたが眠気が取れない) → 減薬で眠気消失</li> <li>・ 促進環境：ワークシステム、スケジュール、手帳、パーテーション、置き場の整理 (物の位置を決めて写真で提示) (【e135】仕事のしやすさを支援)</li> <li>・ 生活介護事業所でのプレハブ設置 (生活関連刺激や対人刺激の除去)</li> <li>・ 職員3名で交代しながらの個別対応 (【e340, 440】)</li> <li>・ 共有スペース空間を (パーテーションで) 仕切って生活 (【e115】日常生活での使いやすさを支援)</li> </ul>		

## ICFフォームにまとめる際の留意点(1)

- 「健康状態」
  - 診断名やその他の医療情報を記載。
  - postでは支援によって消失した症状を見え消しなどで明示。
- 「心身機能・構造」
  - 学習スタイルや評価尺度の結果を記載。評価尺度は医療とのつながりに有用。
  - pre-postの間に把握された情報があれば付記しておく。
- 「活動と参加」
  - ①強みや維持調整など支援に活用できる項目と②修正や考案などQOLが低下している項目を記載。
  - ②について、pre(支援前)ではQOL低下の状況を記載し、post(支援後)では支援の変更内容と効果の変化、そして支援カテゴリーの変化を記載する。
  - postに記載する支援は、学習スタイルに基づくもの、機能分析で実施したもの、ICFデータを活用したものなどを含む。QOL向上に有効だった支援を特に記載。

## ICFフォームにまとめる際の留意点(2)

- 「環境因子」
  - QOLの①阻害因子と②促進因子を記載。
  - ①のpreでは阻害項目とその状況を記載、postでは当該の阻害因子の除去とその結果について記載。
  - ②のpreでは促進項目とその状況を記載、postでは当該の促進因子の生活場面の幅広い活用の工夫とその効果を記載。
  - 阻害環境の除去と促進環境の充実については、学習スタイルの把握や機能分析の実施そしてICFデータによるものを含む。
  - 内容に応じて「活動と参加項目」を参照する記載を入れておくことご本人の状況の理解を助ける。
- 「個人因子」
  - 一般的にフェイスシートに記載されるような内容を記載する。

# 自閉症の特性と学習スタイルのアセスメント

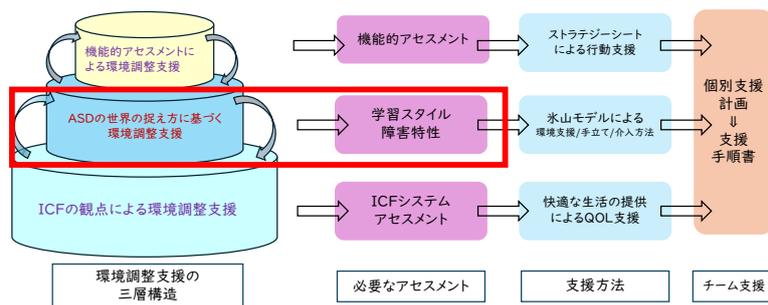
本講義・演習で使用するワークシート

- 特性&学習スタイルワークシート

## 研修の流れにおける本講義の位置

氷山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ対話(オンライン/集合研修)	時間	グループ対話後の現場の実践(約1ヶ月)主な使用シート欄
	事前課題	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本理念 ③ICFシートについて	-		モデル情報・事業所情報の整理 モデル情報シート、事業所情報シート(ハイスク場面)、BPI-S ICFシートの環境因子
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	⑤自閉症の特性と学習スタイル ⑥氷山モデル ⑦チーム支援	[8/26 WEB] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先課題の確認	2.5h	支援現場・モデルの様子動画撮影 特性&学習スタイルWS、氷山モデルWS アセスメントパッケージ(+ICFシートの活動参加)
フェイス1	(2)特性理解とアセスメント-集合研修	⑧課題となる行動の観察と記録 ⑨機能的アセスメント ⑩日常生活場面での直接観察	[9/27、10/1 集合] モデルの紹介と質疑(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの評価場面の動画撮影 ABC記録とストラテジーS(上)、スキッチャープロット(プレ) FAST
フェイス2	(3)課題行動に対する支援の検討(行動の分析)	⑪見てわかる工夫(構造化) ⑫コミュニケーションプログラム ⑬機能的アセスメントに基づく支援	[10/29 WEB] 優先課題(標的行動)の検討と仮説立て	2.5h	ハイスク場面の整理、標的行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルWS、構造化WS、Co指導計画書、ストラテジーS(下) チーム支援実行状況チェックシート①
フェイス3	(4)支援プランの立案と実施	⑭支援プランの立案 ⑮支援手順書の作成と実際の対応	[11/26 WEB] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(課題分析)の作成と実施 支援場面の動画撮影②、実践報告書家の作成(ICFシートの経過)、チーム支援実行状況チェックシート②
フェイス4	(5)支援プランの見直し(PDCAサイクル)	⑯実施後の評価と改善	[12/24 WEB] 現場実践の途中経過報告(仮説-検証)	2.5h	支援場面の動画撮影③、実践報告書の作成 スキッチャープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
	(6)実践報告会		[2/10 WEB] 現場支援の実践報告	3h	
フェイス5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの案内		
	補講		各受講生の事業所に訪問する、オンラインで聞き取り(トレーナー・サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

- 自閉症の特性と学習スタイル
- 自閉症の学習スタイルアセスメント(行動観察)

### この講義のねらい

- ねらい1(知識): 自閉症の特性と学習スタイルを学んでいきます
- ねらい2(技術): 自閉症の学習スタイルをアセスメント(行動観察)によって把握する技術の獲得を目指します

## 自閉症の特性と学習スタイル



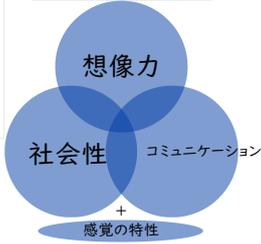
特性理解から  
学習スタイルへ

# (復習) 障害特性

強度行動障害支援者養成研修テキストより

自閉症とは、  
①社会性の特性  
②コミュニケーションの特性  
③想像力の特性  
④感覚の特性  
を持つ発達障害である。その特徴は、3歳くらいまでに現れることが多いが、成人期に症状が顕在化することもある。  
中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

## 自閉症の特性



情報処理の仕方が異なる  
(学習スタイルの違い)

## ●見えすぎてしまう脳

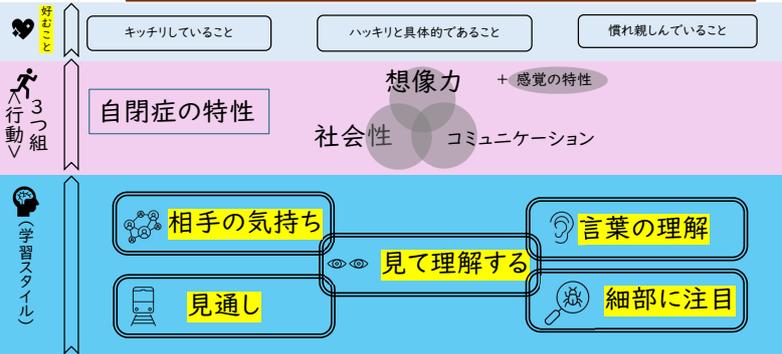
左:定型発達の脳(バランス型)  
見た物の判別、見えない概念の想像、言葉による共有、記憶の引き出し、考えること全体のバランスが優先される

右:自閉症の脳(視覚処理に特化)  
見える物に焦点が強くなり、具体的に視覚的に考える。見えないもの(言葉・概念・意味)の理解は弱い

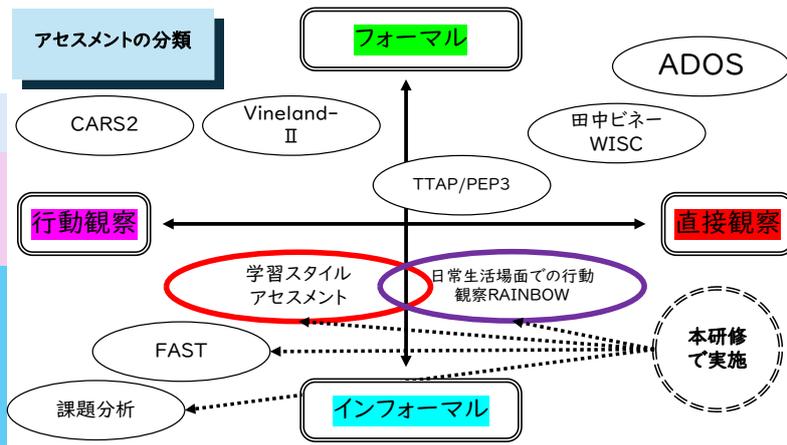
Temple Grandin (2010) TED The world needs all kinds of minds



## 特性と学習スタイルの関係



## アセスメントの分類



## 行動上の特性から 学習スタイルへ

自閉症の特性&学習スタイルワークシート

利用者名: \_\_\_\_\_    全体的な使い方

チェックした日時 (A): \_\_\_\_\_

行動上の特性 (三つ組)

- 社会性の特性     人や集団との間わりに難しさがある     状況の理解が難しい
- コミュニケーションの特性     理解が難しい     発音が難しい     やりとりが難しい
- 想像力の特性     自分で予定を立てることが難しい     変化への対応が難しい     物の一部に対する強い興味

行動上の特性をチェックしてから



- 学習スタイル(世界の捉え方・感じ方)のアセスメントすることで
- 自閉症の行動の理由を仮説立てる
- 自閉症の目線で世界を捉え直してみる

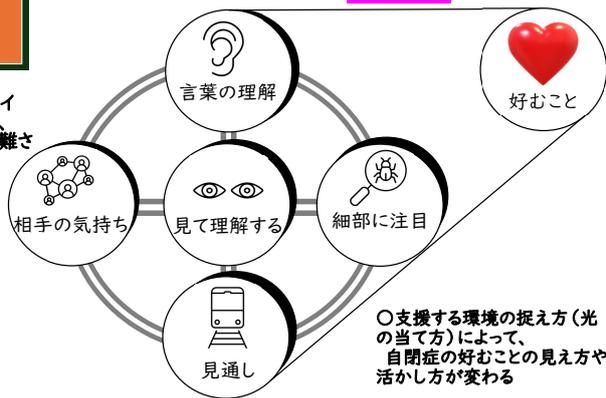


## 自閉症の学習スタイル

## ●自閉症の学習スタイルから好むことへ

○自閉症の学習スタイルは光と影のように、「強みの側面」と「困難な側面」がある

○それぞれの学習スタイルは相互に関係している



○支援する環境の捉え方(光の当て方)によって、自閉症の好むことの見え方や活かし方が変わる

# 「見て理解する」



目に見えないものは分かりにくい(言葉、時間、暗黙のルール、文脈など)  
「見て理解する」学習スタイルは、具体的に視覚的に理解すること



●見えれば分かる

見て理解する(困難さの側面)	解説	二つの大きさ	見て理解する(強みの側面)	手立ての可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>見えない言葉や時間などの理解の困難さ</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な指示を理解する強さ</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>一般化の困難(人や場所の応用が難しい)</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>場面ごとの記憶の強さ、同じ場面で同じ行動をとる</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	

# 「細部に注目」



「細部に注目」する学習スタイルは、強く深いフォーカス(焦点)に代表されます。  
復習:「筒メガネ体験」



●情報整理で高い集中

細部に注目(困難さの側面)	解説	二つの大きさ	細部に注目(強みの側面)	手立ての可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>注目の狭さ(全体が見れない)</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>興味関心のあるものに強く焦点があたる</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>気が散りやすい</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>整理された環境で優れた力を発揮する</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>注意の切り替えが難しい</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>好きなことによく取り組む</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	

# 「見通し」



「見通し」とは、予測を立てること・段取りを考えて行動すること・行動を開始して継続すること

●繰り返しが得意



見通し(困難さの側面)	解説	二つの大きさ	見通し(強みの側面)	手立ての可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>見通しが持てないと不安・混乱が強くなる</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>同じ状況で繰り返すこと(ルーティン)が得意</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>情報を整理し順序だてることが難しい</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>パターン的に取り組むことに慣れる</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>状況に応じて終わることは難しい</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>無くなったら終わりの理解</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>自発的に次にやるべき活動に移ることに難しさ</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>見て次の活動を理解する</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>時間の管理が難しい</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>自分なりの決め事に律儀である</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	

# 「言葉の理解」



そもそも言葉の理解が難しい。言葉を聞くと、記憶や映像が浮かぶ人も。  
言葉のニュアンスなどの曖昧な概念の理解に難しさ。



●見えれば分かる/伝わる

言葉の理解(困難さの側面)	解説	二つの大きさ	言葉の理解(強みの側面)	手立ての可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>話し言葉の理解の困難</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>見て理解する</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>表現コミュニケーションの難しさ</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>伝えようとする気持ちがある/行動で示す</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>意味/抽象的な意味理解の困難、字義通りの解釈</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な指示・具体物の理解</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	

# 「相手の気持ち」



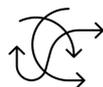
他者の視点に立って物事を考えることが難しい(人と集団との関わりに難しさ)



●ルールや気持ちが見えれば分かる

相手の気持ち(困難さの側面)	解説	二つの大きさ	相手の気持ち(強みの側面)	手立ての可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>相手とのやりとりの開始/維持の難しさ</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が必要とする場面では人に意識を向けやすい</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>他者の視点を取ることの困難</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>我が道をいく姿勢や行動</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>暗黙のルールの理解の難しさ</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>視覚的に理解できるルールを守る</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	

# 「感覚の問題」



感覚処理のプロセスに問題を抱えている。復習:「感覚の体験」



●過敏さは配慮・鈍感さは好む刺激の入力へ

感覚の問題	解説	二つの大きさ	感覚の問題(強みの側面)	手立ての可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>感覚刺激の過敏さ、または鈍感さ</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>苦手な感覚刺激/好む感覚刺激が分かる</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	
<ul style="list-style-type: none"> <li>見えてしまう環境への対処の困難</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>見える力の強さ、聞こえる力の強さ</li> </ul>	
(場面/行動):			(場面/行動):	

# 「好むこと」

- キッチリしていること
  - ・いつも同じ場所にそろっていること
- ハッキリしていること
  - ・曖昧さがなく、明解なこと
- 慣れ親しんでいること
  - ・いつも同じことで安心が得られる

好むこと/支援のアイデア 解説

□ キッチリ/ハッキリ/慣れ親しんでいることについて支援に活用できるアイデアを箇条書きしてください

## 自閉症の学習スタイルアセスメント (行動観察)

### 演習

行動から学習スタイルの把握へ



特性&学習スタイルチェックシート  
動画学習

①【困難さの側面】当てはまる項目にチェックを入れ、行動を記述しましょう  
②【強みの側面】当てはまる項目にチェックを入れ、行動を記述しましょう  
③【好むこと/支援のアイデア】を記述しましょう

# 「見て理解する」

見えない側面 (困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難さ
  - ①②③ 生活全般/見えない情報 (言葉・周囲の状況) 理解が難しい
- 一般的な困難 (人や場所の応用が難しい)
  - ④ 帰宅前/同じ場面ごとで決まった行動

見える側面 (強みの側面)

- 具体的な指示を理解する強さ
  - ①③④ 移動・食事・中りピンガ/信号やカレンダー、スイッチを理解
- 場面ごとの記憶の強さ、同じ場面でも同じ行動をとる
  - ①③④ カレンダー確認/数字やカレンダーの理解

# 「細部に注目」

細部に注目 (困難さの側面)

- 注目の狭さ (全体が見えない)
  - ① 歩行中/信号/周辺全体を見渡せない
- 気が散りやすい
  - ③ 食事中/カレンダー (規則性) に反応してしまう
- 注意の切り替えが難しい
  - ③ 食事中/カレンダー (規則性) にフォーカスが長く強く

細部に注目 (強みの側面)

- 興味関心のあるものに強く焦点があたる
  - ③ 食事中/カレンダーを理解
- 整理された環境で優れた力を発揮する
  - 不明: 継続して情報を集める (例: 作業場面など)
- 好きなことによく取り組む
  - 不明: 継続して情報を集める (例: 余暇・趣味など)

# 「見通し」

見通し (困難さの側面)

- 見通しが持てない不安・混乱が強くなる
  - ① カレンダー/問題解決の行動が取れない
- 情報を整理し利用できると必要に応じて活用しようとする
  - ② 休日の余暇/同じ行動してよいから分らない (信号/走り出したら急には止まれない)
- 状況に応じて移行すること体質しい
  - ③ 信号/走り出したら急には止まれない
- 自発的に次にやるべき活動に移ることの難しさ
  - ④ カレンダー/人の介入を持ち続けてしよう
- 時間の管理が難しい
  - ⑤ 信号/急になる予備が弱く黄色は走り出してしま

見通し (強みの側面)

- 同じ状況で繰り返すこと (ルーティン) が得意
  - ② 帰宅後/帰宅前/決まった手続き (消灯・手洗) 待ち時間
- パターン 前に取り組むことに慣れる
  - ③ カレンダー確認/数字やカレンダーの理解
- 無くならなかったら終わりの理解
  - ⑥ カレンダー確認/信号/指号/横断歩道を理解/めくって終わりを理解
- 見て行動する
  - ⑥ カレンダー/信号/指号/横断歩道を
- 自分の決める事に自信がある
  - ⑥ 家を出る時/スイッチをON-OFF

# 「言葉の理解」



手袋が袋 (をください)



言葉の理解 (困難さの側面)	解説	言葉の理解 (強みの側面)	自立の可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>話し言葉の理解の困難                             <ul style="list-style-type: none"> <li>① 食事/カミング/抽象語の理解が難しい言葉の理解 (場面/行動): ① そのものが困難</li> </ul> </li> <li>表現コミュニケーションの難しさ                             <ul style="list-style-type: none"> <li>② 自販機/地名など伝えてよいか分からない(ない)という状況説明のみ</li> </ul> </li> <li>意味/抽象的な意味理解の困難、字義通りの解釈                             <ul style="list-style-type: none"> <li>③ 食事/抽象語の理解(美味しい?など)が困難</li> </ul> </li> </ul>	<p>④ 自販機/場所とお財布(状況)を見て判断する</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>見て理解する                             <ul style="list-style-type: none"> <li>④ 自販機/場所とお財布(状況)を見て判断する</li> </ul> </li> <li>伝えようとする気持ちがある/行動で示す                             <ul style="list-style-type: none"> <li>⑤ 帰宅前/手袋が袋がないことを伝えようとする(身振りあり)</li> </ul> </li> <li>具体的な指示・具体物の理解                             <ul style="list-style-type: none"> <li>⑥ 自販機/活動の意味理解を経験で学んでいる</li> </ul> </li> </ul>	<p>④ 自販機/人への意識がある</p> <p>⑤ 歩行中/周囲の状況に影響を受けない</p> <p>⑥ 信号機/信号の意味理解はある様子</p>

# 「相手の気持ち」



相手の気持ち (困難さの側面)	解説	相手の気持ち (強みの側面)	自立の可能性
<ul style="list-style-type: none"> <li>相手とのやりとりの開始/維持の難しさ                             <ul style="list-style-type: none"> <li>① 食事/自販機/自分からやり取りを始めるられないまま (場面/行動): ① た応答のみ</li> </ul> </li> <li>他者の視点を取ることの困難                             <ul style="list-style-type: none"> <li>② 歩行中/信号/運転手・ガイドさんの気持ちを推測できない</li> </ul> </li> <li>暗黙のルールの理解の難しさ                             <ul style="list-style-type: none"> <li>③ 信号/赤信号に気づけない</li> </ul> </li> </ul>	<p>④ 自分が必要とする場面では人に意識を向けやすい</p> <p>⑤ 我が道をいく姿勢や行動</p> <p>⑥ 視覚的に理解できるルールを守る</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が必要とする場面では人に意識を向けやすい                             <ul style="list-style-type: none"> <li>④ 自販機/人への意識がある</li> </ul> </li> <li>我が道をいく姿勢や行動                             <ul style="list-style-type: none"> <li>⑤ 歩行中/周囲の状況に影響を受けない</li> </ul> </li> <li>視覚的に理解できるルールを守る                             <ul style="list-style-type: none"> <li>⑥ 信号機/信号の意味理解はある様子</li> </ul> </li> </ul>	<p>④ 自販機/人への意識がある</p> <p>⑤ 歩行中/周囲の状況に影響を受けない</p> <p>⑥ 信号機/信号の意味理解はある様子</p>

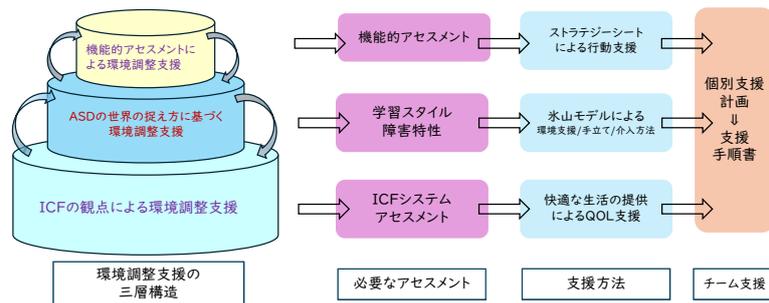
# 冰山モデル

- 本講義・演習で使用するワークシート
- 冰山モデルワークシート

氷山モデル MX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ討議 (オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成 研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための 基本的な情報 ③-2ICFシステムのデータ入力と 分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報を QOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート、事業所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスと チーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤ <b>冰山モデル</b> ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・ 優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、冰山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェーズ 1	②特性理解とアセ メント:集合研修	⑦課題となる行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面の記録観察	[9/27、10/1] モデルの紹介と実践 (動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの詳細場面の動画撮影 ASDC記録とストラテジーシート(上段)、スキッチャープロット(プル) FAST
フェーズ 2	③支援の検討 (行動の分析)	⑩見てわかる工夫(最適化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先場面(個別的行動)の検討と 実践立て	2.5h	ハリスク場面の整理、個別的行動の動画撮影(Before/After) 冰山モデルワークシート、参加と参加の支援計画書、 コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ 3	④支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手帳書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳書(観覧合符)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、実践報告書の作成(ICFシートの記録)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェーズ 4	⑤支援の見直し (PDCAサイクル)	⑮実施後の評価と改善	[12/24] 現場実況の途中経過報告 (質疑・応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、実践報告書の作成 スキッチャープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ 5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェーズ 5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受講生の事業所に訪問する。オンラインで取り取り(トレーナー・サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

# 冰山モデル

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

- 冰山モデルに基づいた行動理解
- 現場で取り組む強度行動障害支援の5つのフェーズ(冰山モデルマトリクス)
- 演習
- まとめ

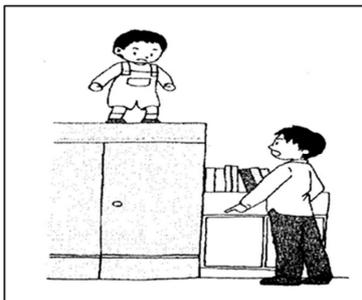
### この講義のねらい

- 冰山モデルをベースに、行動障害対応を5つのフェーズに整理し、現場支援の取り組みを明らかにする
- 中核的人材養成研修における「グループ討議」と「現場の実践」の全体像を把握する

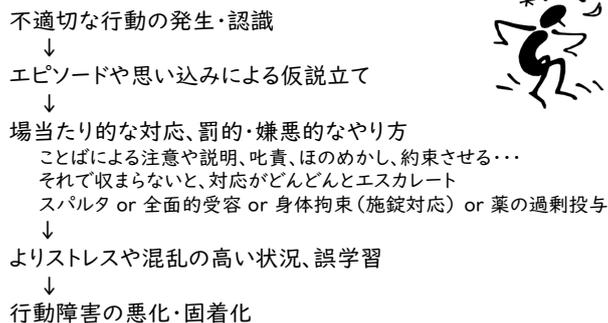
## 冰山モデル

- 自閉症の人が示す行動を、自閉症の特性・学習スタイルから理解し、有効な支援を提供するための枠組み
- 多くの場合、観察された「不適切な」行動、「課題となる行動」は、自閉症の特性・学習スタイルに配慮されない対応・状況で引き起こされている

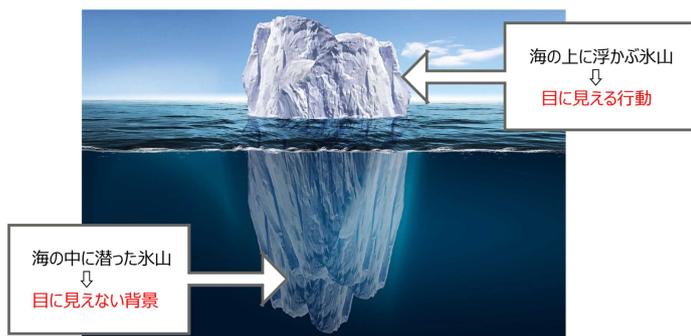
## 自閉症の人と周囲との相互作用



## 悪循環の構図



## 冰山モデル



## 冰山モデル

<https://teacch.com/wp-content/uploads/sites/553/2022/09/TEACCH-iceberg-english-2022.7.27.pdf>



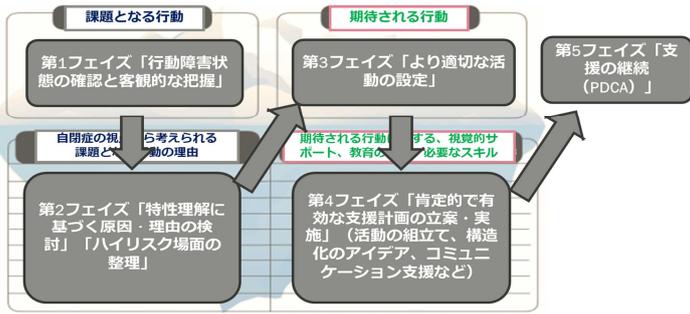
## 行動を自閉症の特性から理解する

- 「ふざけて、まわりにある物をどんどん投げてしまいます」
  - (仮説) 目の前にある物に衝動的に反応しやすい、視覚的な違和感に耐えられない、どこに片づけていいかわからない
- 「いくら言っても言うことを聞きません」
  - (仮説) 言葉の意味がわからない、何を言っているかわからない、オウム返しで返事をしよう、「わかりません」と聞けない
- 「女の人に興味があって、髪の毛の匂いを嗅ぎにきます」
  - (仮説) 匂いに敏感、「女性」を意識しているというよりも「髪の毛の匂い」が気になっている可能性、周囲が過反応するとそこに焦点が当たってしまう、ほかにやることがない、社会的な関係を理解することが難しい。

## 冰山モデル

- 自閉症の人が示す行動を、自閉症の特性・学習スタイルから理解し、有効な支援を提供するための枠組み
- 多くの場合、観察された「不適切な行動」「課題となる行動」は、自閉症の特性・学習スタイルに配慮されない対応・状況で引き起こされている
- 水面下に潜む原因・理由について<仮説-検証>作業を続け、「課題となる行動」を予防・軽減する
- 自閉症の人の特性・学習スタイルと個別のアセスメントに基づいて、より「期待される行動」を具体的に設定する
- 曖昧で漠然とした期待は、むしろ本人の不安・混乱を助長する
- 「期待される行動」を教える(支援する)ための具体的な手立てを計画し、実施する
- 構造化のアイデア、コミュニケーションプログラムなど
- PDCAを続ける

# 冰山モデルマトリックス



## 第1フェーズ 「行動障害状態の確認と客観的な把握」



- 優先順位の整理
- それは、組織的に対処すべき「課題となる行動」か？
- 緊急性、自他への影響、学習の可能性、成功の見通し（実際に取り組めるか）など
- 他に取り組むべき課題はないか？
- ターゲットとなる行動を客観的に把握する
  - 経過
  - 行動の頻度、強度、場面、周囲との相互作用
  - Ex)スカッタープロット、ABC分析、課題分析表

## 第2フェーズ① 「特性理解に基づく原因・理由の検討」



- その人はどんな人か？
  - 成育歴、家族関係
  - 今の作業場やホームでの暮らしぶり
  - 特に、落ち着いているときは・・・
  - 個別のアセスメント情報（好きなこと・嫌いなこと、できること・難しいこと、得意なこと、苦手なこと）
  - 自閉症の特性、学習スタイル
  - 知的レベル、他の疾患の可能性
- その人のことをよく知る作業を続ける
- その現場はどうなっているか？
  - 物理的な生活環境・作業環境、スタッフ体制、支援の考え方、実際の関わり・・・

## 第2フェーズ① 「特性理解に基づく原因・理由の検討」



- 行動の原因・理由を自閉症の特性からさぐる
- 客観的なデータに基づいて、問題行動をめぐる周囲・環境との相互作用を明らかにする
  - 悪循環の構図を可視化する
  - しばしば周囲の無理解や無理な要求、場当たりの対応、劣悪な物理的環境によって、問題行動は引き起こされる
- 本人の立場に立って考える
  - 「問題提起行動」である
  - 本人のストレスと、不安・混乱・フラストレーションが潜んでいる可能性

## 第2フェーズ② 「仮説-検証の作業(1)」



- 場所の問題:例)騒がしい、トイレが気になる、広すぎて落ち着かない
- スキルの問題:例)できないことを要求されている
- 理解の問題:例)わからない指示、ことばかけ
- 表現の問題:例)イヤだ、困っている、うまく伝えられない
- やり取りの問題:本人とスタッフでの言葉でのやり取り(予定の確認、質問、説明など)
- 混乱や不安:例)見通しが無い、何をすべきかわからない、やることがない
- 場面や物へのパターンの行動、誤学習
- 興味のない活動、好きな活動が止められない
- 感覚の問題:例)不快な刺激、自己刺激行動
- 過去の不快な経験や失敗体験
- 身体症状や精神疾患の可能性 など

## 「仮説-検証の作業(2)」

- 場所の問題⇒落ち着いて過ごせる場所を用意する
- スキルの問題⇒できることを要求する
- 理解の問題⇒わかるように指示を出す・伝える
- 表現の問題⇒適切な表現の仕方を教える
- 混乱や不安⇒スケジュールを用意する、場所を整理する、今ここで何をすればいいかを明確にする
- こだわり、パターンの行動、誤学習⇒こだわりの対象となるものを物理的に整理する、場面を変えてよりよい行動を教える
- 興味のない活動⇒好きな活動を提供する
- 好きな活動が止められない⇒「終わり」を教える
- 感覚⇒感覚刺激を調整する
- 過去の不快な経験や失敗体験⇒成功体験を増やす
- 身体症状や精神疾患の可能性⇒医療との連携

## 第2フェイズ③ 「ハイリスク場面の整理」



- 当面の対応として、不適切な行動を予防・軽減する
  - 本人(たち)のストレスを減らす
  - 本人(たち)の不安・混乱・フラストレーションを解消する
  - 本人(たち)が安心・安定して過ごせることに取り組む
  - 特定の引き金を避ける
- 場所、活動、見通し、本人とのやり取りを整理する
  - 過ごしやすい場所
  - 適度な活動、好きな活動
  - 見通しが持っている
  - 本人に合わせたやり取り etc

## ハイリスク場面のチェックシート

ハイリスク場面のチェックシート			
対象者:	( ) ( )	場所:	実施日: / / 記録者:
チェック項目	よくある例	現状	当面の予防・改善プラン
①物理的環境	特定の場所に居られない、じっと出来ない		
②感覚刺激	特定の感覚刺激(音、水など)に過反応		
③気になるもの・人	特定のものの他人に過反応にこだわりの行動		
④見通しのなさ	持てない、何度も予定を聞く、次の活動を見逃す		
⑤適度な活動がない	目は動かない行動が出来る、自分でうまく遊べない		
⑥周囲の伝え方、かかわり方	高聲指示で遠慮、かかわるスタッフが複数行動		
⑦本人の表現方法	嫌なときに逃げ、黙って物を取る、かんしゃ表現		
⑧失敗経験(無理な設定)	作業がうまくできず材料を捨てる、機嫌が悪くなる		
⑨その他	好きな活動が止められない、儀式的な行動、行動の停止		

★当面の予防・改善プランを実施するにあたって、追加の検討事項

## 第3フェイズ 「本人に合った、より適切な活動の設定」

- 適切な活動、期待される行動の設定
  - 特性・学習スタイルを考慮する
  - アセスメントに基づく
  - 肯定的に表現する
    - 「ゴミ箱の空き缶をあさらない」
    - ⇒「空き缶のシールを台紙に貼る」
- その人の意図・目的に合わせて活動を整理する
  - 周囲の人々や状況にも働きかける
  - 行動が起きる前から介入する
  - 長期的・肯定的に支援を続ける(PDCA)



## 第4フェイズ 「肯定的で有効な支援計画の立案・実施(1)」

- より適切な活動の組立て
- 活動のテーマを具体的に決める
  - 本人、家族の希望
  - 能力的にできそうなこと(個別のアセスメント)
  - 実用性・機能性
  - 成功の可能性、安全、緊急性
- どこでおこなうか、場所を用意する
  - 十分な物理的整理統合をおこなう
  - 最初は、活動と場所を1対1にしておく
  - 関係のない道具や材料は片付けておく
- 盛りだくさんにならないように
  - 正しいやり方を体験できるように
  - 失敗ややり直しにならないように
  - スモールステップで取り組む



## 第4フェイズ 「肯定的で有効な支援計画の立案・実施(2)」

- 活動の内容を明確にする
  - <始まり>と<終わり><流れ・手順>
  - 事前に、支援者のほうで実際にやってみる
  - 課題分析表の作成
- 構造化とコミュニケーション支援
  - ルーティン、ワークシステムとマテリアルストラクチャーの組み合わせ、道具の工夫、補助具の用意
  - スケジュールで「いつ(どこで)するか」伝える
  - 本人の意思確認、困ったときの手立て
- 本人に実際にやってもらう
- アセスメントは常に必要
- 自立のための教授と再構造化を続ける
- できるようになったら、日常生活の中に組み込んでいく



## 第5フェイズ 「支援の継続(PDCA)」

- 行動の定義、経過・傾向の把握、周囲との相互作用、個別の評価
  - 氷山モデルによる仮説立て
  - 介入計画 PLAN
  - プログラムの実施 DO
  - 実施後の評価・検証 CHECK
  - ACTION
- 自閉症を理解し、適切な行動に焦点を当て、PDCAを繰り返す  
 • プログラムは個別化され、本人/周囲(環境・関係者)の双方に働きかける  
 • 目標は、「生活の質の向上」「自立と社会参加」「ノーマライゼーションの実現」



## 演習

## モデルのシナリオ (※モデルは架空の人物です)

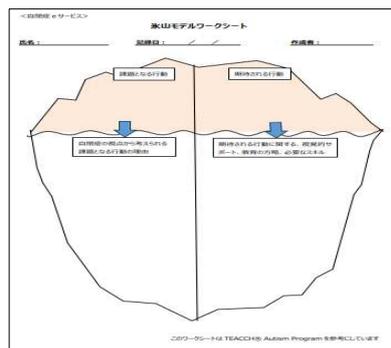
- キミコさんは30代、地域生活が難しくなり入所施設に移り、数年がたっています。重度の知的障害があり、自閉症と診断されています。入所施設に入った当初から不安定になることがあり、大きな声をあげたり、力いっぱい壁を叩いたりすることがあります。
- 落ち着いているときは、スタッフからの声かけに返事をし、日常的な指示にはすくに応じてくれます。簡単な話し言葉があり自分の名前を書いたりできるため、多くのスタッフが「キミコさんはことばがわかっている、日常会話ができる」と捉えています。
- 平日の日は施設内の作業場で、簡単な内職作業をしています。メンバーのみんなと一緒に作業をしていますが、他のメンバーとの交流はほとんどありません。自分がおこなっている部品を取られたり作業の邪魔をされたりして大声をあげることがあるので、そのときはスタッフが気づいて相手とのかわりを調整しているとのことですが、キミコさんが他のメンバーが持っている道具や材料を黙って持つていくこともあり、それでトラブルになることもあります。
- キミコさんが不調になりやすいのは、作業が終わって居住棟で過ごす夕方の時間帯と休日だとスタッフは言います。居住棟に戻ってすぐに入浴になりますが、そのあと夕食までの時間をうまく過ごせません。何度も食堂に行って夕食の準備の様子を確認しています。しまいに食堂のドアを激しく叩いて入室をアピールすることもあります。
- 休日も、平日と同じように朝から着替えを済ませ、作業用のカバンを持って出かける用意をしています。スタッフが「今日は作業はお休みですよ」と言われると作業用のカバンを片づけるのですが、今度は何度も玄関に行き、外の駐車場の様子を見ては「お出かけ、お出かけ」と訴えてきます。「今日は10時に出発します」「今日はドライブはありません」などその都度スタッフが伝えるのですが、納得できず、怒って大声をあげるのことでして。
- スタッフは、夕方や休日のキミコさんの過ごし方も見直したいと思っています。休日はドライブ以外特に設定された活動がありません。キミコさんが取り組める余暇や家事活動を見つけていきたいとスタッフは考えています。

## 第2フェイズ② 「仮説-検証の作業(1)」



- 場所の問題:例)騒がしい、トイレが気になる、広すぎて落ち着けない
- スキルの問題:例)できないことを要求されている
- 理解の問題:例)わからない指示、ことばかけ
- 表現の問題:例)イヤだ、困っている、うまく伝えられない
- やり取りの問題:本人とスタッフでの言葉でのやり取り(予定の確認、質問、説明など)
- 混乱や不安:例)見通しが無い、何をすべきかわからない、やることがない
- 場面や物へのパター的な行動、誤学習
- 興味のない活動、好きな活動が止められない
- 感覚の問題:例)不快な刺激、自己刺激行動
- 過去の不快な経験や失敗体験
- 身体症状や精神疾患の可能性 など

## 冰山モデルワークシート



## さんの行動について(1)

- 「課題となる行動」は、いつから始まりましたか？ 何かきっかけはありましたか？
- その行動は、どういう場面・どういときによく起こりますか？
- その行動に対するこれまでの対応は効果がありましたか？
- その行動の理由・原因を、自閉症の特性から検討しなさい
- ふだんから、不快な刺激にさらされていませんか。「課題となる行動」が起きやすいハイリスク場面をすぐに整理しなさい。
- ふだんから、本人は見通しのある過ごし方ができていますか。
- スケジュールやワークシステム、視覚的な手がかりは、その人に適切に個別化されていますか。
- 本人は、必要なことを他の人に伝える適切な方法をもっていますか。

## さんの行動について(2)

- その行動に代わる、「期待される行動」を具体的に設定しなさい。
- それは個別化されたアセスメントに基づいて、本人が無理なく取り組める内容になっていますか。
- その行動は、本人の興味や得意なことに基づいて決められていますか。
- 「期待される行動」が安定した時、より適切な行動を、他の状況へ般化していく計画がありますか。
- 生活全体として、身体を動かす十分な機会を含め、さまざまな活動が用意されていますか。また、リラックスできる場面がありますか。
- その行動に対応することで、本人と周囲の生活がどのように改善されますか。目標とすべき生活のイメージは？

## まとめ

# チーム支援

- 本講義・演習で使用するワークシート
- チーム支援実行状況チェックシート

## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

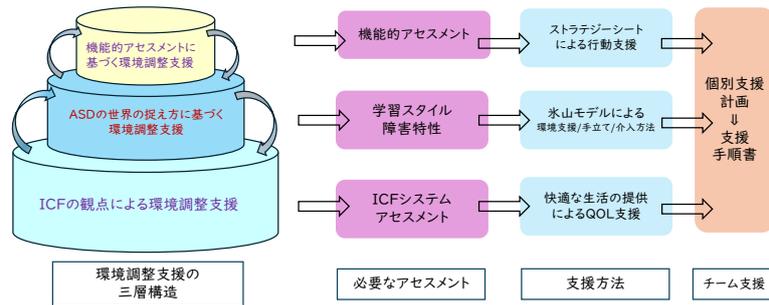
- ・ チーム支援での難しさとは
- ・ 実行状況チェックシートの概要と説明
- ・ まとめ

### この講義のねらい

- ・ チーム支援を活かすポイントについてかんがえる
- ・ チーム支援の実行状況を把握し、取り組む

## 研修の流れにおける本講義の位置

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



氷山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ討議(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月)主な使用シート類
	準備編	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本理念 ③一層格的な支援を実施するための基本的な仕組み ④2-ICFシステムでのデータ入力と分析方法 ⑤3-ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート(ハリスク編)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
フェイズ1	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④自覚の特性と学習スタイル ⑤氷山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む環境支援の状況・優先順位の整理	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 研修者学習スタイルワークシート、氷山モデルワークシート 日常生生活場面アセスメントシート(1:ICFシートの活用-参加)
フェイズ2	(2)特性理解とアセスメント/集合研修	⑦問題となっている行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面の直接観察	[9/27,10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの研修場面の動画撮影 ABC記録とストラテジーシート(上版)、スキッチャーシート(下版) FAST
フェイズ3	(3)支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかる工夫(構造化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先課題(観的行動)の検討と実践	2.5h	ハリスク場面の整理、観的行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルワークシート、初期と参加の支援計画書、 コミュニケーションプログラムの実践計画書、ストラテジーシート(下版) チーム支援実行状況チェックシート④
フェイズ4	(4)支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手順書の作成と実践の対応	[11/26] 実践計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(課題分析)の作成と実践 支援場面の動画撮影⑤、実践報告書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート⑤
フェイズ5	(5)支援の見直し(PDCAサイクル)	⑮実践の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(前期-状態)	2.5h	支援場面の動画撮影⑥、実践報告書の作成 スキッチャーシート(仮定)、ICFシート(仮定) チーム支援実行状況チェックシート⑥
フェイズ6	(6)実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェイズ7	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
総括			各受講生の事業所に訪問する、オンラインで聞き取り(トレーナー-サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## こういうことはありませんか??

- 研修受講者のみに負担。課題・宿題に追われる。。。
- 日中活動スタッフと夜間担当スタッフとで、情報の共有がしにくい
- 話し合いはするものの(プレスト)で終わってスッキリ。でも、自分たちの行動変容には繋がらない。PDCAサイクルがまわらない
- 法人・組織の哲学・理念が共有されていないので、ばらばらな意見になりがち
- 「課題となる行動」ばかりに目がいきすぎてアイデアが出にくい などなど

## 実行状況チェックシートの目的

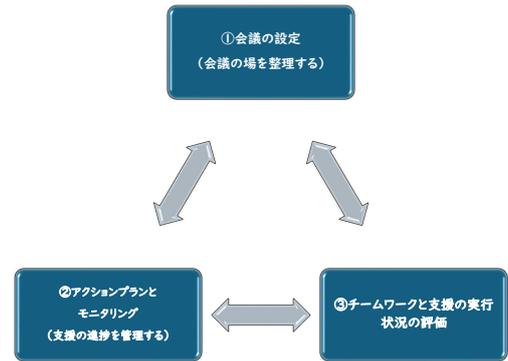
受講者(=中核的人材)がグループ討議の時間でまとめた意見・プランを、**現場に戻ってチームで共有する仕組み**を作る。  
(3回目以降から実施する)



チームの意見をすいあげ、  
**限られた時間の中で合意形成をしたかどうか**

## 実行状況チェックシートについて

## 実行状況チェックシートの概要 (中核的人材が意識すべき項目)



## 項目内容について

### 項目内容① 会議の設定(会議の場を整理する)

1	チームに必要なメンバーの勤務等を調整し、会議を設定したか。	<input type="checkbox"/>
2	会議の参加者がポジティブな討議ができるようなグラドルール(他者が発言中は口を挟まない、否定をしないなど)を明示したか。	<input type="checkbox"/>
3	会議にあたって、会議の目的と終了時間を参加者に伝えているか。	<input type="checkbox"/>
4	参加者全員が会議で発言できるように会議をコントロールしているか。	<input type="checkbox"/>
	・個人ワークの時間を設ける	
	・全体共有の時間を設ける	
5	終了時、会議の参加者の意見を整理しまとめたか。また、会議に参加していないチームメンバーにも情報を共有するようにしているか。	<input type="checkbox"/>

### 項目内容② アクションプランとモニタリング (支援の進捗を管理する)

6	支援の手立てや記録の方法を決める際は、具体的に、実行可能性や予測される効果などを検討し、参加者で確認したか。	<input type="checkbox"/>
7	支援の手立てを決める際は、『いつ・だれが・何を行うのか』を行動レベルで決め、手順書等の作成につなげたか。	<input type="checkbox"/>
8	実施記録については『いつ・どのような方法で共有するか』を確認したか。	<input type="checkbox"/>
9	支援の進捗管理のために、次回の会議の設定や、必要なタイミングで他のスタッフに確認することなど、適時リマインドをおこなっているか。	<input type="checkbox"/>
10	支援を実行した際、一定の経過を見た後、振り返りの会議を設定しているか。	<input type="checkbox"/>
11	振り返りの会議では記録を確認し、その結果に影響しているポジティブな要因やネガティブな要因、関連する課題などを検討し整理したか。	<input type="checkbox"/>

## 項目内容③ チームワークと支援の実行状況の評価

12	支援の取り組みを通して、常にチームのメンバーの尽力を褒め、チームでのまとまりを高めているか。	<input type="checkbox"/>
13	支援の実行状況を確認し、次のアクションについてチームとして方向性を共有できているか。	<input type="checkbox"/>

## 全体の項目 負担量を軽減する目的で、13項目までを上限

1	チームに必要なメンバーの勤務等を調整し、会議を設定したか。	<input type="checkbox"/>
2	会議の参加者がポジティブな議論ができるようなグラウンドルール(他者が発言中は口を挟まない、否定をしないなど)を明示したか。	<input type="checkbox"/>
3	会議にあたって、会議の目的と終了時間を参加者に伝えているか。	<input type="checkbox"/>
4	参加者全員が会議で発言できるように会議をコントロールしているか。	<input type="checkbox"/>
	・個人ワークの時間を設ける	
	・全体共有の時間を設ける	
5	終了時、会議の参加者の意見を整理しまとめたり、また、会議に参加していないチームメンバーにも情報を共有するようにしているか。	<input type="checkbox"/>
6	支援の手立てや記録の方法を決める際は、具体的に、実行可能性や予測される効果などを検討し、参加者で確認したか。	<input type="checkbox"/>
7	支援の手立てを決める際は、『いつ・だれが・何をを行うのか』を行動レベルで決め、手順書等の作成につなげたか。	<input type="checkbox"/>
8	実施記録については『いつ・どのような方法で共有するか』を確認したか。	<input type="checkbox"/>
9	支援の進捗管理のために、次回の会議の設定や、必要なタイミングで他のスタッフに確認することなど、適時リマインドをおこなっているか。	<input type="checkbox"/>
10	支援を実行した際、一定の経過を見た後、振り返りの会議を設定しているか。	<input type="checkbox"/>
11	振り返りの会議では記録を確認し、その結果に影響しているポジティブな要因やネガティブな要因、関連する課題などを検討し整理したか。	<input type="checkbox"/>
12	支援の取り組みを通して、常にチームのメンバーの尽力を褒め、チームでのまとまりを高めているか。	<input type="checkbox"/>
13	支援の実行状況を確認し、次のアクションについてチームとして方向性を共有できているか。	<input type="checkbox"/>

## チーム支援の実行状況をチェック

東山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ対話(オンライン/集合研修)	時間	グループ対話後の現場の実践(約1ヶ月)主な使用シート類
	事前課題	①研修概要について ②体系的な支援と中核的人材育成 ③-1標準的な支援を実施するための 基本的な手順 ③-2ICFシステムのデータ入力 と分析方法 ③-3ICFシステムで把握した情報を QOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート(ハイリスク場面)、ICF-S ICFシートの構成因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスと チーム支援	④自閉症の特性と学習スタイル ⑤東山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを念頭に現場支援の状況 優先課題の確認	2.5h	支援現場・モデルの様子動画撮影 特性学習スタイルシート、東山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(4ICFシートの活動・参加)
フェーズ1	⑦特性理解とアセス メント:集合研修	⑦課題となっている行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面での点検観察	[9/27,10/1] モデルの紹介と質疑 (動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの評価場面の動画撮影 ABC記録とストラテジーシート(上段)、スキーマープロット(フル) FAST
フェーズ2	⑩支援の検討 (行動の分析)	⑩見てわかる工夫(構造化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先課題(目標行動)の検討と 仮説立て	2.5h	ハイリスク場面の整理、目標行動の動画撮影(Before/After) 東山モデルワークシート、活動に参加の支援計画書、 コミュニケーションプログラムの作成、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ3	(4)支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手順書の作成と実施の対応	[11/26] 実践計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(課題分析)の作成と実施 チーム支援実行状況チェックシート② チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ4	⑮支援の見直し (PDCAサイクル)	⑮実施後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告 (録音・録画)	2.5h	支援現場の動画撮影②、実践報告書の作成 スキーマープロット(上段)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート④
フェーズ5	⑯実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェーズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補講		各受講生の事業所に訪問する、オンラインで聞き取り(トレーナー・サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかわして、サブトレーナーが対応)		

## チェックシートの共有について

### ・各討議の時間で内容を確認

・チーム支援を実施する際に、他事業所のうまくいった点・うまくいかなかった点を確認し共有する。

・討議内で共有された情報を、自分たちの事業所に持ち帰り実施をおこなう。

チーム支援の再プランニングをおこなう。

## チーム支援|うまくいくためのポイント①

- 目標の明確化
  - ・明確で簡潔な目標を設定→具体的な行動指針を提供する
- コミュニケーションのリアリティ
  - ・詳細の伝達方法【いつ、どこで、誰が、何を、どのくらいの期間行うか】
  - ・視覚的に理解しやすいレイアウトと環境設定
- フィードバックと評価
  - ・定期的なフィードバック
  - 【2週間、または最長で1ヶ月ごとに結果を共有など】
  - ・フィードバックの目的
  - 【支援の改善とモチベーションの維持】
- チームでの協議
  - ・意思決定プロセス【方針をチームで検討 フォーマルな会議での決定】

さいごに

## チーム支援|うまくいくためのポイント②

### ● サポートの改善

#### ・課題への対応

【支援や記録がうまくいかない場合、個人の責任にせず対策をチームで検討・成功例を共有し、全員が学べるようにする】

### ● 継続的な学びと事例検討

#### ・OJTと外部講師の活用

【外部の専門家を招いて事例検討を実施・継続的な学びとモチベーションの向上】

### ● 職場環境の改善

#### ・コミュニケーションの促進

【日常の雑談や軽い話題でリラックスした職場環境を作る・相談しやすい雰囲気の維持】

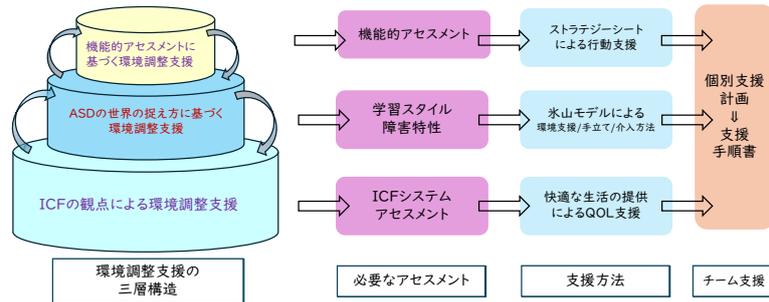
# 課題となっている行動の観察と記録

- 本講義・演習で使用するワークシート
- ABC記録、スキッタープロット

# 研修の流れにおける本講義の位置

氷山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視座 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な情報 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事前学習情報の整理 モデルの基本情報シート、得意所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤氷山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、氷山モデルワークシート 日常生活行動増進アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェーズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題となっている行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面の正確な観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの野鳥場面の動画撮影 ABC記録とストラテジーシート(上段)、スキッタープロット(プル) FAST
フェーズ2	③支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかる工夫(編成化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 実現場(機能的行動)の検討と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	ハリスク場面の整理、機能的行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルワークシート、参加と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ3	④支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手順書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(観測台)の作成と実践 支援現場の動画撮影②、支援報告書等の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェーズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑮実施後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑・応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキッタープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェーズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受講生の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー/サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

- 課題となっている行動の具体化
- 記録の役割
- 演習(ABC記録とスキッタープロットの取り方の説明)

### 講義・演習のねらい

- 行動観察を行うために、課題となっている行動を具体的に表現することができる。
- ABC記録とスキッタープロットの2つの記録の取り方を学ぶ。

## 課題となっている行動の具体化

## 行動を具体的にとらえるメリット

- 具体的に誰が何に困っているのか明確になる
- 記録をしやすい
  - 増減がわかりやすい
  - 対応の効果が明確になる
- 支援者間での情報共有のズレが少なくなる
  - 一貫した対応がしやすくなる

## 行動を具体的にとらえる メリット

- 支援者間での情報共有のズレが少なくなる



## 行動を具体的にとらえる コツ

1. 観察可能な（見える、聞こえる、回数をかぞえたり時間をはかることができる）行動だけを取り扱う
2. 動詞で書く
3. 誰が読んでも同じ行動が思い浮かべられるくらい具体的に書く
4. 「～しない」は「～しないで、～している」と書く

## 1. 観察可能な行動だけを取り扱う

誤	正
考える 思う イライラする 落ち着かない	叩く 蹴る かみつく 大声で何回も～と言う

2. 動詞で書く
3. 誰が読んでも同じ行動が思い浮かべられるくらい具体的に

誤	正
パニック	大声で叫んだあと、自分のこめかみを両手で叩く
粗暴な行為	作業の材料のプラスチックを手で割って投げる

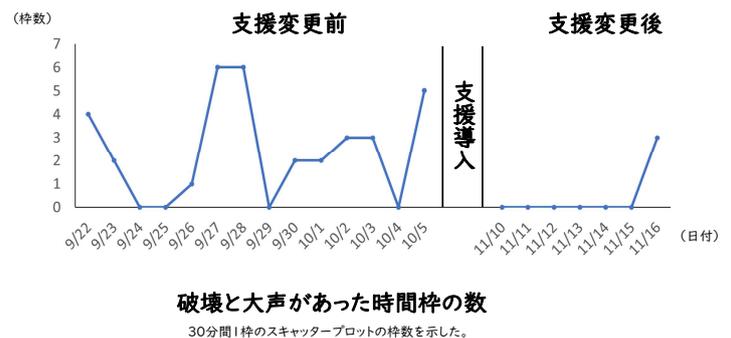
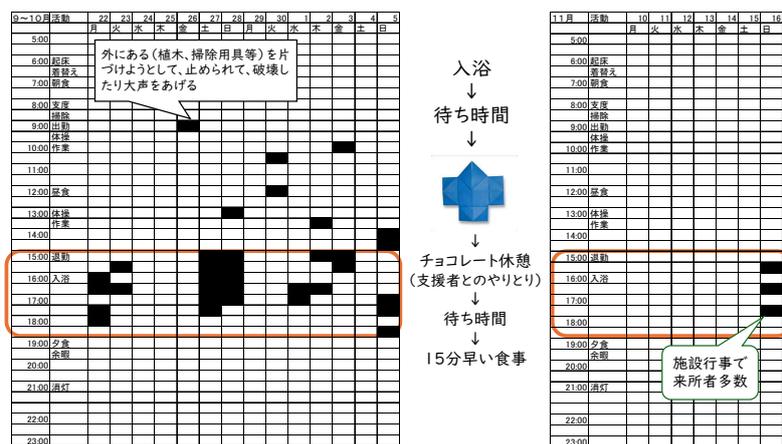
4. 「～しない」は「～しないで、～している」と書く

誤	正
作業をしない	作業をせずに、床に寝そべっている

## 記録の役割

## 記録の役割

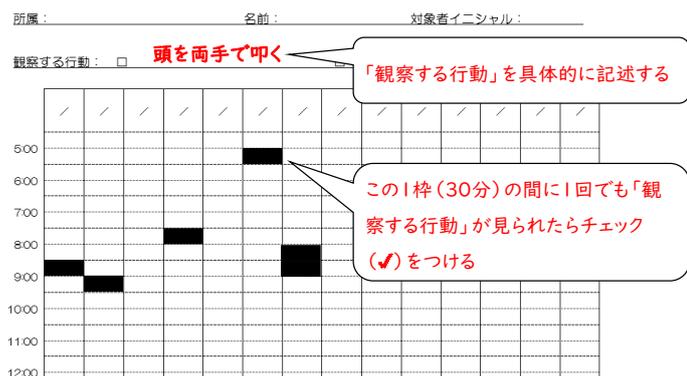
- アセスメントになる
  - 記録はその人の行動が、なぜ起きているか分析をする(機能などの仮説を立てる)ための情報として活用できる
- 支援の効果を検証できる
  - 支援の前と後に記録を取ることで支援が効果的であったかどうか(機能などの仮説が正しかったかどうか)を検証することができる



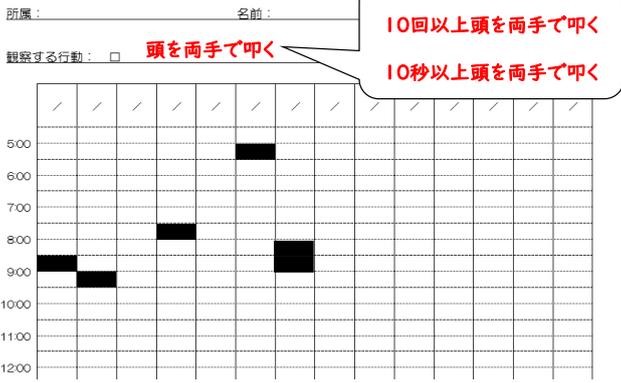
## 記録

1. エピソード記録(例えば、形式のない日誌)
2. スキャッタープロット
  - 起きやすい場面、起きにくい場面を知る
3. ABC記録
  - 観察したことを「事前の状況—行動—事後の状況」に分けて書く
4. 課題分析にそった記録

## 2. スキャッタープロット



## 2. スキャッタープロット



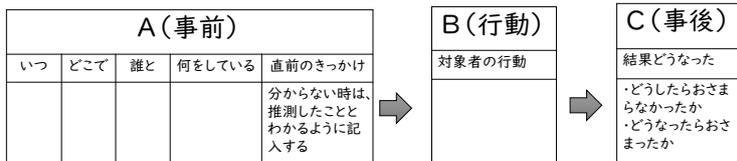
## 3. ABC記録

所属： \_\_\_\_\_ 名前： \_\_\_\_\_ 対象者イニシャル： \_\_\_\_\_

記録日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日 ~ \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

ヒント	直接のきっかけ、周囲の状況、行動直前の対象者の状態など。	対象者の行動を具体的に記述する。「(チェック)」「無し」などは具体的な行動ではないのでNG。	行動に対して周囲はどのように反応したか、またその周囲の反応に対して対象者の行動はどうか変化したか。	
日	時間	事前の状況	対象者の行動	事後の状況
11	12:10	昼食時に食堂にて、他利用者に声をかけられた時	近くの支援者にかみつく	落ち着かせるために支援者といっしょに食堂をでる。2~3分で落ち着き食堂に戻った。

## ABC記録のポイント



その他、事前の状況で関係がありそうなことを、A(事前)に記入してもよい

- ・天候(暑さ、寒さ等)
- ・体調(病気、生理、服薬の影響等)
- ・集団の大きさ 等

## 2つの記録からわかること

- ・起きやすい場面を予測できる。
- ・起きにくい場面のなかにある環境の条件を見つける。
  - ・いつ起こるか ⇔ いつ起こらないか
  - ・誰と起きるか ⇔ 誰と起こらないか
  - ・どこで起こるか ⇔ どこで起こらないか
  - ・どんな活動だと起こるか ⇔ どんな活動だと起こらないか
  - ・どうしたらおさまらないか ⇔ どうしたらおさまるか
- ・ご本人の視点から、環境との相互作用をとらえる
  - ・支援者の視点「危ないので、急いで手をつかんだ」
  - ・ご本人の視点「急に手をつかまれた」

## 演習

ペットボトルの分別作業中です。はがしたフィルムとペットボトルをそれぞれの袋に分けて入れます。「ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる」行動についてABC記録(事前の状況→行動→事後の状況に分けて書く)をしてみましょう。

## 演習課題① ABC記録につけてみましょう

ヒント		直接のきっかけ、周囲の状況、行動直前の対象者の状態など。	対象者の行動を具体的に記述する。「ハニップ」「抛発」などは具体的な行動ではないのでNG。	行動に対して周囲はどのように反応したか、またその周囲の反応に対して対象者の行動はどうか変化したか。
日	時間	事前の状況	対象者の行動	事後の状況
			ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。 支援者を見る。	

## 演習課題① ABC記録につけてみましょう

ヒント		直接のきっかけ、周囲の状況、行動直前の対象者の状態など。	対象者の行動を具体的に記述する。「ハニップ」「抛発」などは具体的な行動ではないのでNG。	行動に対して周囲はどのように反応したか、またその周囲の反応に対して対象者の行動はどうか変化したか。
日	時間	事前の状況	対象者の行動	事後の状況
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。隣の人は投げ入れている。支援者は後ろにいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。 支援者を見る。	ペットボトルは手元からなくなる(本人にとっては投げ入れられる)。支援者が近づく(本人にとっては近づいてくる)。横につく。次のペットボトルの作業をはじめ。

## 演習課題② ABC記録につけてみましょう

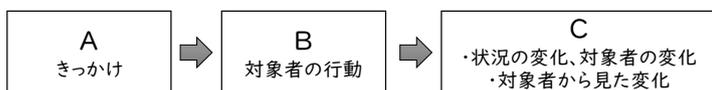
ヒント		直接のきっかけ、周囲の状況、行動直前の対象者の状態など。	対象者の行動を具体的に記述する。「ハニップ」「抛発」などは具体的な行動ではないのでNG。	行動に対して周囲はどのように反応したか、またその周囲の反応に対して対象者の行動はどうか変化したか。
日	時間	事前の状況	対象者の行動	事後の状況
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。隣の人は投げ入れている。支援者は後ろにいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。 支援者を見る。	ペットボトルは手元からなくなる。支援者が近づく。横につく。次のペットボトルの作業をはじめ。
			ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。	
			フィルムとペットボトルをそれぞれの袋に入れる。	

## 演習課題② ABC記録につけてみましょう

ヒント		直接のきっかけ、周囲の状況、行動直前の対象者の状態など。	対象者の行動を具体的に記述する。「ハニップ」「抛発」などは具体的な行動ではないのでNG。	行動に対して周囲はどのように反応したか、またその周囲の反応に対して対象者の行動はどうか変化したか。
日	時間	事前の状況	対象者の行動	事後の状況
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。隣の人は投げ入れている。支援者は後ろにいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。 支援者を見る。	ペットボトルは手元からなくなる。支援者が近づく。横につく。次のペットボトルの作業をはじめ。
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。支援者は横にいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。	支援者が体を止めようとする(本人にとっては、体を寄せくる)。ペットボトルが手元からなくなる。次のペットボトルを渡される。
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。支援者は横にいる。	フィルムとペットボトルをそれぞれの袋に入れる。	ペットボトルが手元からなくなる。次のペットボトルを渡される。

## 記入のポイント

- 観察したありのままを書く。
- Bは対象者の行動のみを書く。気持ちや考えを推測して書かない。
- AとCは支援者の対応や物理的な状況について書く。
- Cには、支援者の対応の後に起きた、対象者の行動の変化を書いて良い。



## まとめ

## まとめ

- 行動上の課題があるときには、課題となっている行動を具体的に表現して、共有する。
- 具体化した行動について記録をつける。
- スキャッタープロットは、課題となっている行動が起きやすい場面と起きにくい場面の両方の条件を知ることができる。
- ABC記録は、行動の前後の状況の変化を知ること、課題となっている行動が「なぜ、起きているのか」という理由を、ご本人の視点やご本人にとっての意味から推測することができる。

※ABC記録について、鳥取大学の井上先生の研究班で動画を作成されています。  
さらに学びたい方は右記QRコードをご参照ください。



## 謝辞

本eラーニングの作成にあたりご協力いただいた、  
本人様・保護者様、  
支援事例を提供頂いた、コープデリ生活協同組合連合会様、  
社会福祉法人はーとふるの関係者様にお礼申し上げます。

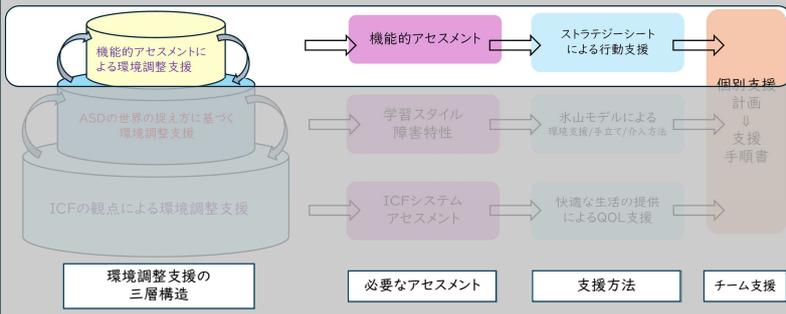
# 機能的アセスメント

本講義・演習で使用するワークシート  
FAST、ストラテジーシート(上段)

# 研修の流れにおける本講義の位置

水山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な視点 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事前学習情報の整理 モデルの基本情報シート、学習所情報シート(ハイルスク編)、BPT-S ICFシート(環境因子(できるだけ実施))
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤水山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用(参加))
フェーズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	⑦機能的アセスメント ⑧日常生活場面の直接観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの観察場面の動画撮影 ASD記録とストラテジーシート(上段)、スキヤッタープロット(プル) FAST
フェーズ2	③支援の検討(行動の分析)	⑨見てわかるエピソード(録音化) ⑩コミュニケーションプログラム ⑪機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先順位(観測行動)の検討と実践立て	2.5h	ハイルスク場面の整理、観測行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、視聴と参加の支援計画書、 コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ3	④支援の立案と実施	⑫支援プランの立案 ⑬支援準備書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援準備書(観測分析)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、支援報告書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェーズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑭実施後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑-応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキヤッタープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェーズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受講生の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー-サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

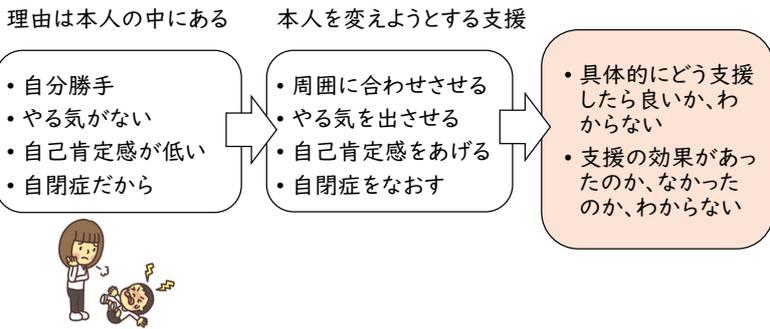
- 機能的アセスメントとは
- 行動の機能の種類
- ストラテジーシート
- 演習
- まとめ

### 講義・演習のねらい

- 本人の視点から課題となっている行動を理解するための機能的アセスメントを学ぶ
- 行動の機能の種類を知る
- 行動の機能を推測することができる

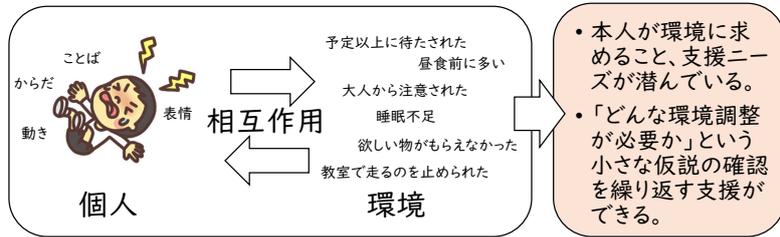
## 機能的アセスメントとは

## なぜ、課題となっている行動が起きているのか



## 機能的アセスメントとは

課題となっている行動と環境との関係を、本人の視点からとらえること



## 機能的アセスメントの意義

①課題となっている行動は、その環境でご本人なりに学習した適応の結果である。課題となっている行動によって、周囲に求めることを示している。

ご本人のニーズに基づく支援の実現

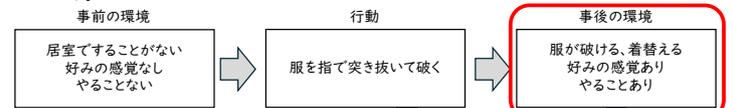
②目に見えることから仮説を立てる。実践することで、仮説を検証できる。

支援の結果を確認できる

## 問題からニーズへ視点をかえる 事後に注目

・Aさんは服を破いてしまう

- ① 障害レベルで理解する→一人ひとりの学習スタイルにあった生活スタイル
  - ・自閉症だから服を破く。でも、全ての自閉症の人がしているわけではない。
- ② 行動と環境のレベルで理解する→機能的アセスメント
  - ・居室ですることがないときに、服を指で強く押して、突き抜いて破いて時間を過ごしている。



周囲の視点では「Aさんが服を破いてしまった」「これは問題だ」  
本人の視点では「関わりたい」「服が勢いよく破けた」「着替えられた」「私が求めていること」

## 行動の機能

・課題となっている行動と環境との関係から、その行動の機能（本人がその行動をせざるを得ない、本人の視点からの理由）を推測すること。

- ・課題となっている行動の主な機能4つ
  - ・社会的な（人とのやりとりや活動がある）場面
    - ・物や活動、人との関わりや注目の要求機能
    - ・物や活動、人との関わりや注目からの回避・逃避の機能
  - ・自己の感覚
    - ・感覚自体が楽しみで、感覚を得ている
    - ・感覚自体が嫌悪的な状態を回避・逃避している

## 行動の機能の種類

# FAST

(Functional Analysis Screening Tool)

	要求が満たされる獲得型	不快から逃れられる回避・逃避型
社会的	・注目や関わりの要求 ・物の要求 ・活動の要求	・注目や関わりの回避・逃避 ・物の回避・逃避 ・活動の回避・逃避
個人内	・感覚の要求 ・好みの感覚を得る	・痛みの軽減 ・不快な感覚の回避・逃避

BPI-Sで全体像を把握してから、評価したい行動を絞り込みます。インパクトや強度ではなく、頻度(回数)をみます。回数の多い行動を選びます。

つけ方の説明動画のQRコードはこちら  
(鳥取大学の井上先生の  
研究班において作成)



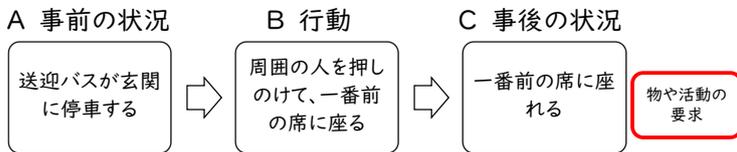
# FAST

(Functional Analysis Screening Tool)

	要求が満たされる獲得型	不快から逃れられる回避・逃避型
社会的	・注目や関わりの要求 ・物の要求 ・活動の要求	・注目や関わりの回避・逃避 ・物の回避・逃避 ・活動の回避・逃避
個人内	・感覚の要求 ・好みの感覚を得る	・不快な感覚の回避・逃避 ・痛みの軽減

## 社会的な場面での要求機能 (物や活動の要求)

太郎さんは生活介護を利用しています。何でも一番にやりたがります。送迎バスは一番前の席に座りたがります。バスが玄関に近づくと、周囲の人を押しのけて走り出し、ドアが開くとすごい勢いで一番前の席に座ります。「人を押しはいけない」と何度も注意していますが、聞き入れません。手を持って止めたりしていますが、体格がよく、力が強いので振り切られてしまいます。高齢の方も多く、危険です。



# FAST

(Functional Analysis Screening Tool)

	要求が満たされる獲得型	不快から逃れられる回避・逃避型
社会的	・注目や関わりの要求 ・物の要求 ・活動の要求	・注目や関わりの回避・逃避 ・物の回避・逃避 ・活動の回避・逃避
個人内	・感覚の要求 ・好みの感覚を得る	・不快な感覚の回避・逃避 ・痛みの軽減

## 個人内の感覚の逃避 (不快な感覚の逃避)

FASTでは「個人内の感覚の逃避・回避」を「痛み」に限定しています。例の場合、騒がしい状況を社会的な場面と考えると、「社会的場面の逃避」と機能を推測してもかまいません。重要なのは、どのような刺激や状況を避けているかを推定することです。

二郎さんは、作業室で作業をしています。作業が終わると、多くの利用者が席を立ち、歩いたり、話をしはじめます。この時間になると二郎さんは、両方の手のひらで大きな音をたてて頭を叩きます。大きな音で頭を叩くので、周囲への影響を考えて、廊下に誘導します。人通りのない廊下にいると、しばらくして頭を叩く自傷はおさまりません。



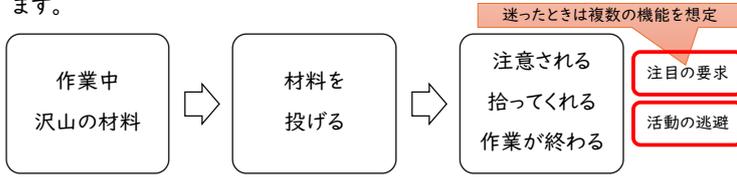
# FAST

(Functional Analysis Screening Tool)

	要求が満たされる獲得型	不快から逃れられる回避・逃避型
社会的	・注目や関わりの要求 ・物の要求 ・活動の要求	・注目や関わりの回避・逃避 ・物の回避・逃避 ・活動の回避・逃避
個人内	・感覚の要求 ・好みの感覚を得る	・不快な感覚の回避・逃避 ・痛みの軽減

## 社会的場面の要求か逃避 (注目の要求か活動の逃避)

花子さんは、美容院のタオルたたみの作業をしています。たたむこと自体は、慣れていて上手です。みんなが座っている机の真ん中に沢山積んであるタオルの山から、自分で取ってたたみます。調子が良い日は50枚たたみます。調子が悪い日は5枚もたたむと、タオルを投げ始めます。投げた時は、支援員が拾って注意をします。それでもやめない時は、投げたタオルは洗い直しになるので、作業をやめて机から離れてもらいます。



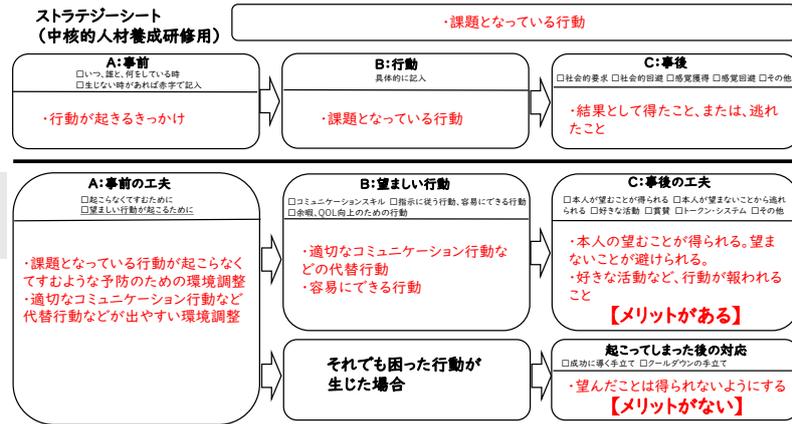
## 課題となっている行動に隠されたニーズ

コミュニケーションとして機能している

物・活動の要求	注目・関わりの要求	活動の回避・逃避	感覚刺激
A: 物や活動が手に入らない状況で起きる	A: 注目や関わりがない状況で起きる	A: 嫌な状況で起きる	A: 特定の感覚がない状況で起きる
C: 行動することで、支援者から、物、活動が得られる	C: 行動することで注目や関わり(そばに来る、声をかける、賞賛、叱責など)が得られる	C: 行動することで、支援者が対応して、嫌な状況がなくなる	C: 行動することで特定の感覚が得られる A: 特定の感覚(特に、痛み)がある状況で起きる C: 行動することで特定の感覚から逃れられたり、軽減したりする

## ストラテジーシート

ストラテジーシート  
(中核的人材養成研修用)



## コミュニケーションの代替行動

同じ機能をもつ適切なコミュニケーションに置き換える



## 代替行動

望ましい行動で、課題となっている行動と同じ結果になる。  
望ましい行動と課題となっている行動は、形は違うが、機能は同じ。



# 演習

## 課題③行動の機能を推測してみましょう

ヒント	直接のきっかけ、周囲の状況、行動直前の対象者の状態など。	対象者の行動を具体的に記述する。「バニシング」「飛走」などは具体的な行動ではないのでNG。	行動に対して周囲はどのように反応したか。またその周囲の反応に対して対象者の行動はどう変化したか。	
日	時間	事前の状況	対象者の行動	事後の状況
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。隣の人は投げ入れている。支援者は後ろにいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。支援者を見る。 <b>機能</b>	ペットボトルは手元からなくなる。支援者が近づくと(本人にとっては近づいてくる)。横につく。次のペットボトルの作業をはじめめる。
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。支援者は横にいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。 <b>機能</b>	支援者が体を止めようとする(本人にとっては、体を寄せてくる)。ペットボトル手元からなくなる。次のペットボトルを渡される。
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。支援者は横にいる。	フィルムとペットボトルをそれぞれの袋に入れる。	ペットボトル手元からなくなる。次のペットボトルを渡される。

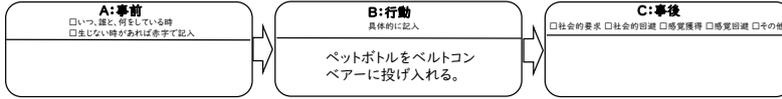
## 課題③行動の機能を推測してみましょう

ヒント	直接のきっかけ、周囲の状況、行動直前の対象者の状態など。	対象者の行動を具体的に記述する。「バニシング」「飛走」などは具体的な行動ではないのでNG。	行動に対して周囲はどのように反応したか。またその周囲の反応に対して対象者の行動はどう変化したか。	
日	時間	事前の状況	対象者の行動	事後の状況
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。隣の人は投げ入れている。支援者は後ろにいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。支援者を見る。 <b>機能 注目/活動の要求</b>	ペットボトルは手元からなくなる。支援者が近づくと(本人にとっては近づいてくる)。横につく。次のペットボトルの作業をはじめめる。
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。支援者は横にいる。	ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。 <b>機能 注目/活動の要求</b>	支援者が体を止めようとする(本人にとっては、体を寄せてくる)。ペットボトル手元からなくなる。次のペットボトルを渡される。
		作業中。フィルムをはがしたペットボトルを持っている。分別する箱と袋。支援者は横にいる。	フィルムとペットボトルをそれぞれの箱や袋に入れる。	ペットボトル手元からなくなる。次のペットボトルを渡される。

社会的な要求のうち、注目、物、活動は分けて書いた方が良い

### ストラテジーシート (中核の人材養成研修用)

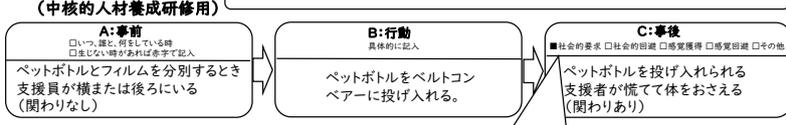
ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。



## 課題④ ストラテジーシートの上段を記入してみましょう

### ストラテジーシート (中核の人材養成研修用)

ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。



## 課題④ ストラテジーシートを記入してみましょう

社会的な要求のうち、注目、物、活動はメモしておく。この場合は「注目」「活動」をどこかに書いておく。

記入し

## まとめ

## まとめ

- 機能的アセスメントとは、本人の視点から、課題となっている行動と環境との相互作用をとらえて、その原因や要因を理解し、支援につなげること。
- 課題となっている行動は、本人の要求やニーズを周囲に伝える行動である。
- 行動と環境との関係を見ることで、行動の機能を推測することができる。特に、行動の後に何が起きているのかが手がかりとなる。
- 課題となっている行動の機能は主に4つある。

## 謝辞

本eラーニングの作成にあたりご協力いただいた、  
本人様・保護者様、  
支援事例を提供頂いた、コープデリ生活協同組合連合会様、  
社会福祉法人はーとふるの関係者様にお礼申し上げます。

# 日常生活場面での直接観察 評価から支援へ

# 研修の流れにおける本講義の位置

- 本講義・演習で使用するワークシート
- 日常生活場面行動アセスメントシート (RAINBOW)

水山モデル MX	科目名	事前学習 (eラーニング)	グループ討議 (オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践 (約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成 研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための 基本的な手順書 ③-2ICFシステムのデータ入力と 分析方法 ④-1ICFシステムで記録した情報を QOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・研修所情報の整理 モデルの基本情報シート、研修所情報シート (ハリスク場編)、BPT-S ICFシートの環境設定 (できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスと チーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ④水山モデル ④チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・ 優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート (+ICFシートの活用・参加)
フェイズ 1	②特性理解とアセ メント: 集合研修	⑤継続している行動の観察と記録 ⑥体系的アセスメント ⑦日常生活場面での直接観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践 (動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの野郎場面の動画撮影 ASBC記録とストラテジーシート (上段)、スキッパープロット (プル) FAST
フェイズ 2	③支援の検討 (行動の分析)	⑧見てわかる工夫 (最適化) ⑧コミュニケーションプログラム ⑧補助的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先順位 (継続行動) の検討と 支援立て	2.5h	ハリスク場面の整理、継続行動の動画撮影 (Before/After) 水山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、 コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート (下段)
フェイズ 3	④支援の立案と実施	⑧支援プランの立案 ⑧支援手順書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書 (観覧合符) の作成と実施 支援現場の動画撮影②、支援報告書等の作成 (ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェイズ 4	⑤支援の見直し (PDCAサイクル)	⑧実施後の評価と改善	[12/24] 現場実況の途中経過報告 (質疑・応答)	2.5h	支援現場の動画撮影②、支援報告書の作成 スキッパープロット (ポスト)、ICFシート (ポスト) チーム支援実行状況チェックシート②
フェイズ 5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェイズ 5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補綴		各受講生の事業所に訪問する、オンライン取り取り (トレーナー・サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー (地域支援をかかえて、サブトレーナーが対応)		

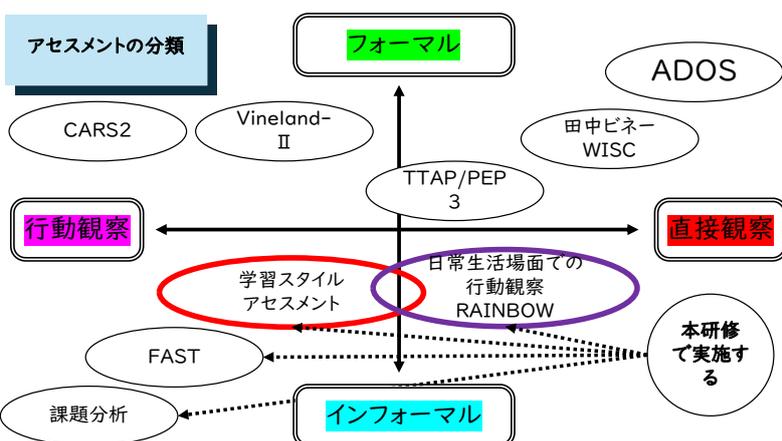
## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

- アセスメントの基本的理解
- 日常生活場面での直接行動観察
- 結果から支援計画へ

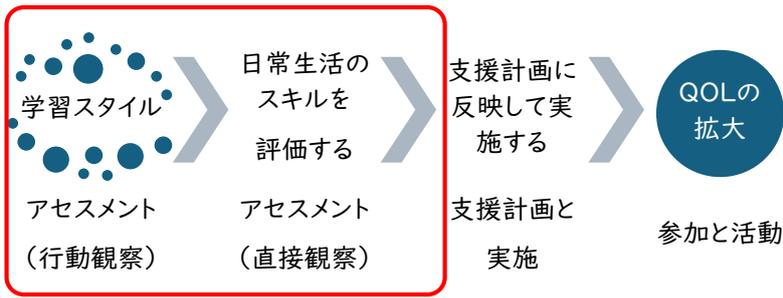
### この講義のねらい

- ねらい1 (知識) : 日常生活におけるアセスメント (直接観察) を学びます
- ねらい2 (技術) : スキルのチェックと学習スタイルから見て分かる工夫の根拠を探します



## アセスメントの基本的理解

## I. アセスメントの目的



## II. アセスメントがなぜ大切か？

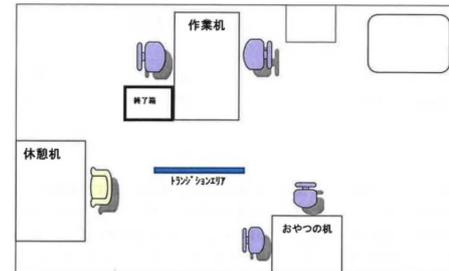
<b>意味</b>	客観的に評価・分析できる(思い込みによる支援を防げる)
	支援の効果を検証できる(やりっぱなしを防げる)
<b>効果</b>	特性とスキルに即した環境調整ができる
	個別化されたオーダーメイドの環境調整ができる
<b>メリット</b>	得られる情報量が多い(短時間で数年分の情報が得られる)
	文脈(ルーティンや記憶)による支配を受けない
	動画などで実際に共有しやすい

## III. アセスメント実施上の注意点

<b>1. 場所を変える</b>	アセスメントの場所と、実際の過ごしの場所は分ける 直接評価の場所と休憩の場所は別に設定する
<b>2. 手続き</b>	合格させようとしな(間違っても肯定的な反応をする) 一気に全てこなそうとしな(休憩・おやつ、数日かけてOK)
<b>3. 評価の基準</b>	合格: 支援に活用できる強み めばえ: 目標にする(練習や見てわかる工夫でできるように) 不合格: 手助けする
<b>4. 指示の階層</b>	手添え>モデルを示す>指さし>言葉の指示を意識する 低い介入から高い介入で理解を確かめる
<b>5. 活かし方</b>	アセスメントの結果を支援に活かすための手段を考える 計画の根拠とし、支援の結果から定期的に更新する

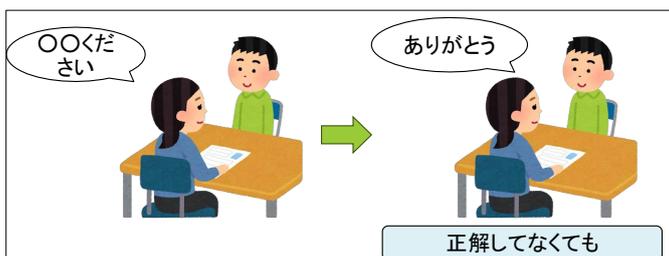
1. 場所を変える アセスメントの場所を実際の過ごしの場所は分ける

- ルーティン(決まった流れ)や記憶、状況による支配から切り離された設定をする
- そのことで、モデル利用者の素のままの特性やスキルが観察可能となる



直接評価の場所と休憩の場所は別々に設定する

2. 手続き 合格させようとしな(間違っても肯定的な反応をする)  
一気に全てこなそうとしな(休憩・おやつ、数日かけてOK)



## IV. 量的評価から質的評価へ | (RAINBOWの右側の欄へ入力)

<b>学習スタイルを確認し更新</b>	見て理解する・細部に注目・見通し・言葉の理解・相手の気持ち・感覚の問題 改めて、学習スタイルの「好むこと」につながるスキルを確認する
<b>学習の態度</b>	指示に従う力(指示しても怒らず応じられるか?) 修正への反応(修正しても怒らないか?) 意味がわからない時の反応(動揺する・分からなくてもやる・拒否する等)
<b>身体の使い方</b>	取り組みの丁寧さ・器用さ・雑さ 利き手が決まっているか・アンバランスさがあるか
<b>集中力・記憶力</b>	注目の仕方・扱える手順の数 余暇などの自由時間の過ごし方
<b>好む物・事 / 苦手な物・事</b>	着目できる好きなものがあるか(6つ以上) 課題となっている行動の引き金となる物・事

# 日常生活場面での直接行動観察 (RAINBOW)

# 日常生活場面行動アセスメント RAINBOW

Rating Assessment for Individuals with ASD Behavior of Whole daily lives



みんなが雨上がりの空に美しい虹を見れるように

## 日常生活場面の行動観察の6つの領域 (全90項目)

認知レベル	職業スキル・職業行動	コミュニケーション	身辺自立・家事活動	興味関心・余暇活動	適応行動
<ul style="list-style-type: none"> <li>●視覚認知</li> <li>●視覚的な情報処理のスキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●職業スキル</li> <li>●作業や活動に取り組むスキル</li> <li>●職業行動</li> <li>●職場(学習)環境での適切なふるまい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●表出</li> <li>●相手に自分の意思を伝えようとするスキル</li> <li>●理解</li> <li>●相手からの意思の理解度</li> <li>●やり取り</li> <li>●コミュニケーションが何度か往復するか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●身辺自立</li> <li>●日常生活のスキルを評価</li> <li>●食事</li> <li>●食事場面のスキルを評価</li> <li>●掃除・洗濯</li> <li>●掃除・洗濯のスキルを評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●社会性</li> <li>●遊びを通じた人とのやりとりやルール理解</li> <li>●余暇</li> <li>●余暇活動のスキル</li> <li>●地域活動</li> <li>●地域における活動スキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●適応/不適応</li> <li>●人・場に即した年齢相応のふるまい, 対処スキル</li> </ul>

## (1) 認知レベル

(1)認知レベル (9項目)	評価	使用した用具・状況・確認した学習スタイル
1 形、色の区別ができる	×	
2 絵、写真の区別ができる	●	
3 自分の名前と他人の名前の区別ができる	●	
4 文字、数字の区別ができる	●	
5 1~10の数を数える	○	
6 1ケタの足し算が自立	○	
7 硬貨の区別と金額がわかる	△	
8 時計(アナログ/デジタル)が読める	○	
9 月間/週間カレンダーがわかる	×	



## 演習 直接観察

**<形・色の分類> (視覚認知)**  
**必要な用具:**  
 ①○△□の方はめパズル(市販の3辺の型ハメパズルでも可)  
 ②赤・青・白の3色の色チップ

**<評価の基準>**  
 ●:実演のあるなしにかかわらず,形と色がどちらも正しく分類できる  
 ○:実演のあるなしにかかわらず,形・色のどちらかが正しい分類できる  
 △:実演のあるなしにかかわらず,形・色チップの間違いが3回以上ある  
 ×:全く分類ができない,あるいは,形パズル・色チップを口に入れるなどかなり不適切な取り扱いをする

**学習スタイル(見て理解する)**  
 ●目に見えない情報(ことば・暗黙の了解・時間など)に気づけない  
 ●経験ある単純レベルの理解

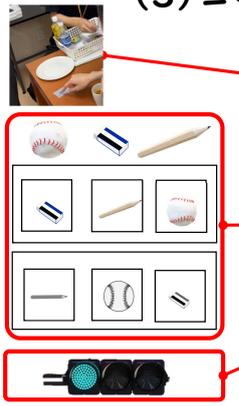
○見える情報から具体的に考える  
 ●写真とイラストで理解する

## (2) 職業スキル・職業行動



(2)職業スキル・職業行動 (13項目)	評価	使用した用具・状況・確認した学習スタイル
10 イラスト・数字カードの仕分け	○	
11 手動シュレッダーの使用	×	
12 紙を半分に折る	●	
13 ハサミで紙を切る	●	
14 ドライバーの使用	×	
15 空き缶つぶし(足や機械で)	×	
16 パソコン・タブレットでの文字入力	×	
17 監督者の指示に従う	△	
18 日課や予定・変更に従う	△	
19 毎日通所する。遅刻をしない	○	
20 ひとりで自立して移動する(屋内)	×	
21 ひとりで自立して移動する(事業所の周囲)	△	
22 ひとりで交通機関を利用して移動する	△	

### (3) コミュニケーション



(3) コミュニケーション (23項目)		評価	使用した用具・状況・確認した学習スタイル
23	自分から手を引く・強る・泣き叫ぶなど	●	
24	ボール・消しゴム・鉛筆の表出	○	
25	写真・絵カードでの表出	○	
26	話し言葉 (単語程度)	○	
27	話し言葉 (二語文以上)	○	
28	自発的に尿意・便意を伝える	●	
29	聞かれたら自分の名前を言うことができる	●	
30	伝言を伝えることができる	△	
31	電話をかけることができる	△	
32	実物を理解する	×	
33	ジェスチャーを理解する	×	
34	写真・絵カード	×	
35	簡単な文字 (漢字・ひらがな・カタカナ)	△	
36	話し言葉 (単語程度)	○	
37	話し言葉 (二語文～三語文程度)	○	
38	裏められたことを理解し前向きに応じる	○	
39	身体への接触に適切に反応をする	○	
40	じゅんげんの意味・ルールがわかる	△	
41	信号を理解し守る	●	
42	注意書き (文字/絵) を見て、守ることができる	○	
43	身近な物 (時計や帽子など) 答えることができる	×	
44	自分から挨拶ができる。聞かれたら自己紹介ができる	△	
45	簡単な日常会話が成立する。(3分以上)	×	

**演習**  
直接観察

**<話し言葉(二語文程度)> (コミュニケーション/理解)**  
必要な用具:  
①ボール1個  
②消しゴム1個  
③鉛筆1本  
④箱1個

**<評価の基準>**  
●: 実演のあるなしに関わらず、全ての話し言葉 (二語文程度) での質問に正答する  
○: 実演のあるなしに関わらず、1~2個は話し言葉 (二語文程度) での質問に正答する  
△: 実演があっても、間違いが3回以上ある  
×: 話し言葉での指示は全て誤答となる。あるいは混乱するか、拒否的である

**学習スタイル(言葉の理解)**

- 話し言葉・抽象概念の理解の難しさ
- 表現コミュニケーションの難しさ

○単語の名詞(生活経験)を理解

### (4) 身辺自立・家事活動



(4) 身辺自立・家事活動 (25項目)		評価	使用した用具・状況・確認した学習スタイル
46	トイレ (小) の自立に一人でできる	○	
47	トイレ (大) に自立 (おしっこができる)	×	
48	生理の手当 (女性) ・着替り (男性) ができる	○	
49	歯を磨くことができる	●	
50	歯を洗うことができる	○	
51	入浴・体を洗うことができる	×	
52	散髪に行くことができる	●	
53	着替えができる	△	
54	自分で衣類を選べる	△	
55	身だしなみ・整髪ができる	○	
56	簡単な買い物ができる	△	
57	簡単な調理ができる	△	
58	食事が適切である	○	
59	テーブルマナーが適切である	×	
60	下着・配膳ができる	△	
61	食器洗いができる	○	
62	テーブル拭きができる	△	
63	窓拭きができる	○	
64	トイレ掃除・風呂掃除ができる	×	
65	掃除機がけができる	○	
66	ゴミ捨てができる	○	
67	洗濯機 (全自動含む) が使用できる	△	
68	洗濯物干しができる	△	
69	洗濯物畳みができる	○	
70	衣類・タオルの畳む・片付けができる	○	

### (5) 興味関心・余暇活動



(5) 興味関心・余暇活動 (15項目)		評価	使用した用具・状況・確認した学習スタイル
71	相手とゲームやルールのある遊びに参加できる	×	
72	友だち・家族と、5分以上適切に遊ぶことができる	○	
73	テレビ・ビデオを観ることができる	△	
74	音楽を聴いて過ごすことができる	●	
75	絵や字を描くことを好む	○	
76	工作や手仕事を好む	○	
77	読書やカタログを読むことを好む	△	
78	テレビゲームやパソコンを好む	△	
79	好きな食べ物、飲み物がある	×	
80	嫌いな食べ物、飲み物がある	×	
81	お金をもらう、お金の意味が分かる	×	
82	買い物やイベントが好き	×	
83	好きな運動、スポーツがある	●	
84	嫌いな運動、スポーツがある	○	
85	外出する活動、習慣がある	×	

### (6) 適応行動

(6) 適応行動 (5項目)		評価	観察状況・確認できた学習スタイル
86	直接観察における行動・態度	△	
87	感覚刺激に対する観察と聞き取り	×	
88	周囲のものへの反応	○	
89	不安・不満や体調不良に関する観察と聞き取り	△	
90	趣味や余暇活動に関する観察と聞き取り	×	

**演習**  
直接観察

**<感覚刺激に対する観察と聞き取り> (適応行動)**  
特になし(直接観察の間、感覚刺激に対する過敏さが見られた場合は、以下のリストを参照して記録しましょう。または、関係者から普段の様子を聞き取りしてください。)

◆**感覚反応リスト:**  
口臭 口臭 口肌触り 口味 口臭臭い 口臭い (先の情報は右側コメント欄へ記入)

<評価基準>  
●: 直接観察中も日常生活場でも、通常の感覚刺激に対しては適切に反応できる  
○: セッション中あるいは日常生活場では1日に2回、通常の感覚刺激に対して過剰に反応することがある  
△: セッション中あるいは日常生活場では1日に3回以上、通常の感覚刺激に対して過剰に反応し、セッションあるいは日常生活に支障をきたすことがある。  
※: 必要に応じてイヤーマフの使用といった配慮が必要

×: 直接評価中も日常生活場でも、頻繁に通常の感覚刺激に対して過剰に反応する。直接評価中、あるいは日常生活にかなりの支障をきたす。常時、イヤーマフの使用といった特別の配慮が必要

**学習スタイル (相手の気持ち・感覚の問題)**

- 人の気持ちを読み取れない
- 相手の立場に気づくことが困難
- 感情理解の困難さ
- 刺激の取捨選択が困難
- 風車やティッシュなどヒラヒラしたものを好む

○私が誰をいく探究心がある  
・明確な指示を受け止められる

○心地よい刺激に没頭  
・好きな歌手のCDがある  
・オルゴールのCDを好む

## VI. RAINBOWのまとめ (質的な情報も記入)

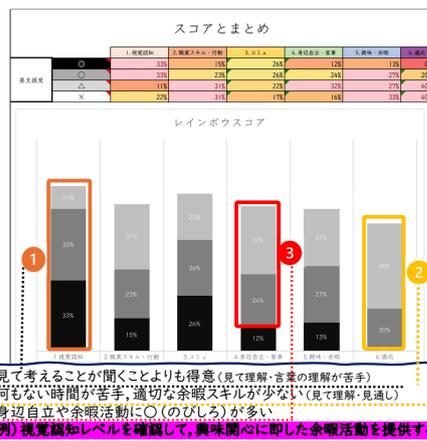
	●システムのまとめ (得意・不得意・学習スタイル)	支援方針/アイデア
視覚認知	①箇条書きにて確認できたスキル (得意/不得意)をまとめる ②確認できた学習スタイルをまとめる	支援方法/アイデアを学習スタイルから記入していく (特に好む事と関連付ける)
聴覚スキル 職業行動		
コミュニケーション		

## VII. 結果から再度学習スタイルの更新へ

評価 使用した用具・状況・確認した学習スタイル

×	
○	
△	
○	
△	
○	
×	

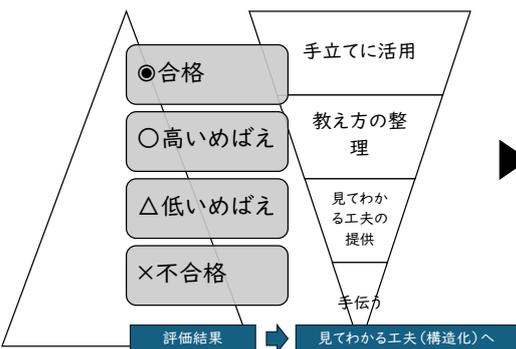
## 結果から支援計画へ



### RAINBOWの結果のまとめ

- RAINBOWのプロフィールスコアから直接観察で確認されたスキルと、日々の評価場面のスキルを確認していく
- ◎スキルを活用して、○スキルや△スキルに狙いを付ける
- 各項目について、特徴的な行動や確認された学習スタイルも考慮する
- 特性&学習スタイルチェックシートも参考にする
- 未評価の項目を確認していくこと、また評価は日々改訂されていく必要がある

## 評価結果から見てわかる工夫と教え方の計画 (公正さへ)



大多数との公平さ  
自立と参加  
生活の質の向上

## 課題選択における優先性の検討

- 学習の可能性、発達の適切性
  - めばえスキルの重視
  - アセスメントに基づく発達レベルにあっていること
- 生活場面での実用性・機能性
  - 生活のいろいろな場面で使える、暮らしに活かせる
  - 年齢相応、本人や家族の好み
- 自立性・成功の可能性
  - 無理のない課題設定、直接の援助や監視がなくても一人で行える
  - 安全、コストパフォーマンス、緊急性
- 本人・家族の希望
  - 本人の意志を尊重する (本人が納得している、やりたがっている)
  - 家族が支援プログラムに協力してもらえるように

## まとめ

### 日常生活場面での直接観察

- RAINBOWの項目に即して(ICFとも連動)
- 場所を変えて直接観察(文脈から離して、少しずつでOK)
- スキルのチェックは量(数値化)と質(学習スタイルの影響)で行う
- 結果から支援目標(既存の目標とのすり合わせも含む)へ

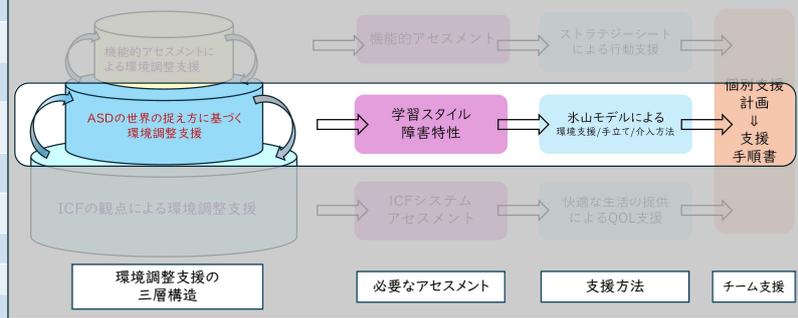
# 見てわかる工夫(構造化)

- 本講義で使用するワークシート
- 自閉症の特性&学習スタイルワークシート
  - 日常生活場面行動アセスメント

# 研修の流れにおける本講義の位置

水山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な情報 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事業所情報の整理 モデルの基本情報シート、事業所情報シート(ハイルスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④自閉症の特性と学習スタイル ⑤水山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性&学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活場面行動アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェーズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	⑦個別のアセスメント ⑧日常生活場面の記録と記録 ⑨機能的アセスメント ⑩日常生活場面の記録と記録	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの野郎場面の動画撮影 ASD記録とストラテジーシート(上段)、スキップアッププロト(プル) FAST
フェーズ2	③支援の検討(行動の分析)	⑪見てわかる工夫(構造化) ⑫コミュニケーションプログラム ⑬機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 水山現場(個別行動)の検討と実践	2.5h	ハイルスク場面の整理、個別行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ3	④支援の立案と実施	⑭支援プランの立案 ⑮支援手帳の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳(観測台)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、実践報告書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェーズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑯実践の評価と改善	[12/24] 現場実装の途中経過報告(個別・全組)	2.5h	支援現場の動画撮影③、実践報告書の作成 スキップアッププロト(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェーズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受講生の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー-サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義の内容とねらい

### この講義の内容

- 見てわかる工夫(構造化)とは
- 見てわかる工夫(構造化)をする時のポイント
- アセスメントに基づく、見てわかる工夫(構造化)事例紹介
- 見てわかる工夫(構造化)の効果と展開
- まとめ

### この講義のねらい

- 見てわかる工夫(構造化)のアイデアを理解し、対象者にとって、不明瞭な生活・事業所生活内を明確化する。
- アセスメントに基づく、見てわかる工夫(構造化)設定の流れを理解する。

## 見てわかる工夫(構造化)とは

# 見てわかる工夫(構造化)とは

自閉症支援における見てわかる工夫(構造化)という用語は、活動をより明確で、実行しやすくするために、

- ・時間の工夫(スケジュール)
- ・方法の工夫(ワークシステム)
- ・場所の工夫(物理的整理統合)
- ・見え方の工夫(マテリアルストラクチャー)

をすることを表す\*

\*参考文献① Mesibov and Shea (2010) を参考に作成

- ・やりとりの工夫(第10回コミュニケーションプログラムで説明)

# 見てわかる工夫(構造化)をする時のポイント

## 見てわかる工夫(構造化)をする時のポイント

私たちの支援が機能するためには、自閉症の人の視点や物事の理解の仕方を私たちが理解すること<sup>b</sup>。

- ・障害特性、学習スタイルの理解
- ・対象者のアセスメント
- 支援に活かせるスキル、興味関心など

水山モデルMX	科目名	事前学習(ラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月)主な使用シート類
	事前学習	①研修概要について ②標準的な支援と中級的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な構想 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・研修所情報の整理 モデルの基本情報シート、研修所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境図子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④自閉症の特性と学習スタイル ⑤水山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活行動増進アセスメントシート(+ICFシートの活用-参加)
フェイズ1	(2)特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題となっている行動の観察と記録 ⑧協働的アセスメント ⑨日常生活場面での記録観察	[9/27、10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの詳細場面の動画撮影 ABC記録とストラテジーシート(上段)、スキッチャープロット(プル)FAST
フェイズ2	(3)支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかる工夫(構造化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫協働的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先順位(協働的行動)の検討と実践 実践の振り返り	2.5h	ハリスク場面の整理、協働的行動の動画撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活動と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェイズ3	(4)支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手帳の作成と実践の対立	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳(協働的行動)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、支援報告書(ICFシートの活用)、チーム支援実行状況チェックシート②
フェイズ4	(5)支援の見直し(PDCAサイクル)	⑮実施後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑-応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキッチャープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
	(6)実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェイズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
	補講				各受講者の事業所に訪問する。オンラインで取り置き(トレーナー-サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別フォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)

## 障害特性、学習スタイル

### 自閉症の特性&学習スタイルワークシート

特性&学習スタイルワークシート	利用名:	チェックした日時(人):
<p>○自閉症の学び方の違い</p> <p>見て理解する(視覚的の側面)  <input type="checkbox"/> 見えない言葉や構造的な理解の困難さ  <input type="checkbox"/> 具体的な指示を理解する  <input type="checkbox"/> 構造的な指示を理解する</p> <p>聴覚的注目(聴覚的の側面)  <input type="checkbox"/> 聴覚的注目の範囲が狭い  <input type="checkbox"/> 聴覚的注目の範囲が広い  <input type="checkbox"/> 聴覚的注目の範囲が広い</p> <p>読解力(読解力の側面)  <input type="checkbox"/> 読解力(読解力の側面)  <input type="checkbox"/> 読解力(読解力の側面)</p>		

## 支援に活かせる学習スタイルやスキル、興味など

### 自閉症の特性&学習スタイルワークシート(特に強み)

自閉症の特性&学習スタイルワークシート(特に強み)	チェックした日時(人):
<p>一対一 見て理解する(強みの側面) 支援の可能性</p> <p>一対一 聴覚的注目(強みの側面) 支援の可能性</p> <p>一対一 読解力(強みの側面) 支援の可能性</p>	

### 日常生活場面行動アセスメント

日常生活場面行動アセスメント	モデル利用者アセスメントパッケージ
(1)認知レベル-やり取り	<input type="checkbox"/> 1 色の区別(弁別)ができる <input type="checkbox"/> 2 線、写真の区別(弁別)ができる <input type="checkbox"/> 3 自分の名前を区別(弁別)ができる <input type="checkbox"/> 4 文字、数字の区別(弁別)ができる <input type="checkbox"/> 5 1~10の数を数える <input type="checkbox"/> 6 1/2の足し算が自立 <input type="checkbox"/> 7 探検の区別と金額がわかる <input type="checkbox"/> 8 時計のアロケツタルが読める <input type="checkbox"/> 9 月曜/通関が読める <input type="checkbox"/> 10 じゃんけん/のルールがわかる <input type="checkbox"/> 11 番号を正確に守る <input type="checkbox"/> 12 注意書き(文字/絵)を見て、守ることができる <input type="checkbox"/> 13 身近な物(時計や椅子など)をさがることができる <input type="checkbox"/> 14 自分から挨拶ができる。聞かれたら自己紹介ができる <input type="checkbox"/> 15 簡単な日常会話(成立する(3分以上))
(2)職業スキル-職業行動	<input type="checkbox"/> 16 絵・数字カードの仕分け <input type="checkbox"/> 17 シェルターの使用

本日の講義では、  
アセスメントに基づく、見てわかる工夫（構造化）の流れを事例から紹介

<p><b>Aさん（自閉症・知的障害）30代男性 生活介護事業所での例</b></p> <p><b>特性&amp;学習スタイル(困難さの側面)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>見えない言葉や時間などの理解の困難さ</li> <li>注目の狭さ</li> <li>気が散りやすい</li> <li>注意の切り替えが難しい</li> <li>困難な状況が行動がとれない</li> <li>情報を整理し、順序立てることが難しい</li> <li>終わりの理解が難しい</li> <li>次の活動に移ることに慣れていない</li> <li>言語の理解の困難</li> <li>家庭コミュニケーションの難しさ</li> <li>ルールの理解の難しさ</li> <li>感覚刺激への過敏さ</li> </ul> <p><b>特性&amp;学習スタイル(強みの側面) 日常生活機能行動アセスメント</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>パターン的に取り組むことに慣れる</li> <li>細くかつら終わりの理解</li> <li>整理された環境で働いた力を発揮する</li> <li>形、色の区別ができる：△</li> <li>手動・ロボットでの操作：◎</li> <li>ひとりですべて移動する(屋内)：○</li> <li>実物を理解する：◎</li> <li>好きな食べ物、飲み物がある：◎</li> <li>好きな運動、スポーツがある：○</li> <li>自分から手を引く強さ：○</li> <li>タブレット・PCでの操作：△</li> <li>直接観察における行動・態度：◎</li> </ul>	<p><b>Bさん（自閉症・知的障害）20代男性 グループホームでの例</b></p> <p><b>特性&amp;学習スタイル(困難さの側面)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>見えない言葉や時間などの理解の困難</li> <li>一般化の困難</li> <li>注目の狭さ(全体が見れない)</li> <li>気が散りやすい</li> <li>注意の切り替えが難しい</li> <li>困難な状況が行動がとれない</li> <li>情報を整理し、順序立てることが難しい</li> <li>終わりの理解が難しい</li> <li>次の活動に移ることに慣れていない</li> <li>言語の理解の困難</li> <li>家庭コミュニケーションの難しさ</li> <li>ルールの理解の難しさ</li> <li>感覚刺激への過敏さ</li> </ul> <p><b>特性&amp;学習スタイル(強みの側面) 日常生活機能行動アセスメント</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>パターン的に取り組むことに慣れる</li> <li>細くかつら終わりの理解</li> <li>整理された環境で働いた力を発揮する</li> <li>形、色の区別ができる：◎</li> <li>鉛、写真の区別ができる：◎</li> <li>1-10の数を数えられる：◎</li> <li>自分から手を引く強さ：◎</li> <li>写真・地図カードでの操作：◎</li> <li>ひとりですべて移動する(屋内)：◎</li> <li>衣服、タオルの整理・片付けができる：○</li> </ul>
---	--

アセスメントに基づく、見てわかる工夫（構造化）事例紹介

基礎研修のおさらい

のぞみの園 強度行動障害支援者養成研修（基礎）  
プログラム4 講義3「支援のアイデア」より

確実に伝えたい6つの情報  
(見える化して伝えたい6つの情報)

- ・ 「いつ」
- ・ 「どこで」
- ・ 「何を」
- ・ 「どのくらい」
- ・ 「どうやって」
- ・ 「次は」

基礎研修のおさらい

6つの情報を確実に伝えるための5つの工夫

<旧>	<新>
のぞみの園 強度行動障害支援者養成研修（基礎） プログラム4 講義3「支援のアイデア」より	今回の研修で使用する用語 参考文献a, c, dより紹介
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時間の工夫（生活の見通し）</li> <li>・ 方法の工夫（やり方・終わり・次）</li> <li>・ 場所の工夫（活動との対応・刺激の整理）</li> <li>・ 見え方の工夫（ヒント・着目）</li> <li>・ やりとりの工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時間の工夫（スケジュール）</li> <li>・ 方法の工夫（ワークシステム）</li> <li>・ 場所の工夫（物理的構造化）</li> <li>・ 見え方の工夫（マテリアルストラチャー）</li> <li>・ やりとりの工夫 (第10回コミュニケーションプログラムで説明)</li> </ul>

※今回の内容に合わせて、講義3「支援のアイデア」資料の提示順番を変更しています。

6つの情報を確実に伝えるための  
5つの工夫

- ・ 時間の工夫（スケジュール）
- ・ 方法の工夫（ワークシステム）
- ・ 場所の工夫（物理的整理統合）
- ・ 見え方の工夫（マテリアルストラチャー）
- ・ やりとりの工夫（第10回コミュニケーションプログラムで説明）

基礎研修の復習と追加情報

時間の工夫（スケジュール）

<旧>	<新>
<p style="text-align: center;">時間の工夫（生活の見通し）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どんな流れで生活するのかという理解を助ける。</li> <li>・ 言われるがまま（または好き放題）ではなく、自分で適切に情報をキャッチし行動できることを大事にする。</li> </ul> <p style="font-size: small;">のぞみの園 強度行動障害支援者養成研修（基礎） プログラム4 講義3「支援のアイデア」より</p>	<p style="text-align: center;"><b>時間の工夫</b> (スケジュール)<sup>a, c, d</sup></p> <p>1日流れや、活動の順番を対象者にとって理解しやすい、意味のある形に整理し、伝える</p>

**Aさん**  
生活介護事業所

特性 & 学習スタイル(困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難さ
- 注目の散ら
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序だてることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 次の活動に移ることの難しさ
- 言語の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- ルールの理解の難しさ
- 感覚刺激への過敏さ

特性 & 学習スタイル(強みの側面)  
日常生活機能行動アセスメント

- パターン的に取り組むことに優れる
- 無くなったら終わりの理解
- 整理された環境で働けた力を発揮する
- 形、色の区別ができる
- 手動スレッダーの使用
- ひとりで自立して移動する(室内):○
- 実物を理解する
- 好きな食べ物、飲み物がある
- 好きな運動、スポーツがある
- 自分から手を引くことができる
- ジェスチャーサインでの表出:△
- 直接観察における行動・態度:◎

## スケジュールの例①



**Bさん**  
グループホーム

特性 & 学習スタイル(困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難
- 聴覚の困難
- 注目の散ら(全体が見えない)
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序だてることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 話し言葉の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- 他者の視点を取ることの困難
- 感覚刺激への過敏さ、または鈍感さ

特性 & 学習スタイル(強みの側面)  
日常生活機能行動アセスメント

- パターン的に取り組むことに優れる
- 無くなったら終わりの理解
- 見て次の活動を理解する
- 整理された環境で働けた力を発揮する
- 形、色の区別ができる
- 形、色の区別ができる
- 1-10の数を数える
- 自分から手を引く
- 写真・絵カードでの表出
- ひとりで自立して移動する(室内):○
- 衣類、タオルの整理・片付けができる

## スケジュールの例②



## 6つの情報を確実に伝えるための5つの工夫

- 時間の工夫 (スケジュール)
- 方法の工夫 (ワークシステム)
- 場所の工夫 (物理的整理統合)
- 見え方の工夫 (マテリアルストラチャー)
- やりとりの工夫 (第10回コミュニケーションプログラムで説明)

## 基礎研修の復習と追加情報

## 方法の工夫 (ワークシステム)

<旧> → <新>

方法の工夫 (やり方・終わり・次)

・「何を」「どのくらい」「どうやって」「次は」という理解を助けるために

一やることの内容や数や順序が違っても進め方は同じというシステムを提示する。

**方法の工夫**  
(ワークシステム)<sup>a, c, d</sup>

対象者が、複数の活動や課題をやりきるために、以下の4つの情報を視覚的に整理して伝える

①何を、  
②どのくらい、  
③どうやって(どうなったら終わりか)  
④次は

のぞみの園 強度行動障害支援者養成研修(基礎) プログラム4 講義3「支援のアイデア」より

**Aさん**  
生活介護事業所

特性 & 学習スタイル(困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難さ
- 注目の散ら
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序だてることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 次の活動に移ることの難しさ
- 言語の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- ルールの理解の難しさ
- 感覚刺激への過敏さ

特性 & 学習スタイル(強みの側面)  
日常生活機能行動アセスメント

- パターン的に取り組むことに優れる
- 無くなったら終わりの理解
- 整理された環境で働けた力を発揮する
- 形、色の区別ができる
- 手動スレッダーの使用
- ひとりで自立して移動する(室内):○
- 実物を理解する
- 好きな食べ物、飲み物がある
- 好きな運動、スポーツがある
- 自分から手を引くことができる
- ジェスチャーサインでの表出:△
- 直接観察における行動・態度:◎

## ワークシステムの例①



**Bさん**  
グループホーム

特性 & 学習スタイル(困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難
- 聴覚の困難
- 注目の散ら(全体が見えない)
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序だてることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 話し言葉の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- 他者の視点を取ることの困難
- 感覚刺激への過敏さ、または鈍感さ

特性 & 学習スタイル(強みの側面)  
日常生活機能行動アセスメント

- パターン的に取り組むことに優れる
- 無くなったら終わりの理解
- 見て次の活動を理解する
- 整理された環境で働けた力を発揮する
- 形、色の区別ができる
- 形、色の区別ができる
- 1-10の数を数える
- 自分から手を引く
- 写真・絵カードでの表出
- ひとりで自立して移動する(室内):○
- 衣類、タオルの整理・片付けができる

## ワークシステムの例②



### ワークシステムの例③



カラオケの活動

### 6つの情報を確実に伝えるための5つの工夫

- 時間の工夫 (スケジュール)
- 方法の工夫 (ワークシステム)
- 場所の工夫 (物理的整理統合)
- 見え方の工夫 (マテリアルストラチャー)
- やりとりの工夫 (第10回コミュニケーションプログラムで説明)

### 基礎研修の復習と追加情報

### 場所の工夫 (物理的整理統合)

<旧>

<新>

**場所の工夫**  
(活動との対応・刺激の整理)

- この場所では何をやるのかという理解を助ける。
  - 整理整頓は基本中の基本
  - エリア (境界) を明確に
  - 場所と活動とが 1対1 対応できれば理想だが...
- 苦手な刺激を少なくするための配慮をする。

のぞみ園 強度行動障害支援者養成研修 (基礎) プログラム4 講義3「支援のアイデア」より

**場所の工夫**  
(物理的整理統合) a, c, d

- 家具の配置や視覚的な合図などの要素を用いて、対象者が特定の区域 (境界のついたエリア) でどのような活動が行われるかを示す
- 過剰な刺激を受ける環境的要因を減らし、注意が逸れることを最小限にする

### 物理的整理統合の例①

**Aさん**  
生活介護事業所

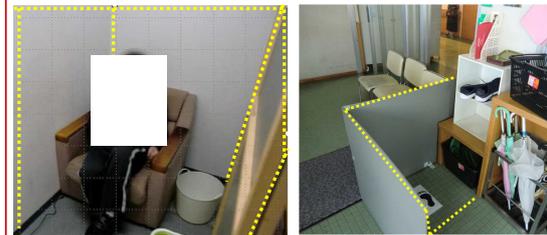
特性 & 学習スタイル (困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難さ
- 注目の狭さ
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序立てることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 次の活動に移ることに難しさ
- 言葉の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- ルールの理解の難しさ
- 感覚刺激への過敏さ

特性 & 学習スタイル (強みの側面)

日常生活機能行動アセスメント

- パターン的に取り組むことに優れる
- 無くなったら終わりの理解
- 整理された環境で優れた力を発揮する
- 形、色の区別ができる: △
- 手動コレクターの使用: ◎
- ひどりで自立して移動する (室内): ○
- 実物を理解する: ◎
- 好きな食べ物、飲み物がある: ◎
- 好きな運動、スポーツがある: ○
- 自分から手を引っ張る: ○
- ジェスチャー・サインでの表出: △
- 直接観察における行動・態度: ◎



① 休憩エリア

② 通所時に靴を置くか、靴の履き替えエリア

### 物理的整理統合の例②



① 休憩 (自由) 時の設定

② 自身でエリアの設定

③ 就寝時の設定の設定

休憩と就寝の物理的整理統合

### 物理的整理統合の例③



**Bさん**  
グループホーム

特性 & 学習スタイル (困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難
- 一般化の困難
- 注目の狭さ (全体が見れない)
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序立てることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 話し言葉の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- 他者の視点を取ることに困難
- 感覚刺激へ過敏さ、または鈍感さ

特性 & 学習スタイル (強みの側面)

日常生活機能行動アセスメント

- パターン的に取り組むことに優れる
- 無くなったら終わりの理解
- 整理された環境で優れた力を発揮する
- 形、色の区別ができる: ◎
- 絵、写真の区別ができる: ◎
- 1~10の数を数える: ◎
- 自分から手を引っ張る: ◎
- 言葉・絵カードでの表出: ◎
- ひどりで自立して移動する (室内): ◎
- 衣服、タオルの整理・片付けができる: ○

## 6つの情報を確実に伝えるための 5つの工夫

- 時間の工夫 (スケジュール)
- 方法の工夫 (ワークシステム)
- 場所の工夫 (物理的整理統合)
- 見え方の工夫 (マテリアルストラクチャー)
- やりとりの工夫 (第10回コミュニケーションプログラムで説明)

## 基礎研修の復習と追加情報

### 見え方の工夫 (マテリアルストラクチャー)

<旧>

<新>

#### 見え方の工夫 (ヒント・着目)

- 見てすぐにわかる情報を提示するために
  - 必要な情報に注目しやすくする工夫
  - 見るだけで何をすれば良いかわかる工夫
  - 情報や材料が見やすい・扱いやすい工夫

のぞみの園 強度行動障害支援者養成研修 (基礎) プログラム4 講義3 「支援のアイデア」より

#### 見え方の工夫

(マテリアルストラクチャー)<sup>a, c, d</sup>

個々の学習教材や作業課題をやりきるために、何をするのか(課題の概念)、進捗、終わり、次に何をするのか等の情報を視覚的な手段を用いて整理する

Aさん

#### 生活介護事業所

##### 特性 & 学習スタイル (困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難さ
- 注目の狭さ
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序だてることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 次の活動に移ることの難しさ
- 言語の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- ルールの理解の難しさ
- 感覚刺激への過敏さ

##### 特性 & 学習スタイル (強みの側面)

日常生活場面行動マネジメント

- パターン的に取り組むことに慣れる
- 無くなった後戻りの理解
- 整理された環境で残った力を発揮する
- 形、色の区別ができる: Δ
- 手動スレゾーラーの使用: ⊙
- ひとりで自立して移動する (屋内): ⊙
- 実物を理解する: ⊙
- 好きな食べ物、飲み物がある: ⊙
- 好きな運動、スポーツがある: ⊙
- 自分から手を引っ張る: ⊙
- ジェスチャー・アイコンでの表出: Δ
- 直接観察における行動・態度: ⊙

### マテリアルストラクチャーの例①



① 除草運搬を示す具体物



② 運搬する数の除草を設定



③ 所定の場所まで運び、草を捨てる



④ 設定された草がなくなったら終わり

Aさん

#### 生活介護事業所

##### 特性 & 学習スタイル (困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難さ
- 注目の狭さ
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序だてることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 次の活動に移ることの難しさ
- 言語の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- ルールの理解の難しさ
- 感覚刺激への過敏さ

##### 特性 & 学習スタイル (強みの側面)

日常生活場面行動マネジメント

- パターン的に取り組むことに慣れる
- 無くなった後戻りの理解
- 整理された環境で残った力を発揮する
- 形、色の区別ができる: Δ
- 手動スレゾーラーの使用: ⊙
- ひとりで自立して移動する (屋内): ⊙
- 実物を理解する: ⊙
- 好きな食べ物、飲み物がある: ⊙
- 好きな運動、スポーツがある: ⊙
- 自分から手を引っ張る: ⊙
- ジェスチャー・アイコンでの表出: Δ
- 直接観察における行動・態度: ⊙

### マテリアルストラクチャーの例②



Bさん

#### グループホーム

##### 特性 & 学習スタイル (困難さの側面)

- 見えない言葉や時間などの理解の困難
- 視覚の困難
- 注目の狭さ (全体が見れない)
- 気が散りやすい
- 注意の切り替えが難しい
- 臨機応変な行動が取れない
- 情報を整理し、順序だてることが難しい
- 終わりの理解が難しい
- 話し言葉の理解の困難
- 表現コミュニケーションの難しさ
- 他者の視点を取ることの困難
- 感覚刺激への過敏さ、または鈍感さ

##### 特性 & 学習スタイル (強みの側面)

日常生活場面行動マネジメント

- パターン的に取り組むことに慣れる
- 無くなった後戻りの理解
- 見て次の活動を理解する
- 整理された環境で残った力を発揮する
- 形、色の区別ができる: ⊙
- 絵、写真の区別ができる: ⊙
- 1→1の数を数える: ⊙
- 自分から手を引っ張る: ⊙
- 写真・絵カードでの表出: ⊙
- ひとりで自立して移動する (屋内): ⊙
- 衣服、タオルの準備・片付けができる: ⊙

### マテリアルストラクチャーの例③



② 各運動の終わりを示す構造化

### マテリアルストラクチャーの例④



軍手干し



## マテリアルストラクチャーの例⑤



感覚の興味を活用した活動



水遊びの活動

## 見てわかる工夫（構造化）の効果と展開

- 本人にとって、「得られるメリット」的な活動になっているか  
eラーニング⑩で解説
- うまく伝わっていないと感じたら、伝え方を見直す（再構造化）  
eラーニング⑮で解説

見直しを続けることで、その人にあった設定になる

前



後



39

## まとめ

### まとめ

- 時間の工夫（スケジュール）
- 方法の工夫（ワークシステム）
- 場所の工夫（物理的整理統合）
- 見え方の工夫（マテリアルストラクチャー）

### ポイント

自閉症の人の視点や物事の理解の仕方（学習スタイル）を私たちが理解し、現在もっているスキルを把握し、活用しながら見てわかる工夫に取り組んでいく

もし、事業所で行動上の問題を示す利用者がいたら、まずは事業所の生活において不明確・曖昧な時間や場面・活動について、見てわかる工夫の検討を

### 参考文献

- Mesibov, G. B., & Shea, V. (2010) The TEACCH Program in the Era of Evidence-Based Practice. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 40, 570-579.
- Mesibov, G. B., et al. (2005). The TEACCH approach to autism spectrum disorders, Springer Science & Business Media.
- 佐々木正美（2004）自閉症児のための絵で見る構造化：TEACCHビジュアル図鑑。（学研のヒューマンケアボックス）
- Mesibov, G. B., Shopler, E., & Hearshey, K. A. (1994) Structured teaching. In E. Schopler & G. B. Mesibov (Eds.), *Behavioral issues in autism*. Plenum Press. New York, 195-207.

### 謝辞

本eラーニングの作成にあたりご協力いただいた、本人様・保護者様、支援事例を提供頂いた、社会福祉法人はーとふるの関係者様にお礼申し上げます。

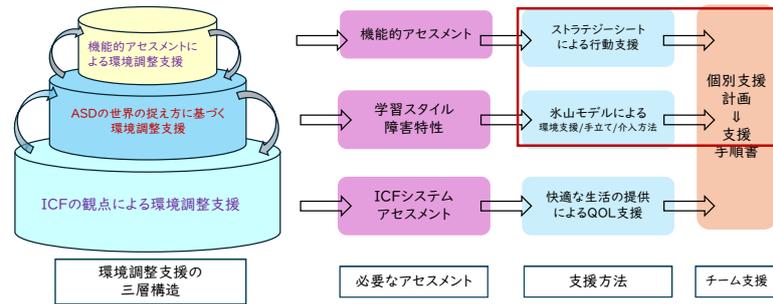
# コミュニケーションプログラム

本講義・演習で使用するワークシート  
 ● コミュニケーションプログラムの実施計画書

# 研修の流れにおける本講義の位置

氷山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な手順書 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事例所情報の整理 モデルの基本情報シート、事例所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
フェイズ1	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤氷山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、氷山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェイズ2	(2)特性理解とアセスメント:集合研修	⑦課題となっている行動の観察と記録 ⑧機能的アセスメント ⑨日常生活場面の正確観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの野郎場面の動画撮影 ASDC記録とストラテジーシート(上段)、スキップアッププロト(プル)FAST
フェイズ3	(3)支援の検討(行動の分析)	⑩見てわかるエピソード(録音化) ⑪コミュニケーションプログラム ⑫機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 実現場(録音行動)の検討と実践	2.5h	ハリスク場面の整理、録音行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート⑩
フェイズ4	(4)支援の立案と実施	⑬支援プランの立案 ⑭支援手順書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(録音分析)の作成と実践 支援現場の動画撮影⑫、支援報告書の作成(ICFシートの活用)、チーム支援実行状況チェックシート⑬
フェイズ5	(5)実践報告会	⑮実践の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑-応答)	2.5h	支援現場の動画撮影⑫、支援報告書の作成 スキップアッププロト(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート⑬
フェイズ6	フォローアップ		[2/10] 現場支援の実践報告会	3h	
補綴			トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義・演習の内容

- ・ 自閉症の人のコミュニケーション
- ・ コミュニケーションの支援
- ・ 演習

### この講義・演習のねらい

- ・ 自閉症のコミュニケーションの困難さや理解、表現、やりとりなどの特徴を理解し、コミュニケーションの支援方法について学ぶ

## 自閉症の人のコミュニケーション

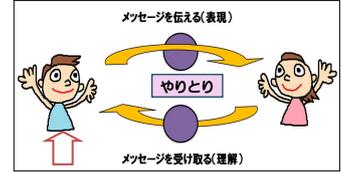
## 自閉症の人のコミュニケーション

- ことばのない自閉症の人も多い
- ことばを持っていても、その実用的な使用で問題になることがある
- コミュニケーションの質的障害
  - たくさんしゃべれているから問題ない、というわけではない
- コミュニケーションがうまくとれないことは、自閉症の人にとって大きなストレスの原因
- 自閉症の人のコミュニケーションの問題を理解することは、支援をする上でとても重要



## コミュニケーションとは

- 他者にメッセージを伝える(表現)
- 他者からのメッセージを受け取る(理解)
- 「伝え合う」という相互作用(やりとり)
  - ことばはコミュニケーションするための1つの手段
  - ことばがたくさんあるからコミュニケーションがうまくいく、とは限らない



### (1) 表現の問題

- ことばがない、ことばがあってもコミュニケーションのためにことばをうまく使えない
  - 偏った機能や文脈でのことばの使用・限定
  - 質問癖、強迫的な言動(好きな話題、気になるテーマ)
  - 即時性/遅延性のエコーリア、独り言
  - 正直すぎる表現、仰々すぎる表現、創作言語
  - 一方的に話をする
  - 奇妙な発音やイントネーション、金切り声や大声、小声でぶつぶつ話す
- 非言語性コミュニケーションの問題
  - 表情に現れない/表情から読み取れない
  - 身振り手振りがほとんどない
- 自発的な表現コミュニケーションが少ない・弱い
  - 即時性エコーリアや指示待ちの問題



### (2) 理解の問題

- 聴覚情報の処理の困難さ
  - 話しことばに注意を向けることが難しい
  - 耳で聞いたことばの中から意味を抽出することがうまくできない
- ことば/文字(文章)を的確に理解できない
  - 言われていることの意味や含意を理解することが苦手
  - 文字通りの理解、一面的な理解、捉え違い
  - ことばかけを合図として捉えている傾向
- 言語表出と言語理解の不均衡
- 非言語性コミュニケーションの理解も困難
  - 視線、表情、身振り、しぐさなどがうまく読み取れない
- 「見て理解する」「絵で考える」



### (3) やりとりの難しさ

- 一方的な会話
  - 話し手/聞き手の交代がうまくできない
  - 話題の維持や切り替えが苦手
  - 質問癖
  - 自分の興味関心のある話題になると、止まらなくなる
- 「心の理論」の問題
  - 相手の話を聞かない
  - 相手の意図や態度・表情に関心がなく、読み取れない
- ちょっとした会話、何気ない挨拶がうまくできない
  - 「今日は暑いですね」→(それで?)

## コミュニケーションの支援

## コミュニケーションの支援①

- 基本は、理解の力を伸ばし、不適切な表現を減らすこと
- 私たちのコミュニケーション技術を高める
  - 常にインフォーマルな評価を：特に自閉症の人は「どこまでわかっているか?」「伝わっているか?」「表現の特徴」をチェックする
- 「理解」を補う：わかりやすく、具体的な指示を出す
  - 過度のことばかけは、誤解されたり不安を高めたりする
  - 視覚的な手がかりを組み合わせる：文字、絵/写真、指さし、見本
  - 場面に応じて、具体的に簡潔な指示を
- 常に、生活全体を構造化する
  - 見通しのある暮らし：スケジュール、ルーティン
  - 落ち着いた生活環境（物理的整理統合）



## コミュニケーションの支援②

- 表現性コミュニケーションのプログラム
- 自発的に、より適切に、自分の気持ちや意図を伝えられるように
- コミュニケーションに関するアセスメント
  - コミュニケーションサンプル
  - アセスメントパッケージ
- 動機の高い場面、構造化された環境で、適切な「表現」のしかたを学ぶ
  - スナックタイム、欠品課題、作業報告、援助要請、サプライズ場面
  - 「おはなし」の時間、選択の機会=チョイスボード
  - PECS®
  - コミュニケーションエイド(VOCAなど)
- 攻撃行動は、本人なりの不適切な表現
  - 機能分析をおこなう
  - うまく表現できないことによるストレス
- 通じたという成功体験が大事

## コミュニケーションの支援③

- 不安や心配事を減らす
  - 質問癖や強迫的な会話がパロメーターになる
  - ことばによる説得やほめめかし、失敗から学ばせようとするやり方は逆効果
- 不適切な表現に対する、周囲の過剰な反応をやめる
  - 対応の統一
  - 周囲が付き合いすぎてエスカレートする傾向
  - 無視することが効果的かどうか？ 引き金を与えないこと
  - 適度なルールを設ける（一方的な「約束」ではなく）
  - いつ、どこで、どれくらい、誰に向かって、何の話をしているかを明確に伝える
- 強迫的な会話にも必然性がある（全部禁止ではうまくいかない）
  - 見通しが持てない（不安や心配）、待てない、他にやることがない、気になって仕方がない……



## コミュニケーションの支援④

- 代替のコミュニケーションスキルを教える
  - ジェスチャーやサイン言語
  - アンケート、日記、手紙、メール、携帯電話
  - PECS®, 絵カード、コミュニケーションブック
  - VOCA(音声出力型コミュニケーションエイド)
- 社会的な意味や抽象概念、感情表現を教える
  - 場面・内容・表現のしかたをセットしておく
  - 視覚的な手がかりを使う：表情の絵、数字パロメータなど
  - ソーシャルナラティブ、コミック会話、CAT-Kit
- ロールプレイ、ソーシャルクラブ、演劇
  - 計画的にコミュニケーションしやすい場面を設定する
  - 無理のないコミュニケーションの機会
  - 徐々に、実生活場面に移行していく



## 演習

## コミュニケーションの実施計画書

コミュニケーションプログラムの実施計画書 (本人、保護者、関係者等が協働して作成・更新する)		
実施者	本人が関与している場合は本人、関係者	
実施日(曜日)	月曜日	
実施時間	15:00-16:00(1時間)	
*プログラムの開始前に行うアセスメント(機能、意図、表現)と、目標設定(コミュニケーションの目標)		
実施場所	本人の部屋	
実施内容	コミュニケーションの目標設定(機能、意図、表現)と、目標設定(コミュニケーションの目標)	
実施状況	本人の部屋	
実施者	本人	関係者
実施日	月曜日	月曜日
実施時間	15:00-16:00	15:00-16:00
実施場所	本人の部屋	本人の部屋
実施内容	コミュニケーションの目標設定(機能、意図、表現)と、目標設定(コミュニケーションの目標)	コミュニケーションの目標設定(機能、意図、表現)と、目標設定(コミュニケーションの目標)

新しい実施目標：より自発的・機能的な表現性コミュニケーションを具体的に設定する

アセスメント情報：アセスメントパッケージその他の情報から、本人が無理なく取り組める目標・実施計画になっているかを確認する

実施計画と経過：プログラムを実施するための場面設定・視覚的な手がかり・教授方法を確認する。実施状況を記録し、必要に応じて実施計画を修正する。

## まとめ

### まとめ

- 自閉症の人にコミュニケーションを教えるのは難しい
  - たくさんしゃべらせればいい、というものではない
  - 伝えることが大事
- コミュニケーションを支援することで、意思の表明と他者への信頼が培われるように
  - 周囲が、無理にことばを引き出そうとしたり、一方的に指示するばかりで(それもわからない言語指示で!)、自閉症の人がコミュニケーションすることが嫌にならないように
  - 自分の気持ちや意図を自発的に表現することは悪いことではない(いいことがたくさんある)、ということを教えたい
  - そのことで、イライラや不適切な行動を予防する
  - 意思決定支援につなげる

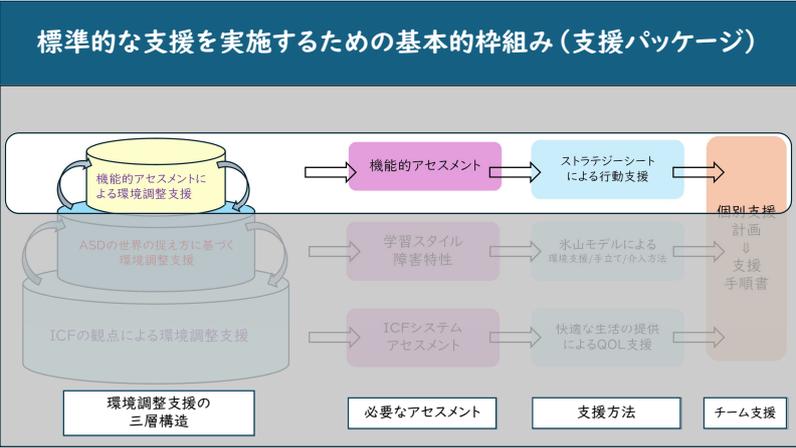


# 機能的アセスメントに基づく支援

本講義・演習で使用するワークシート  
ストラテジーシート(下段)

# 研修の流れにおける本講義の位置

水山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な視点 ④-ZICFシステムのデータ入力と分析方法 ⑤-ZICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事例所情報の整理 モデルの基本情報シート、事例所情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	①学習者の特性と学習スタイル ②水山モデル ③チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、水山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェイズ1	②特性理解とアセスメント:集合研修	①課題の理解とアセスメント ②機能的アセスメント ③日常生活場面での記録観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践 (動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの詳細場面の動画撮影 ASBC記録とストラテジーシート(上段)、スキッパープロット(プル) FAST
フェイズ2	③支援の検討(行動の分析)	④見てわかるエピソード ⑤コミュニケーションプログラム ⑥機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 水山現場(機能的行動)の検討と実践	2.5h	ハリスク場面の整理、機能的行動撮影(Before/After) 水山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、 コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェイズ3	④支援の立案と実施	⑦支援プランの立案 ⑧支援手順書の作成と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手順書(観測台)の作成と実践 支援現場の動画撮影②、支援報告書等の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェイズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑨実践後の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑-応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキッパープロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェイズ5	⑥実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告	3h	
フェイズ5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受講生の事業所に訪問する。オンラインで取り取り(トレーナー-サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別フォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

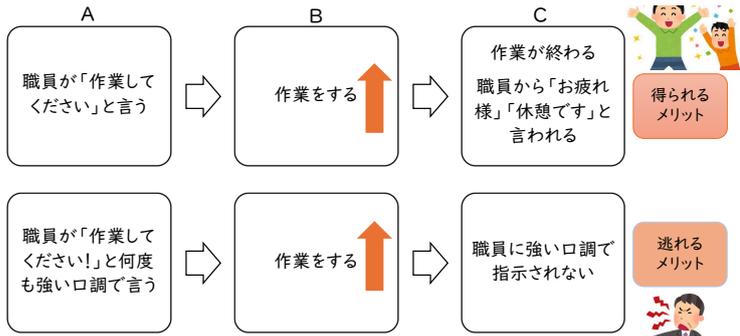
- ABCの枠組み
- 機能に基づく支援計画
- 演習
- まとめ

### 講義・演習のねらい

- ABCの枠組みで、課題となっている行動が増えたり減ったりするしくみを理解する。
- ストラテジーシートを用いて支援方法を検討できる。

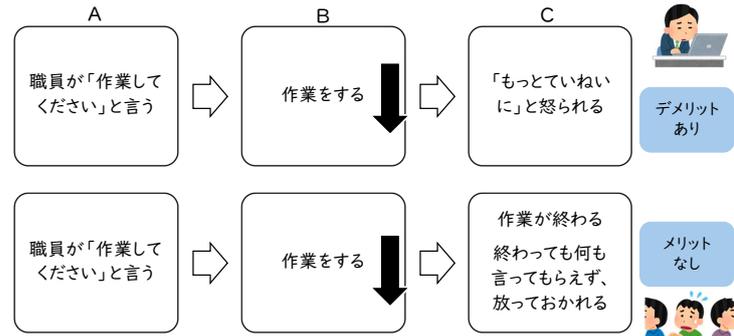
## ABCの枠組み

### 行動の事後の結果 (C) にメリットがあると行動は増える



支援者にとって望ましい行動が出るからといって、本人が嫌がる結果を使用する嫌悪的アプローチは禁止

### 行動の事後の結果 (C) にメリットがないと行動は減る



他害があるから避けられない椅子に座らせる等、行動が減るからといって嫌悪的アプローチの使用は禁止

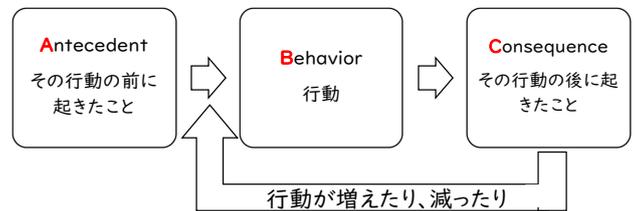
### 結果 (C) に注目する



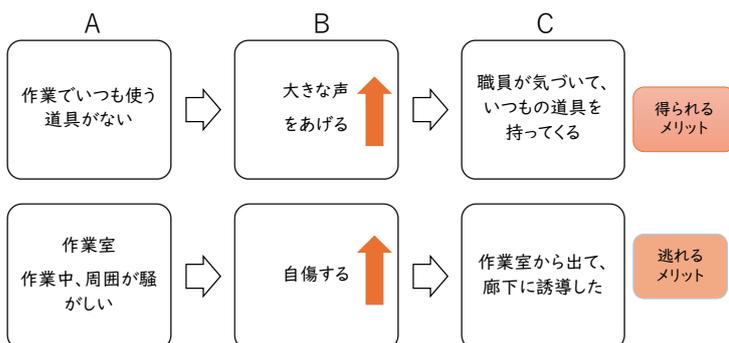
### 行動の増減は結果 (C) によって左右される

ある【A事前の状況やきっかけ】で  
ある【B行動】をして  
好ましい【C事後の状況】が得られると  
将来、その行動は起きやすくなる

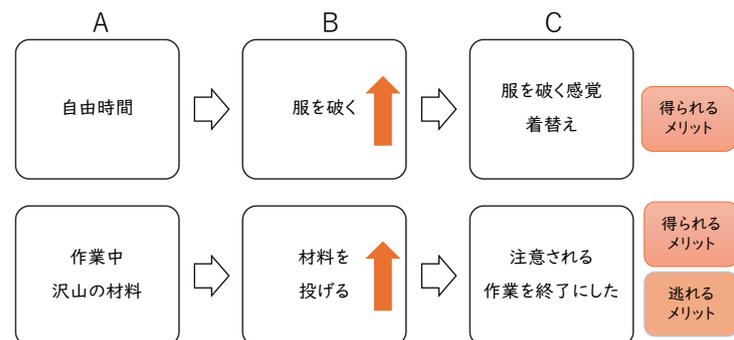
得られる  
メリット



### 望ましい行動も課題となっている行動も事後の結果 (C) によって増える

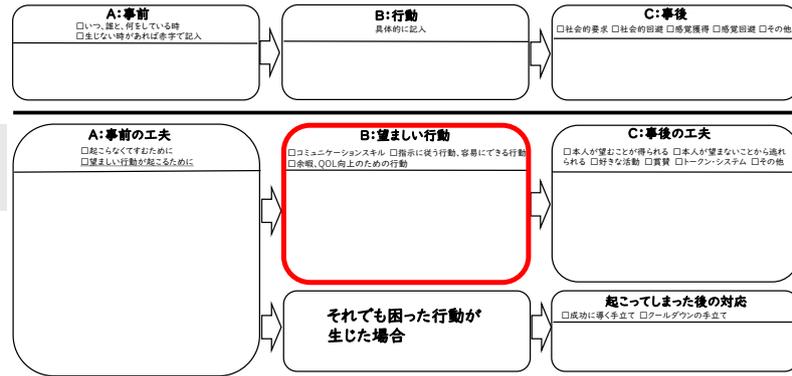


### 望ましい行動も課題となる行動も事後の結果 (C) によって増える



## 機能に基づく支援計画

### ストラテジーシート (中核的人材養成研修用)



## 同じ機能の行動(コミュニケーション行動や代替行動)の例

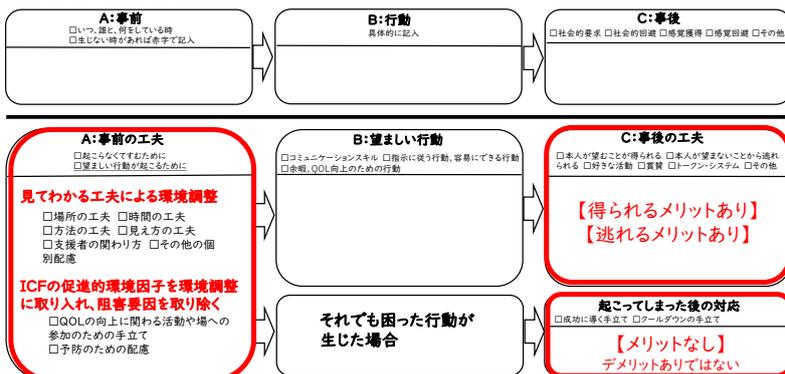
- 物や活動の要求
  - 欲しい物やしたい活動を具体物の選択肢から選択してもらう
  - 欲しい物やしたい活動を示すカードと欲しい物を交換する
- 注目や関わりの要求
  - 活動が終わったら報告をする
  - 活動を一緒に行う
- 社会的な場面での回避や逃避
  - やりたくない時に「終わり」を示すカードを渡す
  - その場を離れたいときに、あらかじめ決めた場所に自発的に移動する
- 感覚
  - 破壊の感覚を求めている方に、リサイクル作業で破壊の感覚を作業内で得られるようにする
  - 人が多く集まる時間はノイズキャンセラーのイヤホンでラジオを聴く

### アセスメントに基づく望ましい行動を選ぶポイント

- 同じ機能のコミュニケーション行動
- 容易にできる代替えとなる行動
- 同時にできない行動
- その場に適した望ましい行動
- QOLの向上につながる行動
- 余暇 等々

日常生活場面行動アセスメントシートの活用

### ストラテジーシート (中核的人材養成研修用)



## 演習

・演習課題⑤「ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる」行動への対応について、ストラテジーシートの下段を記入してみましょう。

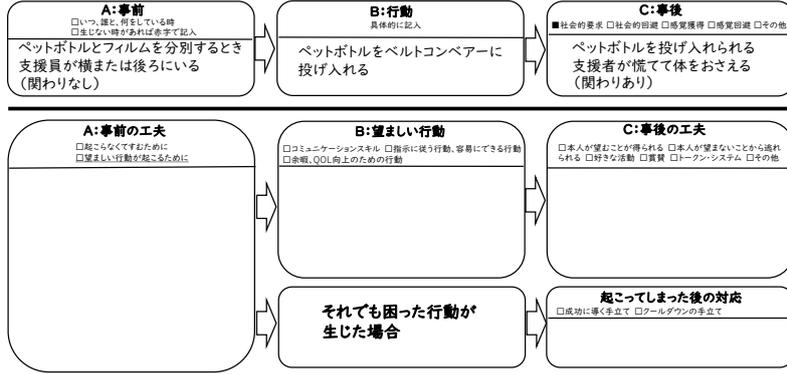
・アイデアを発散する場面です。実行可能性の低いことも出してみましょう。

演習課題⑤

ストラテジーシート

(中核的人材養成研修用)

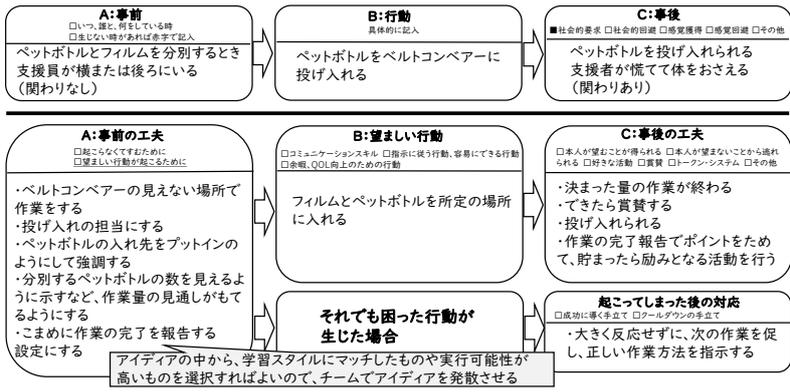
ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。



ストラテジーシート

(中核人材養成研修用)

ペットボトルをベルトコンベアーに投げ入れる。



まとめ

- 強度行動障害では、どうしても激しい行動の形(自傷か、破壊かなど)に目がいきがちになるが、ABCの枠組みでは、行動の前後の環境側の変化に目を向ける。
- 望ましい行動も課題となっている行動も、行動の事後の結果によって、増えたり、減ったりしている。
- 支援では、望ましい行動やQOLの向上につながる行動を生じやすくするために、AとC、つまり行動の前後の環境を調整していく。

謝辞

本eラーニングの作成にあたりご協力いただいた、本人様・保護者様、支援事例を提供頂いた、コープデリ生活協同組合連合会様、社会福祉法人はーとふるの関係者様にお礼申し上げます。

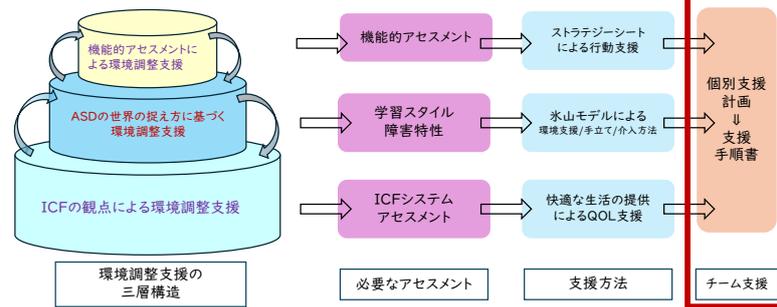
# 支援プランの立案

本講義・演習で使用するワークシート  
● 支援プランの立案ワークシート

氷山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ習得(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な情報 ④-ZICFシステムのデータ入力と分析方法 ⑤-ZICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事例情報整理 モデルの基本情報シート、事例情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
フェイズ1	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤氷山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、氷山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェイズ2	(2)特性理解とアセスメント:集合研修	⑦機能的アセスメント ⑧地域生活場面での記録観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と実践 (動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの親子の動画撮影 ASDC記録とストラテジーシート(上段)、スキップアプロット(プル) FAST
フェイズ3	(3)支援の検討(行動の分析)	⑨見てわかるエピソード(編成化) ⑩コミュニケーションプログラム ⑪機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先場面(機能的行動)の検討と実践	2.5h	ハリスク場面の整理、機能的行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム実践状況チェックシート①
フェイズ4	(4)支援の立案と実施	⑫支援プランの立案 ⑬実践中観察の行版と実践の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援多職種(職能)の作成と実践 支援現場の動画撮影②、実践報告書の作成(ICFシートの活用)、 チーム実践状況チェックシート②
フェイズ5	(5)実践の見直し(PDCAサイクル)	⑭実践の評価と改善	[12/24] 現場実践の途中経過報告(質疑・応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、実践報告書の作成 スキップアプロット(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム実践状況チェックシート③
フェイズ6	(6)実践報告会		[2/10] 現場支援の実践報告会	3h	
フェイズ7	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受療者の事業所に訪問する。オンラインで取り取り(トレーナー・サブトレーナーで対応) 研修期間中、受療者への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

# 研修の流れにおける本講義の位置

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

- 支援計画の考え方
- 支援計画作成のポイント
- 演習
- まとめ

### この講義のねらい

- ICFを活用したQOLを意識した支援計画の目標設定や手立てについて理解する
- 様々なアセスメントに基づいた支援について理解する

## 支援計画の考え方

## 強度行動障害の視点から見た支援計画の課題



## 支援計画はマネジメントサイクルの要

## 支援計画作成のポイント

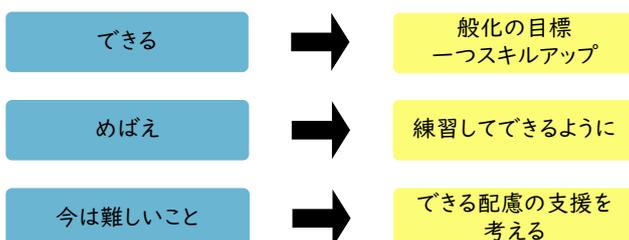
### ポイントを確認します



### 支援計画とアセスメントの結びつき

- ニーズアセスメント→優先順位
- スキルアセスメント→具体性
- 学習スタイル/特性アセスメント→支援の手立て

### スキルアセスメントの活用



### 具体的な目標設定

- ゴールの行動をイメージする (Imagine the behavior of the goal)
- 目標の中に具体性をいれる (Put specificity in the goal)

## 具体的な目標設定を考える

- 具体的:計測できる要素  
(数、距離、場面、時間、工程、援助量など)
- 行動:動詞表現になっている  
(本人のゴールの行動をイメージすること)

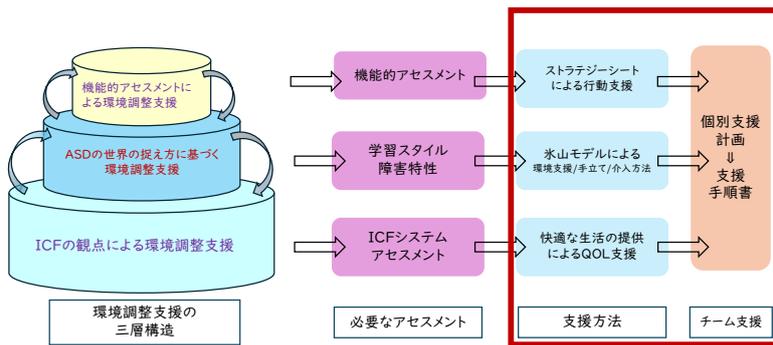
例

- 食具が使える→お弁当のフタの上に乗っているおかずをフォークで食べる
- 言葉を話せる→クラスで担任の先生に要求や自分の気持ちを伝える  
(10場面)
- 身の回りのことが自分でできるようになる→一人で着替えをすることができる

## QOLの視点を入れる

- 課題となっている行動から解放された後の生活をイメージする
- 本人にとってわかりやすい環境
- ICFの生活ベースの視点を考える

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 支援計画シートの書式から確認してみましょう

支援計画シート  
期間：20××年4月1日 - 20××年9月30日

個人 対応シート での記載	実施する具体的な支援が本人の暮らしを整えたい	実施する具体的な支援が本人の暮らしを整えたい
1-1 行動目標	1-1 行動目標	1-1 行動目標
2-1 生活の質	2-1 生活の質	2-1 生活の質
3-1 学習スタイル	3-1 学習スタイル	3-1 学習スタイル
4-1 ICF	4-1 ICF	4-1 ICF

※参考書式：あらかる。http://www.arakarunet.com/

## 支援計画シートの書式から確認してみましょう

- ニーズアセスメント
- スキルアセスメント
- ICFのアセスメント

支援計画シート  
期間：20××年4月1日 - 20××年9月30日

個人 対応シート での記載	実施する具体的な支援が本人の暮らしを整えたい	実施する具体的な支援が本人の暮らしを整えたい
1-1 行動目標	1-1 行動目標	1-1 行動目標
2-1 生活の質	2-1 生活の質	2-1 生活の質
3-1 学習スタイル	3-1 学習スタイル	3-1 学習スタイル
4-1 ICF	4-1 ICF	4-1 ICF

- 学習スタイル
- 特性アセスメント
- スキルアセスメント

## 支援計画シートの書式から確認してみましょう

具体的な行動目標で書かれていると、チームでも支援のイメージが持ちやすくなる

支援計画シート  
期間：20××年4月1日 - 20××年9月30日

個人 対応シート での記載	実施する具体的な支援が本人の暮らしを整えたい	実施する具体的な支援が本人の暮らしを整えたい
1-1 行動目標	1-1 行動目標	1-1 行動目標
2-1 生活の質	2-1 生活の質	2-1 生活の質
3-1 学習スタイル	3-1 学習スタイル	3-1 学習スタイル
4-1 ICF	4-1 ICF	4-1 ICF

学習スタイルと特性、スキルのアセスメントから本人に合わせた支援を考える

# 演習

13: 支援計画の立案 (ワークシート)

ニーズアセスメント(目標を絞り込む)			
<p><b>保護者の思い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グループワークでの学び</li> <li>●一人で思いや行動できるようにしたい</li> <li>●社会生活で自立できるようにしたい</li> <li>●パソコンやスマホ、使えなくなると困る</li> <li>●生活リズムを整えたい</li> </ul>	<p><b>支援者の思い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グループワークを通して、目標達成までの道のりを確認して欲しい</li> <li>●学習意欲が向上するのを期待する</li> <li>●グループワークを通して、生活リズムを整えたい</li> <li>●生活リズムを整えたい</li> </ul>	<p><b>本人の思い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●新しいことを学びたい</li> <li>●新しい友達を作りたい</li> <li>●新しい生活リズムを整えたい</li> <li>●新しい生活リズムを整えたい</li> </ul>	<p><b>支援者の思い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グループワークを通して、目標達成までの道のりを確認して欲しい</li> <li>●学習意欲が向上するのを期待する</li> <li>●グループワークを通して、生活リズムを整えたい</li> <li>●生活リズムを整えたい</li> </ul>
ニーズアセスメント(目標を設定する)			
得意	得意	得意	得意
<p><b>身体自立</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> </ul>	<p><b>生活自立</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> </ul>	<p><b>社会自立</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> </ul>	<p><b>生活自立</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> <li>●歩く</li> <li>●立つ</li> </ul>

## 演習: アセスメントから目標を一つたててみる

- ワークシート内のアセスメント欄を確認して目標を一つたててください
- 作成した後に3つのチェックポイントを確認してください

## チェックポイント

支援計画とアセスメントの結びつき

具体的な目標設定

QOLの視点を入れる

領域	行動目標	目標に向けて習得するスキル	環境/手立て/配慮/教え方
職場スキル/職務行動	30分以内の事業所の仕事に取り組む(新しい仕事2種類)	・2種類の新しい仕事 ・30分程度持続して仕事をする	・作業量を目で見てわかるように設定留守 ・壁側の端(決まった場所)で他利用者と距離を取る ・報告確認後はすぐにトークンを選ぶ
興味関心/余暇活動	20分程度、自由時間を過ごす(新しい余暇グッズ5種類)	・5種類の新しい余暇グッズ ・20分程度自由時間を過ごす	・要求できる余暇グッズの写真カード ・他利用者とバッティングしないような距離で職員が見守る ・最低でも3つ余暇グッズを設定し、午前と午後で変更する
職場スキル/職務行動	欲しいものリストから月刊のトークンのご褒美を選択し、目標に向かってトークンを貯める	・トークンとご褒美の交換 ・欲しいものリストから選択する ・トークンを貯める	・トークンボードを用意する ・欲しいものリストを用意する ・ほしい物リストのアセスメントを1ヶ月に1回行う
コミュニケーション	離れたスタッフに要求や困ったことを伝える(3種類で15種類のコミュニケーション)	・3つの場面でコミュニケーションカードを使う ・新しい15種類のコミュニケーションカードを使う	・要求できる余暇グッズの写真カードを用意する ・写真カードは本人がイメージできるものを用意する ・2 or 3つの活動を選択ボードで選択

## まとめ

## 支援計画のまとめ

- チェックポイントの整理
- 学びやすい環境設定
- 教える視点を入れることも大切

# 支援手順書の作成と実際の対応

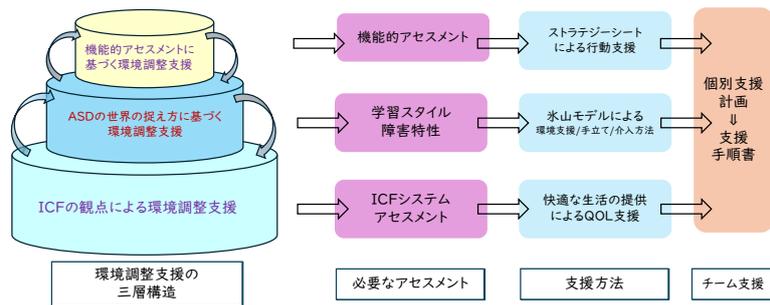
本講義・演習で使用するワークシート

- 課題分析シート
- 支援手順書

# 研修の流れにおける本講義の位置

氷山モデルMX	科目名	事前学習(eラーニング)	グループ討議(オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践(約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な枠組み ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事例情報整理 モデルの基本情報シート、事例情報シート(ハイルスク場面)、BPT-S ICFシート(環境因子(できるだけ実施))
	フェイズ1	①研修ガイダンスとチーム支援 ②氷山モデル ③チーム支援	④ガイダンス研修ガイド ⑤モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、氷山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシート)の活用(参加)
	フェイズ2	①特性理解とアセスメント:集合研修 ②行動の検討(行動の分析)	⑥課題となる行動の観察と記録 ⑦機能的アセスメント ⑧日常生活場面の記録 ⑨見えてわかるエピソード(録音化) ⑩コミュニケーションプログラムの機能的アセスメントに基づく支援	2.5h	モデルの観察と実践(動画によるプレゼン) FAST ハイルスク場面の整理、機能的アセスメント(Before/After) 氷山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
	フェイズ3	④支援の立案と実施	⑪支援プランの立案 ⑫支援手順書の作成と実際の対応	2.5h	支援計画シート、支援手順書(個別合符)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、支援報告書(個別合符)の作成と実施 ICFシート(環境)、チーム支援実行状況チェックシート②
	フェイズ4	⑤支援の見直し(PDCAサイクル)	⑬実施後の評価と改善	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキューパーアセスメント(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
	フェイズ5	⑥実施報告書	⑭実施報告書の作成	3h	
	フォローアップ		⑮フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催
	補綴				各受療生の事業所に訪問する、オンラインで取り取り(トレーナー/サプトレーナーが対応) 研修期間中、受療生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サプトレーナーが対応)

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



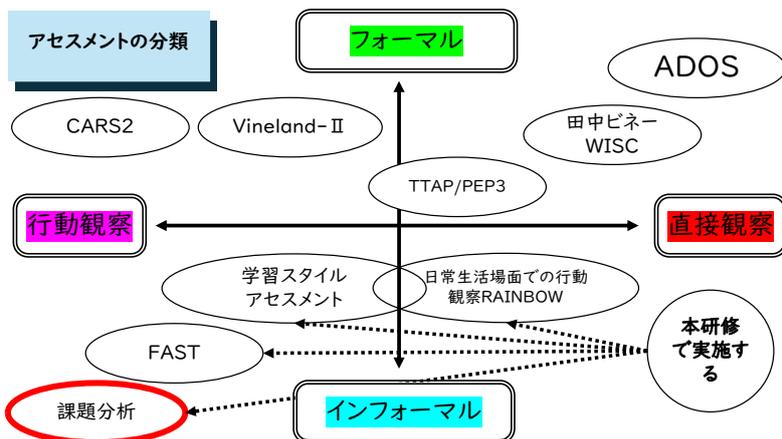
## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

- 課題分析
- 教え方(指示の階層)
- 教え方の実践
- 支援手順書

### この講義のねらい

ねらい1(知識): 自閉症の学習スタイルと理解スキルに応じた課題分析を理解する  
ねらい2(技術): 課題分析に沿った教え方と改善の指標をチームで理解し実施する



## 課題分析

### ●課題分析とは

- ・インフォーマルな行動観察によるアセスメント
- ・活動の手順を、小さな行動単位に分けて、時系列に並べて記述したもの（プログラム学習）
- ・自立の度合いを評価でき、いつも同じ手順と関わり、そして最小限の指示で活動を自立に導くもの

## 【課題分析の意味】

### ① 支援の目的を確認する (RAINBOWを参照に)

- ・身辺自立: 食事の仕方、着替え、歯磨き、入浴、トイレ、身だしなみなど
- ・家事: 掃除、洗濯、洗濯干し・たたみ、片付け、買い物など
- ・その他: 散歩、運動、地域の公共施設・交通機関の利用など

### ② 支援の組み立て方 (状況設定・期間) を作る

- ・「いつ、どこで、何を、どのくらい、どのように、誰と」

### ③ 教え方の段取り (手続き) を整理する

- ・どの教え方が一番有効か? 手添え>モデル>指さし>言葉

### ④ 支援の効果をモニタリング

- ・支援の改善につなげる (教え方・環境調整の改善)

## 【課題分析の作り方】

- ・熟知している人のやり方を観察する
- ・熟知している人からコツややり方、工夫を聞き取る
- ・支援者が実際にやってみる
- ・最も利用者に適したやり方や行程を決める
- ・手順を細かな行動単位に分けて書き出す
- ・はじめから細かく分析しない (うまくいかない場合に細かく)
- ・物や活動に名前をつける (活動名は大切)
- ・具体的で簡潔な言葉で記載する (左手で封筒の両側を押さえて、右手で封筒の口を開き、チラシを入れる…)

## 【② 支援の組み立て方 (状況設定) を作る】

例) 食器洗い

課題	食器洗いが一人でできるようになる
理由	・食器洗いのスキルがある・水が好き・家族の希望・GHでの生活を 目指して・今後、調理や買い物につなげたい
場面設定	いつ=毎夕食の後 誰が=お母さんが教える どこで=台所の流し 何が=はじめは自分の食器だけ
方法	食器洗いの場면을構造化する 「課題分析 (後で説明)」を行い、直接援助のポイント絞る 教え方 (モデリング) と声かけて回数教える
評価期間	6月から7月 毎夕食後、記録する 習熟と自立の度合いを確認する (達成度評価)

## 【課題分析の活動例】

例) 食事場面

食堂で食事を食べる

- ①自分の席に座る
- ②自分の分を座って食べる
- ③嫌いなものは適切に残す
- ④欲しい時にはおかわりを求める
- ⑤食事が終わるまで待つ
- ⑥片付ける
- ⑦次の行動に移る

例) 移動場面 (地域活動)

路線バスに乗る

- ①バス停で待つ
- ②適切なバスに乗る
- ③空いている席に座る
- ④席が空いていない時は、立つ
- ⑤落ち着いて乗っている
- ⑥予定された場所で、降りる準備をする
- ⑦PASMOをリーダーにかざす
- ⑧バスから降りる

## 教え方(指示の階層)

## 【指示の4階層(教え方)】

### ●上手な活動の教え方

- ・支援者が手順を習熟している・いつも同じ手順で教える
- ・指示や手がかりの出し方(タイミングも)が最小限で的確
- ・正しくできたら誉める(その人に伝わる方法で)



## 【課題分析の記録をつけよう】

路線バスに乗る	
①バス停で待つ	V
②適切なバスに乗る	V
③空いている席に座る	G
④席が空いていない時は、立つ	+
⑤落ち着いて乗っている	M
⑥予定された場所で降りる準備をする	G
⑦PASMOをリーダーにかざす	+
⑧バスから降りる	+

+=自立 V=言葉 G=ジェスチャー M=モデル P=手添え

## 【課題分析を利用して教える】

行動の単位	1回	2回	3回
①食器を流しに持って行く	G△	V△	V△
②スポンジに洗剤をつける	P△	G△	G△
③食器をスポンジで洗う	M△	V△	V△
④スポンジをゆすいで片付ける	G△	V△	+
⑤食器を水洗いしてカゴに入れる	G△	G△	V△
⑥食器を布巾でふく	G△	V△	V△
⑦食器を食器棚に片付ける	G△	V△	+

+=自立 V=言葉 G=ジェスチャー M=モデル P=手添え

## 【課題分析を利用して教える】

### 「見て分かる工夫のアイデア」

行動の単位	見て分かる工夫(構造化)のアイデア
①食器を流しに持って行く	スケジュールで提示
②スポンジに洗剤をつける	洗剤の量はキャップ1杯
③食器をスポンジで洗う	ルーチン(内側5回→外5回)
④スポンジをゆすいで片付ける	スポンジおきを設置
⑤食器を水洗いしてカゴに入れる	全部水桶に入れてから、1ずつ水洗いする
⑥食器を布巾でふく	ルーチン(内側5回→外5回)
⑦食器を食器棚に片付ける	食器おきを設置

## 【課題分析の修正や応用】

### ●本人に適したやり方を決める

- ・ステップの項目を見直す(細かくor粗く)
- ・つまづきの理由を推測し補い方を検討(スキルなのか、注目なのか、環境なのか、感覚の問題?)

### ●視覚的な手がかりの工夫

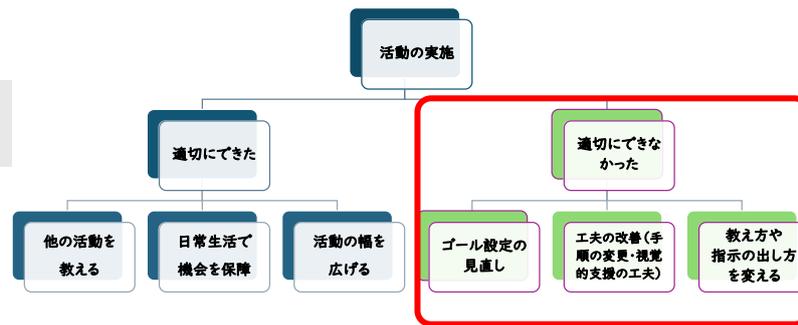
- ・開始や終わり方の手がかり、手順や進め方、場所や範囲の提示、ポイントの強調など

### ●その他

- ・ルーティンの活用や本人の慣れ親しんだ方法など

## 【支援の方向性を検討する】

### 教え方の実践



### アセスメントから見て分かる工夫(構造化)の改善

ステップ	初回	2回	3回
1 自立課題に取り組む	P△		
2 無くなったからおしまい	P△		
3 終了箱に入れる	P△		

評価

学習スタイル



- ①見て理解>言葉の理解が困難
- ②注目が狭くて強い(注目すべき情報に注目できない)
- ③活動や時間の「はじまり」と「終わり」見通せない

### 再評価と見て分かる工夫(構造化)の改善

ステップ	初回	2回	3回
1 自立課題に取り組む	P△	○	○
2 無くなったからおしまい	P△	○	○
3 終了箱に入れる	P△	M△	○

学習スタイル

改善内容



### アセスメントから見て分かる工夫(構造化:時間の工夫)

ステップ	初回	2回	3回
1 勉強カードを受け取る	○		
2 勉強カードをポケットに入れる	P&G△		
3 着席して勉強に取り組む	○		

再評価

学習スタイル



- ①見て理解する
- ②注目が狭く強い(注目すべき情報に注目できない)
- ③活動や時間の「はじまり」と「終わり」が見通せない

### 再評価と見て分かる工夫(構造化:時間の工夫)の改善

ステップ	初回	2回	3回
1 勉強カードを受け取る	○	P△	○
2 勉強カードをポケットに入れる	P&G△	M△	○
3 着席して勉強に取り組む	○	○	○

学習スタイル

改善内容







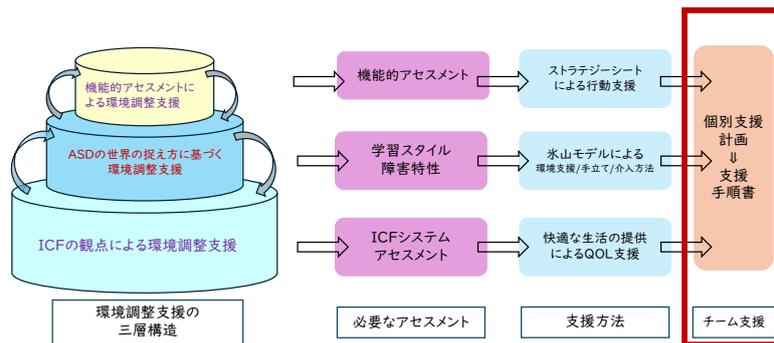
# 実施後の評価と改善

# 研修の流れにおける本講義の位置

本講義・演習で使用するワークシート  
 ● 実施後の評価と改善ワークシート

氷山モデルMX	科目名	事前学習 (eラーニング)	グループ習得 (オンライン/集合研修)	時間	グループ討議後の現場の実践 (約1ヶ月) 主な使用シート類
	準備期間	①研修概要について ②標準的な支援と中核的人材養成研修の基本視点 ③-1標準的な支援を実施するための基本的な情報 ③-2ICFシステムのデータ入力と分析方法 ③-3ICFシステムで記録した情報をQOL支援に活用する	-	1.5h	モデル情報・事例情報整理 モデルの基本情報シート、事例情報シート(ハリスク場面)、BPT-S ICFシートの環境因子(できるだけ実施)
	(1)研修ガイダンスとチーム支援	④学習者の特性と学習スタイル ⑤氷山モデル ⑥チーム支援	[8/26] 研修ガイダンス モデルを含む現場支援の状況・優先順位の確認	2.5h	支援現場-モデルの親子の動画撮影 特性と学習スタイルワークシート、氷山モデルワークシート 日常生活行動場面アセスメントシート(+ICFシートの活用・参加)
フェーズ 1	(2)特性理解とアセスメント:集合研修	⑦機能的アセスメント ⑧地域生活場面での記録観察	[9/27, 10/1] モデルの紹介と変更(動画によるプレゼン)	2.5h	モデルの詳細場面の動画撮影 ASD記録とストラテジーシート(上段)、スキキャプチャシート(プル) FAST
フェーズ 2	(3)支援の検討(行動の分析)	⑨見てわかるエス(動画化) ⑩コミュニケーションプログラム ⑪機能的アセスメントに基づく支援	[10/29] 優先場面(機能的行動)の検討と支援立て	2.5h	ハリスク場面の整理、機能的行動の動画撮影(Before/After) 氷山モデルワークシート、活用と参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、ストラテジーシート(下段) チーム支援実行状況チェックシート①
フェーズ 3	(4)支援の立案と実施	⑫支援プランの立案 ⑬支援手帳書の作成と実施の対応	[11/26] 実施計画の作成/修正	2.5h	支援計画シート、支援手帳書(観覧用)の作成と実施 支援現場の動画撮影②、支援報告書書の作成(ICFシートの活用)、 チーム支援実行状況チェックシート②
フェーズ 4	(5)支援の見直し(PDCAサイクル)	⑭実施後の評価と改善	[12/24] 現場実装の途中経過報告(質疑・応答)	2.5h	支援現場の動画撮影③、支援報告書の作成 スキキャプチャシート(ポスト)、ICFシート(ポスト) チーム支援実行状況チェックシート③
フェーズ 5	(6)実施報告会		[2/10] 現場支援の実施報告会	3h	
フェーズ 5	フォローアップ		トレーナーによる訪問/オンラインコンサルテーションと実践ワークショップの開催		
補綴			各受講生の事業所に訪問する、オンラインで聞き取り(トレーナー/サブトレーナーで対応) 研修期間中、受講生への個別のフォロー(地域支援をかねて、サブトレーナーが対応)		

## 標準的な支援を実施するための基本的枠組み(支援パッケージ)



## 講義・演習の内容とねらい

### この講義の内容

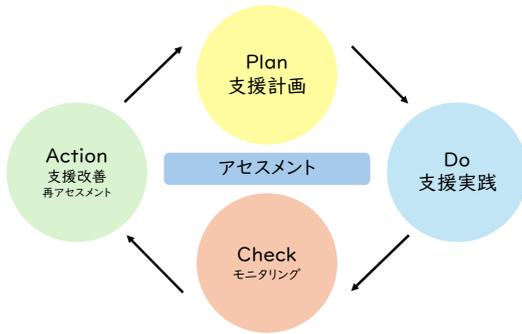
- PDCAサイクルの考え方
- 評価と改善のポイント
- 演習
- まとめ

### この講義のねらい

- 評価と改善のポイントについて理解する
- 再アセスメントと支援の継続の必要性を理解する

## PDCAサイクルの考え方

## 強度行動障害支援からみたPDCAサイクル



## 評価と改善のポイント

### ポイントを確認します

### チームで評価

チームで評価

再アセスメント

支援の継続

- 具体的な評価基準を作る
- 記録の活用

### 再アセスメント

### 支援の継続

- アセスメントは定期的に更新
- 必要なアセスメントの実施

- PDCAの流れを回していく
- コンサルテーションの活用
- 大きいチーム(関連機関)との連携

## 支援計画シートの書式から確認してみましょう

支援計画シート  
期間：20××年4月1日 - 20××年9月30日

種別	実施内容	実施の目的	実施の手段	実施の時期	実施の場所	実施の担当者	実施の回数	実施の回数	実施の回数
20××年4月1日									

※実施内容、実施の手段、実施の時期、実施の場所、実施の担当者、実施の回数、実施の回数、実施の回数

## 演習

## 支援計画シートの書式から確認してみましょう

支援計画シート  
期間：20××年4月1日 - 20××年9月30日

種別	実施内容	実施の目的	実施の手段	実施の時期	実施の場所	実施の担当者	実施の回数	実施の回数	実施の回数
20××年4月1日									

※実施内容、実施の手段、実施の時期、実施の場所、実施の担当者、実施の回数、実施の回数、実施の回数

評価の結果からQOLを意識した計画を考えましょう。また、再アセスメントが必要になる項目や追加のアセスメントが必要になる場合があります。

目標が具体的だとチームで評価しやすくなります。また、日々の記録も重要になります。  
※必要に応じてコンサルテーションなどの資源も有効活用しましょう。

### 15：実施後の評価と改善（ワークシート）

種別	実施内容	実施の目的	実施の手段	実施の時期	実施の場所	実施の担当者	実施の回数	実施の回数	実施の回数
20××年4月1日									



再アセスメント（または追加のアセスメント）が必要と思われる実施内容について記入しよう

再アセスメント（または追加のアセスメント）が必要と思われる実施内容について記入しよう
--

## 演習：再アセスメントの項目を検討する

- 実施後の評価から目標作成に必要な再アセスメントを考えてみましょう

## チェックポイント

チームで評価

再アセスメント

支援の継続

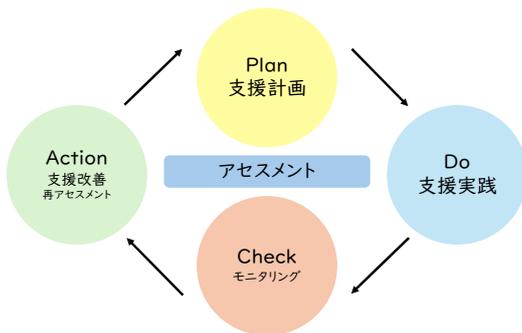


再アセスメント（または追加のアセスメント）が必要良いと思われるアセスメント書いてみましょう

- ・自由時間で使えそうな余暇アセスメント
- ・スキルの再アセスメント
- ・2週間程度で交換できる欲しいもののリストの再アセスメント

## まとめ

### 強度行動障害支援からみたPDCAサイクル



### PDCAサイクルのまとめ

- ・ チェックポイントの整理
- ・ コンサルテーションの活用
- ・ 再アセスメントから支援の継続

# 令和6年度中核的人材養成研修

## 第1回資料

### 第1回研修のねらい

- 研修の意図や構成について理解を深め、今後の研修内の実践に向けた体制整備を進められるようにする
- 各受講者が取り上げるモデル利用者や事業所における支援の現状と課題について、グループ内で共有する

# 第1回研修プログラム(西日本ブロック)

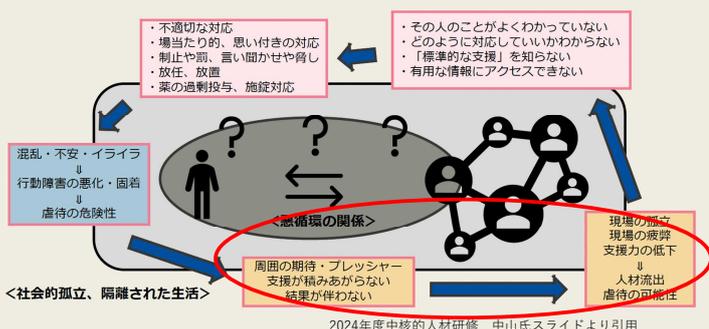
## ■科目名：チーム支援とガイダンス

時間	プログラム	講師	使用する資料等
9:15~	受講者入室		
9:30 (10分)	開会挨拶	田中 正博(設立のぞみの園)	
	行政挨拶	山根 和史 氏 (厚生労働省)	
9:40 (10分)	研修ガイダンス	研修ディレクター 中山 清司 氏 (各都道府県サービス全国ネット)	
9:50 (30分)	【講義】強度行動障害支援における組織的サポートと人材育成の必要性	中野 伊知郎 氏 (倶愛会)	研修第1回配布資料
10:20 (90分)	【グループ討議】※ブレリアウトルーム 自己紹介 各現場の実情と当面の課題 今回の研修に期待すること 研修に関する質問・要望 等	各グループトレーナー	【事前課題】 ・モデル利用者基本情報シート ・事業所情報シート ・ICシート(環境因子) ・BPI-S
11:50 (10分)	まとめ	研修ディレクター 中山 清司 氏	
	事務連絡		研修第1回配布資料
12:00	閉会		

## 強度行動障害支援における組織的サポートと人材育成の必要性

社会福祉法人 倶愛会  
総合施設長 中野伊知郎

### 行動障害と支援現場における悪循環の構図



### 組織的サポートとして何が必要なのか

➤現場を孤立させない(組織的に関わっていきながら良い支援を行う)

- ① 専門性を担保するための人材育成の仕組みを構築
- ② 現場での実践を基本としたスーパービジョンを受けられる仕組みの構築
- ③ チームで取り組むことを意識できるようにマネジメントする
- ④ メンタルサポートの仕組みの構築
- ⑤ 組織的承認
- ⑥ 地域資源の活用や相談支援事業所等を軸とした連携

その人らしい生活スタイルに合わせて、豊かな暮らしを営むことに  
仕事の価値を見出すこと

# 専門性を担保するための 人材育成の仕組みを構築

## 組織的に取り組むために必要なこと

### 理念・ミッション・ビジョン

- 理念・ミッション・ビジョンが組織内に浸透して、仕事の価値を共有している
- 理念・ミッション・ビジョン・中・長期計画に基づいた人材確保と育成、定着に向けた方針が共有されている

### 管理者としての姿勢

- 自閉症、行動障害、人権擁護等、組織のトップも含めた管理者が中心となって課題解決にあっている姿勢
- 有用な情報にアクセスできる

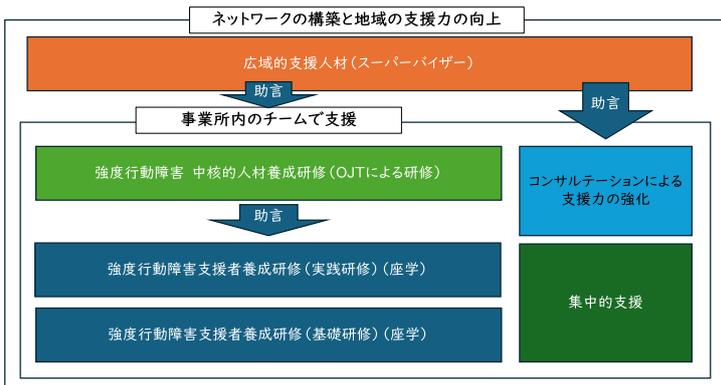
### 組織としてのあり方

- 強度行動障害支援者養成研修を受けて共通言語を学ぶことと合わせて、現場での実践で学ぶ機会を提供
- 組織全体で根拠のある支援を共有している（標準的な支援）
- 必要な人的配置と外部の専門家との連携が行われている
- 必要な環境整備を積極的に行っている

### 組織としての変化

- 社会の変化、制度の変化、ニーズの変化に組織として対応できる

## 組織的な人材育成



## スーパービジョンを受けられる 仕組みの構築

## 専門家がチームに関わることに対する効果

### 障害特性の理解、アセスメント方法を実践から学ぶ事ができる

- 事例を通してその人の特性の理解とアセスメントの視点を学ぶことによって支援根拠のある支援ができる

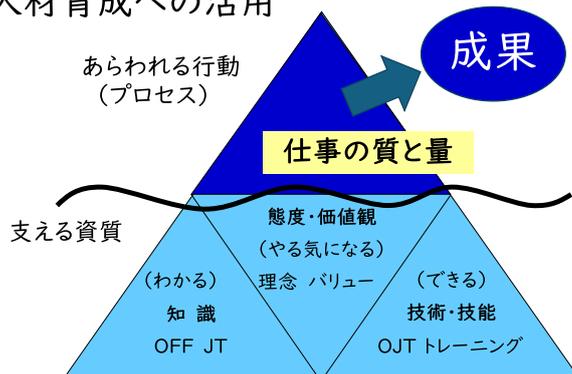
### 支援者が長期的見通しの中で支援を考えることができるようになる

- スモールステップを積み上げ、成功体験を繰り返すことで支援者の自信と達成感を得る事ができる
- 実践を外部発信し評価を得ることで支援者の成長につながり、結果として組織が成長する
- 行動改善の先に具体的な暮らしのイメージを持つことができる

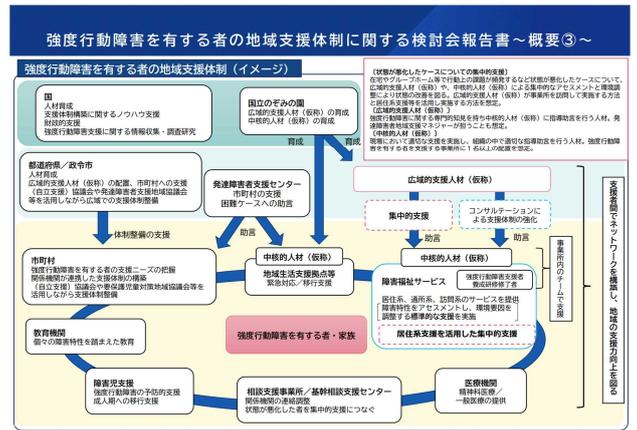
### 中核的人材の育成につながる

- 実践の場で中核的人材の育成が行われ、リーダーとしての人材が育っていく

## 人材育成への活用



チームで取り組むことを意識できるようにマネジメント

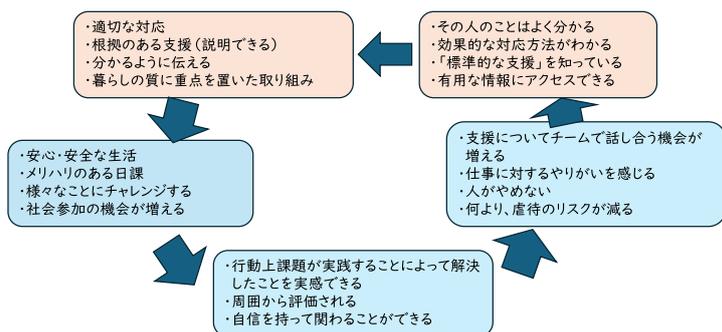


### 強度行動障害支援における職員の負担

- 心理的負担
- 身体的負担
- 業務量の増加
- 技術的負担

### メンタルサポートの仕組みの構築

### 支援現場における好循環の構図



### 現場を孤立させないための対策

- 働きやすい職場環境
- 支援体制の強化のための方策
- 研修と教育の充実
- ストレスとカウンセリング
- 適切な評価とインセンティブ
- ICTの活用

## グループ討議

## グループ討議の内容

■時間：11:50まで

- 内容：①自己紹介  
②各現場の実情と当面の課題  
③今回の研修に期待すること  
④研修に関する質問・要望等

事前課題提出資料を使用しながら説明  
・モデルの基本情報シート  
・事業所情報シート  
・ICFシート（環境因子）  
・BPI-S

■その他：司会進行 = トレーナー

記録・タイムキープ = サブ・トレーナー

\*サブ・トレーナーがまとめた記録は、Teamsの各受講者フォルダに【実践報告フォーマット】というファイル名で保存します。

## 第1回研修の記録とまとめ(受講者用メモ)

## 事務連絡

## 第2回研修までに取り組むこと

## 第2回研修・Teamsについて

	内容等	提出メ切・提出方法
第1回研修アンケートへの回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 研修に関する意見等のアンケート</li> <li>■ 下記URLまたは右記QRコードよりアクセスしてご回答ください。</li> </ul>	メ切:9月20日 方法:アンケートフォームへの回答
eラーニングの視聴 (視聴後のアンケートへの回答を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ⑦課題となっている行動の観察と記録</li> <li>■ ⑧機能的アセスメント</li> <li>■ ⑨日常生活場面での直接観察</li> </ul>	メ切:9月20日
ワークシートの記入	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 自閉症の特性&amp;学習スタイルチェックシート</li> <li>■ 氷山モデルワークシート(左側のみ)</li> <li>■ 日常生活行動場面アセスメント</li> <li>■ ICFシート(活動と参加)日常生活場面行動アセスメント連動Ver.</li> </ul>	メ切:9月20日 方法:Teamsの各受講者フォルダへのアップロード
動画の撮影	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ モデル利用者の様子(課題となっている行動を中心に)</li> <li>■ 事業所環境</li> </ul>	メ切および提出方法は、Teamsにて後日ご案内いたします ※動画はTeamsにはアップロードしないでください

### 【第2回研修について】

■日時：10月1日(火)14:00~16:30 (開場 13:30~)

■場所：TKP岡山会議室 ホール2A (岡山県岡山市北区磨屋町1-6 岡山磨屋町ビル2階)

■当日の持ち物：第1~2回研修の間に取り組んだワークシート(8部印刷してお持ちください)

### 【Teamsの取り扱いについて】

- ・ Teams閲覧範囲は、ディレクター、トレーナーSV、トレーナー、サブ・トレーナー、受講者、事務局です。該当者以外の閲覧は禁止いたします。
- ・ 研修に関するやりとり(支援の相談、フォローアップ日程調整等)は必ずTeamsを使用してください。
- ・ 支援の相談等は受講者同士の助言も可能です。情報交換の場として、ご活用ください。
- ・ 本研修に関すること以外の私的なやりとりや研修依頼、コンサルテーションの契約等の営業とみなされる行為はご遠慮ください。
- ・ モデル利用者が特定される情報(氏名、年齢、顔写真・動画など)のTeamsへのアップロードは禁止いたします。
- ・ ディレクター、トレーナーSV、トレーナー、サブ・トレーナー、受講者等本研修関係者の個人情報(電話番号やメールアドレス等の連絡先)もTeamsでの記載は禁止いたします。
- ・ Teams上に記載された情報の第三者への共有や無断転用を禁止いたします。

## 令和6年度中核的人材養成研修 第2回(集合研修)資料

【日時】 10月1日(火) 14:00 ~ 16:30 ※受講者開場・受付 13:30  
【会場】 TKP岡山会議室 ホール2A  
(岡山県岡山市北区磨屋町1-6 岡山磨屋町ビル2階)

## 第2回研修プログラム(西日本ブロック)

### ■科目名： 特性理解とアセスメント

時間	プログラム	講師	使用する資料等
13:30	受講者開場・受付		
13:55	事務連絡	事務局	
14:00 (10分)	開会 本日のねらい・流れの確認	ディレクター (国立のぞみの館)氏	
14:10 (130分)	【グループ討議】 □モデルの紹介と討議<100分> ➢25分×受講者4名 ➢モデル紹介動画を活用したプレゼンテーション □休憩<10分> □トレーナーコメント/グループ共有<20分> ➢情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認する	各グループトレーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 自閉症の特性&amp;学習スタイルチェックシート</li> <li>■ 氷山モデルワークシート(左側のみ)</li> <li>■ 日常生活行動場面アセスメント</li> <li>■ ICFシート(活動に参加)日常生活場面行動アセスメント運動Ver.</li> <li>■ モデル利用者の動画 等</li> </ul>
16:20 (10分)	まとめ 事務連絡	ディレクター 事務局	氏
16:30	閉会 ※閉会后、17:00まで情報交換・交流の時間 (随時、解散可)		

## 第2回研修のねらい

- モデル利用者の行動観察から自閉症の特性や学習スタイル、スキル等のアセスメントについて理解を深める
- モデル利用者の課題となっている行動の現状や生活環境・状況をグループで共有し、優先課題(標的行動)を選定する

## グループ討議の内容

- 時間： 16:20まで
- 内容：
  - モデルの紹介と討議<100分>
    - 25分×受講者4名
    - モデル紹介動画を活用したプレゼンテーション
  - 休憩<10分>
  - トレーナーコメント/グループ共有<20分>
    - 情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認する
- その他： 司会進行 = トレーナー  
記録・タイムキープ = サブ・トレーナー

## 第2回研修の記録とまとめ(受講者用メモ)

## 事務連絡

## 第3回研修までに取り組むこと

	内容等	提出メ切・提出方法
第2回研修アンケートへの回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象:サブ・トレーナー および 受講者</li> <li>■ 研修に関する意見等のアンケート</li> <li>■ 下記URLまたは右記QRコードよりアクセスしてご回答ください。</li> </ul>	メ切:10月22日 方法:アンケートフォームへの回答
eラーニングの視聴 (視聴後のアンケートへの回答を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ⑩見てわかる工夫(構造化)</li> <li>■ ⑪コミュニケーションプログラム</li> <li>■ ⑫機能的アセスメントに基づく支援</li> </ul>	メ切:10月28日
ワークシートの記入	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ABC記録</li> <li>■ スキャッタープロット</li> <li>■ FAST</li> <li>■ ストラテジーシート(上段)</li> </ul>	メ切:10月22日 方法:Teamsの各受講者フォルダ(3,研修第3回)へアップロード
動画の撮影	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ モデル利用者の評価場面の様子</li> </ul>	第3回研修当日に受講者がZoomの画面共有機能を用いて共有

# 令和6年度中核的人材養成研修 第3回資料

【日時】10月29日(火)9:30 ~ 12:00 ※受講者入室 9:15  
【会場】Zoomによるオンライン  
※サブ・トレーナー、受講者用 会場入室URL

## 第3回研修プログラム(西日本ブロック)

### ■科目名：支援の検討(行動の分析)

時間	プログラム	講師	使用する資料等
9:15	受講者入室		
9:30 (10分)	開会 本日のねらい	ディレクター 氏	
9:40 (130分)	【グループ討議】 テーマ:優先課題(標的行動)の分析と仮説立て □特性理解に基づく原因・支援の検討<100分> ➢25分×受講者4名 □休憩<10分> □トレーナーコメント/グループ共有<20分> ➢情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認する	各グループトレーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ABC記録</li> <li>■ スキャットプロット</li> <li>■ FAST</li> <li>■ ストラテジーシート(上段)</li> <li>■ 強行支援_【ID】活動と参加) 6-16y_情報入力シート ver.2.22</li> <li>■ モデル利用者の動画 等</li> </ul>
11:50 (10分)	まとめ 事務連絡	ディレクター 氏 事務局	
12:00	閉会		

## 第3回研修のねらい

- 客観的なデータに基づいてモデル利用者の優先課題(標的行動)の状況を整理し、行動の原因・理由の分析、仮説立ての視点を深める

## グループ討議の内容

- テーマ: 優先課題(標的行動)の分析と仮説立て
- 時間: 11:50まで
- 内容:
  - 特性理解に基づく原因・支援の検討<100分>  
➢ 25分×受講者4名
  - 休憩<10分> ※各グループ随時
  - トレーナーコメント/グループ共有<20分>  
➢ 情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認する
- その他: 司会進行 = トレーナー  
記録・タイムキープ = サブ・トレーナー

## (参考) Zoomでの動画共有方法



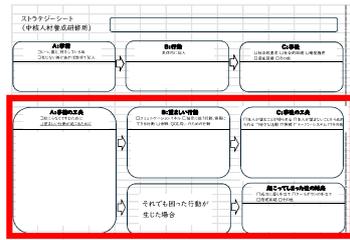
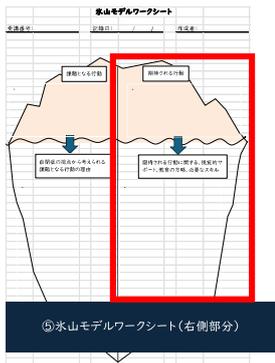
## 第3回研修の記録とまとめ(受講者用メモ)

## 事務連絡

## 第4回研修までに取り組むこと

	内容等	提出メチ・提出方法
第3回研修 アンケートへの回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象：サブ・トレーナー および 受講者</li> <li>■ 研修に関する意見等のアンケート</li> <li>■ 下記URLまたは右記QRコードよりアクセスしてご回答ください</li> </ul>	メチ：11月22日 方法：アンケートフォームへの回答
ワークシートの記入	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 氷山モデルワークシート(右側)</li> <li>■ ストラテジーシート(下段)</li> <li>※活動参加の支援計画書、コミュニケーションプログラムの実施計画書、等上記以外のシートについてトレーナーの指示があった人のみ提出</li> </ul>	メチ：11月19日 方法：Teamsの各受講者フォルダ(4.研修第4回)へアップロード
チーム支援実行状況チェック	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象：サブ・トレーナー および 受講者</li> <li>■ eラーニング⑥で説明のあった「チーム支援実行状況チェックシート」について、下記URLまたは右記QRコードよりアクセスしてご回答ください</li> </ul>	メチ：11月22日 方法：アンケートフォームへの回答
動画の撮影	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 標的行動の動画撮影</li> </ul>	第4回研修当日に受講者がZoomの画面共有機能を用いて共有
eラーニングの視聴 (視聴後のアンケートへの回答を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ③支援プランの立案</li> <li>■ ④支援手順書の作成と実際の対応</li> </ul>	メチ：11月25日

### (参考) 第4回研修までに取り組むワークシート



### (参考) eラーニングの視聴方法

■ 7/19配布資料「中核的人材養成研修実施概要について」P3 の視聴URL取得フォームにアクセスし、ご視聴ください

中核的人材養成研修実施概要について

※本資料をご確認の上、学習記録の更新・提出、eラーニングの視聴等をお願いします。

順次	ページ
I. 研修に係る業務連絡(研修スケジュール等、Microsoft Teams 問い合わせ先)について	1
II. eラーニングについて	3
III. 研修プログラムの(各回の概要)について	5
IV. フォローアップについて	9
V. 添付資料について	9

研修内容(研修の)	所要時間	研修内容	視聴URL
研修の記録	19分	・ AEC 記録 ・ スキルチェックシート	<a href="#">視聴URL</a>
研修参加のテスト	20分	・ FAST ・ スキルチェックシート(上段) ・ スキルチェックシート(下段)	<a href="#">視聴URL</a>
③日常生活保護の連携研修	24分	・ 日常生活保護の連携研修	<a href="#">視聴URL</a>
④支援プランの立案	28分	・ 支援プランの立案	<a href="#">視聴URL</a>
⑤コミュニケーションプログラムの実施計画書	21分	・ コミュニケーションプログラムの実施計画書	<a href="#">視聴URL</a>
⑥研修終了後の振り返り	19分	・ スキルチェックシート(下段)	<a href="#">視聴URL</a>
⑦支援手順書の作成と実際の対応	16分	・ 支援プランの立案ワークシート ・ 支援手順書の作成と実際の対応	<a href="#">視聴URL</a>
⑧実践的スキル向上	22分	・ 実践的スキル向上 ・ 実践的スキル向上	<a href="#">視聴URL</a>
⑨実践的スキル向上	16分	・ 実践的スキル向上 ・ 実践的スキル向上	<a href="#">視聴URL</a>

## 第4回研修プログラム(西日本ブロック)

# 令和6年度中核的人材養成研修 第4回資料

【日時】11月26日(火)9:30 ~ 12:00 ※受講者入室 9:15  
【会場】Zoomによるオンライン  
※サブ・トレーナー、受講者用 会場入室URL

### ■科目名：支援の立案と実施

時間	プログラム	講師	使用する資料等
9:15	受講者入室		
9:30 (10分)	開会 本日のねらい	ディレクター 氏	
9:40 (130分)	【グループ討議】 テーマ:実施計画(支援手順書)の作成/修正 □より適切な活動の設定とそのための手立て<<100分>> ➢25分×受講者4名 □休憩<<10分>> □トレーナーコメント/グループ共有<<20分>> ➢情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認する	各グループトレーナー	■氷山モデルシート ■ストラテジーシート ■モデル利用者の動画等
11:50 (10分)	まとめ 事務連絡	ディレクター 氏 事務局	
12:00	閉会		

## 第4回研修のねらい

- 自閉症の特性・学習スタイル、個別のアセスメントに基づいて、目的に合わせて活動を整理し、より適切な活動、期待される行動を具体的に設定する視点を深める
- 設定した活動や期待される行動を教える(支援する)ための肯定的で有効な具体的手立てを計画する視点を深める

## グループ討議の内容

- テーマ：支援の立案と実施
- 時間：11:50まで
- 内容：
  - より適切な活動の設定とそのための手立て<<100分>>  
➢25分×受講者4名
  - 休憩<<10分>> ※各グループ随時
  - トレーナーコメント/グループ共有<<20分>>  
➢情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認する  
➢チーム支援実行状況チェックシートの共有  
(チーム支援を実施する際の、うまくいった点・うまくいかなかった点等)
- その他：司会進行 = トレーナー  
記録・タイムキープ = サブ・トレーナー

## (参考) Zoomでの動画共有方法



## 第4回研修の記録とまとめ(受講者用メモ)

## 事務連絡

## 第5回研修までに取り組むこと

	内容等	提出/提出方法
第4回研修アンケートへの回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象: サブ・トレーナー および 受講者</li> <li>■ 研修に関する意見等のアンケート</li> <li>■ 下記URLまたは右記QRコードよりアクセスしてご回答ください</li> </ul>	メ切: 12月20日 方法: アンケートフォームへの回答
支援計画シート・支援手順書の作成と支援の実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 各受講者の事業所で使用している支援計画シート・支援手順書の様式を、eラーニング③「支援プランの立案」④「支援手順書の作成と支援の実施」にて説明されているポイントから見直しつつ、今回の研修で検討している内容に沿って作成</li> </ul>	メ切: 12月17日 方法: Teamsの各受講者フォルダ(5.研修第5回)へアップロード
実践報告書案の作成(ICFシートの経過)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 実践報告書の事業所概要・利用者概要部分について、作成を進めてください</li> </ul>	※提出不要
チーム支援実行状況チェック	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象: サブ・トレーナー および 受講者</li> <li>■ eラーニング⑥で説明のあった「チーム支援実行状況チェックシート」について、下記URLまたは右記QRコードよりアクセスしてご回答ください</li> </ul>	メ切: 12月20日 方法: アンケートフォームへの回答
動画の撮影	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 支援場面の動画撮影</li> </ul>	第5回研修当日に受講者がZoomの画面共有機能を用いて共有
eラーニングの視聴 (視聴後のアンケートへの回答を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ⑤実施後の評価と改善</li> </ul>	メ切: 12月23日

## (参考) 第5回研修までに取り組むこと 支援計画シート・支援手順書

- 支援計画シート、支援手順書は、eラーニングでは参考様式としてお示ししています。
- 各事業所で使用している様式をご提出ください。

支援計画シート

期間: 20××年4月1日 ~ 20××年9月30日

支援計画シート(参考様式)

支援手順書

支援手順書(参考様式)

## (参考) 第5回研修までに取り組むこと 実践報告書案の作成(ICFシートの見直し)

- 各受講者のTeamsフォルダに「実践報告フォーマット」があります。できるところから記入をお願いします。
- フォーマットをダウンロードし、作成をおすすめします。

**利用者概要**

※作成にあたって、eラーニング③-③「ICFシステムで活用した情報もQOL支援」に活用する情報をご参照ください

モデル利用者の概要(プレ)

※記載例

## (参考) eラーニングの視聴方法

- 7/19配布資料「中核的人材養成研修実施概要について」P3の視聴URL取得フォームにアクセスし、ご視聴ください

中核的人材養成研修実施概要について

※資料2「研修のよう」事前研修の「実践」eラーニングの視聴情報をお願いします。

区分	ページ
1. 研修に係る基本事項(研修スケジュール等)	1
2. eラーニングについて	3
3. 研修プログラムの各研修について	5
4. 研修で取得するスキルについて	9
5. フォロアップについて	9
6. 終了について	9

研修項目	研修時間	研修内容	視聴URL
① 研修の導入	19分	研修の導入	視聴URL
② 研修の導入	21分	研修の導入	視聴URL
③ 研修の導入	24分	研修の導入	視聴URL
④ 研修の導入	28分	研修の導入	視聴URL
⑤ 研修の導入	21分	研修の導入	視聴URL
⑥ 研修の導入	19分	研修の導入	視聴URL
⑦ 研修の導入	16分	研修の導入	視聴URL
⑧ 研修の導入	23分	研修の導入	視聴URL
⑨ 研修の導入	16分	研修の導入	視聴URL

## 令和6年度中核的人材養成研修 第5回資料

【日時】12月24日(火)9:30 ~ 12:00 ※受講者入室 9:15  
【会場】Zoomによるオンライン  
※サブ・トレーナー、受講者用 会場入室URL

## 第5回研修プログラム(西日本ブロック)

### ■科目名：支援の見直し(PDCAサイクル)

時間	プログラム	講師	使用する資料等
9:15	受講者入室		
9:30 (10分)	開会 本日のねらい	ディレクター 氏	
9:40 (130分)	【グループ討議】 テーマ:現場実践の途中経過報告(仮説-検証) □モデル利用者への支援の実施と見直しの検討<<100分>> ➢25分×受講者4名 □休憩<<10分>> □トレーナーコメント/グループ共有<<20分>> ➢情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認 ➢チーム支援実行状況チェックシートの共有 ➢第6回研修(実践報告会)当日の報告者の決定(各グループ1名) ※トレーナーが事務局に報告	各グループトレーナー	■ 支援計画シート ■ 支援手順書 ■ モデル利用者の動画 等
11:50 (10分)	まとめ 事務連絡	ディレクター 氏 事務局	
12:00	閉会		

## 第5回研修のねらい

- 支援計画シート、支援手順書等に沿った支援経過を共有し、支援効果、改善の手立てを検討する。

## グループ討議の内容

- テーマ：支援の見直し(PDCAサイクル)
- 時間：11:50まで
- 内容：
  - 現場実践の途中経過報告(仮説-検証)<<100分>>  
➢25分×受講者4名
  - 休憩<<10分>> ※各グループ随時
  - トレーナーコメント/グループ共有<<20分>>  
➢情報、支援アイデアを共有、次回までの現場実践を確認する  
➢チーム支援実行状況チェックシートの共有(チーム支援を実施する際の、うまくいった点・うまくいかなかった点等)  
➢第6回研修(実践報告会)当日の報告者の決定(各グループ1名) ※トレーナーが事務局へ報告
- その他： 司会進行 = トレーナー  
記録・タイムキープ = サブ・トレーナー

## (参考) Zoomでの動画共有方法



## 第5回研修の記録とまとめ(受講者用メモ)



(参考)③-2/⑨のシートから強行支援\_[ID]活動と参加)6-16y\_情報入カシートへの転写方法

① ③-2/⑨日常生活行動場面アセスメント(ICFシート(活動と参加)運動Ver.xlsxの[A&Pシート]に転写用)シートの左上角を右クリックし、シート全体をコピー

② シート全体が薄灰色と緑点線で囲まれてコピー状態となる

③ 強行支援\_[ID]活動と参加)\_.xlsxの(運動版から転写)シートの左上角を右クリックし、数値転写行(123のマークアイコン)を実行

④ データ転写完了

参照:eラーニング③-2「ICFシステムのデータ入力と分析方法」講義資料

(参考)強行支援\_ICFデータ分析アプリでの分析方法

① アプリとICFデータを同じフォルダに入れておく

② データ分析アプリの起動画面

③ ファイル読み込みウィンドウがポップアップ

④ 分析対象のファイルを選択して「開くをクリック

※セキュリティの警告がでた場合には「コンテンツの有効化」をクリック

参照:eラーニング③-2「ICFシステムのデータ入力と分析方法」講義資料

(参考)第6回研修までに取り組むこと  
実践報告資料の作成

- 実践報告フォーマットの各スライド左上に項目、各スライド内に報告で使用するワークシート例や作成の視点を記載しています。  
※フェイス1〜5は、eラーニング⑤「氷山モデル」で紹介している支援プロセスです。
- 各スライドの作成の視点に沿って、研修で取り組んだことをまとめてください。報告時、ワークシートは全て使用しなくても構いません。また、スライドに記載しているワークシート例以外にも使用して構いません。
- 「研修を通じた変化」のスライド内にある【支援チーム・管理者から見た変化・感想】は、支援チームの方、管理者が記載、もしくは受講者が聞き取りをして記載してください。

研修を通じた変化

【支援チームから見た変化】

- 受講者自発的な変化
- 支援チームの変化
- 事業所の変化

※支援チームの方、管理者が記載、もしくは受講者が聞き取りをして記載

【支援チーム・管理者から見た変化・感想】

- 受講者自発的な変化
- 支援チームの変化
- 事業所の変化

※支援チームの方、管理者が記載、もしくは受講者が聞き取りをして記載

実践報告フォーマットより抜粋

(参考)実践報告資料

モデル利用者の概要(ICFフォーム)のまとめ方

モデル利用者の概要(プレ) ※記載必須

(プレ)は、研修開始時に記入したICFシートや研修での支援をする前の内容を記載

モデル利用者の概要(ポスト) ※記載必須

(ポスト)は、研修を通して行った支援内容や支援効果、モデル利用者の変化点等についてを記載

(参考)ICFフォームにまとめる際の留意点(1)

- 「健康状態」
  - 診断名やその他の医療情報を記載。
  - postでは支援によって消失した症状を見え消しなどで明示。
- 「心身機能・構造」
  - 学習スタイルや評価尺度の結果を記載。評価尺度は医療とのつながりに有用。
  - pre-postの間に把握された情報があれば付記しておく。
- 「活動と参加」
  - ①強みや維持調整など支援に活用できる項目と②修正や考案などQOLが低下している項目を記載。
  - ②について、pre(支援前)ではQOL低下の状況を記載し、post(支援後)では支援の変更内容と効果の変化、そして支援カテゴリーの変化を記載する。
  - postに記載する支援は、学習スタイルに基づくもの、機能分析で実施したもの、ICFデータを活用したものを含む、QOL向上に有効だった支援を特に記載。

参照:eラーニング③-3「ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する」講義資料

(参考)ICFフォームにまとめる際の留意点(2)

- 「環境因子」
  - QOLの①阻害因子と②促進因子を記載。
  - ①のpreでは阻害項目とその状況を記載、postでは当該の阻害因子の除去とその結果について記載。
  - ②のpreでは促進項目とその状況を記載、postでは当該の促進因子の生活場面の幅広い活用の工夫とその効果を記載。
  - 阻害環境の除去と促進環境の充実については、学習スタイルの把握や機能分析の実施そしてICFデータによるものを含む。
  - 内容に応じて「活動と参加項目」を参照する記載を入れておくことご本人の状況の理解を助ける。
- 「個人因子」
  - 一般的にフェイスシートに記載されるような内容を記載する。

参照:eラーニング③-3「ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する」講義資料

# 令和6年度中核的人材養成研修 第6回資料

【日時】2月10日(月)14:00～17:00 ※受講者入室13:30  
【会場】Zoomによるオンライン  
※サブ・トレーナー、受講者用 会場入室URL

## 第6回研修プログラム

### ■科目名：実践報告会

時間	プログラム	講師	使用する資料等
13:30	受講者入室		
14:00 (10分)	開会 本日のねらい	事務局 ディレクター 氏	
14:10 (90分)	【実践報告会】 □各グループで1つのブレイクアウト □各グループ1名発表 (1名あたり発表時間15分・コメント等5分=計20分)	各トレーナーSV	
15:40 (10分)	休憩		
15:50 (45分)	【グループ討議】 テーマ:研修の振り返り	各グループトレーナー	
16:35 (25分)	まとめ	ディレクター 厚生労働省 氏	
	事務連絡	事務局	
17:00	閉会		

## 第6回研修のねらい

- 実践を振り返り、研修効果や課題等について、トレーナー、他受講者等と共有し、今後の取り組みの糧とする。

## 実践報告会の進め方

- 進行・タイムキープ：トレーナーSV / 記録:事務局

- 時間：発表者① 14:10～14:30  
発表者② 14:30～14:50  
発表者③ 14:50～15:10  
発表者④ 15:10～15:30  
総 評 15:30～15:40  
(トレーナーSVより)

※発表の流れ  
発表者報告(15分)⇒管理者コメント(2分)⇒  
担当トレーナーコメント(2分)⇒次の発表者準備(1分)

### ■備考

- 発表者が画面共有して、報告していただきます。報告終了後、画面共有を切ってから管理者等のコメントをお願いします。
- 発表開始から15分経過時に事務局よりお知らせをします。
- 発表者以外の方は、カメラON、マイクはミュートをお願いします(事務局が出欠確認をします)。
- トイレ等でやむを得ず離席する場合には、Zoomのチャットにて事務局宛にご連絡をお願いします。
- 全予定終了後、ブレイクアウトから退出せず各会場で休憩してください。ただし、15:50からグループ討議までに必ずお戻りください。

## 実践報告会 グループ割り・発表順

A～Dグループ (トレーナーSV: 氏)		E～Hグループ (トレーナーSV: 氏)		I～Lグループ (トレーナーSV: 氏)	
報告者	担当トレーナー	報告者	担当トレーナー	報告者	担当トレーナー
①A:		①E:		①I:	
②B:		②F:		②J:	
③C:		③G:		③K:	
④D:		④H:		④L:	

M～Pグループ (トレーナーSV: 氏)		Q～Tグループ (トレーナーSV: 氏)		U～Xグループ (トレーナーSV: 氏)	
報告者	担当トレーナー	報告者	担当トレーナー	報告者	担当トレーナー
①M:		①Q:		①U:	
②N:		②R:		②V:	
③O:		③S:		③W:	
④P:		④T:		④X:	

※各会場発表順：①→②→③→④

## グループ討議の内容

- テーマ：研修の振り返り
- 時間：15:50～16:35まで(45分)

### ■内容：

- 前回からの現場実践の経過報告
- サブ・トレーナー/受講者から一言  
⇒研修全体を振り返っての気づき、研修に対する感想・意見、今後の抱負など
- 管理者から一言  
⇒受講者やチーム、事業所の変化、研修に対する感想・意見など
- オブザーバー参加者から一言  
⇒研修に対する感想・意見など

- その他：司会進行 = トレーナー  
記録・タイムキープ = サブ・トレーナー

# 第6回研修の記録とまとめ (受講者用メモ)

## まとめ

### 発達障害者支援法

#### (基本理念)

##### 第二条の二

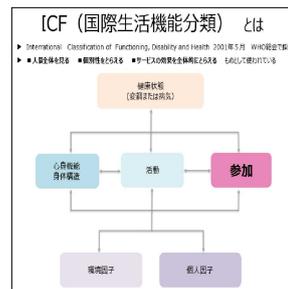
2 発達障害者の支援は、社会的障壁の除去に資することを旨として、行われなければならない。

#### (国民の責務)

##### 第四条

国民は、個々の発達障害の特性その他発達障害に関する理解を深めるとともに、基本理念の通り、発達障害者の自立及び社会参加に協力するように努めなければならない。

### 強度行動障害を有する者への支援の考え方



○WHOによって採択されたICF (国際機能分類) では、「障害」を健康状態（診断）に加え、生活機能（心身機能身体構造、活動、参加）と背景因子（環境因子、個人因子）の観点で説明。

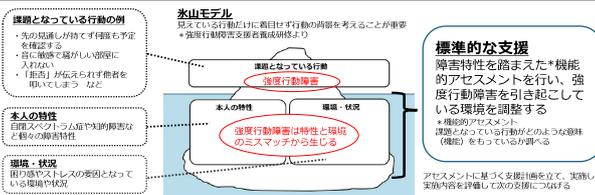
○強度行動障害を有する者への支援にあっても知的障害や自閉症といった診断名だけでなく、その障害特性の現れである「活動と参加」そして強度行動障害の発生に影響している「環境因子」を含めた観点を合わせて分析していく。

○「活動と参加」の困難性が発生する生活場面（環境）から、個々の障害特性のアセスメントを実施し、強度行動障害の発生に影響している「環境因子」を把握・調整していくことで、QOLを高める支援を実践していく

中核的人材養成研修資料より

### (参考) 強度行動障害を有する者への標準的な支援

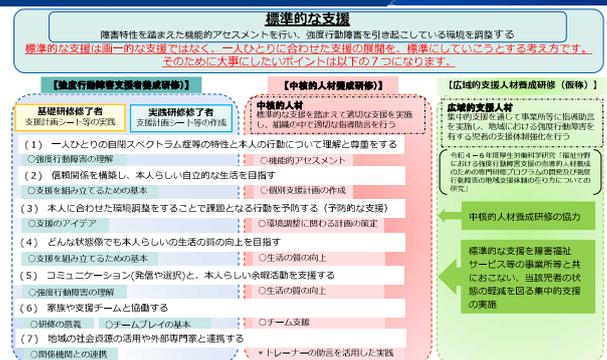
(強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書より)  
 ○(中略) 強度行動障害を有する者への支援にあっても、知的障害や自閉スペクトラム症の特性など個人因子と、どのような環境のもとで強度行動障害が引き起こされているのか環境因子もあわせて分析していくことが重要となる。こうした個々の障害特性をアセスメントし、強度行動障害を引き起こしている環境要因を調整していくことが強度行動障害を有する者への支援において標準的な支援である。



**予防的支援の重要性** (強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書より)  
 ○**予防的観点を込めて標準的な支援を行うことが必要**  
 ○強度行動障害を引き起こさなくても良い支援を**日常的におこなうことが重要**  
 ○支援者、家族、教育等の関係者が、標準的な支援の**知識を共有し、地域の中に拡げていくことが重要**

### 標準的な支援のポイント① (一般支援者用)

参考





## 研修後をお願いしたいこと①

	内容等	提出メチ・提出方法
修了書発送にかかる宛先登録	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象:ディレクター、トレーナーSV、トレーナー、サブ・トレーナー、受講者</li> <li>■ 内容:修了書の発送先等</li> <li>■ 下記URLまたは右記QRコードよりアクセスして、ご回答ください ※回答URL:</li> </ul>	メチ:2月14日 方法:アンケートフォームへの回答 ※発送準備のため、早めの回答にご協力をお願いします
実践報告動画の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 対象:受講者</li> <li>■ 内容:事務局が個人情報等確認し、動画にした実践報告の確認 【流れ】 □Teamsにて事務局より受講者へ、動画の修正または確認依頼 ↓ □受講者が、修正対応、動画の音飛び等の確認 確認し公開OKの場合、受講者が事務局へTeamsで連絡</li> </ul>	期間:研修終了後～2月中旬 方法:動画の共有、連絡はTeamsで行います
第6回研修および研修全体に関するアンケートへの回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象:サブ・トレーナー、受講者</li> <li>■ 内容:研修に関する意見等のアンケート</li> <li>■ 下記URLよりアクセスしてご回答ください(受講者とサブ・トレーナー用で内容が異なりますので、該当のURLよりアクセスをお願いします) ※受講者用回答URL: ※サブ・トレーナー用回答URL:</li> </ul>	メチ:3月7日 方法:アンケートフォームへの回答

## 研修後をお願いしたいこと②

	内容等	提出メチ・提出方法
研修の効果に関するアンケート (実施者:のぞみの園)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象:サブ・トレーナー、受講者</li> <li>■ 内容:下記6つの尺度について、研修終了後現在の状況をご回答ください ① 健康なリーダーシップ尺度 ※回答URL: ② 心理的安全性尺度 ※回答URL: ③ 知識共有尺度 ※回答URL: ④ 行動障害の支援尺度 ※回答URL: ⑤ 支援の環境調整実施尺度 ※回答URL: (全日本自閉症支援者協会版EPS) ⑥ BPI-S ※ワークシート「①～③、BPI-S 問題行動評価尺度種別記入フォーム」に現在のモデル利用者の状況についてご記入ください</li> </ul>	メチ:3月7日 方法:①～⑤はアンケートフォームへの回答 ⑥はExcelに記入し、Teamsの各受講者フォルダ(6、研修第6回)へアップロード
ICFに関するアンケート (実施者:安達園先生)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象:サブ・トレーナー、受講者</li> <li>■ 内容:ICFの使用に関するアンケート</li> <li>■ 右記URLにアクセスして、ご回答ください ※回答URL:</li> </ul>	メチ:3月7日 方法:アンケートフォームへの回答
機能的アセスメントに関するアンケート (実施者:井上雅彦先生)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象:サブ・トレーナー、受講者</li> <li>■ 内容:機能的アセスメントの理解、実施状況等に関するアンケート</li> <li>■ 右記URLにアクセスして、ご回答ください ※回答URL:</li> </ul>	メチ:3月7日 方法:アンケートフォームへの回答
支援状況に関するアンケート (実施者:井上雅彦先生)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 回答対象:サブ・トレーナー、受講者</li> <li>■ 内容:研修における課題となる行動への支援状況に関するアンケート</li> <li>■ 右記URLにアクセスして、ご回答ください ※回答URL:</li> </ul>	メチ:3月7日 方法:アンケートフォームへの回答

## 修了書について

### 【受講者】

- 研修課題を全て提出している方を対象に、トレーナー等の評価を基に、基準に則り事務局が修了判断します。修了可となった方について、修了書および評価書を令和7年2月末に発送予定です。
- 修了基準に満たなかった方については、令和7年2月17日までに事務局より個別に連絡をします。事務局からの連絡を受けた受講者は、基準に満たなかった点を中心に実践を継続していただきます。事務局によるフォローアップを継続し、令和7年3月末に再度修了判断を事務局が行います。
- なお、修了可否および評価書について、都道府県担当者にも送付します。

### 【サブ・トレーナー】

- 研修課題を全て提出している方を対象に、修了書を発行します(令和7年2月末発送予定)。
- 未提出課題がある方には、事務局より個別に連絡します。

### 【トレーナー、トレーナーSV、ディレクター】

- 修了書は、令和7年2月末に発送予定です。

## 実践報告動画の公開について

- 期間: 令和7年3月上旬～3月31日(予定)
- 方法: 専用HPより視聴(要パスワード)  
※視聴方法・パスワード等の案内文書を修了書と一緒に発送します。
- 対象: 受講者、サブ・トレーナー、トレーナー、トレーナーSV、ディレクター、受講者、オブザーバー
- 備考: □実践報告資料の配布はしません。  
□実践報告動画の録画・録音、上記対象者以外への共有、実践報告動画から知り得た情報をSNS等で公開することは禁止とします。  
□本研修で使用した実践報告やモデル利用者の動画等、本研修以外に使用される場合には、各受講者がモデル利用者、家族に改めて同意をお取りください。  
□実践報告動画について、ご不明な点がありましたら、下記問い合わせ先までご連絡ください。

## eラーニング・ワークシートの取り扱いについて

### 【eラーニングの公開】

- 公開期間: 令和7年3月31日までとします。
- 受講者が所属している事業所内チームも視聴可能ですが、中核的人材養成研修に関係ない者への共有は禁止とします。

### 【ワークシート・eラーニング資料の利活用】

- 利活用にあたっては、下記目的のもと中核的人材養成研修修了者の関与していることが必須です。
  - ・利用者支援(中核的人材養成研修で取り上げたモデル利用者以外への活用可)
  - ・事業所支援(中核的人材養成研修修了者が実施)
  - ・所属事業所や法人内研修において、チームの支援力向上に必要な知識の向上を図ること
- 留意点は下記のとおりです。
  - ・著作権は作成者にあり、管理は国立のぞみの園が行います。
  - ・修了者は不特定多数にデータを共有しないよう管理の徹底をお願いします。
  - ・ワークシート、eラーニング資料の加工、複製、第三者への配布、営利目的の研修での使用は禁止とします。
  - ・上記以外の用途で利活用を行う場合には、事務局までご相談をお願いします。

## 研修後の問い合わせ先

(独) 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

## 令和 6 年度中核的人材養成研修 ワークシート一覧表

シート番号	シート名	対応するeラーニング講義	シート様式	使用する研修回
①-1	モデル基本情報シート	①研修概要について	Word Excel	第1回 ※提出期限 8/9
①-2	事業所情報シート		Word Excel	
①-3	BPI-S		Excel のみ	
③-1	ICF シート(環境因子)	③-2ICF システムのデータ入力と分析方法	Excel のみ	第3回
③-2	ICF シート(活動と参加) 日常生活場面行動アセスメント連動 Ver.	③-3ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する		
④	自閉症の特性&学習スタイルチェックシート	④自閉症の特性と学習スタイル	Excel のみ	第2回
⑤-1	冰山モデルワークシート	⑤冰山モデル	Word Excel	
⑤-2	ハイリスク場面のチェックシート		Word Excel	
⑥	チーム支援実行状況チェックシート	⑥チーム支援	Microsoft Forms	第3~6回
⑦-1	ABC 記録	⑦課題となっている行動の 観察・記録	Word Excel	第3回
⑦-2	スキャッタープロット		Word Excel	
⑧-1	FAST	⑧機能的アセスメント	Excel のみ	
⑧-2 / ⑫	ストラテジーシート	⑧機能的アセスメント ⑫機能的アセスメントに基づく支援	Word Excel	
⑨	日常生活場面行動アセスメント	⑨日常生活場面での直接観察	Excel のみ	第2~3回
⑩	活動参加の支援計画書	対応なし	Word Excel	第4回
⑪	コミュニケーションプログラムの 実施計画書	⑪コミュニケーションプログラム	Word Excel	
⑬-1	支援プランの立案ワークシート	⑬支援プランの立案	Word のみ	提出なし
⑬-2	支援計画シート(参考様式) ※各受講者の様式を使用		—	第5回
⑭-1	課題分析シート	⑭支援手順書の作成と実際の 対応	Word Excel	
⑭-2	支援手順書 ※各受講者の様式を使用		—	
⑮	実施後の評価と改善ワークシート		Word のみ	提出なし

※シート番号に色のついているワークシートは、研修内で必ず取り組むシートです。色のついていないシートは、各受講者のモデル利用者への支援状況によって使用の有無が変わります(トレーナー指示あり)。

※モデル利用者以外への支援でもご使用ください。ただし、研修に関係ない方・事業所へのデータの共有はご遠慮ください。

※一部のワークシートは、自閉症 e サービスより提供を受けています。ワークシートの活用に関してご不明な点は、事務局(国立のぞみの園)までお問合せください。

モデル基本情報シート

【注意】このシートは、中核的人材養成研修に参加する受講生の事業所情報を整理するものです。事務局・トレーナー及び受講生は、本人・家族のプライバシーに配慮し、情報シートを目的外で使用しないこと

受講番号 記入日 年 月 日

性別			年代		
診断名			その他疾患		
手帳の等級	療育手帳		精神保健福祉手帳		身体障害者手帳
	有無	等級	有無	等級	有無 等級
障害支援区分	知能指数 (IQ)		行動関連項目点数		
これまでの生活状況の経過・変化			現在の生活状況(暮らし、学習・作業、地域・余暇活動)		
課題となっている行動について、できるだけ具体的に書きください(頻度・強度など)					
その行動はいつから始まりましたか?			その行動はどのような場面・どういときによく起こりますか?		
その行動に対するこれまでの対応は効果がありましたか?			現在、考えられる介入プランはどのようなものですか?		

事業所情報シート

【注意】このシートは、中核的人材養成研修に参加する受講生の事業所情報を整理するものです。事務局・トレーナー及び受講生は、本人・家族のプライバシーに配慮し、情報シートを目的外で使用しないこと

受講番号 記入日 年 月 日

事業所の概況			
所在地(都道府県・市町)			
運営法人			
事業所名			
事業所の主たる事業種類(生活介護など)			
事業所の契約利用者人数	男性	人	女性 人
平均支援区分			
事業所の現場支援スタッフ数	常勤	人	非常勤 人
事業所の運営理念			
事業所の特徴			
モデル利用者に 対応している支援チーム	事業所所長(管理者)名		現場チームリーダー名
	現場スタッフ数(常勤)		現場スタッフ数(非常勤)
	その他関係者		
モデル利用者 をとりまく支援リスト	事業所名	サービス種別	
	日中活動の場		
	生活の場		
	医療関係		
	相談機関		

モデル利用者が過ごしている 事業所内現場の様子 (図示又は写真可)	
事業所に関する追加情報	

BPI-S  
問題行動評価尺度短縮版

**対象者:** \_\_\_\_\_ **回答者:** \_\_\_\_\_

ID: \_\_\_\_\_ 対象者との関係: \_\_\_\_\_

年齢: \_\_\_\_\_歳 \_\_\_\_\_月 一日に対象者と接する平均的な時間: \_\_\_\_\_

対象者と接してきた期間: \_\_\_\_\_

知的障害:  知的障害なし  不明  
 軽度(IQ=56-70)  中度(IQ=41-55)  重度(IQ=26-40)  最重度(IQ<26)

教示

以下に、3種類の問題行動を特定するための包括的な定義がありますので、それらに目を通してください: 自傷行動(項目 1-8)、常同行動(項目 9-18)、攻撃的/破壊的行動(項目 19-30)。各項目に関する対象者の行動が、過去2ヵ月間に、(1)通常どれくらい頻繁にみられるか(頻度)、および(2)どの程度問題となっているか(重症度)、について、最もあてはまるものに○をつけてください。

もしその行動が過去2ヵ月間に一度も見られなかった場合は、「一度もなかった/問題ない」(“0”)に○をつけてください。

もし、3種類の行動がみられる場合は、その頻度とその重症度を適切に評価してください(以下の定義を使用してください)。【注:常同行動下位尺度には重症度評定欄はありません】。

	軽度の問題	中度の問題	重度の問題
自傷行動	行動はみられるが、対象に重大な損傷を与えるものではない(例:一時的に皮膚が赤くなる、とても軽いあざ)。	行動は対象に中度の損傷を与える場合がある(例:中程度のあざ、皮膚のひっかき傷、繰り返しかさぶたをはがす)。	行動は対象に中度から重度の損傷を与え、何らかの医療的対応が必要になる場合がある(例:皮膚を噛みちぎる、指で目をつく、骨折する)。
攻撃的/破壊的行動	行動はみられるが、他の人に重大な損傷を与えるものではない(例:一時的に皮膚が赤くなる、とても軽いあざ);あるいは、器物を壊すが、修理や交換は必要としない(例:ものを投げつける、家具を傾ける、ドアを激しく閉める、食べ物や台無しにする、塗装に傷をつける)。	行動は他の人に中度の損傷を与える場合がある(例:中度のあざ、皮膚のひっかき傷);あるいは、器物を壊すが、修理すれば使用することができる。(例:カーテンや家具を部分的に壊す)。	行動は他の人に中度から重度の損傷を与え、何らかの医療的対応が必要になる場合がある(例:皮膚を噛みちぎる、指で目をつく、骨折する);あるいは、交換が必要なほど、器物を壊す。





ICFコアセット 活動と参加 6歳-16歳用 情報把握シート 基本情報

支援チームID	支援対象者ID(必須)	イニシャル(任意)	生年月日	年齢	性別 (F/M/?)	活動完了年/月/日	チームリーダーID
				125年4月			

> 記載例

支援チームID	支援対象者ID	イニシャル(任意)	生年月日	年齢	性別	活動完了年/月/日	チームリーダーID
任意のID	任意のID	(A.A.など記入)	2005/3/12	20年2ヶ月	男性	2020/10/15	任意のID

支援チームID、支援対象者ID、チームリーダーIDは個人情報を保護しつつ支援対象者を特定するためのIDです。  
 「支援対象者ID」は回答分析アプリでシートを解析した結果が書き込まれるファイル名に反映されるため(必須)です。

ICFコアセット 活動と参加 強行支援 (6歳-16歳版採用) 情報把握シート 第1章

1. 3つの期間に該当する領域の観点

1.1 活動の状況 (「目標なし」の欄あり) のいずれの欄でも記載  
 「目標なし」は、活動と参加の両方について活動が実現できなかったことを意味する(「目標あり」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。  
 「目標あり」は、活動と参加の両方について活動が実現できたことを意味する(「目標なし」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。  
 「目標あり」は、活動と参加の両方について活動が実現できなかったことを意味する(「目標なし」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。

2. 補足情報に記入する内容の解説

「補足情報」は、活動と参加の両方について活動が実現できなかったことを意味する(「目標なし」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。  
 「補足情報」は、活動と参加の両方について活動が実現できなかったことを意味する(「目標なし」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。

第1章 学習と知識の応用

1. 習得をもって(わかって)として、知ろうとして) 五感(視・聴・触・味・臭) を使うこと

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d110	見たり、聞いたりして、自分の見たり、聞いたりすること				○ ○ ○ ○
d115	見たり、聞いたりして、自分の見たり、聞いたりすること				○ ○ ○ ○
d120	自分の見たり、聞いたりして、自分の見たり、聞いたりすること				○ ○ ○ ○

2. まねを学ぶこと

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d130	まねを学ぶこと				○ ○ ○ ○

3. 知らないことを解明して知ろうとすること

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d132	知らないことを知ろうとすること				○ ○ ○ ○

6. 物の状態や状態の観察を学ぶこと

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d137a	物の状態や状態の観察を学ぶこと				○ ○ ○ ○
d137b	物の状態や状態の観察を学ぶこと				○ ○ ○ ○

7. 読み、書き、計算の学習

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d140	読むこと				○ ○ ○ ○
d145	書くこと				○ ○ ○ ○
d150	計算すること				○ ○ ○ ○

8. 遊びや日常生活を通して学ぶこと

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d155	遊びや日常生活を通して学ぶこと				○ ○ ○ ○

10. 役に立つことを覚えること、課題がわかるまで注意を集中すること

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d160	役に立つことを覚えること				○ ○ ○ ○
d161	課題がわかるまで注意を集中すること				○ ○ ○ ○

11. 役に立つこと、問題解決、意思決定

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d166	役に立つこと				○ ○ ○ ○
d170	問題解決				○ ○ ○ ○
d172	意思決定				○ ○ ○ ○

12. 思考すること、問題解決、意思決定

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d163	思考すること				○ ○ ○ ○
d175	問題解決				○ ○ ○ ○
d177	意思決定				○ ○ ○ ○

ICFコアセット 活動と参加 強行支援 (6歳-16歳版採用) 情報把握シート 第1章

1. 3つの期間に該当する領域の観点

1.1 活動の状況 (「目標なし」の欄あり) のいずれの欄でも記載  
 「目標なし」は、活動と参加の両方について活動が実現できなかったことを意味する(「目標あり」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。  
 「目標あり」は、活動と参加の両方について活動が実現できたことを意味する(「目標なし」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。

2. 補足情報に記入する内容の解説

「補足情報」は、活動と参加の両方について活動が実現できなかったことを意味する(「目標なし」を記入してください。「目標なし」は記入してはならない) 活動が実現できなかった場合は「目標なし」を記入してください。

第2章 生活の中で求められる課題

14. 作業や活動の目的、目標の達成 (a) 一人で実行、b) 他者と協力して実行)

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d210a	一つの作業や活動を一人で実行すること				○ ○ ○ ○
d220a	複数の作業や活動を一人で実行すること				○ ○ ○ ○
d230a	目標(日々のおまじまりの作業や活動)を一人で実行すること				○ ○ ○ ○
d210b	他者と協力して一つの作業や活動をする				○ ○ ○ ○
d220b	他者と協力して複数の作業や活動をする				○ ○ ○ ○
d230b	他者と協力して目標(日々のおまじまりの作業や活動)を行う				○ ○ ○ ○

15. 作業や活動中のストレス対処および得意に感じるコントロール

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d240	ストレスや不安を伴う作業や活動の進行				○ ○ ○ ○
d250	得意に感じるコントロール				○ ○ ○ ○

第3章 コミュニケーション

17. 話し言葉や、表情やジェスチャーによるメッセージの理解

項目番号	項目タイトル	実現なしで記載は?	目標達成の程度や支援	補足の程度は?	補足情報 (活動の状況、活動の状況、活動の状況、活動の状況)
d310a	話し言葉で伝えられたメッセージの理解				○ ○ ○ ○
d310b	声で伝えられたメッセージの理解				○ ○ ○ ○
d3150	表情やジェスチャーが伝えるメッセージの理解				○ ○ ○ ○

1.6. 文字の種類、記号やシンボルの種類、絵や写真の種類

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d325 and d331-2.

2.1. 話し言葉の質、書体やフォントによるメッセージの伝達

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d330 and d330-2.

2.3. 文字、記号やシンボル、絵や写真によるメッセージの伝達

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d345 and d335-2.

2.5. 会話をディスカッション

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d350 and d355.

2.6. 電話やFAX、電子メールによるコミュニケーション

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes item d360.

3.5. 衣服と履き物の種類、状況に応じた選択

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d340 and d345.

3.6. 食べることと飲むこと

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d350 and d355.

3.7. 健康の維持、危険の回避

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d370 and d371.

第6章 家庭生活

4.0. 家事をすること

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d630 and d640.

ICFコアセット 活動と参加 強行支援 (6歳-16歳版採用) 情報把握シート 第1章

Table with 2 main sections: 1. 3つの関心に関する評価の観点, 2. 機能情報に記入する内容の解説. Includes detailed instructions for using the ICF Core Set.

第4章 運動・移動

2.8. 姿勢を変える、同じ姿勢を保つ、姿勢を変えたり移動する

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes item d415.

3.0. 手や腕、手や腕を使って物を操作すること

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d440 and d445.

3.2. 歩行やその他の方法で移動すること

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes item d455.

3.3. 交通機関や交通手段を利用しての移動

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d470 and d475.

第5章 セルフケア

3.4. 入浴・身だしなみ・経済・生活のケアなどで清潔を保つこと

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d510, d530, and d535.

ICFコアセット 活動と参加 強行支援 (6歳-16歳版採用) 情報把握シート 第1章

Table with 2 main sections: 1. 3つの関心に関する評価の観点, 2. 機能情報に記入する内容の解説. Includes detailed instructions for using the ICF Core Set.

第7章 対人関係

4.4. 一般的な対人関係

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d710 and d720.

4.5. 特定の対人関係

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes items d730, d740, and d750.

4.6. 家族や親戚などとの対人関係

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes item d760.

第8章 遊び、教育、仕事や経済活動

4.8. 一人でまたは誰かと遊ぶこと

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes item d880.

5.1. 学校での教育から学ぶこと

Table with 6 columns: 項目番号, 項目タイトル, 実証なしで困難は?, 困難程度, 達成の程度, 評価情報. Includes item d820.





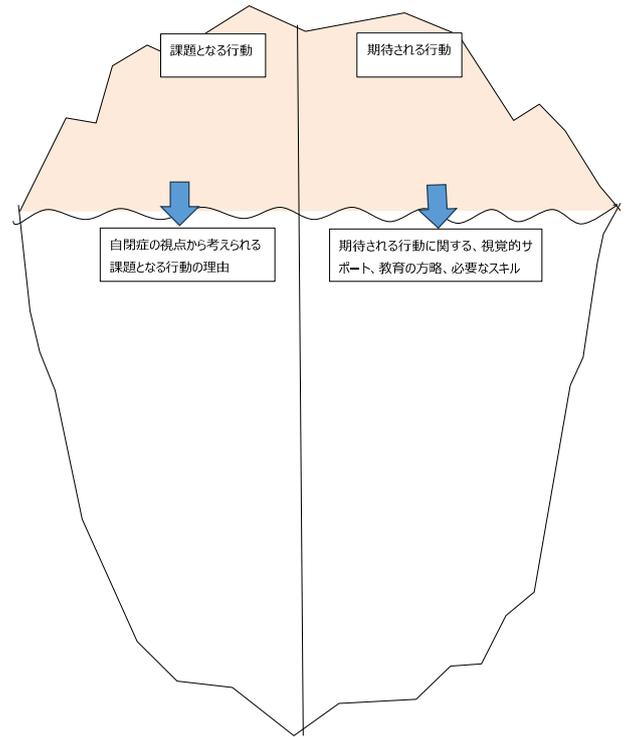
氷山モデルワークシート

受講番号: \_\_\_\_\_ 記録日: / / 作成者: \_\_\_\_\_

課題 ①: 課題 ①(課題)			
①	課題 ①(課題)	課題 ①(課題)	課題 ①(課題)
②	課題 ②(課題)	課題 ②(課題)	課題 ②(課題)
③	課題 ③(課題)	課題 ③(課題)	課題 ③(課題)
④	課題 ④(課題)	課題 ④(課題)	課題 ④(課題)
⑤	課題 ⑤(課題)	課題 ⑤(課題)	課題 ⑤(課題)
⑥	課題 ⑥(課題)	課題 ⑥(課題)	課題 ⑥(課題)
⑦	課題 ⑦(課題)	課題 ⑦(課題)	課題 ⑦(課題)
⑧	課題 ⑧(課題)	課題 ⑧(課題)	課題 ⑧(課題)
⑨	課題 ⑨(課題)	課題 ⑨(課題)	課題 ⑨(課題)
⑩	課題 ⑩(課題)	課題 ⑩(課題)	課題 ⑩(課題)

課題 ②: 課題 ②(課題)			
①	課題 ①(課題)	課題 ①(課題)	課題 ①(課題)
②	課題 ②(課題)	課題 ②(課題)	課題 ②(課題)
③	課題 ③(課題)	課題 ③(課題)	課題 ③(課題)
④	課題 ④(課題)	課題 ④(課題)	課題 ④(課題)
⑤	課題 ⑤(課題)	課題 ⑤(課題)	課題 ⑤(課題)
⑥	課題 ⑥(課題)	課題 ⑥(課題)	課題 ⑥(課題)
⑦	課題 ⑦(課題)	課題 ⑦(課題)	課題 ⑦(課題)
⑧	課題 ⑧(課題)	課題 ⑧(課題)	課題 ⑧(課題)
⑨	課題 ⑨(課題)	課題 ⑨(課題)	課題 ⑨(課題)
⑩	課題 ⑩(課題)	課題 ⑩(課題)	課題 ⑩(課題)



このワークシートは TEACCH® Autism Program の資料を参考にしています

ハイリスク場面のチェックシート

対象者: ※受講番号記入 ( ) 場 所: \_\_\_\_\_ 実施日: / / 記録者: \_\_\_\_\_

チェック項目	よくある例	現状	当面の予防・改善プラン
①物理的環境	特定の場所に居られない、じつでできない。		
②感覚刺激	特定の感覚刺激(音、水など)に反応		
③気になるもの・人	特定のものや人に過反応、こだわりの行動		
④見過ごしやすさ	得てない、何度も予定を聞く、次の活動に拒否する		
⑤適度な活動がない	自己刺激行動が増える、自分でうまく遊べない		
⑥周囲の伝え方、かかわり方	言葉指示で混乱、かかわるスタッフへの攻撃的行動		
⑦本人の表現方法	嫌なときに逃げ、黙って物を取る、かんしゃ表現		
⑧失敗経験(無理な設定)	作業が途中で材料を捨てる、嫌な場所がある		
⑨その他	好きな活動が止められない、儀式的な行動、行動の停止		

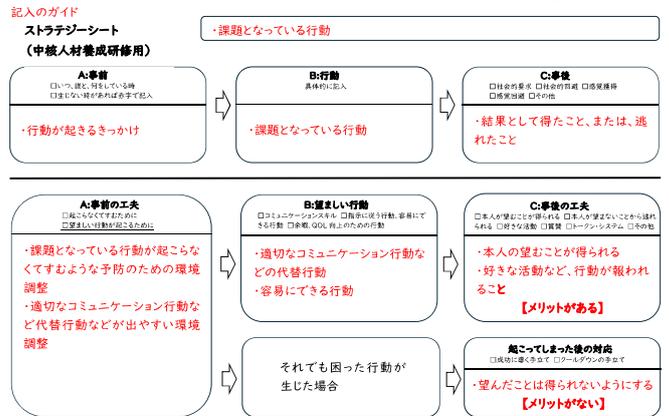
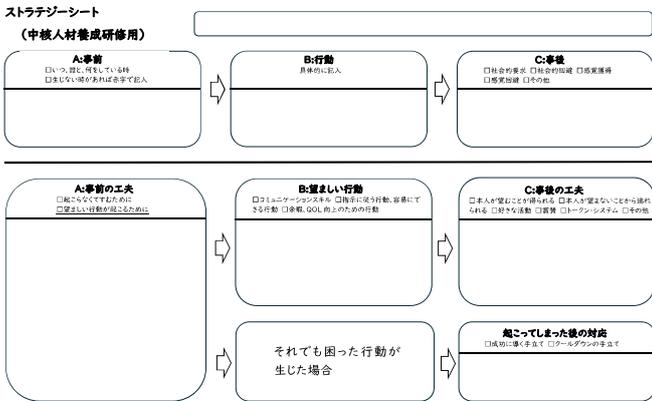
★当面の予防・改善プランを実施するにあたって、追加の検討事項

チーム支援実行状況チェックシート

1	チームに必要なメンバーの勤務等を調整し、会議を設定したか。	<input type="checkbox"/>
2	会議の参加者がポジティブな討議ができるようなグラウンドルール(他者が発言中は口を挟まない、否定しないなど)を明示したか。	<input type="checkbox"/>
3	会議にあたって、会議の目的と終了時間を参加者に伝えているか。	<input type="checkbox"/>
4	参加者全員が会議で発言できるように会議をコントロールしているか。	<input type="checkbox"/>
	・個人ワークの時間を設ける	
	・全体共有の時間を設ける	
5	終了時、会議の参加者の意見を整理しまとめたか。また、会議に参加していないチームメンバーにも情報を共有するようにしているか。	<input type="checkbox"/>
6	支援の手立てや記録の方法を決める際は、具体的に、実行可能性や予測される効果などを検討し、参加者で確認したか。	<input type="checkbox"/>
7	支援の手立てを決める際は、『いつ・だれが・何をやるか』を行動レベルで決め、手順書等の作成につなげたか。	<input type="checkbox"/>
8	実施記録については『いつ・どのような方法で共有するか』を確認したか。	<input type="checkbox"/>
9	支援の進捗管理のために、次回の会議の設定や、必要なタイミングで他のスタッフに確認することなど、進捗リマインドをおこなっているか。	<input type="checkbox"/>
10	支援を実行した際、一定の経過を見た後、振り返りの会議を設定しているか。	<input type="checkbox"/>
11	振り返りの会議では記録を確認し、その結果に影響しているポジティブな要因やネガティブな要因、関連する課題などを検討し整理したか。	<input type="checkbox"/>
12	支援の取り組みを通して、常にチームのメンバーの尻力を褒め、チームでのまとまりを高めているか。	<input type="checkbox"/>
13	支援の実行状況を確認し、次のアクションについてチームとして方向性を共有できているか。	<input type="checkbox"/>

※中核的人材養成研修では、MicrosoftFormsにて回答していただきます。





中核の人材養成研修 ワークシート

### 活動参加の支援計画書

受講番号: \_\_\_\_\_ 作成者: \_\_\_\_\_ 作成日: \_\_\_\_/\_\_\_\_/\_\_\_\_

●支援目標(具体的な短期:行動目標・長期:状態目標)

○支援に活用する道具/活動の場面

目標設定は次の設定基準によること

□興味関心とスキル □発達の適切性(めばえスキルへのアプローチ) □機能性(役立つ目標か)

□自立性(可能な限り一人でできる目標か) □一般化(他の場面・人での応用)を目指しているか

□保護者との協働と優先順位

実施計画と経過			
	1回目	2回目	3回目
予告、移動手段			
時間の工夫 スケジュール提示			
場所の工夫 場面設定			
方法の工夫 取り組み方の支援			
見え方の工夫			
教え方			
指示の出し方、応え方、 タイミング、指示書の使 い方など			
結果と修正点			
見て分かる工夫の 改善プラン			

方法の工夫: □リスト 指示書 □マッピング □左から右、上から下 □終了音 □タイマー □他

見え方の工夫: □具体的な指示(□文字 □数字 □色・マーク □絵・写真 □見本 □ジグ □矢印)

□まとめる組織化(□容器 □仕切り □配慮) □はっきりと明瞭化(□ハイライト) □他

中核の人材養成研修用ワークシート  
(自閉症 e サービス)

### コミュニケーションプログラムの実施計画書 (より、自発的・機能的な表現性コミュニケーションを教える)

★新しい実施目標:

機能: \_\_\_\_\_ (本人が伝えようとしている内容、意図)

文脈:(場面) \_\_\_\_\_ (人) \_\_\_\_\_ (どこで、誰とコミュニケーションをおこなうか)

形態: \_\_\_\_\_ (コミュニケーションの方法)

★プログラムの根拠となるアセスメント情報(特に、表現性コミュニケーションについて)

好きなこと、欲しいもの: \_\_\_\_\_

嫌いなこと、嫌なもの: \_\_\_\_\_

本人がふだんよく伝えている内容、意図: \_\_\_\_\_

現状のコミュニケーションしやすい場面: \_\_\_\_\_

現状のコミュニケーションの形態: \_\_\_\_\_

その他: \_\_\_\_\_

★実施計画と経過

支援プラン	1回目	2回目
場面設定 本人・教授者・相手の配置 刺激の調整		
視覚的手がかり コミュニケーションツール		
教授方法 プロンプトの出し方、応え方、 タイミング 指示書や Co カード等の有 無		
結果と修正点 再構造化プラン		

機能: □要求 □拒否 □説明(コメント) □情報提供 □情報請求 □あいさつ □その他  
形態: □発声 □行為動作(直接動作) □指差し・ジェスチャー □物 □絵/写真 □文字 □サイン言語  
□ことば(単語) □二語文以上

13: 支援計画の立案(ワークシート)

ニーズアセスメント: 目標を絞り込む				
保護者の願い		支援者の見立て		
<ul style="list-style-type: none"> <li>●グループホームでの生活</li> <li>●一人で買い物ができるようになって欲しい</li> <li>●お仕事をたくさん頑張ってもらいたい</li> <li>●パニックや自傷・他害が少なくなって欲しい</li> <li>●もう少しわかりやすく伝えて欲しい</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●グループホーム移行を目指して、日課の確認や身辺のことが定着して欲しい</li> <li>●できる仕事の種類が増える</li> <li>●仕事から楽しみやつながる意欲を育てる</li> <li>●周りにわかるようにコミュニケーションを伝える</li> <li>●事業所で過ごせる余暇グッズ</li> </ul>		
本人のニーズ				
<ul style="list-style-type: none"> <li>●伝えたいことをわかって欲しい</li> <li>●いつもの外出先で楽しく過ごしたい</li> <li>●苦手な活動にはあまり参加したくない</li> <li>●好きな旅行をしたい</li> </ul>				
スキルアセスメント: 目標や手立てを具体的ににする				
ニーズの優先の高い項目	できる	めばえ	今は難しい	その他
身辺自立 家事活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・造作</li> <li>・トイレ</li> <li>・カップラーメン調理</li> <li>・持ち物の管理</li> <li>・ゴミ捨て</li> <li>・衣類の配膳/下着</li> <li>・洗濯</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スケジュールの確認</li> <li>・レンジを使った調理</li> <li>・お湯を沸かす</li> <li>・コップを作る</li> <li>・テーブル拭き</li> <li>・掃除機</li> <li>・タオルドライ</li> <li>・洗濯を干す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洗濯機を使う(音など苦手意識があるため)</li> <li>・火を使った調理</li> </ul>	→本人が難しいことはスタッフが代替してあげる
興味関心 余暇活動	→一人で15-20分過ごす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設イベントに参加する(本人が取り組める活動の場合)</li> <li>・映像をみて過ごす(切り替えに時間がかかる場合がある)</li> <li>・活動を選択する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設イベントに参加する(本人が苦手意識が強い場合)</li> </ul>	→拒否が強い活動には無理に誘わず、別の活動設定をする
職業スキル 職業行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・20分程度仕事に取り組む(3種類)</li> <li>・アセスメント活動で新しい仕事の練習ができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指示書を見ながら工程数の多い仕事ができる</li> </ul>	→チームでの仕事	→拒否が強い活動には無理に誘わず、別の活動設定をする
興味関心 余暇活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通ICカードを使う</li> <li>・電子マネーの支払い</li> <li>・信号の理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バスなどの乗車時間の振る舞い</li> <li>・お金の計算</li> <li>・店員とのやり取り</li> <li>・購入したものの管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バスなどの待ち時間を自分で確認する(遅延を理解する)</li> <li>・売切れを理解する</li> </ul>	→本人が難しいことはスタッフが代替してあげる →怪しげな場面は代替の活動を設定する
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近くの慣れた相手へのコミュニケーション(日常必要なものの要求): 単語、絵カードなど</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・離れた相手へのコミュニケーション(日常必要なものの要求)</li> <li>・困った場面で人に伝える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当スタッフ以外への発信</li> <li>・言葉のみの理解</li> <li>・補助音声の使い分け</li> <li>・自分の体調にかなう声掛け</li> </ul>	→なるべく本人が発信しやすいスタッフを近くに配置する
職業スキル 職業行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークンを貯める(短期)</li> <li>・作業への注目</li> <li>・仕事とトークンの結びつき</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークン貯める(月毎)</li> <li>・欲しいもののリストの作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月刊給料の理解</li> </ul>	→月刊給料の理解が難しいので、仕事のモチベーションはトークンにしている

支援計画シート(例)

期間: 20××年4月1日 - 20××年9月30日

概ね 次のライフステージ までの目標		楽しめる余暇活動が増えて本人なりの暮らしを整えたい		
一年間の目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇活動の種類を増やす</li> <li>・コミュニケーション手段の獲得</li> <li>・できる仕事の種類が増える</li> <li>・楽しみの見通しを持って仕事に取り組む</li> </ul>		
6ヶ月間で実現可能な具体的な行動目標				
領域	行動目標	目標に向けて習得するスキル	環境/手立て/配慮/教え方	評価
職業スキル/職業行動	30分以内の事業所の仕事に取り組む(新しい仕事2種類)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2種類の新しい仕事</li> <li>・30分程度持続して仕事をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業量を目で見えわかるように設定留守</li> <li>・壁側の端(決まった場所)で他利用者と距離を取る</li> <li>・報告確認後はすぐにトークンを渡す</li> </ul>	達成/継続/変更
興味関心/余暇活動	20分程度、自由時間を過ごす(新しい余暇グッズ5種類)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5種類の新しい余暇グッズ</li> <li>・20分程度自由時間を過ごす</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要求できる余暇グッズの写真カード</li> <li>・他利用者とバウンディングしないような距離で職員が見守る</li> <li>・最低でも3つ余暇グッズを設定し、午前と午後で変更する</li> </ul>	達成/継続/変更
職業スキル/職業行動	欲しいものリストから月刊のトークンのご褒美を選択し、目標に向かってトークンを貯める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークンとご褒美の交換</li> <li>・欲しいものリストから選択する</li> <li>・トークンを貯める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークンボードを用意する</li> <li>・欲しいものリストを用意する</li> <li>・ほしい物リストのアセスメントを1ヶ月に1回行う</li> </ul>	達成/継続/変更
コミュニケーション	離れたスタッフに要求や困ったことを伝える(3場面:15種類のコミュニケーション)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3つの場面でコミュニケーションカードを使う</li> <li>・新しい15種類のコミュニケーションカードを使う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要求できる余暇グッズの写真カードを用意する</li> <li>・写真カードは本人がイメージできるものを用意する</li> <li>・2or3つの活動を選択ボードで選択</li> </ul>	達成/継続/変更

※参考書式: みらくる(支援をより効果的に進めていくためのモデルフォーマット: 札幌市自閉症・発達支援センター)  
<https://sapporoogaru.wixsite.com/miracle>

具体的な行動目標 →

15: 実施後の評価と改善(ワークシート)

6ヶ月間で実現可能な具体的な行動目標				
領域	行動目標	目標に向けて習得するスキル	環境/手立て/配慮/教え方	評価
興味関心/余暇活動	20分程度、自由時間を過ごす(新しい余暇グッズ5種類)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5種類の新しい余暇グッズ</li> <li>・20分程度自由時間を過ごす</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要求できる余暇グッズの写真カード</li> <li>・他利用者とバウンディングしないような距離で職員が見守る</li> <li>・最低でも3つ余暇グッズを設定し、午前と午後で変更する</li> </ul>	<p>継続</p> <p>15分程度過ごせる新しい余暇グッズを3種類増やすことができた。まだアセスメントして、取り組んでいないものもあるので、継続した支援を行う</p>
職業スキル/職業行動	欲しいものリストから月刊のトークンのご褒美を選択し、目標に向かってトークンを貯める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークンとご褒美の交換</li> <li>・欲しいものリストから選択する</li> <li>・トークンを貯める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークンボードを用意する</li> <li>・欲しいものリストを用意する</li> <li>・ほしい物リストのアセスメントを1ヶ月に1回行う</li> </ul>	<p>変更</p> <p>1週間のトークンは理解し目標に向かってトークンを貯めることができた。2週間以上は理解が難しいので、目標を変更して支援を継続する。</p>



再アセスメント(または追加のアセスメント)が必要良いと思われるアセスメント書いてみましょう

支援計画シート(例)

期間: 20××年4月1日 - 20××年9月30日

概ね 次のライフステージ までの目標		楽しめる余暇活動が増えて本人なりの暮らしを整えたい		
一年間の目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇活動の種類を増やす</li> <li>・コミュニケーション手段の獲得</li> <li>・できる仕事の種類が増える</li> <li>・楽しみの見通しを持って仕事に取り組む</li> </ul>		
6ヶ月間で実現可能な具体的な行動目標				
領域	行動目標	目標に向けて習得するスキル	環境/手立て/配慮/教え方	評価
職業スキル/職業行動	30分以内の事業所の仕事に取り組む(新しい仕事2種類)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2種類の新しい仕事</li> <li>・30分程度持続して仕事をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業量を目で見えわかるように設定留守</li> <li>・壁側の端(決まった場所)で他利用者と距離を取る</li> <li>・報告確認後はすぐにトークンを渡す</li> </ul>	達成
興味関心/余暇活動	20分程度、自由時間を過ごす(新しい余暇グッズ5種類)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5種類の新しい余暇グッズ</li> <li>・20分程度自由時間を過ごす</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要求できる余暇グッズの写真カード</li> <li>・他利用者とバウンディングしないような距離で職員が見守る</li> <li>・最低でも3つ余暇グッズを設定し、午前と午後で変更する</li> </ul>	継続
職業スキル/職業行動	欲しいものリストから月刊のトークンのご褒美を選択し、目標に向かってトークンを貯める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークンとご褒美の交換</li> <li>・欲しいものリストから選択する</li> <li>・トークンを貯める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トークンボードを用意する</li> <li>・欲しいものリストを用意する</li> <li>・ほしい物リストのアセスメントを1ヶ月に1回行う</li> </ul>	変更
コミュニケーション	離れたスタッフに要求や困ったことを伝える(3場面:15種類のコミュニケーション)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3つの場面でコミュニケーションカードを使う</li> <li>・新しい15種類のコミュニケーションカードを使う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要求できる余暇グッズの写真カードを用意する</li> <li>・写真カードは本人がイメージできるものを用意する</li> <li>・2or3つの活動を選択ボードで選択</li> </ul>	達成

※参考書式: みらくる(支援をより効果的に進めていくためのモデルフォーマット: 札幌市自閉症・発達支援センター)  
<https://sapporoogaru.wixsite.com/miracle>

課題分析シート

受講番号:
目標:
場所:

作成日 / /
作成者:
期間: 年 月 日 ~ 月 日

Table with 6 columns: ステップ, and 5 empty columns, and 1 column: 備考・コメント. Rows 1-20.

Table with 2 columns: 評価のまとめ, and 3 rows: 見て分かる工夫, 教え方, その他の工夫・配慮.

使用する記号

- =合格 P=手添え
△=芽生え M=モデル
X=不合格 G=ジェスチャー、指差し
V=声かけ
+=自立(すでに獲得されているスキル)

15:実施後の評価と改善(eラーニング演習用ワークシート)

Table with 5 columns: 領域, 行動目標, 目標に向けて習得するスキル, 環境/手立て/配慮/教え方, 評価. Contains text about 6-month goals and evaluation.



再アセスメント(または追加のアセスメント)が必要良いと思われるアセスメント書いてみましょう

支援計画シート(例)

期間:20××年 4 月 1 日 - 20××年 9 月 30 日

Table with 2 columns: 概ね 次のライフステージまでの目標, 一年間の目標. Content about leisure activities.

Table with 5 columns: 領域, 行動目標, 目標に向けて習得するスキル, 環境/手立て/配慮/教え方, 評価. Contains detailed support plan for 6 months.

※参考書式:みらくる(支援をより効果的に進めていくためのモデルフォーマット:札幌市自閉症・発達支援センター)
https://sapporoogaru.wixsite.com/miracle

# タイトル

- 受講番号：
- 所属：
- 氏名：

## モデル利用者の概要(プレ)

<b>健康状態</b> ・疾病 ・疾患	
<b>心身機能・構造</b>	<b>活動・参加</b> (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定
<ul style="list-style-type: none"> <li>・診断名</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>	<p>【強み、支援の維持調整】</p> <p>【支援の修正、支援の考案】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICFシステム項目【d●●】</li> <li>困難あり・なし：支援あり・なし：効果大・小</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICFシステム項目【d●●】</li> <li>困難あり・なし：支援あり・なし：効果大・小</li> </ul>
<b>環境因子</b> (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定	<b>個人因子</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul> <p>促進環境： 阻害環境：</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年代</li> <li>・性別</li> <li>・障害支援区分</li> <li>・行動関連項目●点</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>

## モデル利用者の概要(プレ) ※記載例

<b>健康状態</b> 重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、朝起きられない	
<b>心身機能・構造</b>	<b>活動・参加</b> (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定
<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業に取り組みない (実行機能の問題)</li> <li>・物の位置が気になる (ルール学習の強さ)</li> <li>・生活関連刺激の苦手さ (感覚特性、独特な注意)</li> <li>・対人刺激の苦手さ (社会的認知、感覚特性?)</li> <li>・見て学習することが得意 (暗黙的学習の難しさ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(強み) 記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】(絵や写真は理解できる)</li> <li>・(強み) まねをして学ぶこと【d130】(見て学ぶことができる)</li> <li>・(支援修正) 一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】</li> <li>困難あり：何をしようかわからない、作業に取り組みることができない</li> <li>支援あり：プレハブでワークシステムを用いてバスルーム(漫画)のスケジュール実施</li> <li>効果小：活動に取り組みることができるが、24時間365日マンツーマン対応で持続困難</li> <li>・(支援修正) 場面に応じた行動のコントロール【d250】</li> <li>困難あり：他利用者の物の置き方が気になり、他者への暴力行為あり</li> <li>支援あり：24時間365日マンツーマンによる見守り支援</li> <li>効果小：支援員の制止で暴力行為に止まらないが、ご本人のQOLは上がらず、24時間365日マンツーマン対応で持続困難</li> <li>・(支援考案) 基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】</li> <li>困難あり：GIIの共有スペースで他の利用者との関わるスキルがない、加えて、他利用者への暴力行為があり制止される</li> <li>支援なし：支援員の関わりは暴力の防止のみにとどまっている。(ご本人のQOLは上がらず、本2項目には効果なし)</li> </ul>
<b>環境因子</b> (※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を選定	<b>個人因子</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・阻害環境：共有スペースでの生活 (【e240, 250, 260等】生活関連刺激や対人刺激【d710, 750】への苦手さ?)</li> <li>・睡眠薬【e110b】</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul> <p>・促進環境：ワークシステム (【e1351】仕事のしやすさを支援する製品と用具)</p> <p>・生活介護事業所でのプレハブ設置 (生活関連刺激や対人刺激の除去)</p> <p>・職員3名で交代しながらの個別対応 (【e340, 440】)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・50代男性</li> <li>・障害支援区分6</li> <li>・行動関連項目12点</li> <li>・発達年齢4歳3か月</li> <li>・グループホーム(5人暮らし)</li> <li>・生活介護事業所に通所</li> </ul>

## 支援チームの概要

- 【記入の視点】
- チーム構成
  - チームで検討・支援していくための工夫等

## フェイス! 「行動障害状態の確認と客観的な把握」

- 【報告で使用するワークシート類(例)】
- BPI-S
  - FAST
  - ABC記録
  - スキャッタープロット 等

- 【作成の視点】
- 課題となっている行動の状況整理等

## フェイズ2

### 「特性理解に基づく原因・理由の検討」

#### 【報告で使用するワークシート類(例)】

- 自閉症の特性&学習スタイルチェックシート 等

#### 【作成の視点】

- アセスメントから把握した特性を基にした背景要因等

## フェイズ2

### 「仮説-検証」

#### 【報告で使用するワークシート類(例)】

- ICFシート
- 氷山モデルシート
- ストラテジーシート 等

#### 【作成の視点】

- アセスメントを基にした支援仮説・方針

## フェイズ2

### 「ハイリスク場面の整理」

#### 【報告で使用するワークシート類(例)】

- ABC記録
- スキャッタープロット

#### 【作成の視点】

- アセスメント、記録を基にしたハイリスク場面の整理

## フェイズ3

### 「本人に合ったより適切な活動の設定」

#### 【報告で使用するワークシート類(例)】

- 日常生活場面行動アセスメントシート
- 支援計画シート

#### 【作成の視点】

- アセスメントを基にした適切な活動、期待される行動の設定内容

## フェイズ4

### 「肯定的で有効な支援計画の立案・実施」

#### 【報告で使用するワークシート類(例)】

- 支援計画シート
- 課題分析シート
- 支援手順書
- スキャッタープロット 等

#### 【作成の視点】

- アセスメントを基にした支援計画・具体的な支援内容
- 支援計画シートの様式は各事業所のもので可
- 支援記録
- 実施した結果をもとにした改善点・考察 等

## フェイズ5

### 「支援の継続」

#### 【報告で使用するワークシート類(例)】

- 支援手順書
- スキャッタープロット 等

#### 【作成の視点】

- 実施した支援の評価に基づく支援の見直しの視点等

モデル利用者の概要(ポスト)

※プレからの変更点を赤字で記入

健康状態 ・疾病 ・疾患	
心身機能・構造	活動・参加(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOL向上に関わる支援実施・支援内容変更を記載
・診断名 ・ ・	【強み、支援の維持調整】 【支援の修正、支援の考案】 ・ ICFシステム項目【 <b>d●●</b> 】 困難あり・なし : 支援あり・なし : 効果大・小 :  ・ ICFシステム項目【 <b>d●●</b> 】 困難あり・なし : 支援あり・なし : 効果大・小 :
環境因子(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOL向上に関わる環境支援を記載	個人因子
・ ・ ・ 促進環境 : 阻害環境 :	・年代性別 ・障害支援区分 ・行動関連項目●点 ・精神年齢●歳●か月

研修を通じた変化

【受講者から見た変化】

- 受講者自身の変化
- 支援チームの変化
- 事業所の変化

【支援チーム・管理者から見た変化・感想】

- 支援チームの変化
- 事業所の変化

モデル利用者の概要(ポスト)

※記載例

変更箇所を赤字にしてください

健康状態 重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、 <del>執拗さ</del>	
心身機能・構造	活動・参加(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を記載
・作業に取り組みない(実行機能の問題) ・物の位置が気になる(ルール学習の強さ) ・生活関連刺激の苦手さ(感受特性、独特な注意) ・対人刺激の苦手さ(社会的認知、感受特性?) ・見て学習することが得意(暗黙的学習の難しさ)	・(強み)記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】(絵や写真は理解できる) ・(強み)まねをして学ぶこと【d130】(見て学ぶことができる)  ・(維持調整←支援修正)一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】 困難あり:何をしてもよくわからない、作業に取り組むことができない 支援あり:パーティションで空間を仕切った共有スペースで、スケジュール・ワークシステム・手帳書を用いて支援 効果大 : 共有スペースでも他利用者を気にすることなく、活動に取り組むことができた。 <u>ご本人のQOLも向上。</u> また、持続的なチーム支援が可能になった ・(維持調整←支援修正)場面に応じた行動のコントロール【d250】 困難あり:物の置き方が気になり、他者への暴力行為あり 支援あり:物の位置を写真で提示 効果大 : 物の置き場で困らなくなった、支援員が常につきずとも暴力行為がなくなった。 <u>ご本人のQOLも向上。</u> ・(維持調整←支援修正)基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】 困難あり:QOLの共有スペースで他利用者と関わるスキルがない。加えて、他利用者への暴力行為が抑制される。 支援あり:共有スペース空間をパーティションで仕切った。(生活関連刺激や対人刺激の低減) 効果大 : 他利用者と関わるようになってはいるが、暴力行為はなくなった。 <u>ご本人のQOLも向上。</u>
環境因子(※ICFシステム項目・補足情報参考) : QOLに影響している項目を記載	個人因子
・阻害環境:共有スペースでの生活(【e240,250,260等】生活関連刺激や対人刺激【d710,750】への苦手さ?) :睡眠薬【e110b】(全体支援で行動が落ち着いたが眠気が取れない)→減薬で眠気消失  ・促進環境:ワークシステム、スケジュール、手帳書、パーティション、置き場の整理(物の位置を決めて写真で提示) (【e135】仕事のしやすさを支援) :生活介護事業所でのアラブ設置(生活関連刺激や対人刺激の除去) :職員3名で交代しながらの個別対応(【e340,440】) :共有スペース空間を(パーティションで)仕切って生活(【e151】日常生活での使いやすさを支援)	・50代男性 ・障害支援区分6 ・行動関連項目11点 ・発達年齢4歳3か月 ・グループホーム(5人暮らし) ・生活介護事業所に通所

まとめの一言

- 研修の感想
- 今後取り組みたいことなど なんでもOK



# 第1部 広域的支援人材 は何を期待されているのか

厚生労働省 山根和史 発達障害施策調整官が お応えします

中核的人材養成研修がはじまり、強度行動障害のある人々を地域で支えていくための体制作りが進み始めました。地域の支援体制作りで重要な役割を果たすのが**広域的支援人材**です。  
**広域的支援人材**は何を期待されていて、地域の体制作りにおいてどのように活用していくのか。  
 強度行動障害のある人々を地域で支えている関係者が集い、広域的支援人材や地域の支援体制作りについて、厚生労働省の専門官を招き最新の情報を共有します。



日時	2025年1月21日(火)13:00-17:00
内容	第1部：広域的支援人材は何を期待されているのか 第2部：地域の支援体制づくり “チーム佐賀”はこうして生まれ育っている 第3部：つながりtime 2分毎に人を変え名刺交換をする出合いの時間です
場所	アットビジネスセンター東京駅八重洲通り501号室 東京都中央区八丁堀1-9-8 八重洲通ハタビル ■JR東京駅(八重洲口)より徒歩約10分 ■日比谷線 八丁堀駅より徒歩2分
参加費	無料 交通費等は、各自ご負担ください



**第2部 福島 龍三郎 氏**

- ・社会福祉法人はる理事長
- ・NPO法人佐賀中部障がい者ふくしネット理事長 ほか
- ・強度行動障害支援者養成研修(指導者研修)、中核的支援人材養成研修作成メンバーの一人

“強度行動障害の状態になった方たちを支えたい”という思いでスタートしたグループホーム。しかし、「はる」だけでは支えきれなかった。地域として支えていく必要性を実感して、地域のネットワーク作りと人材育成に取り組んできました。当日は、ネットワークの作り方と広域的支援人材の活用についてお話しします。

**対象者** 広域的支援人材名簿登録者、都道府県政令指定都市障害福祉担当課、発達障害者支援センター、都道府県の自立支援協議会行動障害関連部会のメンバー、発達障害者地域支援マネジャー、中核的人材養成研修ディレクター、トレーナー(SV)、サブ・トレーナー等経験者  
 定員150名(定員超過の場合は、抽選となります)

**申込方法** 下記、公式WEBサイト もしくは 右のQRコードからお申込みください  
<https://www.nozomi.go.jp/training/kouiki.html>  
 令和6年10月17日10:00~11月29日10:00まで  
 ※定員決定につきましては、12月13日頃にお申し込み頂きましたメールアドレスにお知らせを致します。



主催 独立行政法人国立高度知的障害者総合施設のぞみの園  
 群馬県高崎市寺尾町2120-2 | TEL: 027-320-1357 平日9:00-17:00 受付 / 土日祝日休み つきおか・ながい  
 E-mail nozomi-seminar-01@nozomi.go.jp

## 広域的支援人材とは

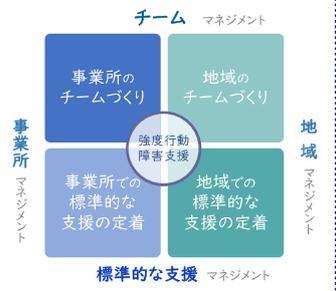
広域的支援人材とは、令和6(2024)年4月の報酬改定で生まれた**集中的支援**のアドバイスをを行う役割と中核的人材を育成し、地域支援体制のスキルアップを回る役割を担います。



## 集中的支援とは

集中的支援とは、令和6(2024)年4月の報酬改定で生まれ、強度行動障害を有する児者の状態が悪化した場合において  
 I. 広域的支援人材が指定障害者支援施設、共同生活援助事業所等を訪問し、集中的支援を行う  
 II. 集中的支援が必要な利用者を、集中的支援を提供できる体制を備えているものとして都道府県等が選定する指定短期入所事業所、指定障害者支援施設、指定共同生活援助事業所、指定障害児入所施設が、他の指定障害福祉サービス事業所又は指定障害者支援施設等で受け入れ、対象利用者に対して集中的支援を行うものです。

## 集中的支援のマネジメントに求められる関わり



**標準的な支援 マネジメント**

集中的支援の実際には、事業所や地域の標準的な支援の理解と定着、それを押し進めるチーム作りが必要です。(左図)  
 事業所のチーム作りでは、法人経営者(事業所管理者)の標準的な支援の理解が重要です。標準的な支援の定着では、**核となる人材の育成**を促すとともに、チームメンバーへのサポートや的確な助言が求められます。  
 また地域での標準的な支援の定着も大切です。支給決定する行政のもとで、サービス等利用計画を作成する相談支援専門員を中心に、関係機関、事業所間の連携をはかり地域のチーム作りが必要です。その際、各都道府県に設置されている発達障害者支援センター、発達障害者地域支援マネジャーなど行動障害支援で中核となる機関、人材はフル活用する必要があります。

- # 事業所&地域のチーム作り
- # 法人経営者(事業所管理者)
- # 標準的な支援の定着
- # チームメンバーへのサポート&助言
- # 関係機関、事業所間の連携

※標準的な支援とは  
 個々の障害特性をアセスメントし、強度行動障害の状態を引き起こしている環境要因を調整していく支援を「標準的な支援」といいます

## 毎年、「情報アップデートDay since 2024」を開催します

国立のぞみの園では、広域的支援人材が、全国各地の取組等に関する情報をアップデートできる機会を用意します。今年は、キックオフとして集合形式で開催し、人とのつながりを深めます。  
 令和7年度以降は、■チームや地域のつくり方、■標準的な支援の定着のさせ方、■チームや事業所、管理者のサポートの仕方、■関係機関、事業所間の連携の仕方、■助言の仕方など、取り上げるテーマを広域的支援人材の皆様と検討しながら、オンデマンドを含めた開催を予定しております。  
**集合形式での開催は貴重な機会となりますので、是非、ご参加ください。**

お願い 第3部(2分×30回=60分)で名刺交換をします。**名刺を多めにご持参ください。**

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍 特になし

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
内山聡至	強度行動障害の状態にある子ども・大人への支援はどう変わるのか	手をつなぐ	2024年 8月号	16～17	2024年
内山聡至	強度行動障害支援の現状と今後の支援体制整備に向けて	特別支援教育研究	2025年 2月号	21～22	2025年

機関名 独立行政法人国立重度知的  
障害者総合施設のぞみの園

所属研究機関長 職 名 理事長

氏 名 田中 正博

次の職員の令和6年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 令和6年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
2. 研究課題名 強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究
3. 研究者名 (所属部署・職名) 総務企画局研究・人材養成部 部長  
(氏名・フリガナ) 日詰 正文 ・ ヒヅメ マサフミ

## 4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	国立のぞみの園	<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称： )	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

## その他 (特記事項)

(※2) 未審査の場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

## 5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

## 6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由： )
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関： )
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由： )
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容： )

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和7年3月26日

厚生労働大臣 殿

機関名 国立大学法人 北海道大学

所属研究機関長 職名 総長

氏名 寶金 清博

次の職員の令和6年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 令和6年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
2. 研究課題名 強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究
3. 研究者名（所属部署・職名） 北海道大学大学院教育学研究院・教授  
（氏名・フリガナ） 安達 潤 ・ アダチ ジュン

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入（※1）		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査（※2）
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針（※3）	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	国立のぞみの園	<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称： )	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

（※1）当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他（特記事項）

（※2）未審査に場合は、その理由を記載すること。

（※3）廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関: )
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容: )

（留意事項） ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和 7年 5月 9日

厚生労働大臣 殿

機関名 国立大学法人 鳥取大学

所属研究機関長 職名 学長

氏名 原田 省

次の職員の令和6年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 障害者政策総合研究事業
2. 研究課題名 強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究  
(所属部署・職名) 医学系研究科臨床心理学講座・教授  
(氏名・フリガナ) 井上 雅彦 ・ イノウエ マサヒコ

#### 4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	のぞみの園	<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称: )	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

#### その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

#### 5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

#### 6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関: )
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容: )

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

厚生労働大臣 殿

機関名 独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター

所属研究機関長 職名 院長

氏名 上野 雄文

次の職員の令和6年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 令和6年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
2. 研究課題名 強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および地域支援体制の構築のための研究
3. 研究者名（所属部署・職名） 医局・統括診療部長  
（氏名・フリガナ） 會田 千重 ・ アイタ チェ

## 4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入（※1）		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査（※2）
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針（※3）	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	国立のぞみの園	<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること （指針の名称： ）	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

（※1）当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

## その他（特記事項）

（※2）未審査に場合は、その理由を記載すること。

（※3）廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

## 5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

## 6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> （無の場合はその理由： ）
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> （無の場合は委託先機関： ）
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> （無の場合はその理由： ）
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> （有の場合はその内容： ）

（留意事項） ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。